鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(117)

市堀遺跡

二〇〇七年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（117）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅢ

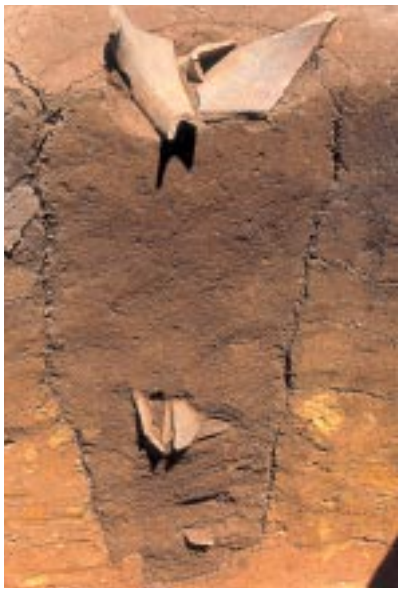
（市来IC～薩摩川内都IC間）

市堀遺跡（いちぼり）

（いちき串木野市）

2007年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道川内道路（市来ＩＣ～薩摩川内都ＩＣ間）建設に伴って，平成14年度に実施したいちき串木野市（旧 日置郡市来町）に所在する市堀遺跡の発掘調査の記録です。

市堀遺跡は，縄文時代早期・晩期，弥生時代，古墳時代，古代，中世，近世にかけての複合遺跡です。

遺跡の中心は縄文時代，古代ですが，縄文時代では早・晩期の遺物が，また古代の遺構内からは県外生産地の可能性をもつ須恵器がまとまって出土しています。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所，いちき串木野市教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　宮原　景信

報　告　書　抄　録

ふりがな	いちぼりいせき
書名	市堀遺跡
副書名	南九州西回り自動車道川内道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	ＸＸⅢ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	117
編著者名	立神次郎・日髙勝博
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL0995－48－5811
発行年月日	2007年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
市堀遺跡（いちぼりいせき）	鹿児島県（かごしまけん） いちき 串木野市（くしきのし） 湊町（みなとちょう） 市堀（いちぼり）	463612	28-25	31° 39′ 15″	130° 20′ 15″	確認調査 19961217～ 19961221 本調査 19980507～ 19980802	3,040	南九州西回り自動車道川内道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市堀遺跡	散布地	縄文時代	集石遺構，落し穴	前平式土器，条痕文土器，入佐式土器，黒川式土器，黒色研磨土器，磨石，敲石，礫器	
		弥生時代		黒髪式土器	
		古墳時代		成川式土器	
		古代	土坑，柱穴群	須恵器，土師器，内黒土師器，双孔棒状土錘，管状土錘	
		中・近世		陶磁器	

遺跡の概要	市堀遺跡は，縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代を中心に，中世や近世までの複合遺跡である。遺跡の中心は古代であるが，縄文時代の遺物は早期と晩期の土器などが出土している。また，古代の遺構から県外生産地の須恵器の甕などが出土し注目されている。

串木野市
串木野新港
照島海岸
九州自然歩道
大里
外戸
池原
海瀬
中井原
上名
大六野
上石野
下石野
生野
平佐原
別府
安茶
牛江
中福良
木場迫
下手中
陳ヶ迫
佐保井
奏町
湊町
八房
中尾町
昭和通
浦和通
春日町
元町
西港町
浜城
浅山
馬河内
福廻
大廻
坂下
中組
八房川
東福川
大川
松山
松原
堀
中原
門前
島門
南子場
野元
平江
名

市堀遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は，南九州西回り自動車道川内道路（市来ＩＣ～薩摩川内都ＩＣ間）建設に伴う市堀遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は鹿児島県いちき串木野市（旧 日置郡市来町）湊町市堀に所在する。

3　発掘調査は建設省九州地方建設局 鹿児島国道工事事務所（現 国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，平成14年５月７日から平成14年８月２日まで実施し，整理作業・報告書作成は平成18年度に実施した。

5　遺物番号は，通し番号とし，本文・表・挿図・図版の番号は一致する。

6　挿図縮尺は，各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，建設省九州地方建設局（現 国土交通省九州地方整備局）鹿児島国道事務所が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査の図面の作成，写真撮影は，繁昌正幸・宮田洋一・石丸良輔，相美伊久雄が行った。

9　遺構実測のトレースは，立神次郎・日髙勝博が行い，一部は整理作業員の協力を得た。

10　土器の実側・トレースは，立神次郎・日髙勝博が行い，一部は整理作業員の協力を得た。
　また，須恵器の一部は市未真澄が行った。

11　石器の実側・トレースは，大成エンジニアリング株式会社に委託し，監修は日髙勝博・相美伊久雄が行った。その他の石器実側・トレースは，立神次郎・日髙勝博が行い，監修の一部は，高見憲次が行った。

12　挿図の監修の一部は，内村光伸が行った。

13　本遺跡出土の須恵器の蛍光Ｘ線分析は，大阪大谷大学三辻利一教授より玉稿をいただいた。

14　本遺跡出土のるつぼ付着物の蛍光Ｘ線分析は，森雄二が行った。

15　遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

16　本書の執筆・編集は，立神次郎・日髙勝博が担当した。

17　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，市堀遺跡の遺物注記の略号は「ＩＢ Ａ－５Ⅱ 1234」である。

本　文　目　次

巻頭図版
序　　文
抄　　録
例　　言
目　　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　遺跡の概要 …… 1

第Ⅱ章　発掘調査の経過 …… 5
　第１節　調査の経緯 …… 5
　第２節　調査の組織 …… 5
　第３節　調査の経過（日誌抄） …… 6

第Ⅲ章　遺跡の位置と環境 …… 10
　第１節　地理的環境 …… 10
　第２節　歴史的環境 …… 11

第Ⅳ章　発掘調査の成果 …… 19
　第１節　発掘調査の方法 …… 19
　第２節　遺跡の層序 …… 22
　第３節　縄文時代の調査 …… 28
　第４節　弥生時代の調査 …… 52
　第５節　古墳時代以降の調査 …… 57
　第６節　中世以降の調査 …… 93

第Ⅴ章　調査データ …… 105

第Ⅵ章　科学分析 …… 123

第Ⅶ章　発掘調査のまとめ …… 127

写真図版 …… 131

挿　図　目　次

第１図　南九州西回り自動車道調査遺跡位置図 …… 3
第２図　市堀遺跡周辺遺跡位置図 …… 13
第３図　市堀遺跡周辺地形図 …… 20
第４図　市堀遺跡確認トレンチ及びグリッド配置図 …… 21
第５図　市堀遺跡の基本土層柱状模式図 …… 22
第６図　市堀遺跡土層断面図⑴ …… 23
第７図　市堀遺跡土層断面図⑵ …… 24
第８図　市堀遺跡の遺構配置図及びＡ地点ドット図 …… 25
第９図　市堀遺跡のＢ地点ドット図 …… 26
第10図　市堀遺跡のＣ地点ドット図 …… 27
第11図　縄文時代の遺構（集石） …… 28
第12図　縄文時代の遺構（落し穴） …… 29
第13図　縄文時代の土器１ …… 31
第14図　縄文時代の土器２ …… 32
第15図　縄文時代の土器３ …… 33
第16図　縄文時代の土器４ …… 35
第17図　縄文時代の土器５ …… 36
第18図　縄文時代の土器６ …… 37
第19図　縄文時代の土器７ …… 38
第20図　縄文時代の土器８ …… 39
第21図　縄文時代の土器９ …… 40
第22図　縄文時代の土器10 …… 41
第23図　縄文時代の土器11 …… 43
第24図　縄文時代の土器12 …… 44
第25図　縄文時代の石器１ …… 46
第26図　縄文時代の石器２ …… 47
第27図　縄文時代の石器３ …… 48
第28図　縄文時代の石器４ …… 49
第29図　縄文時代の石器５ …… 51
第30図　弥生時代の土器１ …… 53
第31図　弥生時代の土器２ …… 54
第32図　弥生時代の土器３ …… 55
第33図　弥生時代の石器 …… 56
第34図　土坑平・断面実測図１ …… 58
第35図　土坑平・断面実測図２ …… 60
第36図　土坑内出土遺物１ …… 62
第37図　土坑内出土遺物２ …… 63
第38図　土坑内出土遺物３ …… 64

第39図　土坑平・断面実測図３ …… 66
第40図　土坑内出土遺物４ …… 68
第41図　土坑内出土遺物５ …… 69
第42図　土坑内出土遺物６ …… 70
第43図　土坑内出土遺物７ …… 71
第44図　溝状遺構平・断面実測図 …… 72
第45図　土坑・溝状遺構・柱穴内出土遺物 …… 73
第46図　古墳時代の出土遺物１ …… 75
第47図　古墳時代の出土遺物２ …… 76
第48図　古墳時代の出土遺物３ …… 77
第49図　古墳時代の出土遺物４ …… 78
第50図　古墳時代の出土遺物５ …… 79
第51図　古墳時代の出土遺物６ …… 80
第52図　古代の出土遺物１ …… 82
第53図　古代の出土遺物２ …… 83
第54図　古代の出土遺物３ …… 84
第55図　古代の出土遺物４ …… 85
第56図　古代の出土遺物５ …… 87
第57図　古代の出土遺物６ …… 88
第58図　古代の出土遺物７・中世の出土遺物１ …… 89
第59図　古代の出土遺物８ …… 90
第60図　古代の出土遺物９ …… 92
第61図　古代の出土遺物10 …… 93
第62図　古代の出土遺物11 …… 94
第63図　古代の出土遺物12 …… 95
第64図　古代の出土遺物13 …… 96
第65図　古代の出土遺物14 …… 97
第66図　古代の出土遺物15 …… 99
第67図　中世の出土遺物２ …… 101
第68図　中世の出土遺物３ …… 102
第69図　近世の出土遺物１ …… 103
第70図　近世の出土遺物２ …… 104

表　目　次

第１表　南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表 …… 4
第２表　市堀遺跡周辺遺跡一覧表 …… 14
第３表　市堀遺跡出土遺物観察表１ …… 108
第４表　市堀遺跡出土遺物観察表２ …… 109
第５表　市堀遺跡出土遺物観察表３ …… 110
第６表　市堀遺跡出土遺物観察表４ …… 111
第７表　市堀遺跡出土遺物観察表５ …… 112
第８表　市堀遺跡出土遺物観察表６ …… 113
第９表　市堀遺跡出土遺物観察表７ …… 114
第10表　市堀遺跡出土遺物観察表８ …… 115
第11表　市堀遺跡出土遺物観察表９ …… 116
第12表　市堀遺跡出土遺物観察表10 …… 117
第13表　市堀遺跡出土遺物観察表11 …… 118
第14表　市堀遺跡出土遺物観察表12 …… 119
第15表　市堀遺跡出土遺物観察表13 …… 119
第16表　市堀遺跡出土遺物観察表14 …… 120

図　版　目　次

図版１　市堀遺跡発掘調査事務所・作業員休息所，駐車場 …… 129
図版２　発掘調査作業風景，Ａ地区土層断面 …… 130
図版３　Ｂ・Ｃ地区土層断面，下層確認トレンチ調査状況 …… 131
図版４　縄文時代早期集石検出状況，黒髪式土器出土状況 …… 132
図版５　遺物包含層内遺物出土状況，15号土坑内遺物出土状況 …… 133
図版６　遺構（ピット群）検出状況，磨製石斧出土状況 …… 134
図版７　古代土師器（台付皿）・内黒土師器・双孔棒状土錘出土状況 …… 135
図版８　縄文時代の出土石器（その１） …… 136
図版９　縄文時代の出土石器（その２） …… 137
図版10　縄文時代の出土土器（早期・晩期） …… 138
図版11　弥生時代の出土遺物（黒髪式土器） …… 139
図版12　弥生時代～古墳時代の出土遺物 …… 140
図版13　古代の出土遺物（須恵器） …… 141
図版14　古代の出土遺物（土師甕） …… 142
図版15　古代以降の出土遺物（土師器，双孔棒状土錘） …… 143
図版16　中世・近世の出土遺物（青磁・白磁・染付・薩摩焼ほか） …… 144

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，平成８年２月，建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，「南九州西回り自動車道川内道路建設事業」の計画に基づいて，市来～隈之城間において計画した事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，これを受けて文化財課が平成８年８月に市来ＩＣと隈之城ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内に市堀遺跡が所在することが判明した。遺跡面積は，4,800㎡であった。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて，平成13年12月17日から平成13年12月21日の５日間に確認調査を実施した結果，約3,040㎡の範囲に縄文時代から中世の遺跡が残存していることが確認された。本遺跡については，現状保存や設計変更が不可能であることから，記録保存のための緊急発掘調査（本調査）を実施することとなった。

本調査は，平成14年５月７日から平成14年８月２日まで，3,040㎡を対象として，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお，事業区間内の遺跡の概要については，以下の通りである。

第２節　遺跡の概要

１　市堀遺跡

市堀遺跡は，いちき串木野市湊町字市堀にあり，衆中小堀とは比高差約20mの尾根とその南の迫を隔てた丘陵で，標高45～47mの丘稜端部に位置している。遺跡は迫集落の東側後方に当たり，同じ丘陵の延長上には北ン原遺跡が所在している。遺跡は平成14年に本調査を実施し，調査面積は3,040㎡である。調査の結果，縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世にかけての複合遺跡であることが知られている。縄文時代の遺構は，集石遺構１基，落し穴状土坑１基を検出し，遺物では，縄文時代早期の前平式土器や条痕系の土器が出土した。また，縄文時代晩期では，入佐式土器や黒川式土器などが出土した。弥生時代も遺物のみの出土で，中期に位置づけされている黒髪式土器の一個体分の完形品があった。古墳時代は成川式土器が出土し，古代から中世と考えられる柱穴群，土坑10基以上や焼土坑２基を検出した。土師器の甕形土器・坏形土器・埦形土器・黒色土器などの出土や須恵器の甕形土器や壺形土器が埋土内から発見された。また，中世以降と考えられる磁器や陶器なども出土している。（本誌所収）

２　安茶ケ原遺跡

安茶ケ原遺跡は，いちき串木野市川上字南安茶ケ原中ほかにあり，市来地区の西部の北側端部

で，町の中心部から北東に約１㎞離れた安茶集落の東後方の独立した台地に位置している。遺跡は北東部に突き出した楕円形の標高25mの台地全体に及び広範囲である。調査は鹿児島県教育委員会により，平成11年に確認調査，平成12年度から平成13年度に本調査を実施し，調査面積は8,000㎡に及んでいる。遺跡は，縄文時代早期・前期・後期から古墳時代，古代，中世から近世などの遺構や遺物が発見された複合遺跡である。

縄文時代早期は，前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・押形文土器などや縄文時代前期は深浦式土器が出土している。一方，縄文時代後期は黒曜石集積遺構をはじめ，指宿式土器・市来式土器・三万田式土器などや磨製石斧・石鏃・磨石・黒曜石剥片などの石器が出土した。

古墳時代は成川式土器がみられ，本遺跡で特筆できるのは古代の時期である。遺構としては，四面廂建物跡２棟，二面廂建物跡，掘立柱建物跡６棟をはじめ貝殻ピット４基，須恵器集積土坑，柱穴や土坑は多数検出された。特に，遺物としては「日置厨」銘墨書土師器，土師器，須恵器など多くの遺物が出土した。中世は，溝状遺構２条，方形竪穴建物跡，柱穴などの遺構をはじめ磁器，陶器，染付，瓦器，鉄滓などの遺物が出土した。近世は溝状遺構や磁器，陶器，動物骨などが発見されている。

3　栫城跡

栫城跡は，いちき串木野市上名の標高50mの台地縁辺部から，現在まで水田として利用されていた低湿部分に立地する。調査面積は50,700㎡で，縄文時代早期・前期・晩期，古墳時代，古代，中世，近世以降までの複合遺跡である。

縄文時代早期は，落し穴３基の遺構や前平式土器・石坂式土器・山形押形文土器をはじめ敲石・磨石などの遺物が出土している。このほか縄文時代前期の轟式土器や縄文時代晩期の黒川式土器・黒色研磨土器などの土器が見られた。古墳時代は成川式土器，古代は土師器・墨書土器・刻書土器・黒色土器などの遺物が出土した。中世では方形竪穴建物跡２棟，五輪塔１基，掘立柱建物跡６棟，井戸１基，かまど跡２基，溝状遺構，柱穴などの遺構や土師器，青磁，青花褐釉陶器，カムィヤキ，瓦器，備前焼，華南三彩，石鍋，滑石製品，灯明皿，古銭，羽釜，鞴羽口，鉄滓・茶臼，木製品，種子などの遺物が発見されている。一方，近世は建物跡，石垣，石列，排水溝，水槽，土坑墓，井戸，石碑（水神）などをはじめ，薩摩焼，木製品，肥前陶器，古銭，煙管，土製人形，鉄製品などが出土した。

4　霜月田遺跡

霜月田遺跡は，薩摩川内市都原町字霜月田で標高約48mの山間部の谷間，傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は11,000㎡である。旧石器時代は細石刃，縄文時代早期の貝殻条痕文土器・山形押型文土器，撚糸文土器などのほか，石皿，打製石鏃，打製石斧が出土した。縄文時代晩期は粗製土器が見られ，中世は掘立柱建物跡３棟，竪穴建物跡２棟，焼土跡３か所を検出し，土師器，須恵器，鉄製品が発見された。

5　都原遺跡

都原遺跡は，薩摩川内市都原町字都原の標高約48mのシラス台地上に位置する。調査面積は5,100㎡である。縄文時代早期は山形押型文土器，手向山式土器などが出土した。一方，中世以降は溝状遺構が発見されている。

第１図　南九州西回り自動車道調査遺跡位置図

第１表　南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表　（市来Ｉ．Ｃ～薩摩川内都Ｉ．Ｃ）

番号	遺跡名	所　在　地	調査面積(m²)	調査期間	調　査　員	時　代	概　　要
1	市　堀	いちき串木野市湊町	3,040	確　認　H13.12	繁昌・宮田（洋）	縄文	条痕文・黒色磨研土器
						古墳	成川式土器
				本調査　H14. 5～H14. 7	石丸・相美	古代	土師器（甕）
						中世	青磁
2	安茶ヶ原	いちき串木野市川上	16,000	確　認　H11. 1	繁昌・栗林	縄文	前平式・石坂式・押型文・深浦式・市来式土器
				本調査　H11. 1～H11. 3	繁昌・栗林	古墳	成川式土器
				H11. 5～H11.10	繁昌・野邉	古代	掘立柱建物跡・貝殻入土坑，墨書土器・須恵器
				H12. 5～H12. 8	繁昌・元田	中世	竪穴遺構・溝状遺構・陶磁器・瓦器
				H13. 5～H14. 1	繁昌・石丸	近世	薩摩焼・染付
3	栫城跡	いちき串木野市上名	50,700	確　認　H11.10	前迫・森田	旧石器	三稜尖頭器・剥片
				本調査　H12.11～H13. 1	繁昌・森田	縄文	落し穴・石斧デポ，石坂式・押型文・轟式・黒川式土器
				本調査　H13. 5～H14. 3	平木場・三垣	古墳	成川式土器
					石丸・西・松本	古代	須恵器・土師器・黒色土器・墨書土器・砥石
				同　上　H14. 5～H15. 3	森田・抜水 吉岡・菅牟田 星野・石丸 平・相美	中世	石切場跡・鍛冶遺構・掘立柱建物跡・五輪塔・ 中世墓，青磁・白磁・滑石製品・カムィヤキ・ 瓦質土器・鞴羽口・石臼・北宋銭
						近世	石切場跡・鍛冶遺構・郷士年寄屋敷跡・五輪塔・
				同　上　H15. 7～H16. 3	森田・星野		住職墓石・近世墓・石垣・一字一石経塚，
					平		薩摩焼・萩焼・京焼・染付・石切道具・寛永通宝
4	霜月田	薩摩川内市都町	11,000	確　認　H12. 6	宮田（栄）・三垣	旧石器	細石刃
				本調査　H12. 6～H12. 8	宮田（栄）・三垣	縄文	集石，貝殻条痕文・押型文・撚糸文土器
							石鏃・石斧・石皿
				同　上　H15. 6～H16. 2	寺原・國師・石原田	中世	掘立柱建物跡・竪穴遺構・焼土域，
							須恵器・土師器・鉄製品
5	都　原	薩摩川内市都町	5,100	確　認　H12. 5	宮田（栄）・三垣	縄文	集石・土坑，石坂式・手向山式・貝殻条痕文土器
				本調査　H12. 5～H12. 6	宮田（栄）・三垣		塞ノ神式土器・石鏃・石斧・石皿・磨石
				同　上　H14. 8～H14.12	星野・菅牟田	古代～中世	蔵骨器埋納遺構・溝状遺構，白磁・土師器

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第１節　調査の経緯

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月から国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度から文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化課が平成３年６月に市来ＩＣと隈之城ＩＣ間の埋蔵文化財分布調査を実施したところ，当事業区内には，８か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

市堀遺跡については，平成13年12月17日から平成14年12月21日（実働５日間）まで確認調査を行い，遺跡の範囲や性格等を把握した。これを受けて，平成14年５月７日から平成14年８月２日まで（実働45日）の本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図った。調査対象面積は3,040㎡である。なお，整理作業及び報告書作成は18年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

第２節　調査の組織

平成13年度調査体制（確認調査）

事業主体者：建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所
調査主体者：鹿児島県教育委員会
企画・調整：鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井上　明文
調査企画者：	〃	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
調査担当者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	繁昌　正幸
	〃	文化財調査員	宮田　洋一
調査事務担当：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	前田　昭信
	〃	主　　査	脇田　清幸

平成14年度調査体制（本調査）

事業主体者：国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
事業主体者：国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
企画・調整：鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井上　明文

調査企画者：	〃	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
調査担当者：鹿児島県立埋蔵文化財センター		文化財研究員	石丸　良輔
	〃	文化財調査員	相美伊久雄
発掘事務担当者：鹿児島県立埋蔵文化財センター		総務係長	前田　昭信
	〃	主査	脇田　清幸

平成18年度体制（整理・報告書作成）

事業主体者：国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所

作成主体者：鹿児島県教育委員会

作成責任者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	～H18・７・31	上今　常雄
		H18・８・１～	宮原　景信
作成企画者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長		有川　昭人
	〃	次長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
作成担当者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査第二課長		立神　次郎
	〃	文化財主事	日髙　勝博
作成事務担当者：鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長		寄井田正秀
	〃	主査	蒲池　正秀
報告書作成検討委員会	平成18年12月15日	宮原所長ほか　12名	
報告書作成指導委員会	平成18年12月13日	新東次長ほか　４名	
企画担当者	中村和美・平美典		

第３節　調査の経過（日誌抄）

平成13年度の確認調査の経過は日誌抄により略述する。

確認調査

平成13年12月17日から12月21日まで向栫城跡と同時に実施した（実働５日間。確認トレンチを５か所に設定し，掘り下げを行った。その結果，古代の土師器，縄文時代早期（条痕文土器）・晩期（精製土器・黒色研磨土器）・古墳時代（中津野式土器・成川式土器），古代（土師器），中世（青磁）などの土器や石器などが出土した。

本調査

本調査は，平成14年５月７日（火）からＡ地点とＢ地点との調査を併行して実施し，平成14年

８月２日（金）に終了した。以下，本調査の調査概要は日誌抄により略述する。

平成14年５月７日（火）～５月10日（金）

Ａ地点の伐採。Ａ地点・Ｂ地点の表土剥ぎ。グリッド杭設定作業。Ａ地点及びＢ地点のⅡ層掘り下げ作業。

平成14年５月13日（月）～５月17日（金）

Ａ地点及びＢ地点のⅡ層掘り下げ作業。Ａ地点のピット検出作業。Ａ地点のⅡ層及びⅢ層遺物出土状況平板・レベル実測。遺物取り上げ作業。Ａ地点のＣ－10区貝殻ピット検出作業後検出状況写真撮影。ピット半截作業完掘後平面・断面実測作業。Ｂ地点のＦ－４・５区，Ｇ－３・４区，Ｉ－３・４区のⅡ層掘り下げ。遺物出土状況平板・レベル実測。遺物取り上げ作業。Ｆ～Ｈ－４・５区Ⅱ層の掘り下げ作業。

平成14年５月20日（月）～５月24日（金）

Ａ地点の土坑１を検出し，埋土掘り下げ（半截）。土坑検出状況写真撮影。土坑１の平面・断面図実測作業。土坑２のⅢ層掘り下げ（南半分・北半分）作業。Ｃ－10区の遺構検出面コンタ図作成。アカホヤ層上面コンタ図作成。Ⅳ層上面の精査作業。遺物出土状況写真撮影。Ｃ－10区の遺物出土状況平板実測作業。Ｂ地点。Ｆ－４～６区のⅡ層掘り下げ作業。精査後Ⅲ層の上面遺構検出作業。ピットの半截及び土坑はベルトを残し埋土掘り下げ作業後完掘。遺構検出上面コンタ図作成。Ｇ～Ｉ－３・４区のピット完掘後平面・断面実測作業。Ⅲ層掘り下げ作業。Ｈ・Ｉ－３・４区のピット検出状況写真撮影。Ｆ～Ｉ－４・５・６区の遺構検出面コンタ図作成。Ⅲ層の掘り下げ作業。ピット及び土坑検出状況平板実測作業。Ｇ－Ｈ４・５区，Ｉ－３区の遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。

平成14年５月27日（月）～５月28日（火）

Ａ地点。Ｃ－10区の遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ⅴ層上面の遺構検出作業。Ｂ地点。Ｇ・Ｈ－４・５区，Ｉ－３・４区の遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。下層確認トレンチ掘り下げ作業。Ｇ・Ｈ－４区の南北トレンチ掘り下げ及び南北・東西トレンチ状況写真撮影作業。Ｉ－３・４区のⅣ層掘り下げ作業。

平成14年６月３日（月）～６月７日（金）

Ａ地点。東側及び南側断面より１ｍ幅トレンチのⅤ層掘り下げ・土層断面分層作業。土層断面状況写真撮影後土層断面実測作業。Ｂ地点。Ｇ・Ｈ－４区の南北トレンチ掘り下げ作業。Ｉ－３・４区のⅤ層掘り下げ作業。Ｇ－４区の下層確認トレンチ完掘状況写真撮影。Ｈ－３・４区，Ｉ－３・４区のⅣ層及びⅤ層掘り下げ作業。遺物出土状況平板実測・レベル実測・取り上げ作業。Ｉ－３・４区，Ｇ・Ｈ－４・５区のⅣ層及びⅤ層掘り下げ作業。土坑３・４の埋土掘り下げ作業後完掘，写真撮影後平面実測作業。Ｉ－４区の南側土層断面分層後精査，断面実測作業。Ｇ・Ｈ－４・５区のⅣ・Ⅴ層の掘り下げ。東側土層断面分層後精査，断面実測作業。

平成14年６月10日（月）～６月14日（金）

Ａ地点。Ｃ－11区のⅡ層上面掘り下げ作業。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業後Ⅲ層上面の遺構検出作業。土坑２及び柱穴７・８の埋土掘り下げ作業。遺構埋土内の遺物出土平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｂ地点。Ｇ・Ｈ－４・５区のⅣ・Ⅴ層

掘り下げ作業，遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｈ－４区の土坑４埋土掘り下げ完掘後写真撮影，Ｇ－４・５区のⅥ層上面での遺構検出。Ｇ・Ｈ－３・４区のⅣ・Ⅴ層掘り下げ作業。Ｇ・Ｈ－４・５区の土層断面写真撮影後土層断面実測作業。

平成14年６月18日（火）～６月21日（金）

Ａ地点。Ｃ－11区のⅢ・Ⅳ層上面の掘り下げ作業。Ⅲ層上面での遺構検出及びコンタ図作成作業。Ｂ地点。Ｇ・Ｈ－３・４区のⅣ・Ⅴ層掘り下げ作業。Ⅵ層上面の精査後遺構検出作業。Ｆ－５区，Ｇ・Ｈ－４・５区，Ｉ－３・４区の遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｇ・Ｈ－３・４・５区のⅥ層上面コンタ図作成作業。Ｂ地点調査終了（21日），埋め戻し作業。

平成14年６月24日（月）～６月27日（木）

Ｂ地点の埋め戻し作業及びＣ地点の重機による表土剥ぎ。Ａ地点。Ｃ－11区の土層断面分層作業。土層断面状況写真撮影後土層断面実測作業。Ａ地点の調査終了（26日）。重機により埋め戻し作業。Ｃ地点の調査開始（25日）。グリッド設定作業。Ｃ－５・６・７区，Ｄ－５・６区のⅡ層掘り下げ作業。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｃ・Ｄ・Ｅ－６・７区のⅡ層掘り下げ作業。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業を繰り返し実施。

平成14年７月１日（月）～７月５日（金）

Ｃ地点。Ｃ・Ｄ・Ｅ－６・７区のⅡ層掘り下げ作業。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業を繰り返し実施。Ｃ－６・７区のⅡ層掘り下げ作業。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ⅲ層上面での遺構検出作業。Ｄ－６・７区Ｃ－６・７区のⅡ層掘り下げ作業。遺物出土状況写真撮影。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｃ－４・５区のⅡ層掘り下げ作業。Ｃ－５区の遺物出土状況写真撮影。Ｃ－６区のⅢ層上面遺構検出作業。Ｃ－４区，Ｄ－４・５区，Ｅ－５区のⅡ層掘り下げ作業。Ｃ・Ｄ・Ｅ－６・７区のⅣ層上面コンタ図作成作業。Ｄ・Ｅ－６・７区の遺物出土状況写真撮影。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。

平成14年７月８日（月）～７月12日（金）

Ｃ地点。Ｃ・Ｄ・Ｅ－５区のⅡ層・Ⅲ層掘り下げ作業。遺物出土状況写真撮影後遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｃ・Ｄ・Ｅ－６・７区のⅣ層上面コンタ図作成作業。Ｃ・Ｄ－４区の遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｃ・Ｄ－３・４区のⅢ層上面のコンタ図作成作業。Ｅ－４区５・６・７区のⅢ層掘り下げ作業。遺構検出作業。Ｃ・Ｄ－６・７区の土坑７（焼土坑）の埋土掘り下げ作業完掘後平・断面実測作業。Ｃ・Ｄ－６・７区の土坑５及び柱穴44の埋土掘り下げ作業完掘後平・断面実測作業。埋土状況写真撮影。Ｃ・Ｄ－４・５区のⅢ層上面遺構検出作業後Ⅲ層掘り下げ作業。Ｃ－４区の土坑８及び溝状遺構を検出後掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－４・５区のⅢ層上面精査後遺構検出作業。同区のコンタ図作成。Ⅲ層遺物出土状況写真撮影。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｃ－６区のⅢ層遺物出土状況写真撮影。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。

平成14年７月15日（月）～７月19日（金）

Ｃ地点。Ｃ－４区の溝状遺構埋土内遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。溝状遺構平・断面実測作業。土坑８の断面状況写真撮影。集石遺構の平・断面実測作業。Ｃ－７区の須恵器ピット平・断面実測作業。Ｄ－５・６・７区のⅢ層掘り下げ作業，Ⅳ層上面遺構検出作業。Ｄ－４・５・６・７区のⅢ層掘り下げ作業。Ｄ－６・７区の遺物出土状況写真撮影。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｃ・Ｄ・Ｅ－６・７区のⅣ層上面コンタ図作成作業。土坑４の完掘状況写真撮影。土坑５の実測作業終了。

平成14年７月20日（月）～７月24日（金）

Ｃ地点。Ｃ－４区の溝状遺構精査後検出状況写真撮影。溝状遺構平・断面実測作業。Ｃ－５～７区のトレンチ設定後掘り下げ作業。Ｄ－７区のⅢ層掘り下げ作業。遺物出土状況写真撮影。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ⅳ層上面の遺構検出作業。Ｃ－３・４区のⅢ層掘り下げ作業。柱穴51の平・断面実測作業。Ｃ－５～７区のトレンチ内掘り下げ作業。遺物出土状況及びトレンチ位置平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。土層断面の分層作業。Ｅ－７区の須恵器ピット平・断面実測作業。Ｃ－４・５区に下層確認のためのトレンチ設定後掘り下げ作業。土層断面の分層作業。Ｃ－６・７区のトレンチ　土層断面写真撮影後土層断面実測作業。Ｄ－６・７区の遺物出土状況写真撮影。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。下層確認トレンチの土層断面の分層作業。土層断面写真撮影後土層断面実測作業。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ作業。Ｅ－６・７区下層確認のためのトレンチ設定後掘り下げ作業。土層断面の分層作業。トレンチの土層断面写真撮影後土層断面実測作業。須恵器ピット平・断面実測作業。須恵器ピット半截掘り下げ作業。

平成14年８月１日（木）～８月２日（金）

Ｃ地点。Ｃ・Ｄ－４・５区のベルト部分の掘り下げ作業。Ｄ－６区の土坑10・11の掘り下げ作業。完掘状況写真撮影後平・断面実測作業。Ｅ－７区の須恵器ピットの半截掘り下げ作業。精査後検出状況写真撮影。平・断面実測。土層断面実測作業。Ｅ－６区の柱穴52・53・54の掘り下げ作業。Ｃ－６区の土坑12（落し穴）の完掘状況写真撮影後平・断面実測作業。本日で調査終了。片づけ作業及び撤収作業。

整理・報告書作成事業の概要

市堀遺跡の整理・報告書作成業務は，平成18年４月10日～平成19年３月20日までに行った。また，報告書作成にあたり，市未真澄，内村光伸，内山伸明，高見憲次，中村和美，中村耕治，抜水茂樹，彌榮久志，森雄二の協力をいただいた。

整理作業従事者：梯　チヨ子，竹之下ハルミ，抜迫ヤス子，山下洋子，山元久代

（50音順，敬称略）

第Ⅲ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

市堀遺跡は，いちき串木野市湊町市堀に所在する。遺跡の所在するいちき串木野市は，薩摩半島の北西端部に位置し，北から北東側にかけては八重山山塊によって薩摩川内市と境を接し，南東側は日置市に接し，西側は吹上浜によって海に面し，東シナ海をはさんで甑島列島に相対している。いちき串木野市は県内随一の漁業基地であり，金山の町でもあった。この遺跡の所在している市来地区は，古い港町で落ち着きのある情景を残した町であったが，近年，国道３号線改良事業や薩摩川内市や旧串木野市との近郊として宅地化が進んでいる。

この市来地区は，町の大半が山地に覆われて，海岸に近い西部を除けば平地に恵まれない環境であり，地形は東から山地・台地・低地・海岸砂丘とで構成されている。

東部の山地は，八重山山塊に属する第三紀後半から第四紀更新世の旧期火山群の一部で，北東部の矢岳付近は標高約400m前後を最高峰として西側に向かって漸次低下している地形となっている。

山地は大部分が安山岩質の岩石で覆われ，八房川の上流，重信川の流域等には溶結凝灰岩が露呈している。これらの山地間はシラスに覆われ，重平山北側に源を発する大里川と八岳の北東斜面に主流の源を発する八房川が，これらの山地や台地を貫入し，山麓に小さなシラス台地を形成しながら狭い谷底平地をつくり，下流では三角州を形成して水田地帯となっている。また，これらの河川は西流して海岸の砂丘付近で合流し，低湿な沖積低地をつくって湊川となって東シナ海へ流入する。

この海岸沿いに発達している砂丘は，南北約４㎞を図り，南下するに従って砂丘の高さと幅を増し，吹上浜自然公園の一部として風光明媚な環境であり，その大海への注ぎ口は古代からの良港となり，中国との貿易港として発達し，藩政時代には交通の要地として御仮屋跡が置かれ，西薩一の港町として繁栄を極めている。明治になって御仮屋跡に郡治所が置かれ，一時は日置・阿多・薩摩・出水・甑島各郡を統治する西薩行政の中心地であったが，明治時代の国道や大正時代の鹿児島本線などの開通がある。一方，汽船時代の到来の中にあり，串木野港の建設により交通の要所を引き渡す結果となったとされている。

交通は，鹿児島本線が西部海岸寄りを北西から南東に走り，旧市来町市街地の北東隅に市来駅がある。道路は，国道３号線が鉄道とほぼ並行して走り，市街地南部の橋ノ口で国道270号線が分岐し，海岸線に沿って南下して南薩へ走る要所となっている。

一方，旧串木野市街地では国道３号線や鹿児島本線がほぼ市街地の中央部を南北に並行して走り，県道43号線が海岸線に沿って北上し，県道331号線は五反田川沿いに薩摩郡の内陸部と結んでいる。また，神之山で国道３号線から分かれる日置地区広域営農団地農道が東部の農村地域を南下して日置市の東市来に達している。

いちき串木野市は，平成17年度に市来町と串木野市とが平成の合併でできた新しい市である。本遺跡の所在している旧市来町は，明治22年（1889）には市来郷のうち湊村・大里・川上の３か村を統合して西市来村として発足し，昭和５年に町制を施行して市来町と改称している。一方，旧串木野市は，明治22年市町村制の施行に伴い，上名・下名・冠岳・荒川・羽島の５か村が統合し，串木野村として発足した。昭和10年には町制を施行し，昭和25年10月には鹿児島県で五番目の市として

市制を施行し，今回の市来町との合併により新しい市が誕生したことになる。

第２節　歴史的環境

いちき串木野市内の文化財は，遺跡を含めて多くが周知されている。中でも，来迎寺跡墓塔群（昭和42年指定），市来（川上）貝塚，国指定では有名な無形民俗文化財の七夕踊りが挙げられ，浦之名の疱瘡踊（昭和38年指定）・羽島崎春祭りに伴う田打や船持祝（昭和37年指定）などは，史跡や無形民俗文化財として県指定を受けている。

一方，遺跡は昭和60年刊行の『鹿児島県市町村別遺跡地名表』によると，串木野市が18か所，市来町では縄文時代１，弥生時代１，城跡５，寺跡及び墓地群３，江戸時代の諸遺跡４，観音像１の15か所が記載されている。しかし，平成３年度以降の北薩伊佐地区埋蔵文化財分布調査では30か所の遺跡が確認されている。その後，市来町による県営農村活性化住環境整備事業・中山間地域総合整備事業・電線鉄塔移設事業・県営圃場整備事業・農道整備事業等に伴う発掘調査をはじめ，鹿児島県教育委員会が平成８年度以降に実施した南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査等により遺跡数は増加し，現在では106か所の遺跡が周知されている。

いちき串木野市の発掘調査が行われた周辺の遺跡を中心に紹介したい。

当時，市来町の名を有名にしたのは七夕踊りと市来貝塚で，現在では小字名で川上（市来）貝塚としている。本貝塚は川上宮之後に所在し，八房川上流約３㎞の南岸の標高約12～13mの山地から伸びた尾根が谷底平野に突き出たかたちの舌状台地に位置している。貝塚を形成した台地は標高７～12mの北側の畑地造成によって一部貝層が露出して確認され，この北側斜面に縄文時代後期の貝層が形成されている。この貝塚は，大正９年（1920）に当時市来尋常小学校に赴任してきた有村栄助により発見された。翌，10年３月には山崎五十麿が調査を実施し，壺形，鉢形の土器類，貝輪の完全品や未完成品，貝類，石器，骨角器類，イノシシやシカなどの獣骨などが出土した資料を考古学雑誌に発表している。出土した土器のうち，初めて発見された形式を市来式土器と三森定男が命名し，人類学先史学講座第一巻で初めて市来式土器の型式名が使われ，南九州を中心とする縄文時代後期の示標となる形式の土器となっている。その後に寺師見國が小範囲で調査を行い，昭和36年（1961）には河口貞徳が貝層の２か所でトレンチ調査を10日間において実施している。その結果，市来式土器や指宿式土器，多くの石器，人骨２体も発見された。

平成２年（1990）には１か月と平成４年には約２か月において，市来町教育委員会が国庫補助を受けて，第二・三の貝塚の存在や集落の確認を目的に調査を行っている。

平成２年の調査では，土器，土製加工品，石器，貝輪，垂飾品・釣針・簪をはじめとする骨角器などが見られ，貝層を構成する層では，ハマグリ，アサリ，サザエ，カキ，アカガイなどや人骨も発見された。一方，タイ類を主体とする魚骨をはじめ，イノシシ，サル，イヌ，タヌキ，オオカミなどの獣骨が出土し，中でも　オオヤマネコの焼骨は特筆されている。

平成４年の調査では，貝層が大きく三層に分かれ，下層には出水式土器・指宿式土器が，下層には市来式土器が多く出土する傾向が指摘され，軽石製品や石錘４点，貝輪をはじめ，タマキ貝，マルサルボウカイ，カバトゲウミギクガイなどの貝種や人骨も発見されている。中でも，タマキ貝の貝輪は製作工程を知ることができる好資料をはじめ，多くの単式釣針，鋸歯状尖頭器などは西九州型漁労文化の影響がうかがえる資料とされている。

牛ノ江原遺跡は，川上字牛ノ江原ほかにあり，市来地区の西部北寄りの丘陵に位置している。遺跡は牛ノ江集落の南側後方で標高約40mの台地にあり，川上（市来）貝塚とは同じ丘陵の尾根違いにあたっており，近距離にあり遺跡の環境が同じである。遺物は，古墳時代の成川式土器をはじめ古代の土師器，青磁，土錐などが確認されている。

前平木場遺跡は，川上字前平木場にあり，市来地区の中央北端部で，串木野地区との境界に接する平木場集落に位置し，遺跡は集落のほぼ中央の標高約120mの南側へ緩やかに傾斜する段丘上にある。遺物は古墳時代の成川式土器をはじめ古代の土師器，陶器，磁器などが確認されている。

才野遺跡は，川上字才野ほかにあり，市来地区の中央部で，標高約130mの段丘上に位置している。遺跡は珍ノ山池を見下ろす所に位置し，弥生式土器や古墳時代の成川式土器等の遺物が確認されている。また，才野集落内にある小牟田遺跡とは迫を隔てた環境にある。

中ノ平遺跡は，川上字中ノ平ほかにあり，市来地区のほぼ中央部のやや北側寄りで，中ノ平の集落の北側斜面まで広がる標高約100mの丘陵に位置し，弥生式土器，成川式土器，土師器などの遺物が確認されている。また，北山屋敷遺跡も同じ丘陵にある。

外戸遺跡は，湊町字外戸にあり，標高約50mの谷頭にある緩やかに傾斜している畑地に位置し，弥生式土器，古代の土師器，青磁，陶器などの遺物が確認されている。また，外戸集落に取り囲まれるようにしている。

外戸山口遺跡は，湊町字外戸山口にあり，外戸集落の南西側で外戸橋を見下ろす標高約10mの丘陵地に緩やかな傾斜をもつ畑に位置し，水田との比高差も小さい環境にある。弥生式土器や古墳時代の成川式土器，古代の土師器などの遺物が確認されている。

衆中小堀遺跡は，湊町字衆中小堀にあり，安茶ケ原遺跡とは道路を隔てた南側で標高約21mの丘陵に位置し，遺物は古代の土師器，陶器，磁器などが確認されている。

北ノ原遺跡は，湊町字北ノ原にあり，標高約50mで市堀遺跡とは同じ丘陵上に位置している。遺跡の範囲は大きく，平坦面をもつが，東西及び北側の三方は大小の谷となり，古墳時代の成川式土器，古代の土師器をはじめ，青磁，白磁，染付などが確認されている。

草田平遺跡は，湊町字草田にあり，標高約20～40mの傾斜のある丘陵地で，市来農芸高校を見下ろす環境にある。また，外戸遺跡とは同じ丘陵上にあり，その先端部に位置している。古代の土師器，陶器などの遺物が確認されている。

小原遺跡は，湊町字小原にあり，湊町の市街地の南西端部で標高約10m程度の砂丘の小段丘内に位置している。遺跡は段丘頂部にある墓地の南側斜面で，弥生時代の遺物が確認されている。

鳩越遺跡は，大里字鳩越にあり，東市来地区との境界に接する標高約117mの丘陵地に位置している。遺跡は西側へ張り出した広大な丘陵で頂部は平坦地となり，さらに緩やかな傾斜を保つ環境で茶畑や柑橘類の植栽の多い所である。古墳時代の成川式土器や陶器などが確認されている。

池原前遺跡は，大里字池原前にあり，池ノ原集落前の標高約120mの丘陵上に位置している。遺跡は丘陵全体に広がり，傾斜も緩やかな畑地を中心に，古墳時代の成川式土器，古代の土師器のほか陶器が確認されている。

原ノ園原遺跡は，大里字原ノ園原ほかにあり，中福良集落を擁する上城跡とは谷を隔てた北側近くの標高約30mの平らで小さな台地に位置している。本遺跡を含めた地域には，大里川とほぼ平行

（縮尺２万５千分の１）
※22，23，25，56については遺跡の
位置が枠外のため省略

第２図　市堀遺跡周辺遺跡位置図

第２表　市堀遺跡周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	住所	時代	地形	遺物等	備考
1	市堀	いちき串木野市湊町市堀	古墳，中世，近世	丘陵	土器・土師器・陶器・土錘	
2	北ン原	いちき串木野市湊町北ン原	古墳，中世	丘陵	土師器・青磁・染付	
3	衆中小堀	いちき串木野市湊町衆中小堀	中世，近世	丘陵	土器・土師器・青磁	
4	安茶ヶ原	いちき串木野市川上南安茶ヶ原中ほか	古墳，中世，近世	台地	土器・土師器・青磁・陶器	
5	牛ノ江原	いちき串木野市川上牛ノ江原ほか	古墳，中世，近世	丘陵	土器・土師器・青磁・陶器	
6	大里田圃	いちき串木野市大里	弥生，古墳	扇状地	弥生壷形土器	一部破壊(大里田園地帯)，平成６年確認調査
7	重信城跡	いちき串木野市大里重信上城	弥生，中世	台地	黒髪式・土師器	表面採集
8	上城詰城跡	いちき串木野市大里上城詰城ほか	旧石器，縄文，弥生，中世	台地	台形石器・縄文土器・白磁・青磁	市来氏，平成５年確認調査，平成７～９年本調査
9	来迎寺跡墓塔群	いちき串木野市大里島内	縄文，中世（10～15C）	台地	黒曜石・土師器・五輪塔・宝塔など	
10	川上(市来)貝塚	いちき串木野市川上中組	旧石器，縄文（後），中世	台地	人骨・獣骨・鹿角製品・土器・石器	平成２・４年度確認調査
11	河上城跡	いちき串木野市川上中組	中世	丘陵	堀切・土塁	別称「栫城」
12	鍋ヶ城跡	いちき串木野市大里木場迫	縄文（草・早・晩），平安（９C後半），中世（12～16C）	台地	白鳥平式・須恵器・白磁・青磁	平成６年度確認・本調査
13	川口番所跡	いちき串木野市湊町天神町	近世（寛政～幕末）	低地		
14	お仮屋跡	いちき串木野市湊町祇園町	近世（慶長～幕末）	低地	石垣	
15	中原の治水溝	いちき串木野市大里中原	近世（嘉永５年）	台地	石畳の溝	
16	下諏訪	いちき串木野市大里中原	縄文	台地	土器片・打製石斧	「町郷土誌」
17	中諏訪	いちき串木野市大里中原	古墳	台地	土師器・須恵器	「町郷土誌」
18	上ノ原	いちき串木野市大里島内		台地	磨製石斧・土器片	「町郷土誌」
19	大谷山	いちき串木野市川上大谷山		丘陵	石器・土器片	「町郷土誌」
20	北山屋敷	いちき串木野市川上中平後	縄文	台地	土器片・打製石斧	「町郷土誌」，平成４年北薩・伊佐分布調査，平成８年度確認調査
21	小牟田	いちき串木野市川上才野ヶ原		台地	土器	「町郷土誌」
22	久保野入角	いちき串木野市川上久保野入角	古墳，中世	台地	土師器	平成３年北薩・伊佐分布調査
23	鉾ノ谷	いちき串木野市川上鉾ノ谷	弥生，古墳	段丘	土器	
24	中ノ平	いちき串木野市川上中ノ平ほか	弥生，古墳，近世	丘陵	土器・陶器	平成８年度確認調査
25	前平木場	いちき串木野市川上前平木場	古墳，中世，近世	段丘	土器・土師器・陶器・磁器	
26	才野ヶ原	いちき串木野市川上才野	旧石器，縄文，弥生，古墳	段丘	細石刃核・吉田式・桑ノ丸式	平成10年度確認調査
27	外戸	いちき串木野市湊町外戸ほか	弥生，中世，近世	段丘	土器・土師器・青磁・陶器	平成８年度確認調査
28	外戸山口	いちき串木野市湊町外戸山口	弥生，中世，近世	段丘	土器・土師器	

遺跡番号	遺跡名	住所	時代	地形	遺物等	備考
29	草り田平	いちき串木野市湊町草り田平	中世，近世	段丘	土師器・陶器	
30	小原	いちき串木野市湊町小原	弥生	段丘	土器	「縄文研究通信」
31	鳩越	いちき串木野市大里鳩越	古墳，近世	丘陵	土器・陶器	
32	松尾平	いちき串木野市大里松尾平	旧石器，縄文，古墳，中世	丘陵	台形石器・ナイフ・縄文土器・成川式	平成４年度本調査
33	池原前	いちき串木野市大里池原前ほか	古墳，中世，近世	丘陵	土器・土師器・陶器	平成７年度確認調査
34	原ノ園原	いちき串木野市大里原ノ園原ほか	弥生，古墳，中世，近世	台地	土器・土師器・陶器	
35	中尾東原	いちき串木野市大里中尾東原ほか	中世，近世	台地	土師器・陶器・青磁・染付	
36	佐保井東原	いちき串木野市大里佐保井東原ほか	中世	台地	土師器・青磁	
37	妙見前	いちき串木野市大里妙見前ほか	古墳，中世，近世	台地	土師器・青磁・陶器	
38	東園	いちき串木野市大里東園ほか	古墳，中世，近世	台地	土器・土師器・陶器	
39	西ノ鼻	いちき串木野市大里西ノ鼻ほか	古墳，中世，近世	台地	土器・土師器・陶器	
40	半崎堀	いちき串木野市大里半崎堀	弥生，古墳，中世，近世	台地	土器・土師器・陶器	
41	上平山	いちき串木野市大里上平山	弥生，古墳	段丘	土器	
42	田中堀	いちき串木野市大里田中堀ほか	縄文，弥生，古墳，中世，近世	段丘	土器・土師器・陶器	
43	崎野堀	いちき串木野市大里崎野堀ほか	弥生，古墳，中世，近世	丘陵	土器・土師器・白磁・染付・陶器	
44	深田前迫	いちき串木野市大里深田前迫ほか	古墳，中世，近世	丘陵	土器・土師器・陶器・磁器	
45	戸崎平	いちき串木野市大里戸崎平ほか	中世	丘陵	土師器・土錘	
46	戸崎原	いちき串木野市大里戸崎原ほか	旧石器，縄文，古墳，中世	段丘	細石刃核・縄文土器・成川式・土師器・土錘	平成６年度確認調査，平成11年度本調査
47	落シ平	いちき串木野市川上落シ平	古墳	丘陵		平成４年農政分布調査，平成５年度確認調査
48	瀧之段	いちき串木野市川上瀧之段	縄文（草・早・前・晩），中世	丘陵	細石刃核・草創期土器・塞ノ神式・深浦式・押型文	平成４年農政分布調査，平成５年度確認調査，平成９年度本調査
49	安徳	いちき串木野市大里安徳	縄文～古墳	丘陵		平成４年農政分布・確認調査
50	針原	いちき串木野市川上中組針原	縄文，奈良，平安	段丘	石坂式・土師器	
51	本寺屋敷	いちき串木野市大里本寺屋敷	古墳，中世，近世	段丘	成川式・土師器・五輪塔	表面採集
52	来迎寺	いちき串木野市大里来迎寺	縄文，中世	台地	黒曜石・土師器	表面採集
53	西町	いちき串木野市湊町西町	縄文，中世	低地	青磁・砥石	「縄文研究通信」
54	梅巌寺跡	いちき串木野市湊町天神町	古墳，中世，近世	低地	成川式・青磁・染付・陶器	平成６年度確認調査
55	中島	いちき串木野市川上中島	縄文，古墳，中世	低地	縄文土器・成川式・須恵器	表面採集
56	柿ノ谷	いちき串木野市川上柿ノ谷		低地	鉄滓堆積層・加工石・流動滓	

して走る国道３号線の東側の小台地に，弥生時代から古墳時代，古代・中世にかけての遺跡が周知されている。

中尾東原遺跡は，大里字中尾東原ほかにあり，原ノ園原遺跡の北西部にあたり，下手中集落の上で標高約30mの台地に位置し，遺跡の西側には大里川が北流している。遺跡は，古代の土師器，染付，青磁，陶器などが確認されている。

佐保井東原遺跡は，大里字佐保井東原ほかにあり，標高約20mのほぼ平坦な台地上に位置している。本遺跡は，中尾東原遺跡とは迫を隔てたすぐ北側にあり，重信城とは台地を隔てた近隣に当たり，古代の土師器や青磁を確認している。

妙見前遺跡は，大里字妙見前ほかにあり，標高約60mのほぼなだらかな台地上に位置し，市木地区の南西部に当たる。本遺跡は，上ン原遺跡とは迫を隔てた南西川約200mのところで，来迎寺墓塔群は同台地の北側端部に所在している。遺物は古代の土師器，青磁を確認している。

東園遺跡は，大里字東園ほかにあり，標高約60mの平坦面をもつ広大な台地上に位置し，妙見前遺跡とは小さい谷を隔てて相接している。遺跡は，古墳時代の成川式土器，古代の土師器，陶器などが確認され，遺跡の南側は狭い水田となり，中原治水溝が廻っている。

西ノ鼻遺跡は，大里字西ノ鼻ほかにあり，東園遺跡の西南側で中諏訪遺跡や下諏訪遺跡とは同じ台地に位置し，同台地の道路を挟んだ北側台地に当たる。これらの遺跡は中原集落を取り囲むように広がり，本遺跡は古墳時代の成川式土器，古代の土師器，陶器などが確認さている。

半崎堀遺跡は，大里字半崎堀ほかにあり，西ノ鼻遺跡のほぼ中央の中原集落の中心部から北西に延びている台地にあり，遺跡は傾斜のない台地全体に及び，北側端には広域果場がある。遺跡は，弥生式土器，古墳時代の成川式土器，古代の土師器，陶器が確認されている。

上平山遺跡は，大里字上平山ほかにあり，市来地区の南東部に当たり，大里の広大な水田を見下ろす段丘に位置している。遺跡は，堀集落でも集落の南東部の若干はなれた集落内に東側へのなだらかな傾斜もつ環境で，弥生式土器，古墳時代の成川式土器，古代の土師器，陶器が確認されている。本遺跡の周辺には，田中堀遺跡，深田前迫遺跡，戸崎原遺跡など遺跡が確認されている。

田中堀遺跡は，大里字田中堀ほかにあり，堀集落の中でも北側の集落全体にまたがる広大な段丘上に位置し，遺跡は山の裾野を廻るように約10mの緩傾斜をもつ環境である。遺跡は，縄文式土器（時期不詳），弥生式土器，古墳時代の成川式土器，古代の土師器，染付，青磁，陶器などが確認されている。

崎野堀遺跡は，大里字崎野堀ほかにあり，崎野集落を見下ろす標高約30mの小丘陵のほぼ平坦な畑地に位置している。遺跡は，縄文式土器（時期不詳），弥生式土器，古墳時代の成川式土器，古代の土師器，染付，青磁，陶器などが確認され，田中堀遺跡とは道路を一つ隔てており，丘陵の北東部には迫が入り込んでいる。

深田前迫遺跡は，大里字深田前迫ほかにあり，標高約20～30mの東西に細長い丘陵上の畑地に位置している。遺跡は，古墳時代の成川式土器，古代の土師器，染付，青磁，陶器などが確認され，崎野堀遺跡とは道路を一つ隔てており，丘陵の北東部には迫が入り込んでいる。

松尾平遺跡は，大里字松尾平にあり，宇都集落北側約200mで標高約20mの傾斜のある小さい丘陵地に位置している。遺物は，古墳時代の成川式土器をはじめ古代の土師器などの遺物が確認され

ている。その後，県営農村活性化環境整備事業に伴って市来町教育委員会が平成４年（1992）調査を実施している。調査の結果，旧石器時代の台形石器を主体としたナイフ形石器文化期と細石刃などの細石器文化期の遺物が発見されている。ナイフ形石器文化期では，台形石器・角錐状石器・剥片尖頭器・分割剥片・ナイフ石器・楔形石器・使用痕のある剥片などの石器が出土している。特に，台形石器は形態的に４分類が行われており貴重な資料となっている。この旧石器時代のほか，縄文時代早期は集石遺構１基，円筒形条痕文土器や格子状押型文土器・山形押型文土器と晩期の遺物が少量みられている。

落シ平遺跡は，川上字落シ平にあり，中山間地域農村活性化総合整備事業に伴って市来町教育委員会は平成10年（1998）に瀧之谷遺跡とともに確認調査を実施している。本遺跡では地表面で土師器片や黒曜石などが確認できるが，遺物包含層は削平を受けていることが判明している。

才野ケ原遺跡は，川上字才野ケ原ほかにあり，中山間地域農村活性化総合整備事業に伴って瀧ノ段遺跡とともに市来町教育委員会が平成６年（1994）に瀧之谷遺跡とともに確認調査を実施し，旧石器時代終末期の細石刃核・細石刃，石斧などや縄文時代早期前葉の吉田式土器，早期後葉の桑ノ丸式土器が出土している。本遺跡は近年の圃場整備事業により削平を受けているために遺物包含層の残存している所を中心に調査を実施している。

安徳遺跡は，大里字安徳にあり，松尾平遺跡より南東側約250mで，宇都集落内の丘陵地に位置している。本遺跡は，縄文時代から古墳時代にかけての遺跡として知られ，平成４年には松尾平遺跡の調査と同期間に道路拡張部分の約15㎡について本調査が行われている。その結果，調査区の部分は，すでに削平を受けており，攪乱された層から土師器，青磁，近世陶器，滑石製品などの遺物が出土している。

大里田圃遺跡は，大里字大里田圃にあり，大里川東岸で大里の水田地帯の北側に位置し，西側の近隣には標高35mの台地には周知の遺跡である原ノ園遺跡があり，弥生時代・古墳時代・中世・近世の遺物が確認されている。遺跡は，大里川と国道３号線に挟まれた標高約５mの南北に長い水田地帯に所在し，平成９年（1997）には県営農村活性化環境整備事業に伴って市来町教育委員会により確認調査を実施している。調査の結果，古墳時代の成川式土器，古代の土師器などが攪乱層より出土し，遺物包含層は削平を受けていた。

上城詰城跡は，大里字上城詰城ほかにあり標高約110～115mの尾根状の台地に所在し，中世の山城を主体とした遺跡である。中福良集落の北側にある広大な台地の全てが遺跡で，古くから周知されている。これまでの調査により旧石器時代，縄文時代，弥生時代の複合遺跡であることが確認されている。

本遺跡は，県営農村活性化環境整備事業に伴って平成４年（1992）に市来町教育委員会が確認調査，第１次（平成７年）から第三次（平成９年）までの３か年の間に本調査を実施している。調査の結果，旧石器時代は，ナイフ形石器文化の礫群１基と三稜尖頭器・剥片尖頭器・分割剥片・石核・ナイフ形石器・台形石器・敲石や細石刃文化期の細石核や細石刃などの遺物が発見されている。

瀧之段遺跡は，川上の八房川上流約５㎞に位置し，八岳の裾野にあたる標高約25mの台地の傾斜地に所在している。調査は，平成４年（1992）に確認調査，平成５年の本調査，平成６年には県営中山間地域整備事業に伴って市来町教育委員会が確認調査を，平成９年には本調査を実施している。

調査の結果，下層の旧石器時代から縄文時代草創期の層からは，ハンマーストン，細石刃核，ブランク，細石刃，石核，掻器，楔形石器などや縄文時代草創期の舟形配石遺構１基と，隆帯文土器をはじめ，41本の石鏃が発見されている。一方，上層からは，縄文時代早期の集石遺構４基，溝状遺構１条をはじめ，円筒形の山形押型文土器，手向山式土器，円筒形条痕文式土器，塞ノ神式土器などの土器や掻器，石鏃，石斧，磨石，敲石，石皿などが発見された。

鍋ケ城跡は，上城跡の南東部にあり市来地区の山城で最も東側に所在する中世の山城である。この山城の広大な台地は，北東部がやや小高くなっており，北東側約200mには金兼鐘寺跡がある。本遺跡は，平成９年（1997）に県営農村活性化環境整備（大里地区）事業に伴って市来町教育委員会により調査を実施している。調査の結果，縄文時代から中世にかけての複合遺跡で，古代の土坑や中世の掘立柱建物跡などの遺構検出があり，中世山城である。遺物は，山城のほか縄文時代草創期の白鳥平系土器，縄文時代早期の前平式土器を中心とした貝殻円筒形貝殻文土器文化，縄文時代晩期の黒川式土器，弥生時代には黒髪式土器，古代～中世にかけては土師器（糸切痕土師器・内黒土師器），須恵器，青磁（同安窯系青磁・細型連弁文青磁碗），白磁（玉縁口縁白磁碗・口禿白磁碗），滑石製石鍋など出土の報告がある。特に，前平式土器の破片を利用した円盤状土製加工品の出土は県内最古であることや，この山城は13世紀から16世紀まで使用されたと報告されている。

針原遺跡（伝河上氏墓跡）は，川上字針原にあり，八房川が緩やかに蛇行する北岸の標高約９ｍの台地斜面縁辺部にあり，河川と県道とに挟まれた台地で，周辺には南北朝から室町時代と推定される五輪塔群40数基があり，川の対岸には川上城があることから，河上氏の墓地であろうとされていた。本遺跡は，平成５年（1993）に鹿児島県教育委員会により調査が行われ，中世の土坑７基をはじめ土師器，中世陶器，滑石製石鍋，近世の陶器，銭貨（寛永通宝），土人形などが発見されている。調査の結果，河上氏との結びつきを証明できる資料はなかったと報告されている。

古代

本遺跡が所在する市来地区には，古代において「市来」の名が初めて登場するのは平安時代に著された『延喜式』で，薩摩国における最初の駅名があげられているが，それを裏付けるものは見あたっていない。平安時代末の様相を伝える建久８年（1197）の薩摩国図田帳（島津家文書）の「市来院百五十町」が旧東市来町を含めた地区に相当すると考えられている。鎌倉時代以降は，市来院郡司職にあった市来氏とその庶流河上氏等が残した古文書に詳細な記録がある。南北朝時代の動乱は，南九州においても複雑な政治状況を現出している。しかし，市来院は薩摩国日置郡に属していたと考えられている。この地は市来院に属し，宝亀年間（770～780）以降，郡司の大蔵氏一族が支配し市来氏を称したとされている。

引用・参考文献

『市来町郷土誌』市来町教育委員会　1985
『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅰ）』1992　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書61
『今里遺跡』　2002　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書33
『老ノ原遺跡』　1996　東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書８
『猿引遺跡・雪山遺跡』　2003　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書53
『犬ヶ原遺跡』2003　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書５

第Ⅳ章　発掘調査の成果

第１節　発掘調査の方法

本遺跡は，平成８年（1996）８月の南九州西回り自動車道（市来ＩＣ～隈之城ＩＣ間）川内道路建設に伴う埋蔵文化財の分布調査により発見された遺物散布地で，当事業にかかる面積は4,800㎡である。その後，遺跡の対象地内において遺跡の性格と範囲を把握するための確認調査を実施した。

確認調査は，地形を考慮して２×５ｍのトレンチを合計５か所設定し，平成13年12月17日から平成13年12月21日までの５日間にわたり調査を実施した。その結果，遺跡面積は3,040㎡で，その範囲内に縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世などの遺構や遺物が残存していることが判明した。

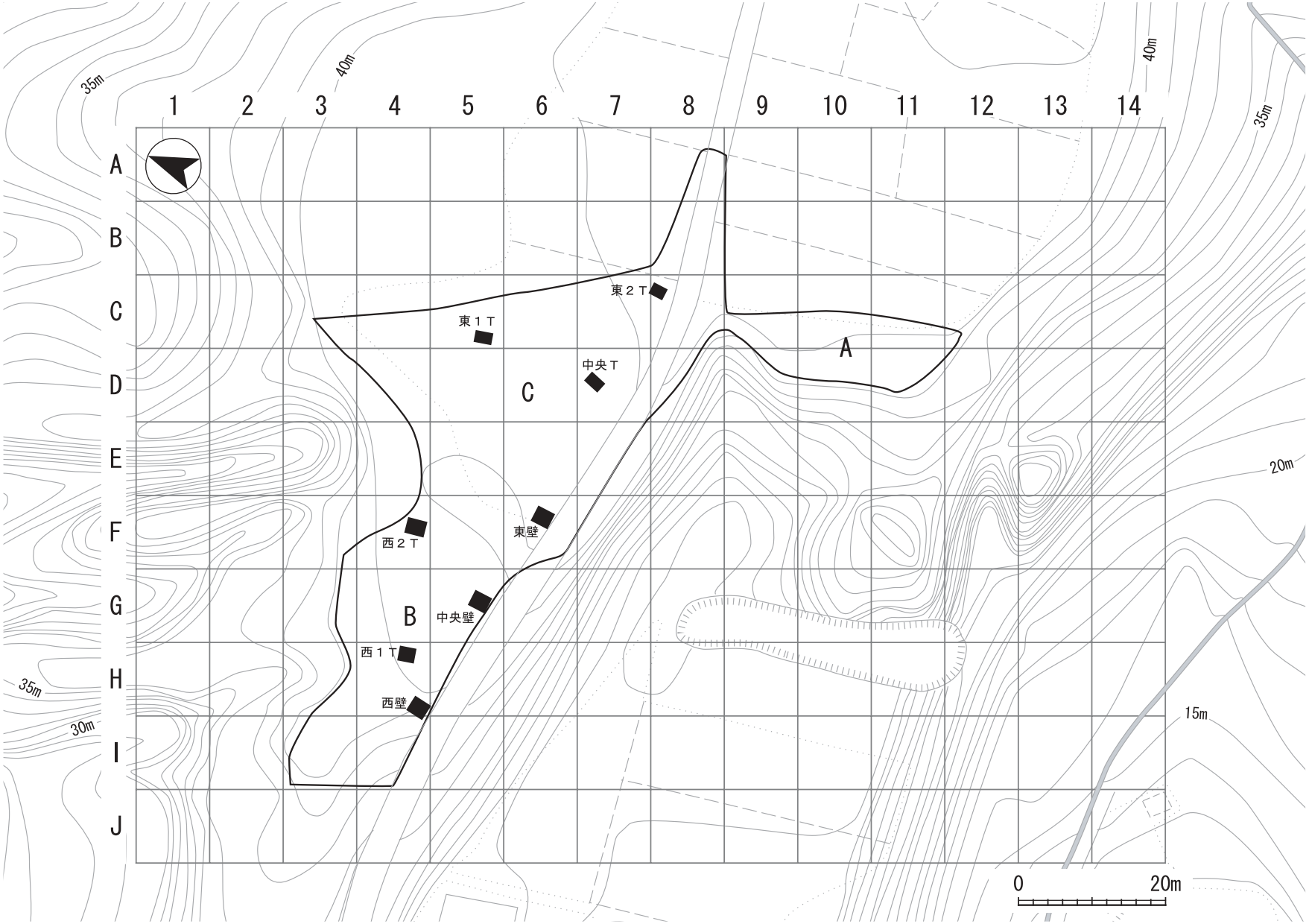
確認調査（平成13年度）後の本調査（平成14年度）は，調査対象地が不正形なことから東側の用地境界のラインを南北の基準点として設定し，そこから10m毎の線を設定した。東西方向の基準線は，北の端から概略20mを計りだし，南北線に直交するラインを基準として設定し，東及び西に向けて10mに線を設定することで10m毎のグリッドとして区画した。グリッドの名称は，東西方向を東側からＡ・Ｂ・Ｃ・・・としてＪまでを付け，南北方向を北側から１・２・３・・・として14までを付け，Ｄ－５区・Ｅ－５区のように呼称した。さらに，本遺跡ではグリッドを利用して調査対象地を大きくＡ・Ｂ・Ｃの３地点に分け調査を実施した。

調査は，伐採等の作業から開始し，環境整備等も並行して実施した。その後，表土を重機（バックホー）により除去後，グリッド杭の設定を実施した。当初の掘り下げについては，Ａ・Ｂ地点の２つの調査区について並行して調査を進め，Ａ・Ｂ地点の調査終了後，Ｃ地点の調査区の調査に取りかかるという工程で実施した。

Ａ・Ｂ地点の調査は，遺物包含層のⅡ層以下を人力（山鍬・ジョレン・移植ゴテなど）によって掘り下げ，遺物が出土したら遺物出土状況の写真撮影，遺物出土状況の平板・レベル実測，遺物の取り上げ作業などと包含層の掘り下げを繰り返し行った。掘り下げ作業でⅢ層上面に達したらジョレンにより遺構等確認のための精査作業を行い建物の柱穴の跡と考えられる小穴や溝跡などの検出作業に努めた。検出された遺構等は，移植ゴテなどを用いて丁寧（半截する場合もある）に掘り下げ，遺構検出状況写真撮影や平板や手測りによる実測や断面実測などを行った。その後，Ⅲ層の遺物包含層は，Ⅱ層と同様に山鍬を使って掘り下げを行い，Ⅳ層上面に達したらⅡ層包含層で行った作業行程をくり返し，出土遺物や遺構検出の作業と，その記録に努めた。さらに，下層確認のためにＡ地点の全域を山鍬でＶ層（シラス）まで掘り下げ，実際に旧石器時代の遺構や遺物の有無について確認作業を実施した。

Ｃ地点では，Ａ・Ｂ地点と同様の作業を行った。各（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）層の遺物包含層については，掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，平板・レベル実測，遺物取り上げ作業後，遺物包含層の精査作業を行い，遺構が確認された場合には遺構検出状況の写真撮影，遺構の半截するなどにより遺構掘り下げや埋土などの状況確認作業，検出遺構の断面等の状況写真撮影，平面・断面実測などについての作業を繰り返し行った。その後，旧石器時代については，下層確認のためのトレンチを設定し，人力により掘り下げを行って遺物の有無を確認した。

第３図　市堀遺跡周辺地形図



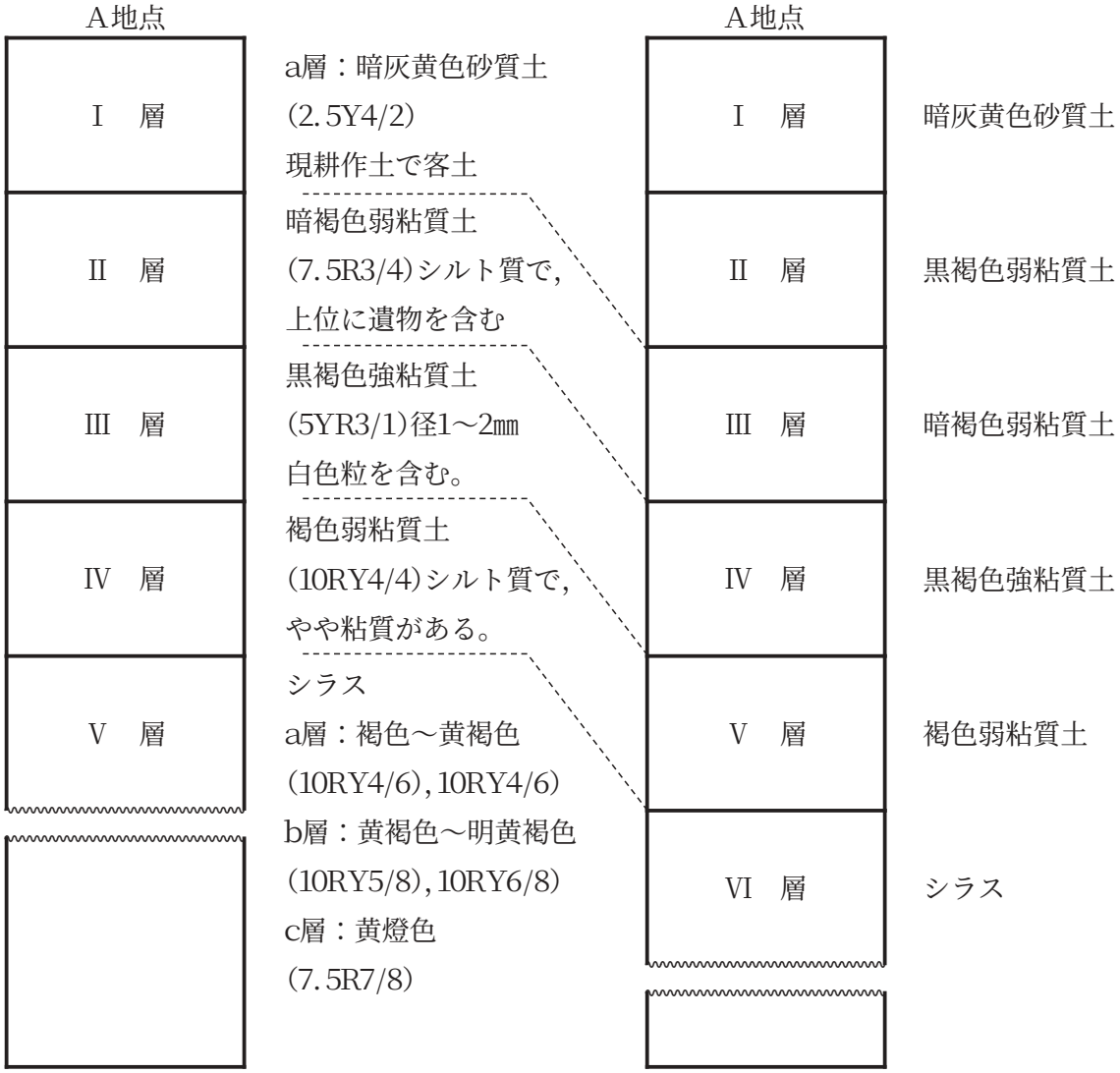
第４図　市堀遺跡確認トレンチ及びグリッド配置図

第２節　遺跡の層序

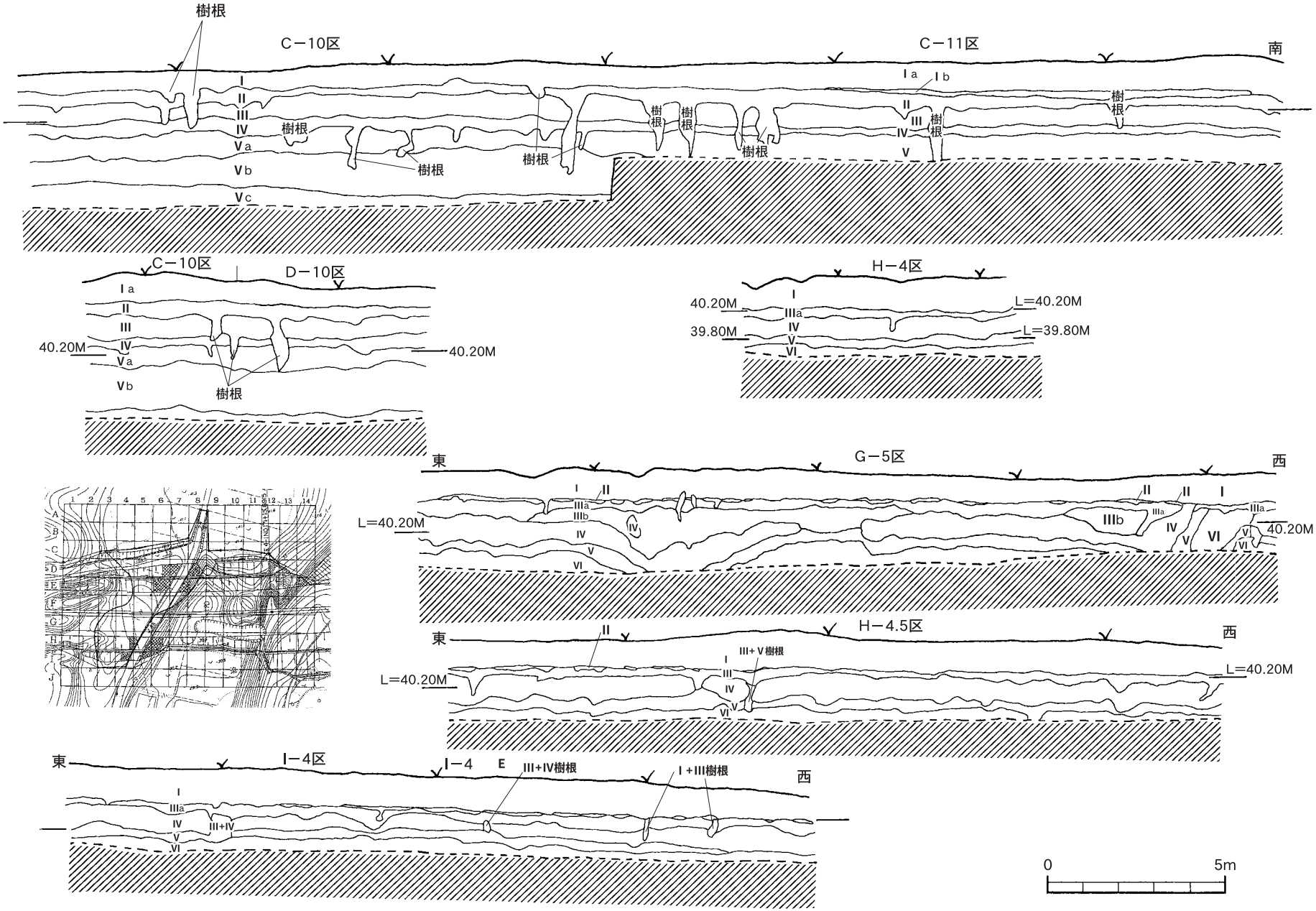
市堀遺跡の層序は，Ａ地点とＢ地点で色調を若干異にしているが，Ａ地点ではⅠ層からⅤ層まで，Ｂ地点ではⅠ層からⅥ層まで分層できた。

本遺跡は，東側丘陵地から西側の台地縁辺部にかけて傾斜をもち，遺跡の北側から西側及び南側にかけては迫が入っている。地形は次第に下がっていくという三方方向へ傾斜する地形で，３地点ともに台地縁辺部の先端部に位置している。

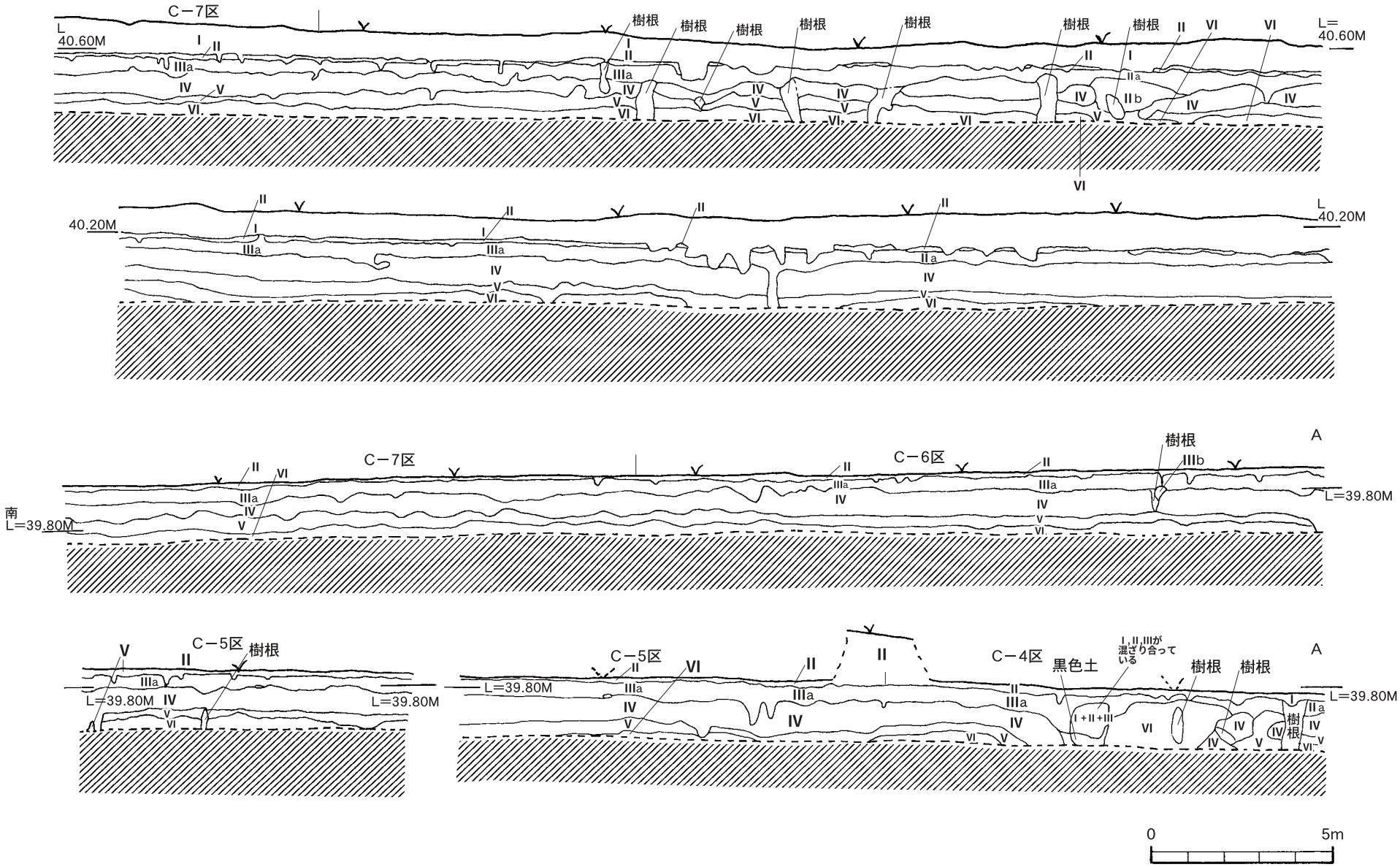
Ⅰ層は現耕作土で客土を認めるために造成土の可能性が高い。Ⅱ層は各部分で一定の層幅がなく，場所によっては削平を受けたり，残存しても僅かな堆積のところも観察された。このⅡ層が遺物包含層で，縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世などの遺構検出や遺物が出土している。Ⅲ層は径１～２㎜程度の白色粒を含む強い粘質土で，乾くとクラックが入りやすい層で，旧石器時代の遺物包含層であるが，本遺跡では無遺物包含層である。しかし，Ⅲ・Ⅳ層から出土している遺物は，土器の器面が磨滅しているものが多く，黒曜石製の石器の表面が風化している。遺跡の立地している環境からⅡ層からの移動が想定できる。Ⅴ層はａ・ｂ・ｃ層に３分され，それぞれに大小の軽石をａ層では微量に，ｂ層では多量に，ｃ層では若干含んでいることから，シラス該当層であることが考えられる。



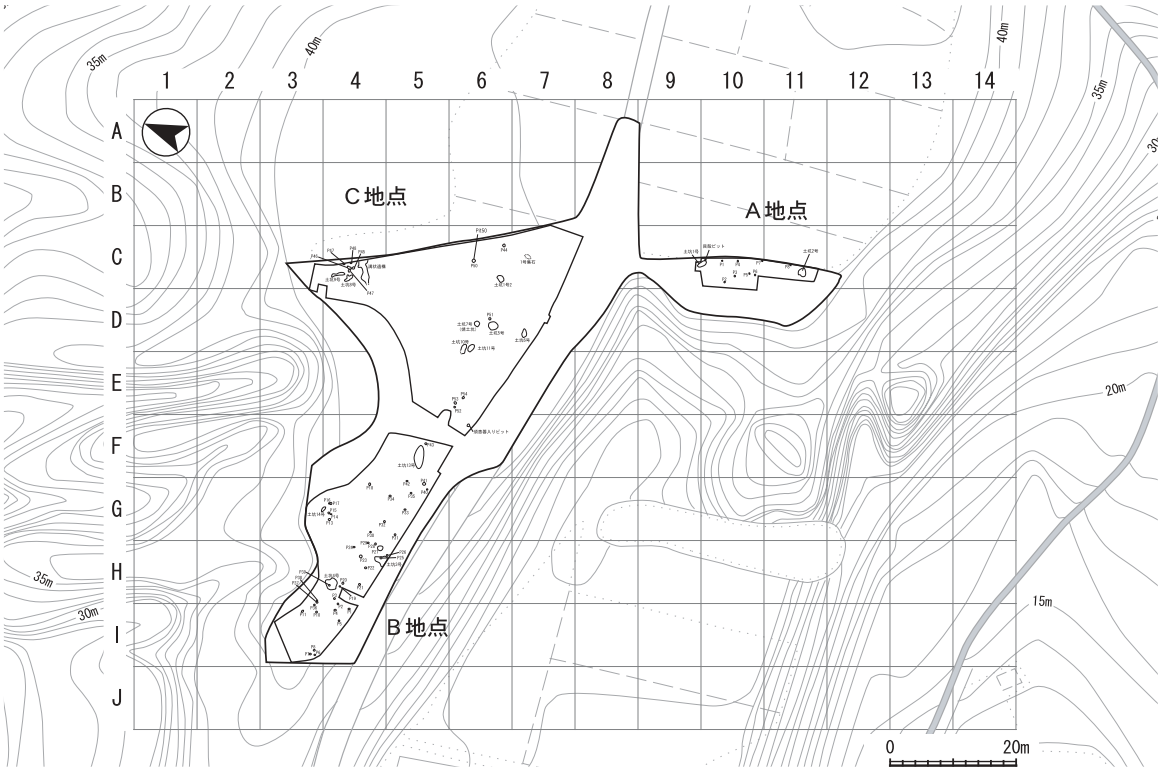
第５図　市堀遺跡の基本土層柱状模式図



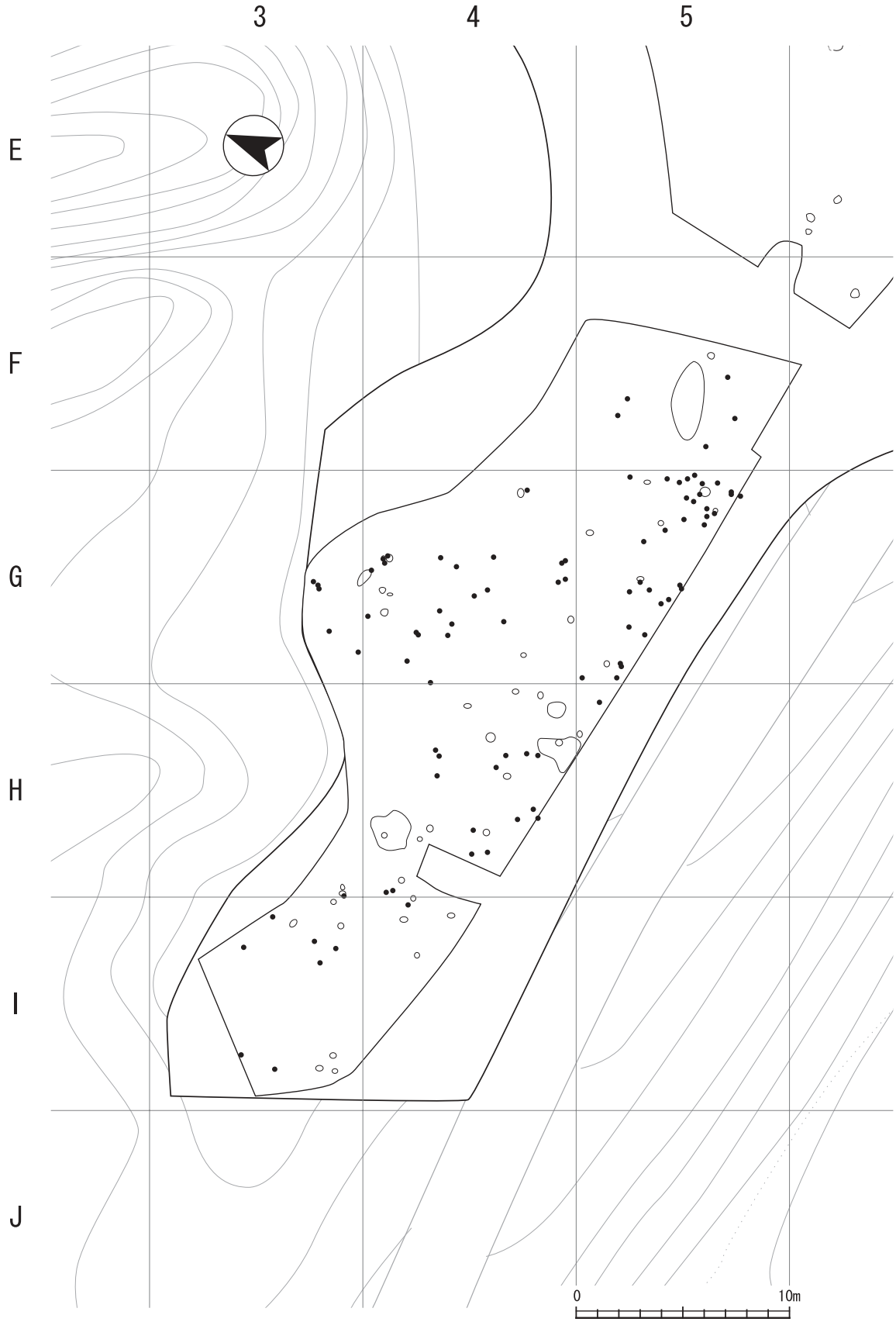
第６図　市堀遺跡土層断面図(1)



第７図　市堀遺跡土層断面図(2)



第８図　市堀遺跡の遺構配置図及びＡ地点ドット図



第９図　市堀遺跡のＢ地点ドット図

第10図　市堀遺跡のＣ地点ドット図

第３節　縄文時代の調査

縄文時代の調査は，確認調査の結果を基に表土を重機により除去した後にグリッドを設定し，Ａ地点及びＢ地点のⅡからⅢ層へと各層ごとに掘り下げを行った。Ａ・Ｂ地点の調査終了後にＣ地点の調査を実施した。その結果，Ⅱ層から縄文時代早期の遺構検出や遺物出土があり，同じ層より縄文時代晩期の遺物の出土がみられた。

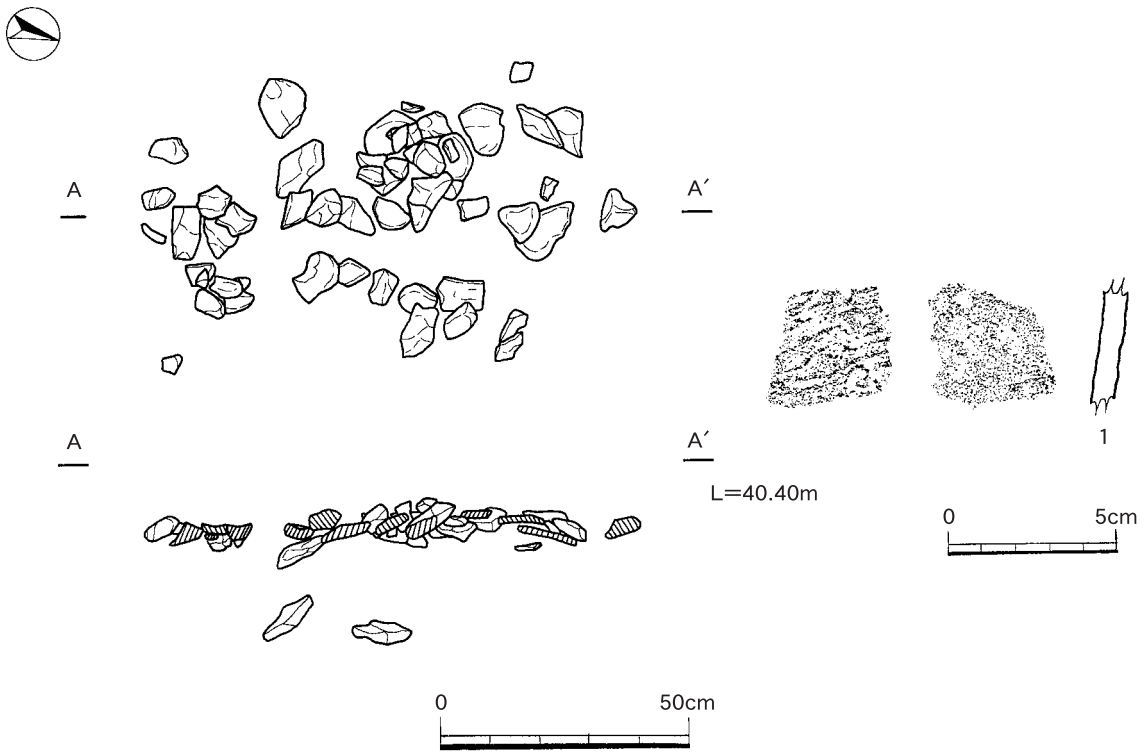
１　縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は，Ｃ地点のⅡ層より集石遺構１基と落し穴状土坑１基が検出されている。

集石（第11図）

集石は，Ｃ－７区で安山岩を主体とした角礫などが54個，略南北を長軸とした100㎝×62㎝の範囲に，３か所に分かれたような状況で検出された。堀り込み等はみられなかったが，礫２個だけがレベル的に15～20㎝下位にみられ，他の礫はほぼ同位置のレベルで検出された。礫全体が焼成を受けているようで大変脆くなっていたが，周辺の土には焼土や炭化物は発見されなかった。

１は，集石内から出土した土器の小破片である。焼成を受けた痕跡はみられない。外面は摩耗を受けているが，横方向の貝殻条痕による調整が施されている。内面は，ナデ調整で仕上げられ，胎土には多くの砂粒を含んでいる。器壁が薄く，縄文早期の貝殻文系の土器が考えられる。



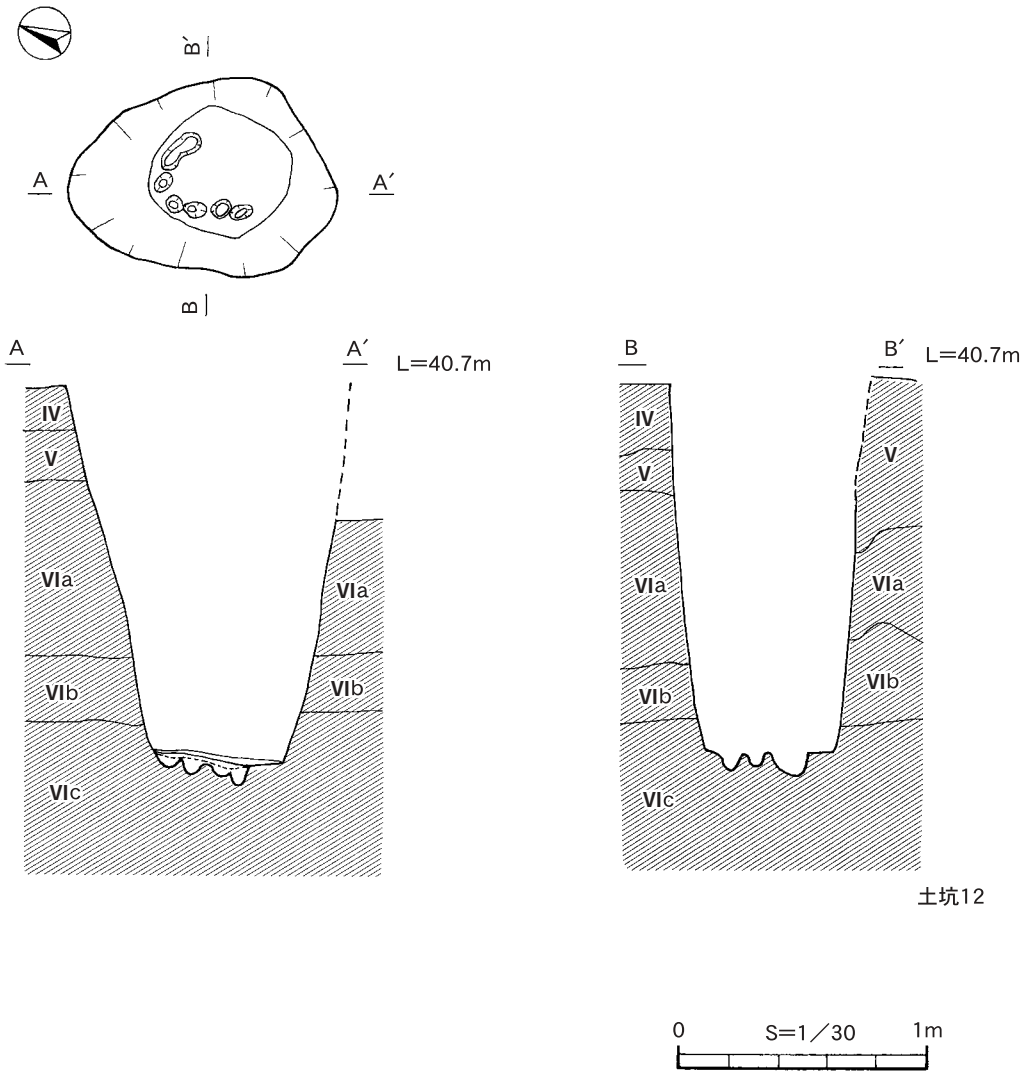
第11図　縄文時代の遺構（集石）と遺構内出土遺物

落し穴状土坑（第12図）

Ｃ－６区で検出された。Ⅲ層より掘り込みがあったと考えられる落し穴状の土坑で，埋土の上位の色調は，Ⅲ層包含層の土質と類似していたためⅣ層上面で検出した。

土坑の平面形は，長軸が110㎝，短軸が74㎝を測る略楕円形状である。検出面からの深さは145㎝と深く，Ⅳｃ層まで掘り込んでいる。

埋土の色調は褐色土で，Ⅳｂ層の埋土に近い色調であった。底面の西壁側には，小さな６個のピットが弧状に検出された。小ピットの径は，10㎝程度を測るものであった。当初は，逆茂木痕ではないかと考え，断面をスライスしながら調査した結果，底面のピットは樹痕などの影響による自然にできた可能性が考えられる。埋土からの遺物の出土はなかった。



第12図　縄文時代の遺構（落し穴状土坑）

２　縄文時代の遺物

①　縄文時代早期の土器（第13図２～第15図43）

出土した早期の土器は，小破片が多い。胴部に貝殻条痕文が施されており，時期は縄文時代早期前半と考えられる。口縁部や文様の分かる胴部など43点を図化した。

２～５は口縁部の小破片である。２，３は口唇部が平坦で，口縁部外面には，貝殻腹縁による刺突文が縦方向に施文される。その下には，貝殻条痕調整ののち斜めに貝殻復縁による刺突文が施されている。４は，口唇部に刻目が施され，斜め方向に貝殻条痕文が施される。５は，器壁が約５㎜と薄い。

６～23は，胴部の破片である。貝殻条痕調整ののち貝殻刺突文やヘラ状工具による沈線文などが施される土器である。

６～９は，斜め方向の貝殻条痕調整ののち，縦方向に列状の貝殻刺突文が施されている。内面は，ケズリ調整で仕上げられている。６～８は，角筒土器，９はレモン形土器の可能性が考えられる。

10～13は，貝殻条痕調整ののち貝殻腹縁による縦方向の刺突文が施されている。10～12は円筒土器，13は角筒土器と考えられる。

14～16は，角筒土器と考えられ，貝殻条痕調整ののち縦方向に波状沈線文が施されている。

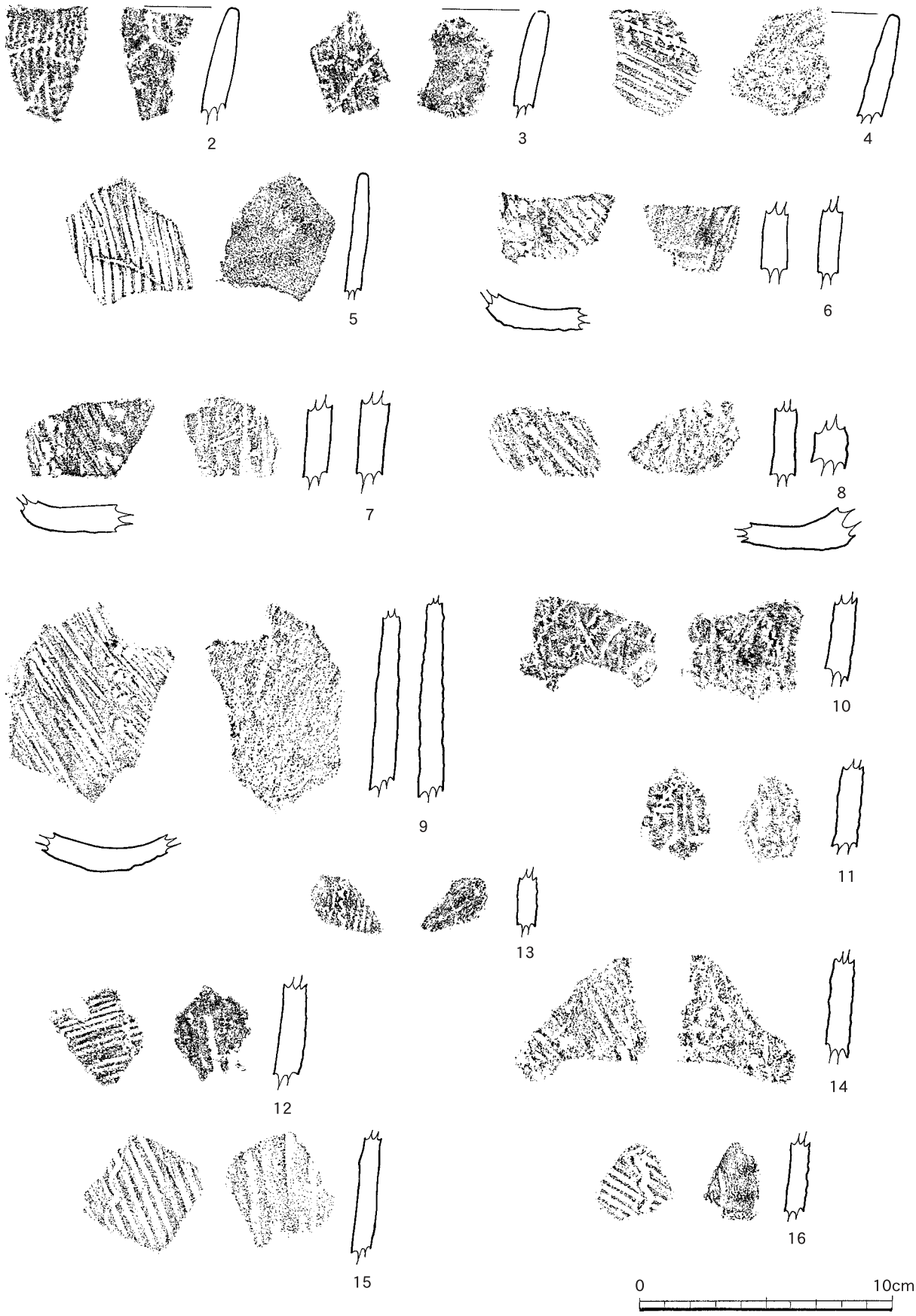
17は，角筒土器で，貝殻条痕調整ののち直線状の沈線文が施されている。縦方向の沈線文は，２条１組となっている。

18～21は，貝殻条痕調整ののち列状に刺突文が施されている。20は，2列で構成されている。21は，器壁が1.2㎝と厚い。

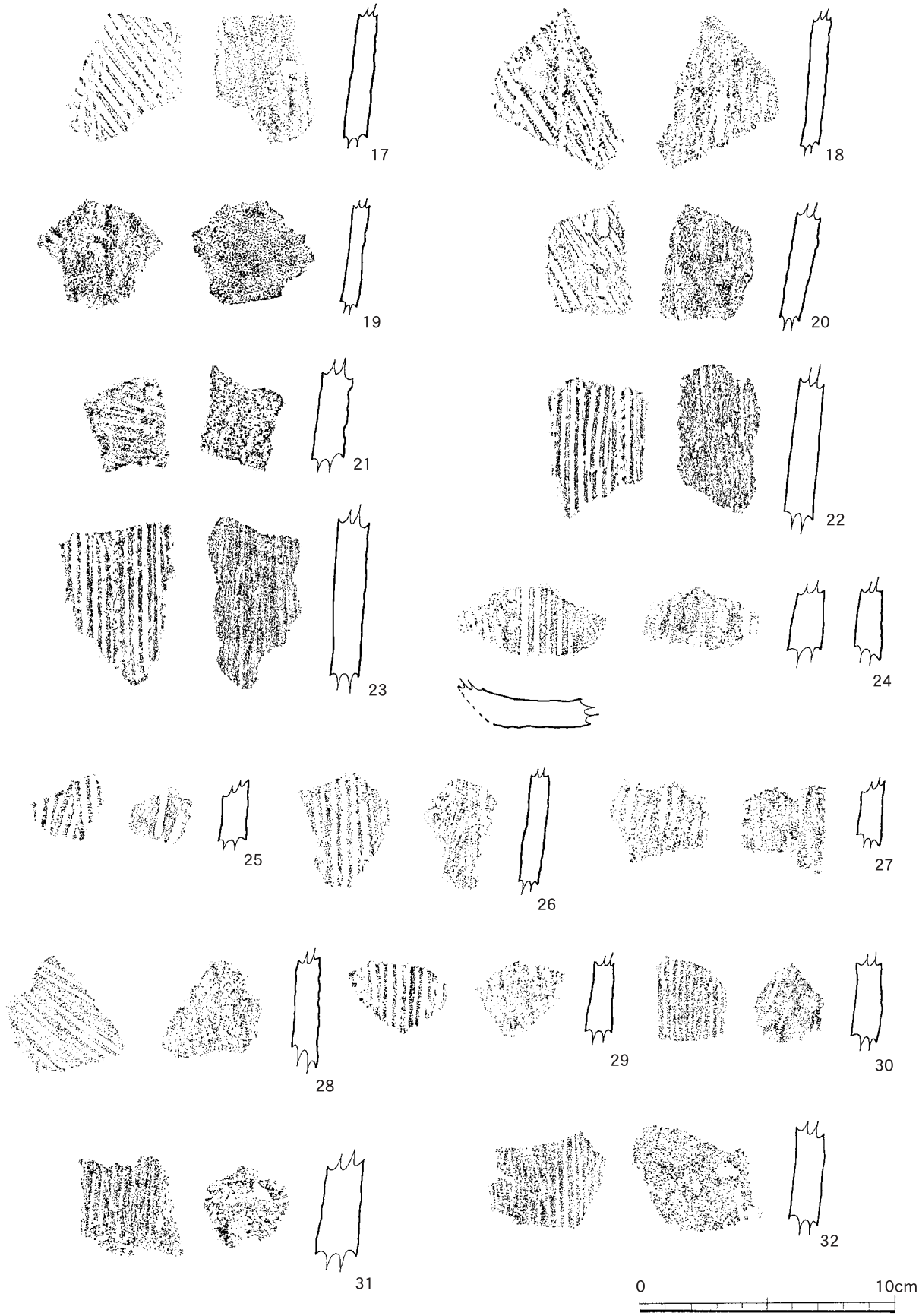
22・23は，縦方向の貝殻条痕調整ののち貝殻腹縁による刺突文が施されている。条痕がはっきり施され，器壁が約１㎝と厚い。内面は，縦方向のケズリ調整で仕上げられている。
同一個体の可能性が高い。

24～40は，胴部の小破片である。２重施文が確認できず，縦や斜め方向に貝殻条痕文が施されているものを取り上げた。小破片で器形が分からないものが多いが，24・31・32・34・38・39は角筒土器と考えられる。26は，器壁が約５㎜と薄い。28は，斜め方向に条痕が施されている。内面は，縦方向のケズリ調整で仕上げられている。31・32は，同一個体と考えられる。器壁が約1.5㎝と厚く，胎土に砂粒を多く含んでいる。33の内面はケズリののちナデ調整が施され，丁寧に仕上げられている。34・35は，同一個体と考えられる。器壁が約１㎝と厚い。胎土に角閃石を多く含んでいる。内面は，縦方向のケズリ調整で仕上げられている。38は，内面がケズリののちナデ調整で丁寧に仕上げられている。胎土に石英を多く含む。

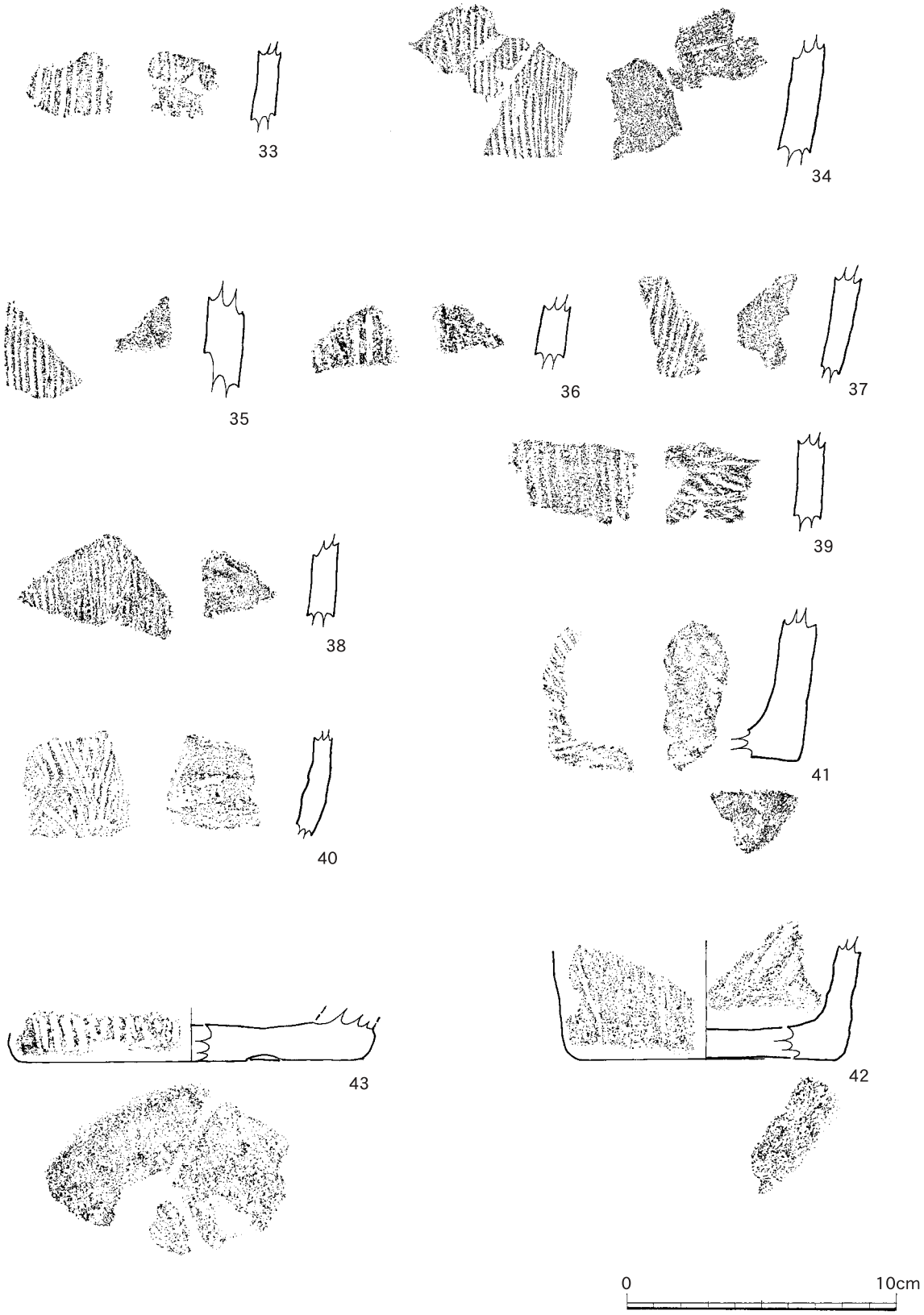
41～43は，底部の破片である。41は，器底の厚さが１㎝で，ほぼ直に胴部へ立ち上がる。剥離部分が多いが，わずかに底部に近い胴部には斜め方向の貝殻条痕文が施されている。底部外面はナデ調整で，底部から胴部に立ち上がる内面は指頭によるオサエ調整である。42は，円筒土器の底部と考えられる。外面は，摩滅が著しいが，わずかに縦方向の条痕調整が確認できる。43は，レモン形土器の底部と考えられる。器底の厚さは1.5㎝で，器底側面には縦方向の貝殻条痕が施される。



第13図　縄文時代の土器１



第14図　縄文時代の土器２



第15図　縄文時代の土器３

②　縄文時代晩期の土器（第16図44～第24図156）

縄文晩期の土器は，縄文土器の中でも晩期の土器と考えられるものが多く出土している。器形は，深鉢形土器や浅鉢形土器などである。出土した土器の大部分は，胴部の破片で傾きなど不明な点もあるが，口縁部や胴部の屈曲部，外面の調整等について器形ごとに分類した。

⑴　深鉢形土器（第16図44～第23図148）

深鉢形土器は，外面に沈線や条痕を持つ粗製土器である。大きく口縁部，胴部，底部に分類した。

ア　口縁部（第16図44～57・第17図58～60）

44は，口縁部が緩やかに外反し，口唇部は平坦になっている。口縁部の幅は広く，横方向に数条の沈線がみられる。内外面ともナデ調整で仕上げられている。

45～57は，口縁部が外反し，外面がナデ調整で丁寧に仕上げられているものである。45・46は，器壁が薄く，口唇部は先細になっている。47～49は，口唇部が平坦になっている。50は，口縁部が内傾している。52は，口縁部に段が付き，口唇部は平坦になっている。53は，口唇部が丸く仕上げられている。54は，器壁が５㎜と薄く，口唇部が丸くなっている。径が５㎜の補修孔を持っている。

58～60は，口縁部が外反し，外面に横方向の条痕が見られるものである。58・59は，口唇部は先細になっている。60は，口唇部が平坦に仕上げられている。

イ　胴部（第17図61～第22図131）

胴部は，まず屈曲部とそれ以外の部位に分け，次に器面調整により細かく分類した。

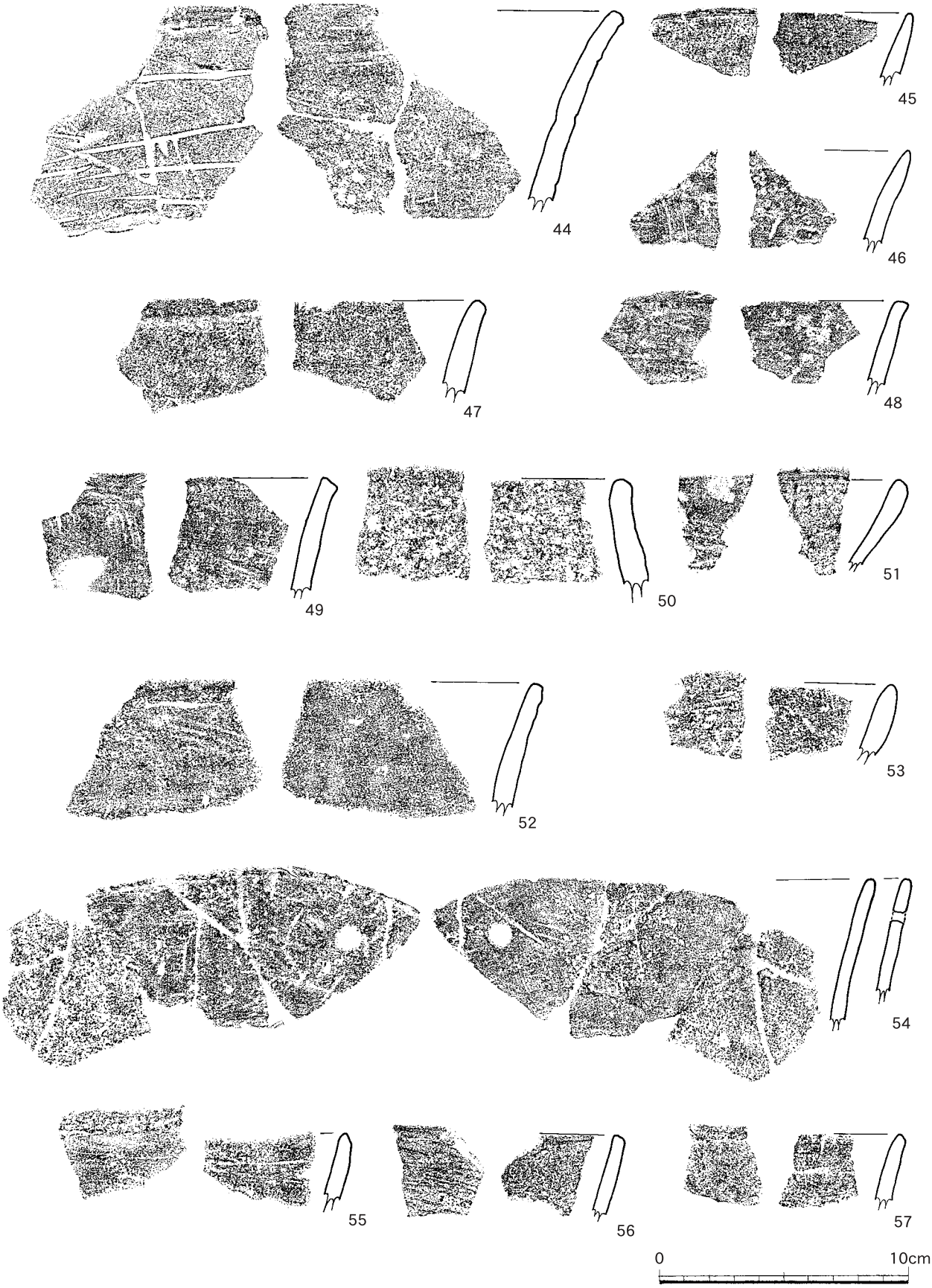
61～72は，胴部の屈曲部である。61は，外面がミガキ調整で仕上げられ，わずかに屈曲する。64は，逆「く」の字状に屈曲し，稜をなす。外面は丁寧なナデ調整，内面はヘラケズリののちナデ調整で仕上げられている。65・66は，内外面ともに丁寧なナデ調整で仕上げられている。67は，胴上部と考えられ，肩部でやや内側に曲がり，頸部から外に開く。外面は横方向の条痕調整ののちナデ調整で，内面はナデ調整で仕上げられている。68は，わずかに段を持つ頸部である。69は，緩やかに外に開く頸部で，外面は横方向の条痕調整ののちナデ調整で仕上げられている。71・72は，器壁が約５㎜と薄い。緩やかに内側へ曲がる肩部と考えられる。ともに外面はヘラケズリ，内面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。

73～131は，屈曲部以外の胴部である。小破片が多く，傾きが不明なものもある。器面調整によって分類した。

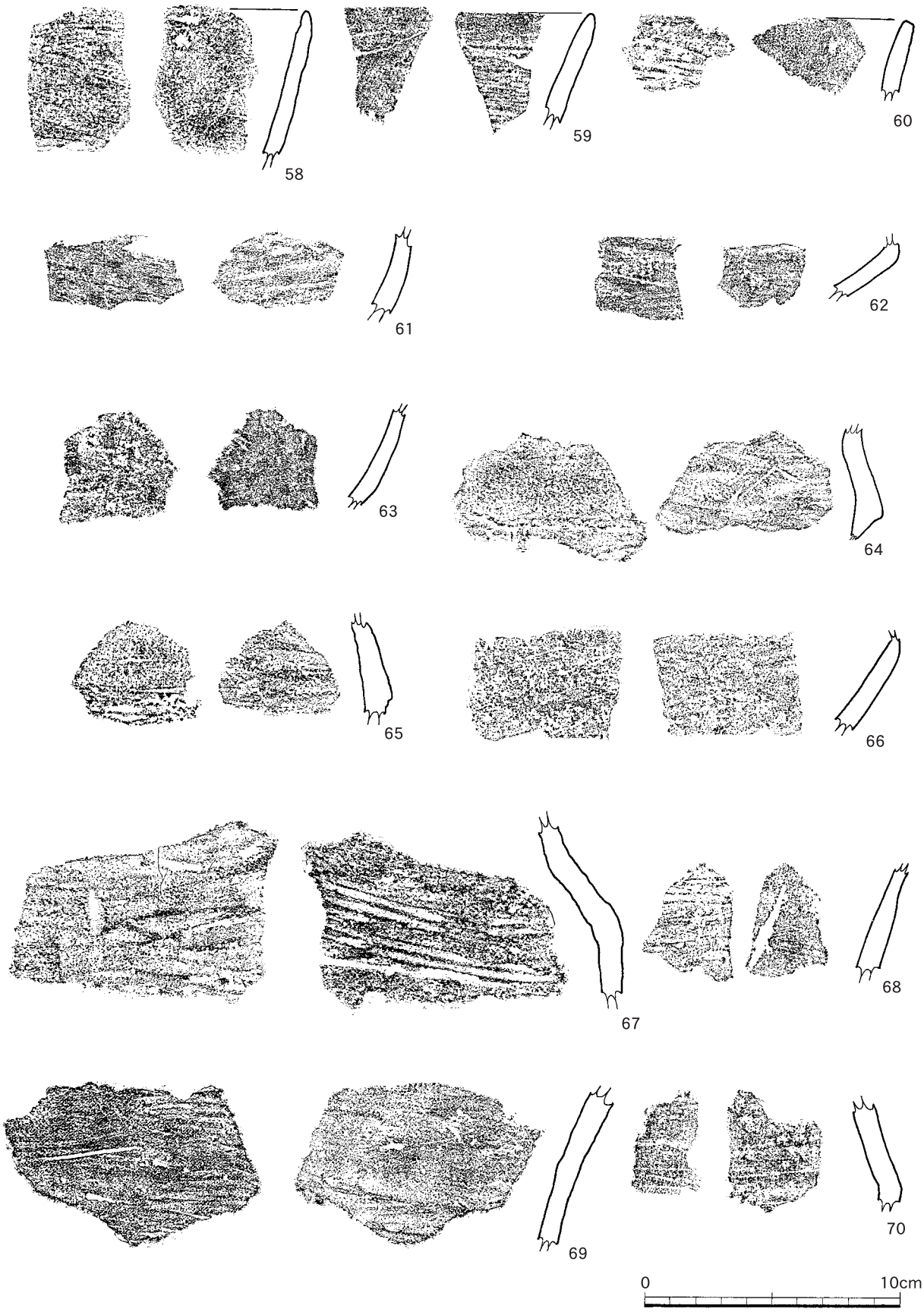
73は，外面に沈線が施される。内外面ともナデ調整である。44と同一個体と考えられる。

74～77は，外面がミガキ調整によって仕上げられている。75・76は，器壁が４㎜と薄い。78～98は，外面が丁寧なナデ調整で仕上げられている。81は，胴下部と考えられ器壁が約１㎝である。99～122は，外面がケズリ調整で仕上げられている。99は，肩部からほぼ直線的に底部へ向かう部分と考えられ，斜め方向のヘラゲズリが施されている。101は，外面はヘラケズリののちナデ調整，内面はヘラミガキで仕上げられている。109は，外面にススが薄く付着している。内面はヘラミガキで仕上げられている。

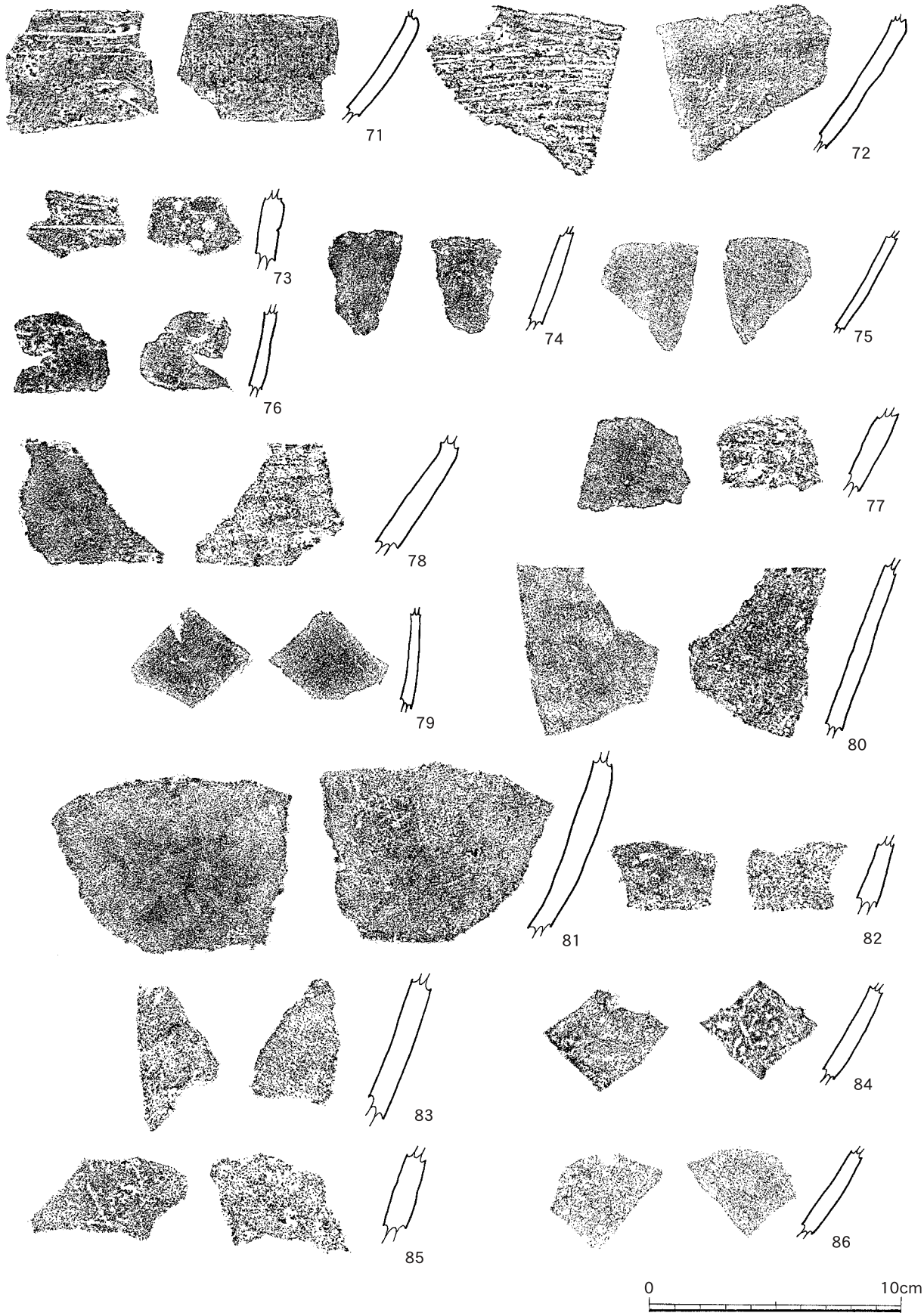
115は，ほぼ直線的に立ち上がる胴下部と考えられる。器壁は，約４㎜と薄い。内面は，ナデ調整で丁寧に仕上げられている。118は，外面に薄くススが付着しており，黒褐色を呈する。121は，



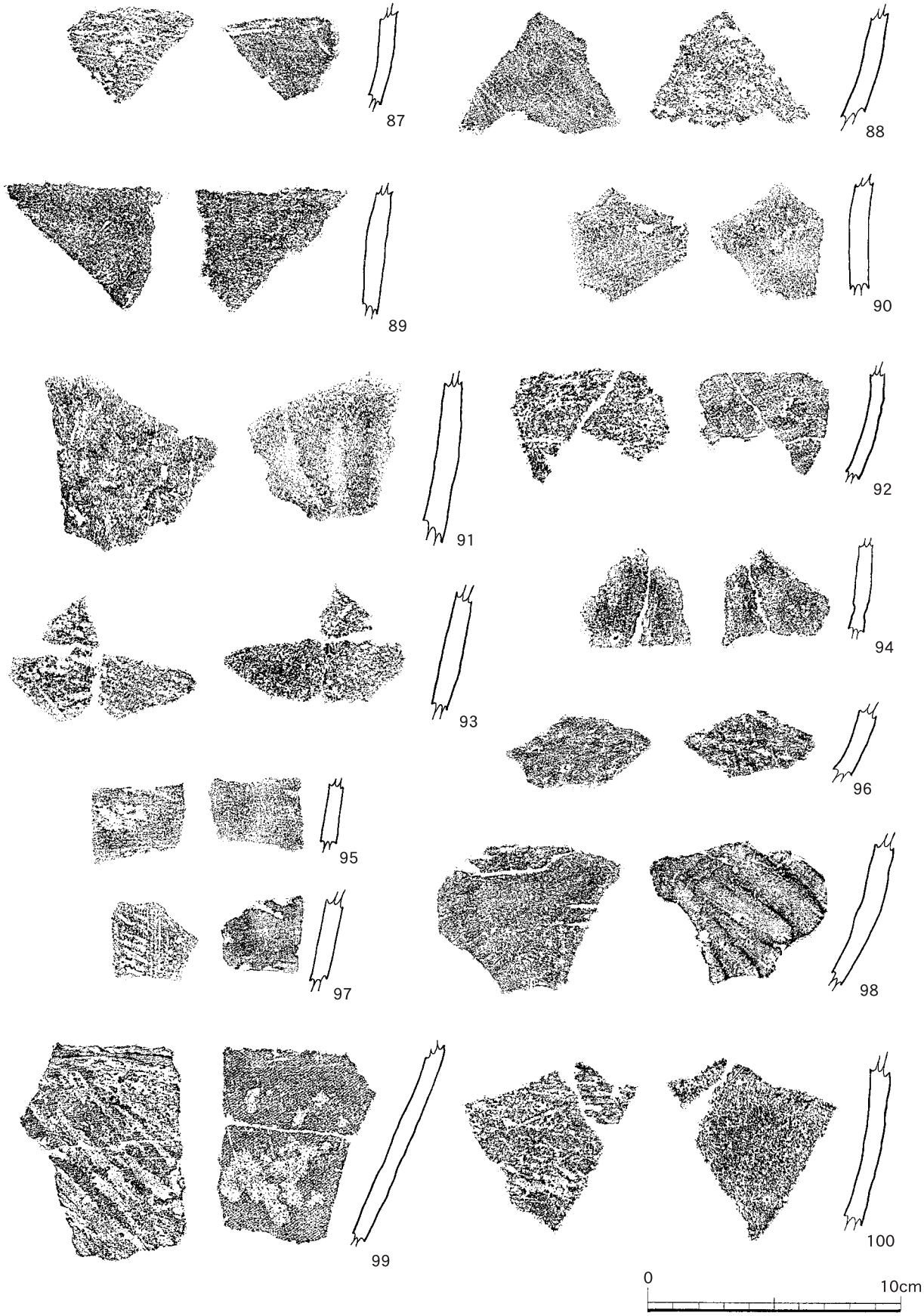
第16図　縄文時代の土器４



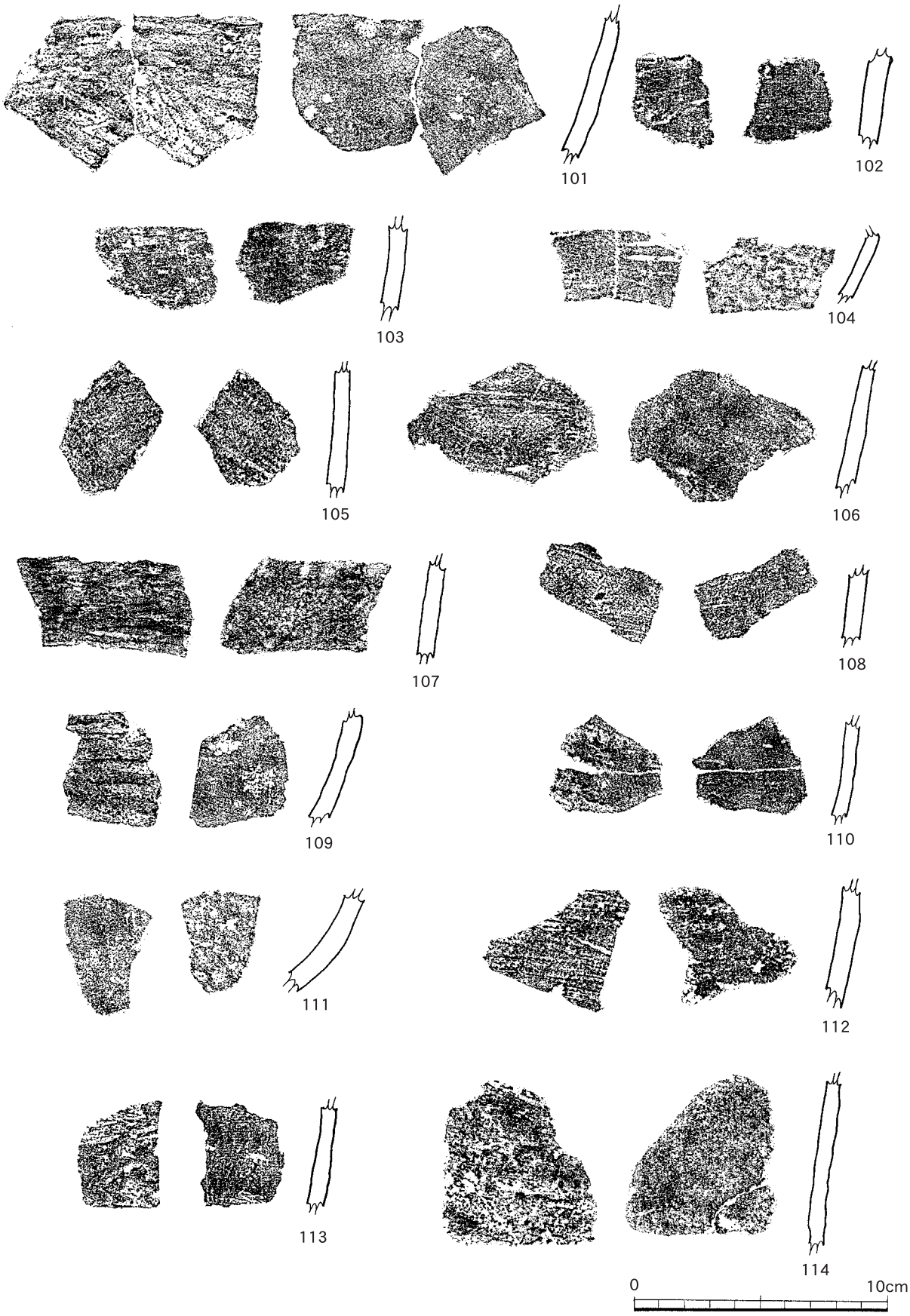
第17図　縄文時代の土器５



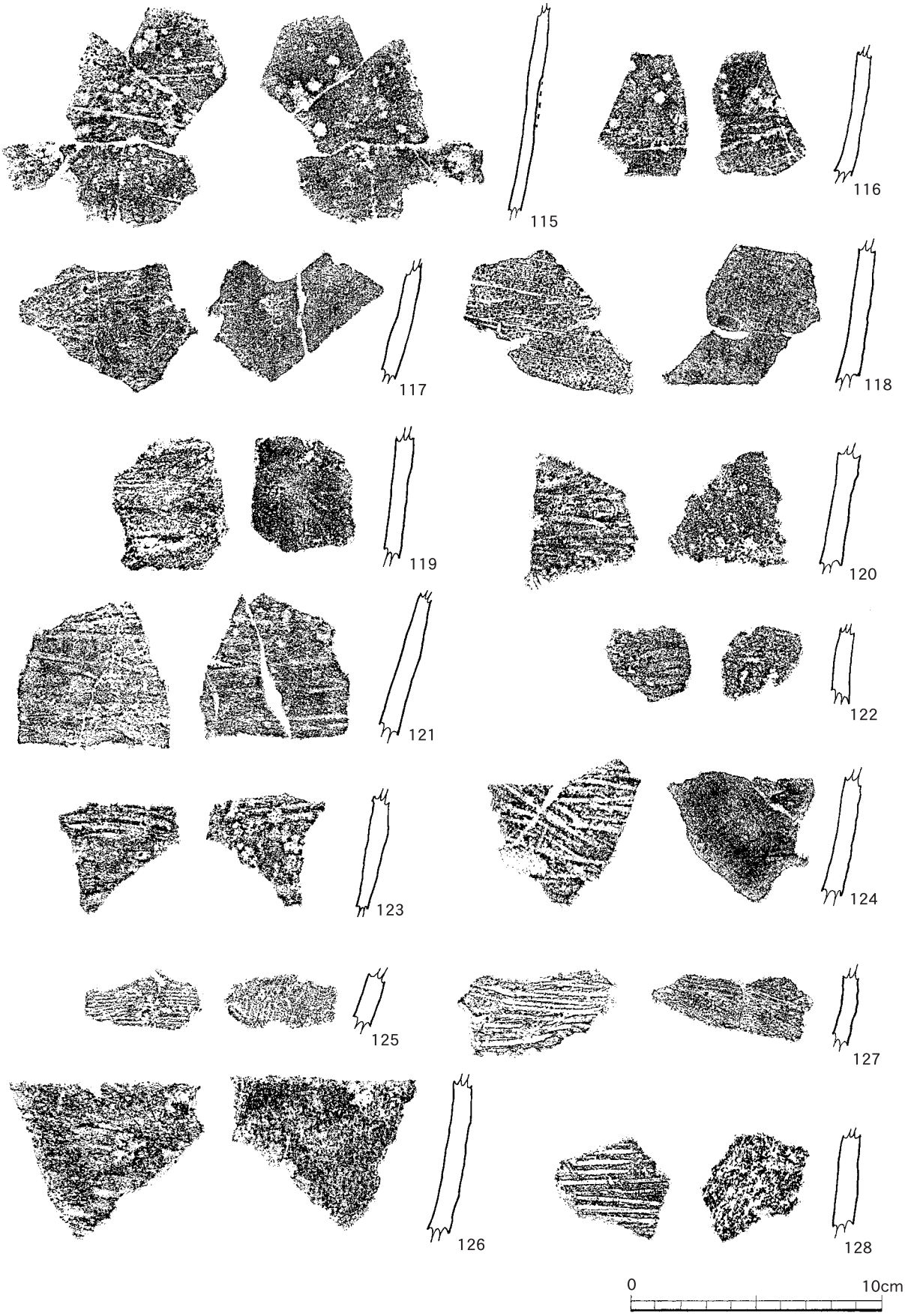
第18図　縄文時代の土器６



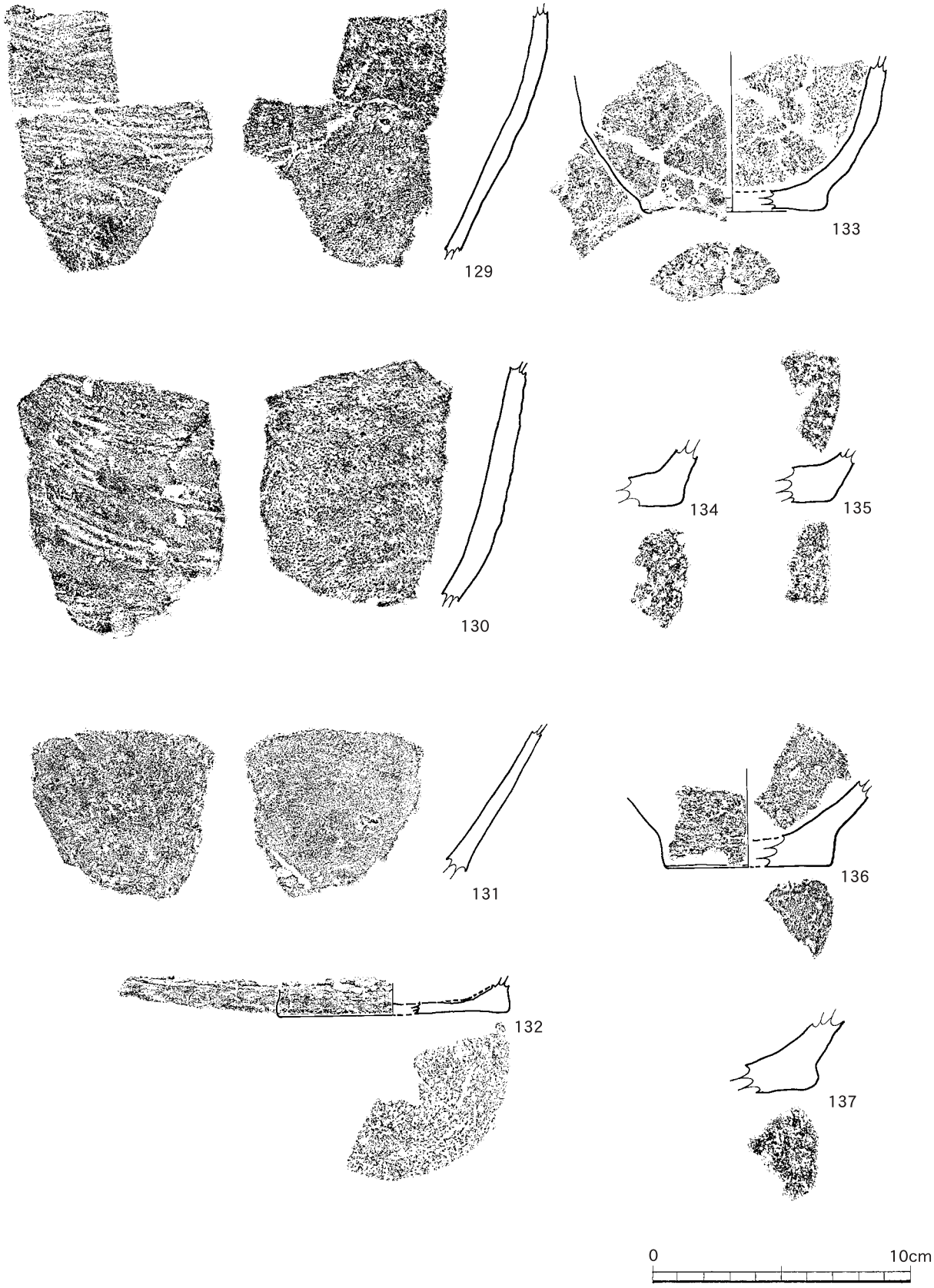
第19図　縄文時代の土器７



第20図　縄文時代の土器８



第21図　縄文時代の土器 9



第22図　縄文時代の土器10

外面にヘラ等の工具でケズリ調整が施されている。

123～130は，外面が条痕調整で仕上げられているものである。横方向に貝殻を用いて調整されているものが多い。124は，まず横方向に条痕調整がなされ，その後斜め方向の調整が施されている。内面は，ミガキで丁寧に仕上げられている。127・128は，外面が横方向の貝殻条痕で仕上げられている。129は，肩部と考えられる。直線的に立ち上がり，肩部でやや内側に傾く。外面は横方向の条痕調整ののち，ナデ調整で仕上げられている。130は，条痕調整ののちナデ調整で仕上げられる。部分的にヘラ状工具によるケズリが見られる。

131は，底部に近い胴部と考えられる。内外面ともナデ調整で仕上げられている。

ウ　底部（第22図132～137・第23図138～148）

底部の破片とわかるもの17点を図化した。形状から４つに分類した。

Ⅰ類（132・133）：内湾しながらすぼまる底部である。平底で，器底が比較的薄い。器底の張り出しが小さいものである。133は，外面にススが付着し，黒褐色を呈する。

Ⅱ類（134～141）：内湾しながらすぼまる底部である。平底で，器底が比較的厚い。器底の張り出しが小さいものである。134～137は，内外面ともナデ調整で仕上げられている。胎土に砂粒を多く含む。141は，底径が10.8㎝ある。胎土に砂粒を多く含む。

Ⅲ類（142～144）：器底が比較的薄く，胴部と底部の境が明瞭なもの。平底で，器底の張り出しが大きいものである。142・143は，胴部への立ち上がり部分に稜をなす。144は，底径が12.2㎝ある。内外面ともナデ調整で仕上げられている。胎土に砂粒を多く含む。

Ⅳ類（145～148）：器底が比較的厚く，胴部と底部の境が明瞭なもの。台形状に大きく張り出すものである。145は，底径が10㎝ある。147は，器底が約２㎝と厚い。底部側面は摩耗が著しいが，ナデ調整が施され，指頭圧痕が残る。

⑵　浅鉢形土器（第24図149～156）

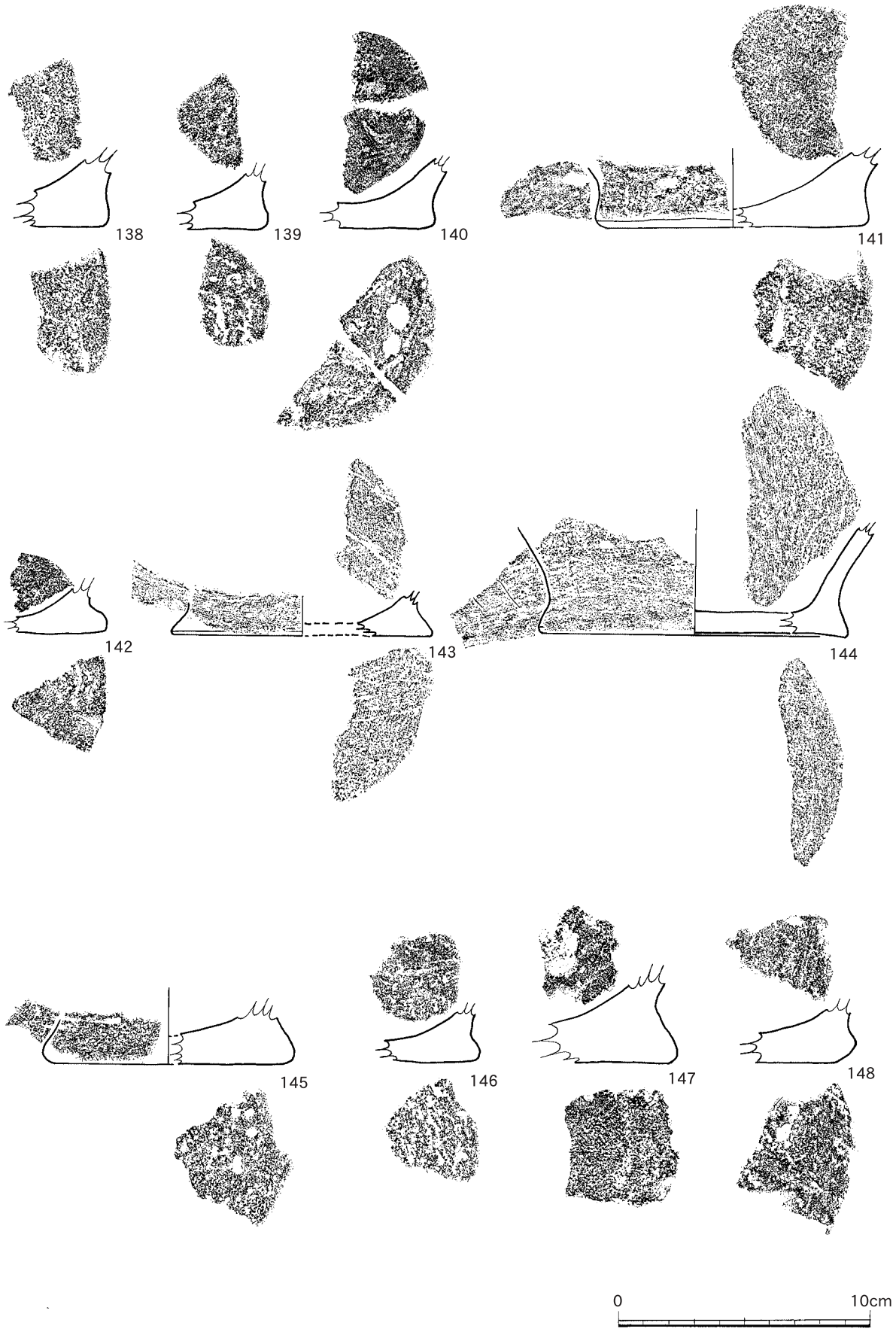
浅鉢土器は，ミガキ調整で仕上げられる精製土器で，８点を図化した。大きく口縁部と胴部に分類した。

ア　口縁部（149・150）

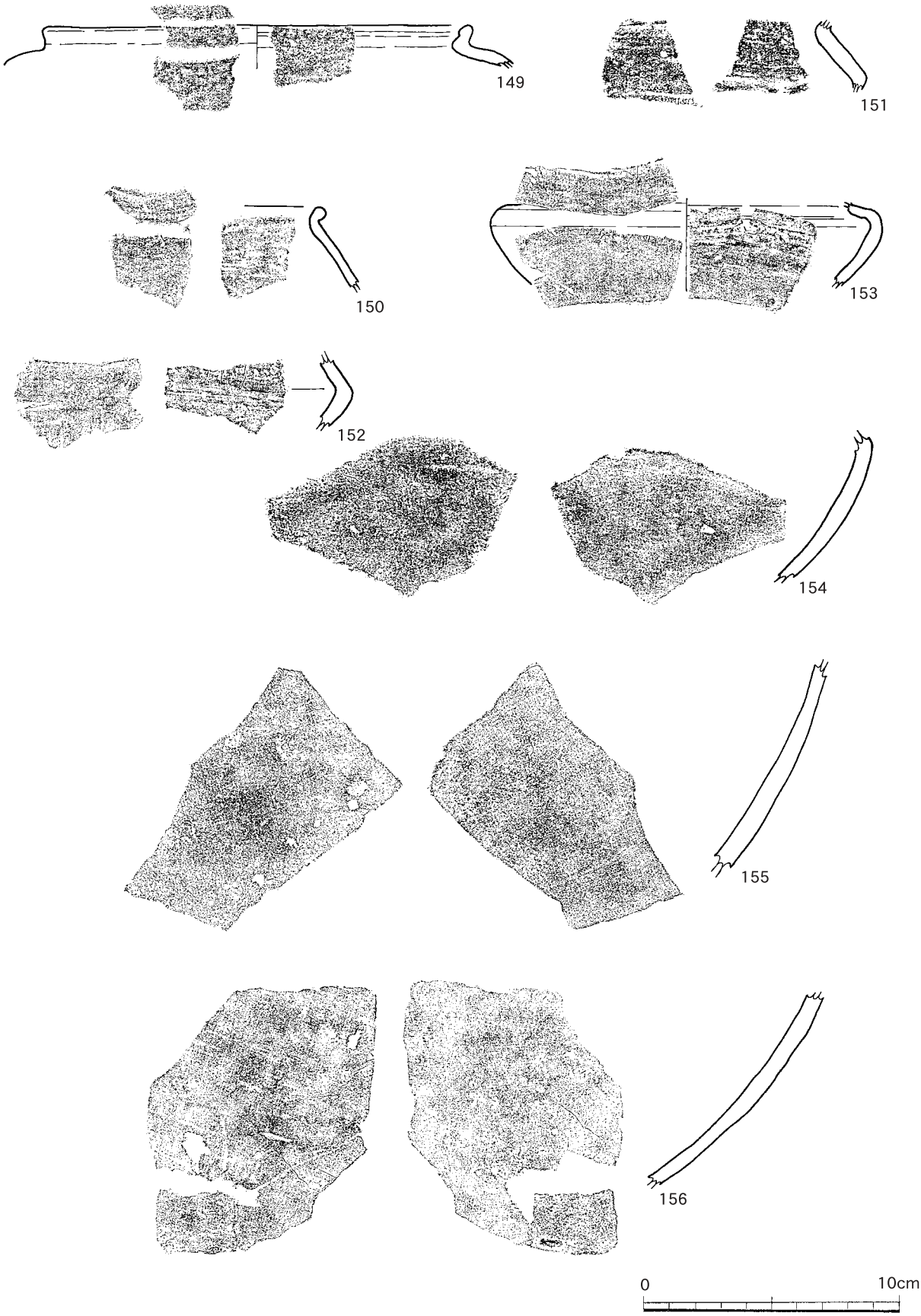
頸部で「く」の字状に外側に屈曲する。頸部はほとんどなく，口唇部に至る。口唇部は丸みを呈する。149は，口唇部内側が凹み稜をもつもので，口径は16.6㎝である。

イ　胴部（151～156）

151・153は，「く」の字状に内側に屈曲する肩部と考えられる。屈曲は短く，内外面ともミガキ調整で仕上げられている。152は，肩部で丸く内湾している。154～156は，口径が大きな浅鉢の胴下部と考えられる。154は，上部がわずかに内側へ屈曲している。155・156は，外に向かってやや内側に傾きながら立ち上がり，内外面ともミガキで丁寧に仕上げられている。



第23図　縄文時代の土器11



第24図　縄文時代の土器12

出土石器（第25図157～第29図192）

出土石器は帰属時期が困難であった。これらの石器は，その特徴から縄文時代の石器に比定できるものが多かった。そこで，縄文時代の調査の項目で報告した。

また，石器の中には，弥生時代の石器と考えられる１点については第33図217に所収した。土坑や溝状遺構の埋土中より出土した石器は，第45図280～284に掲載した。

本遺跡の石器には打製石鏃の出土はなく，土器に比べて石器の数の少ないことが本遺跡の特色でもある。

出土石器には，磨製石斧（157～160），打製石斧（161），スクレィパー（162～165），石錘（166～168），石核（169～171），磨石（172～179・185）・砥石（183）・敲石（180～182）・凹石（184）・石皿（186～189）・礫器（190～192）など埋土中のものを含めて41点があった。

石器の素材は頁岩（157・158・160）・蛇紋岩（159）・粘板岩（161）・硅質頁岩（162）・安山岩（166～168・175・177・178・181・184～189・192）・凝灰岩（183）・メノウ（163・182）・三船（169）や上牛鼻産の黒曜石（164・165・171）・ハリ質安山岩（170），砂岩（167～174・176・179・180・191）などを用いている。素材の中では，小型の磨石や敲石（ハンマーストーン）には，砂岩を，大型の石皿や凹石には安山岩を多く利用している。

石斧は５点出土している。磨製石斧４点，打製石斧１点で，157・158以外はすべて破損品である。158は未製品である。

157・158は磨製石斧で，母岩より剥離されたままの素材を使用したものと考えられる。157は大型の磨製石斧で，片面には自然面をそのまま残し，側面と頭部周辺のみに剥離による調整が施されている。一方，裏面は器面全体に母岩より剥離された状況で大小の剥離痕が残されている。刃部は両面より丁寧な研磨により蛤刃状に仕上げられ，使用によるものか微細な刃こぼれを認める。また，胴部側縁と刃部側縁付近の接点付近で２分割している。

158は磨製石斧の未製品で，片面に自然面を残し，片側のみに大小の剥離痕を残している。刃部の一部に簡単な剥離を加えたような痕跡を認め，製作を途中で放棄したことが考えられる。

159～161は欠損品である。159・160は磨製石斧で，159は頭部のみの資料で，160は体部の一部を残し，裏面の体部も欠損している。161は打製石斧の頭部のみの資料である。

162～165はスクレィパーである。

162は扁平で両面に光沢のある自然面を残した横長の素材を利用している。主要刃部は両面より大小の交互剥離調整により丁寧に刃部を作っている。

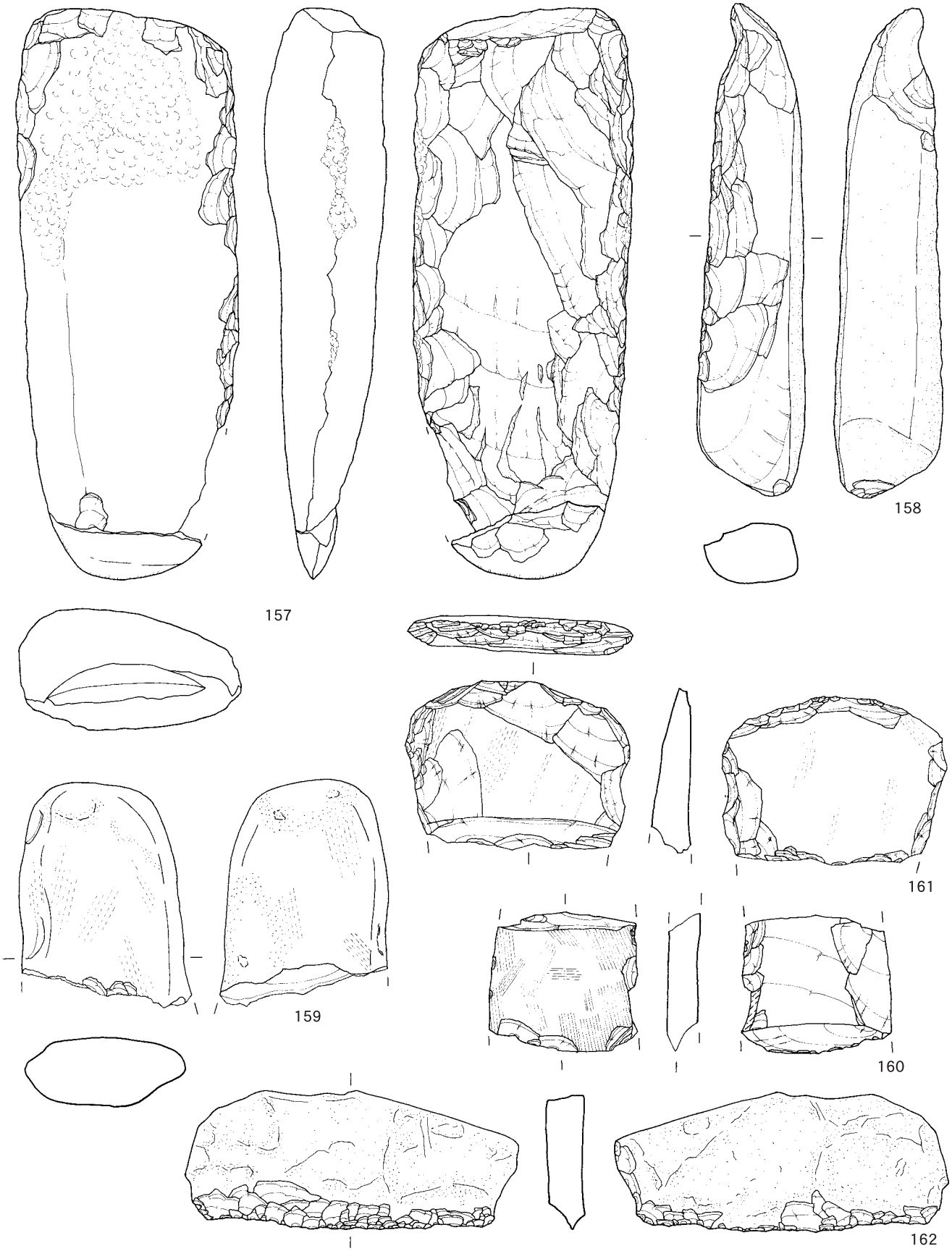
163は細身で片側に自然面を残している剥片を素材に用いている。剥片の自然面を残し，片側のみに簡単な剥離を加えて刃部を作りだしている資料である。

164は片側に自然面を残した素材剥片を利用し，一方の側縁の片側のみに押圧剥離を施し，刃部としている。

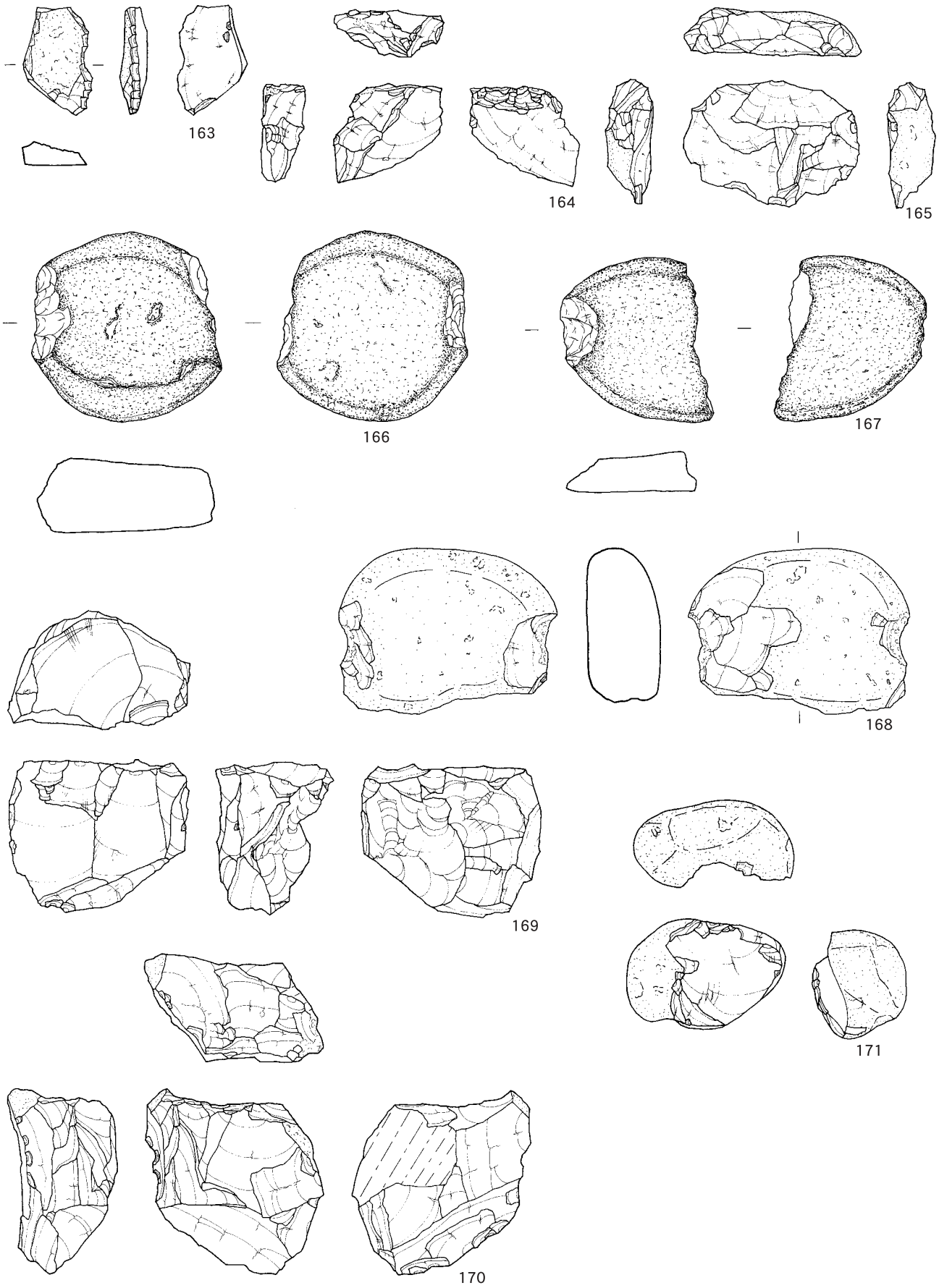
165は片面に自然面を残した厚みのある幅広い剥片を素材としているもので，下端に簡単な押圧剥離を施し，刃部を作りだしている。

166～168は楕円礫を素材に用いた石錘である。

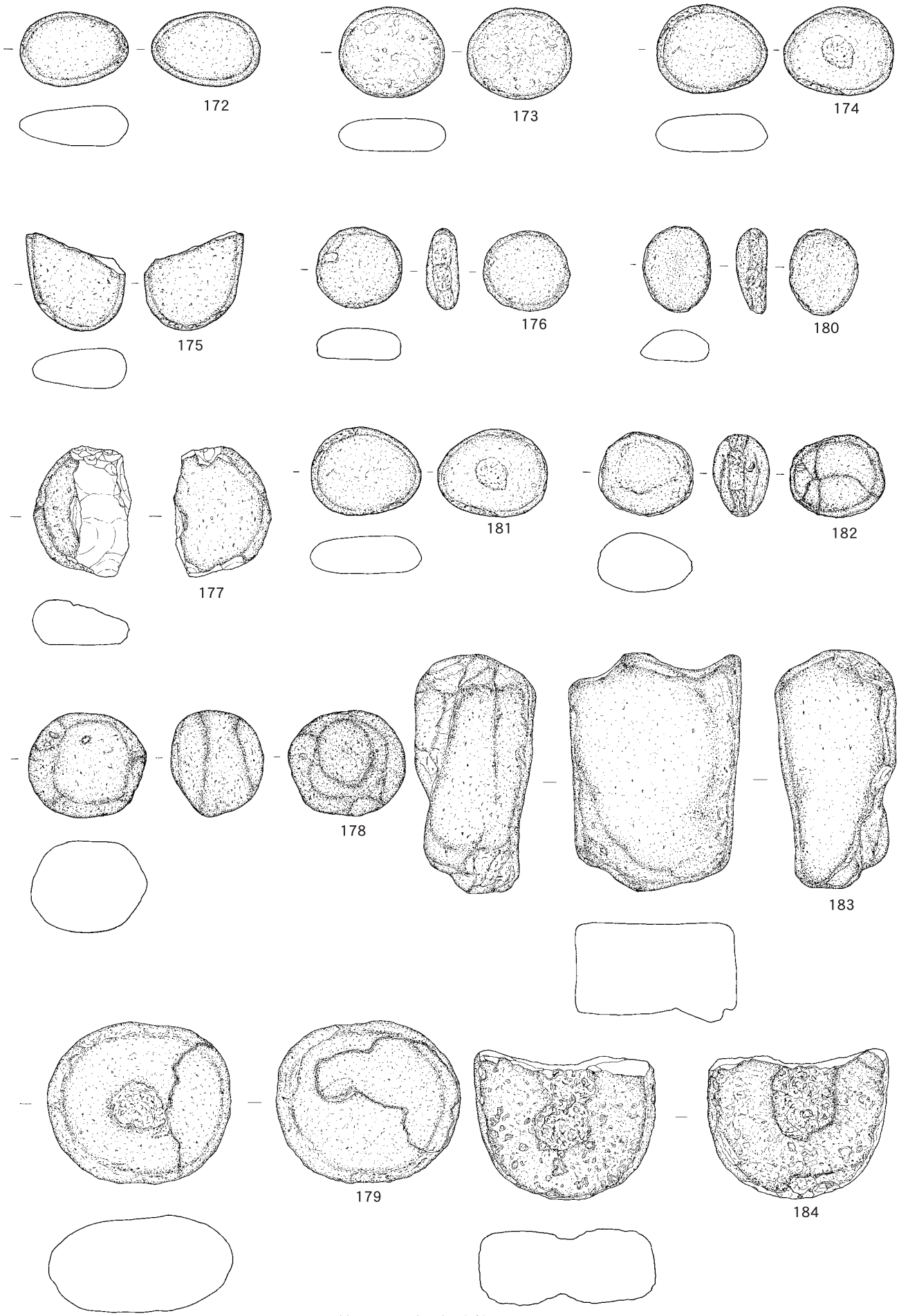
166は楕円礫の両側縁に両面から敲打による大小の剥離を加えて抉り部を作っている。



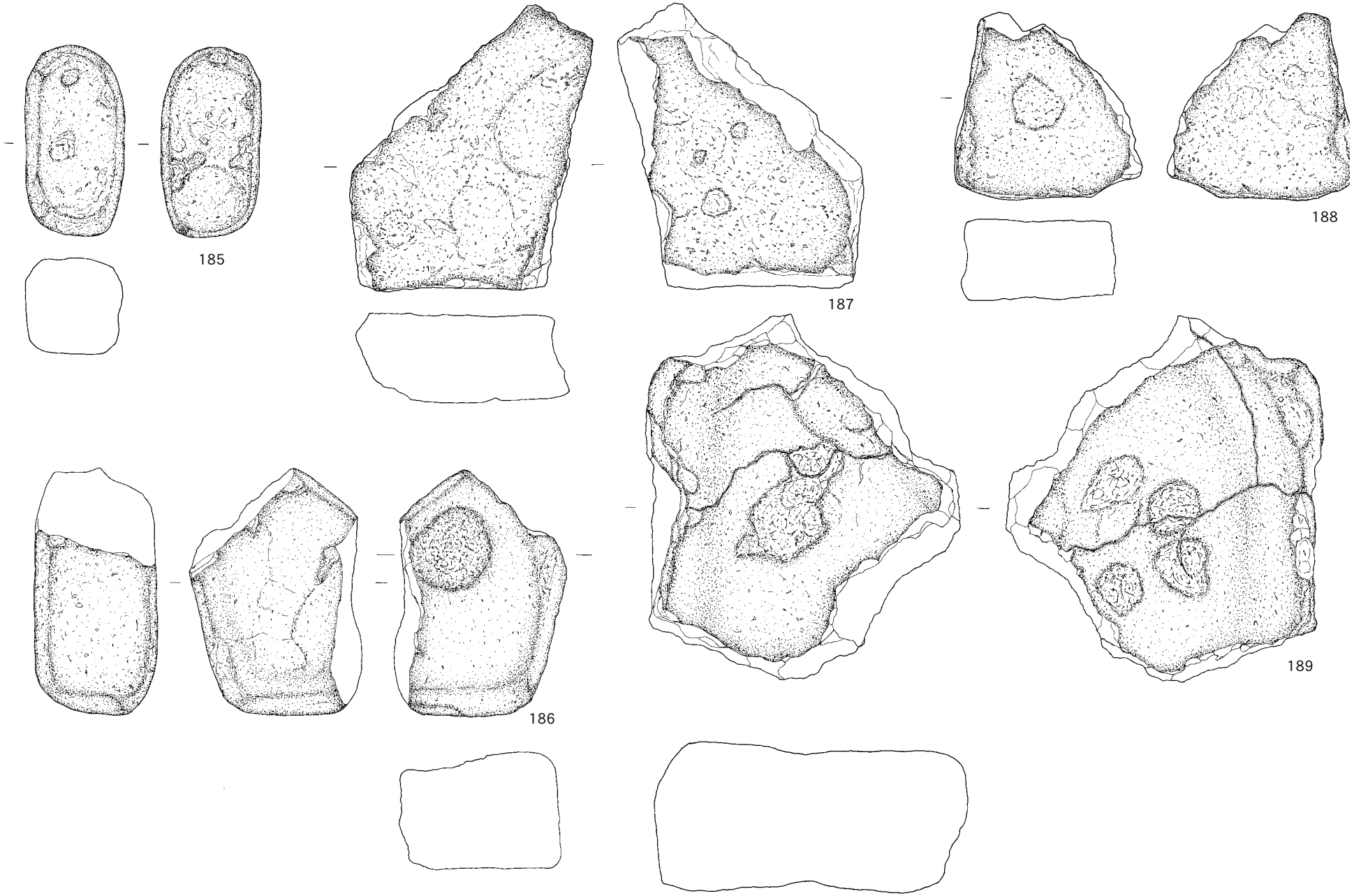
第25図　縄文時代の石器１



第26図　縄文時代の石器 2



第27図　縄文時代の石器 3



第28図　縄文時代の石器４

167は扁平な楕円礫を素材とし，片側を欠損している破損品で，側縁の片側のみに敲打による剥離で抉り部を作りだしているものである。168は楕円礫の両側縁の両面に敲打による剥離で不整形な抉り部となっている。

169～171は黒曜石を素材とし，剥片剥離のなされた残核石核である。

169の打面の形状は平坦面を打面にしたもので，剥片の剥離を正面と裏面において剥離している資料である。170の打面の形状は上面の先行する剥離面を打面にしたもので，表裏面に剥離面を認めるものである。171は自然面を残した楕円礫の一面に，敲打による剥離面を認める資料である。

172～179・185は大小の楕円礫を素材とした磨石である。

172～177は小型で扁平な楕円礫を素材にした磨石で，表裏面に平坦な磨面をもつ資料である。172・173は磨面のみをもつもので，敲打痕は確認できない。174～177は磨面と敲打痕のある資料である。

176はＡ地点の柱穴１の埋土上位で出土したもので，埋土と遺物包含層との判断が困難であったために，遺物包含層の出土として処理した。175・177は破損品である。178はボール状の楕円礫を素材として使用のもので，片面には磨面をもつもので複雑な鈍い稜を認める。

179は大きめの楕円礫を素材とした磨石である。上面の中央に円形状の敲打痕による不規則な凹部のあるもので，側縁の一部に敲打痕が確認できる。被熱のためか表皮の一部が剥ぎ落ちている。

180～182は大小の楕円礫を素材とした敲石（ハンマーストーン）である。

180・182は側縁周に敲打による痕跡をもつもので，181は両側縁の一部と下端に敲打痕が確認できる資料である。

185は断面が略方形状の安山岩の楕円礫を素材とした磨石で，四面に鈍い磨面をもつもので，両面には部分的に敲打痕を認める。

183は三面ともに磨面をもつ砥石で，186は四面をもつ礫の二面に磨面や敲打による浅い凹みもつ石器である。

184は約半分ほどを欠損している凹石である。両面ともに磨面をもつもので，中央部に不規則な凹を作り出している。また，側縁周の一部には敲打による痕跡を認める資料で，「磨る」・「敲く」・「潰す」の機能を兼ね備えている。

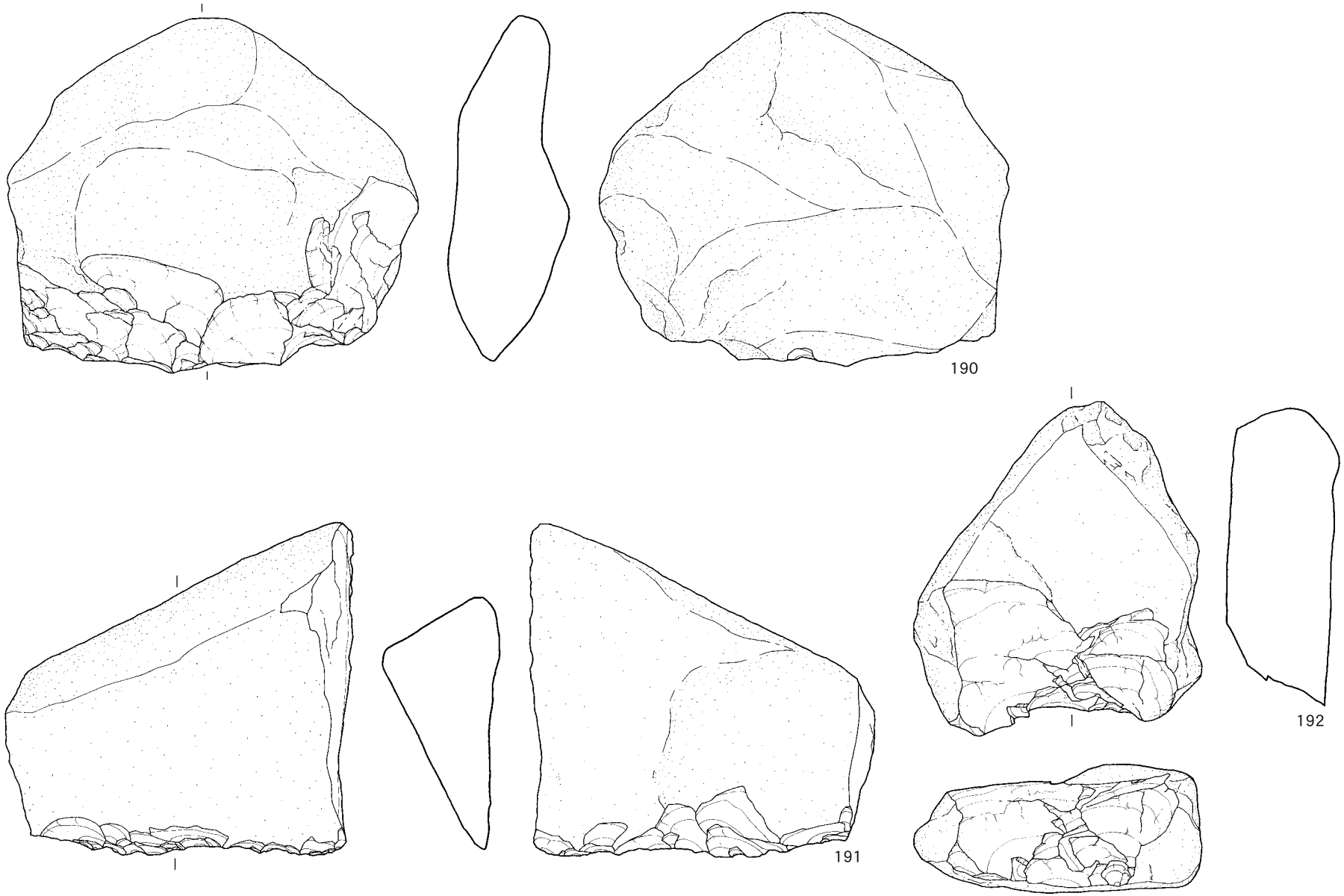
186～189は石皿である。

これらの石皿は，上面や下面には僅かに窪んだ磨面をもつもので，円形状の浅い凹みを１か所から数か所を認める。187及び188は大半の部位を欠損しているもので，189は両面にクラックが走っている。

186は両面及び残存している側縁には磨面がみられる。これらの石皿は片面か両面かに一か所から数か所に敲打による凹部がみられる。

190～192は不定形の礫を素材に用いた礫器で，190・192は礫の表面の片側のみに敲打による大小剥離調の調整により刃部を作りだしている。

191は両面からの大小の敲打による剥離調整により刃部を作り出している資料である。



第29図　縄文時代の石器 5

第４節　弥生時代の調査

弥生時代の調査は，縄文時代と同様にＡ地点及びＢ地点のⅡからⅢ層へと各層ごとに掘り下げを行った。Ａ・Ｂ地点の調査終了後にＣ地点の調査を実施した。

その結果，主にⅡ層を中心にⅢ層上部から弥生時代中期後半から終末に位置づけられている１個体分の黒髪式土器，弥生時代後期後半から終末ごろの中津野式土器などの出土が少量がみられた。

なお，この層の上部については削平を受けたり，残存しても僅かな堆積のところも観察され，縄文時代をはじめ古墳時代・古代の遺物などとともに出土している。

本遺跡では弥生時代の遺構検出はなかったが，出土遺物には少量の土器と石器が出土した。本項に掲載した石器は帰属時期の把握が困難で，砥石１点のみを掲載した。

弥生土器には，甕形土器や壺形土器などがあり，黒髪式土器１個体分が一括して出土したが，出土量は決して多くなかった。

①　甕形土器（第30図193～第33図208）

193～208は甕形土器である。これらの口縁部は小破片のために傾き等について疑問の残るものがほとんどである。

193は遺物包含層から一括して出土した資料で，底部の脚台部分を欠損している。口縁部から底部にかけては94個の破片で復元されたもので，本遺跡唯一の復元完形品である。

口径は26.0㎝，胴部径は24.2㎝，復元高は32.8㎝（復元底部は含まず）を測る。

口縁部の断面は，鋤先状がくの字を呈し，口縁部上面の幅が狭く，端部は丸味を帯びている。口縁部の内面は大きく内湾し鮮明な稜線を残し，胴部がすぼまっている。器形に若干の歪を認める器形である。

内外面の調整は斜位及び縦位のハケ目調整が施されているが，部分的には磨滅を受けているために不鮮明である。頸部下位の付近には，僅かに窪む１条の沈線を巡らせている。口縁部の外側口唇端部より胴部にかけては煤の付着が観察でき，煮炊きに使ったと考えられる。

194～202は，「く」字状もしくはやや外反する口縁部をもつ破片である。

194の復元口径は22.6㎝，195の復元は22.7㎝，199の復元口径は18.0㎝，200の復元口径は21.0㎝，202の復元口径は21.4㎝を，それぞれ測る。

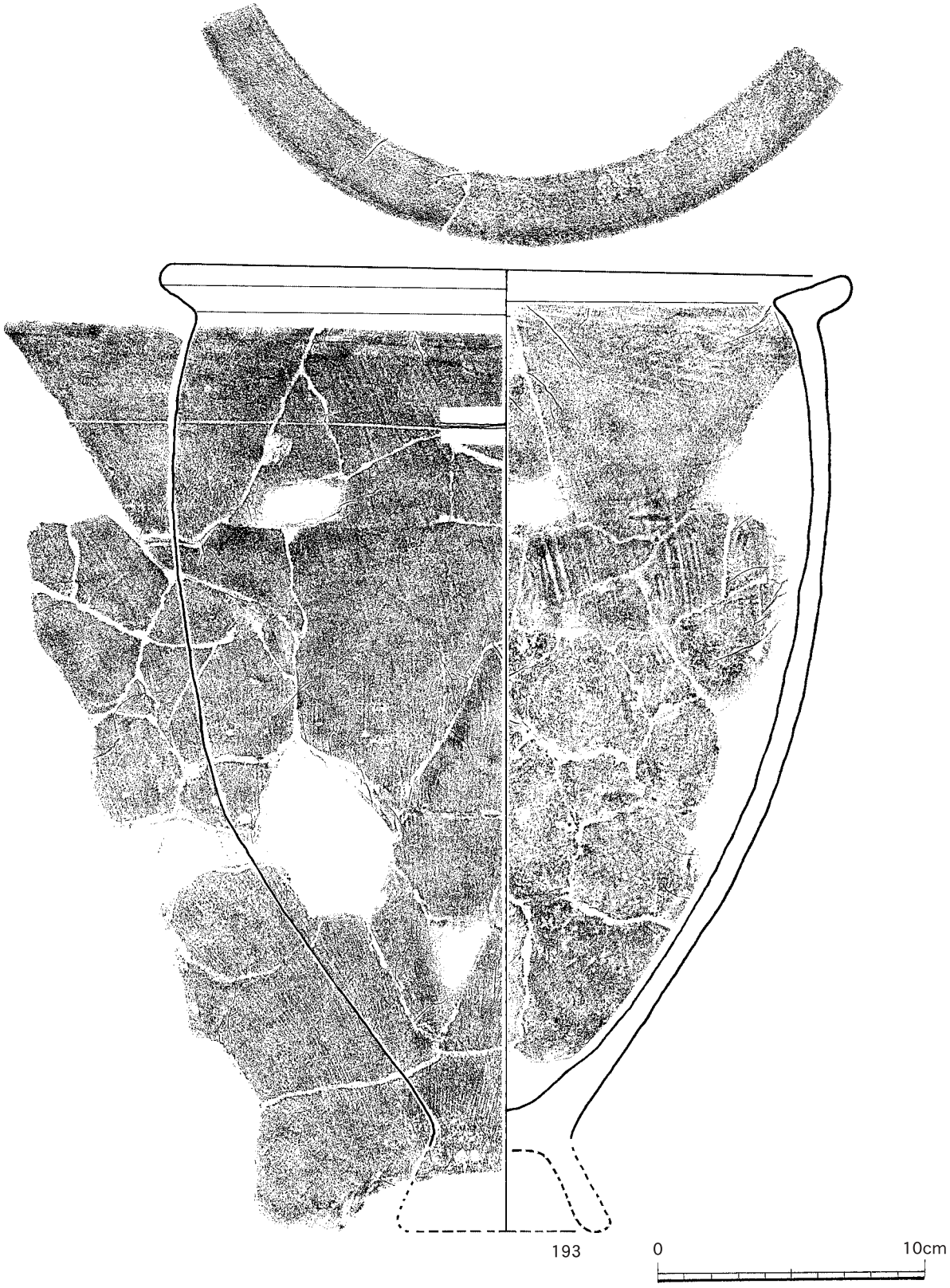
194～196・201は内面に稜をもつもので，内外面ともに磨滅を受けているが，ハケ目やナデ調整の痕跡がわずかに残っている。

193・194・209の調整は，内外面ともに鮮明さを欠くがナデ調整が部分的に残っているもので，200は口縁部外側から胴部にかけての部位で，濃淡の差はあるが煤の付着を認める。

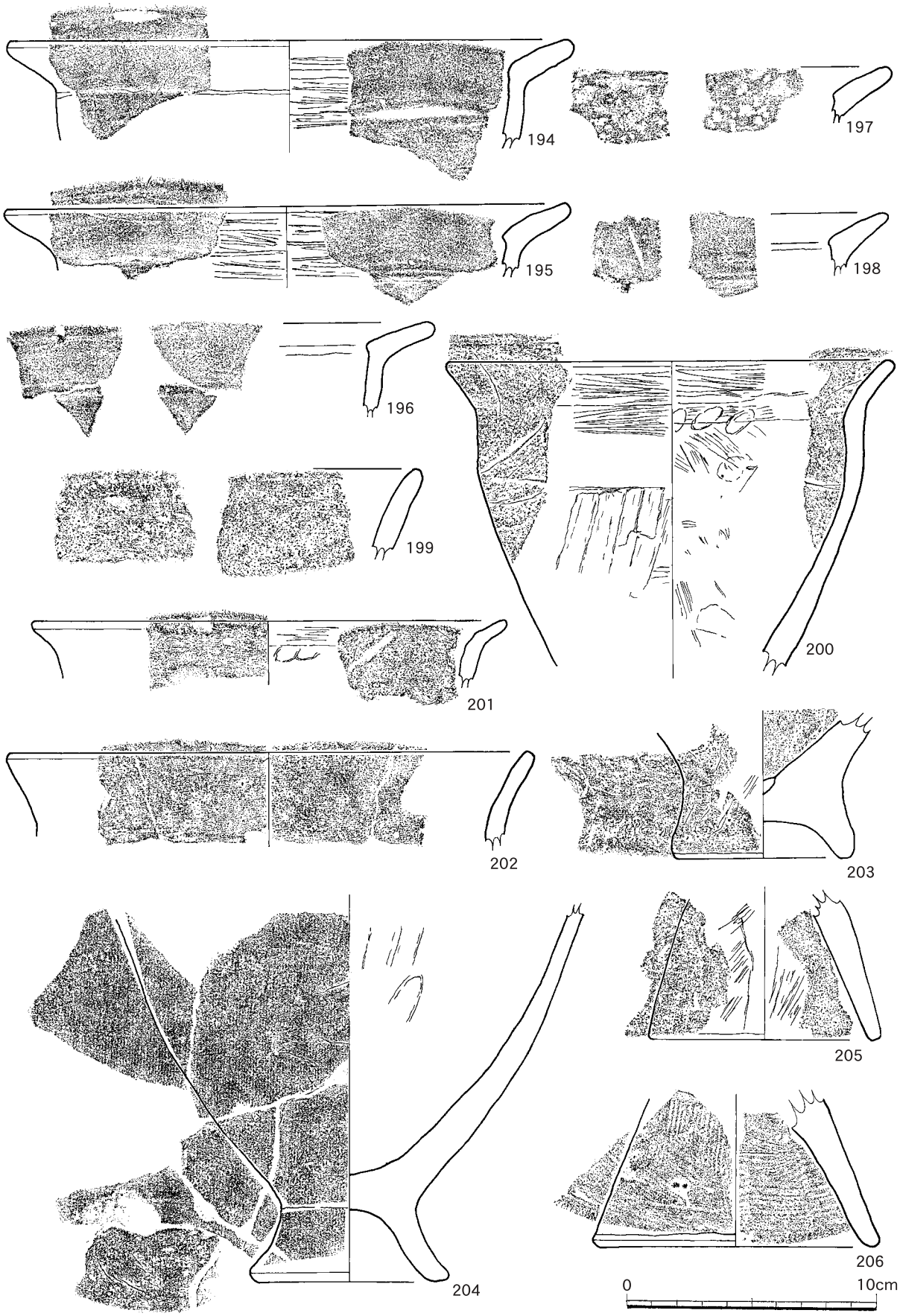
199・200は口縁部破片で，203～206は胴部付近や胴部下位付近から底部付近にかけての破片，上げ底の底部破片などである。204～206は上げ底の底部破片である。

205は復元底径7.4㎝，204は復元底径9.4㎝，205は復元底径7.9㎝，206は底径11.5㎝を測るもので，上げ底の脚台破片である。204・205は磨滅しているために調整痕を僅かに残し，206は内外面ともに丁寧なハケ目の調整が施されている。

207は，僅かに外反する口縁部から底部付近にかけての資料である。頸部付近には，くびれ部を僅かにもつ器形で，復元口径26.4㎝を測り，底部は欠損している。内面の大半は磨滅を受けている



第30図　弥生時代の土器１



第31図　弥生時代の土器２

第32図　弥生時代の土器３

ためにナデ調整痕は鮮明さを欠くが，外面は器面全体に磨滅を認めるものの，横位・斜位及び縦位のハケ目調整が施されている。

208は口縁部から頸部と底部を欠損している胴部から底部付近までの資料で，胴付近の復元胴部径32.8㎝を測る。外面には斜位や縦位のハケ目調整を中心に横位の調整を認め，内面の大部分には大小の剥落を受けている。

②　壺形土器（第32図209～216）

209～216は壺形土器の破片である。出土遺物のほとんどが小破片が多いために，壺の特長を示す資料はなく，掲載した遺物209以外は頸部付近の破片である。傾きなどに疑問を残す資料が多くあった。

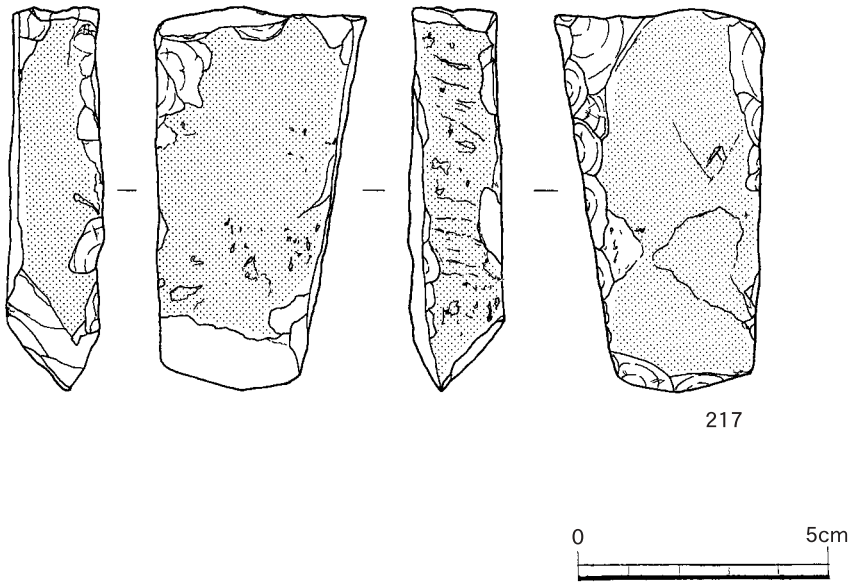
209は，僅かに外反する口縁部破片で，復元口径12.4㎝を測る。口唇部外側の下位付近に２条の貼付突帯を巡らす器形で，内外面ともにナデ調整を認めるものの大半は磨滅や剥落を認める。外面の突帯間にはヘラケズリの痕跡が部分的に施されている。

210～211は壺の頸部付近の部位が考えられる資料である。肩部付近には１条から２条の貼付三角突帯を有する資料である。ともに内外の調整は磨滅しているために鮮明さを欠いでいる。これらの破片は小破片のために器形の傾きは不明で，210・216以外の破片は刻目を有する突帯をもつ資料である。

③　石器（第33図217）

弥生時代の石器は，砥石１点のみを掲載した。

217は扁平な安山岩を素材とした資料で，最大長7.7㎝，最大幅4.25㎝，最大厚1.9㎝，重さ84.96ｇを測る。裏面と両端部は欠損している砥石で，表裏面と両側縁には細かな磨面とわずかに擦痕が確認できる資料である。この砥石は，使用によるためか各面には部分的に敲打による痕跡を残している。



第33図　弥生時代の石器

第５節　古墳時代以降の調査

１　遺　構

本遺跡の検出遺構は，柱穴，土坑，溝状遺構などが検出された。

遺構には成川式土器の甕や壺，土師器の甕，須恵器の甕の大小破片などを中心に，縄文早・晩期の土器や石器などの遺物も少量であるが埋土内から出土した。

Ａ地点ではⅡ層が遺物包含層，表土の上位に客土があったためにＣ地点では，Ⅲ層がＡ地点のⅡ層に相当する包含層で，これらの層から遺構を検出した。このⅡ層及びⅢ層は，場所により一定の層幅もなく，後世の削平を受けていることから，残存しても僅かな堆積のところも観察された。

また，包含層は縄文時代から古代などの遺物も混在して出土した。そのために検出遺構の帰属時期が困難であったが，遺構の埋土内からは古墳時代から古代にかけての資料が大半を占めているために，この項で取り扱うこととした。

遺構には，調査時に須恵器ピットとして調査を実施した柱穴状の遺構をはじめ，各地点での検出した柱穴（61個）・土坑（14基）・溝状遺構（１条）などがあげられる。

これらの遺構のうち，柱穴はＡ地点で８個，Ｂ地点では42個，Ｃ地点11個を検出した。そこで掘立柱建物跡についての復元を試みたが，建物跡としての復元は困難であった。中には樹痕が絡んだ跡と判断したものもあった。

遺構の中には須恵器ピットとして調査したが土坑の項で扱った。この遺構の埋土には，須恵甕の破片の塊を上位と中位に意識して投棄したような状況での出土が確認された。

⑴　土坑（第34・35図）

土坑は14基が検出された。Ａ地点では調査区の南北端で２基を検出した。Ｂ地点では４基（Ｆ－５区で１基，Ｇ－５区で１基，Ｈ－４区で２基），Ｃ地点では７基（Ｃ－４区は隣接して２基，Ｄ－６区では隣接して２か所で４基，Ｄ－７区で１基）の内訳である。

土坑の形状は，楕円形を基調とするものと不定形な掘り込みをもつ略楕円形状のものとに大別できる。土坑の平面形や埋土状況をみると掘り込み面が明瞭でなく，床面が不安定で凹凸面が観察できるものがある。そこで，樹痕跡などをも想定したが人工的な掘り込みのある土坑に樹痕が絡んだ形態である。

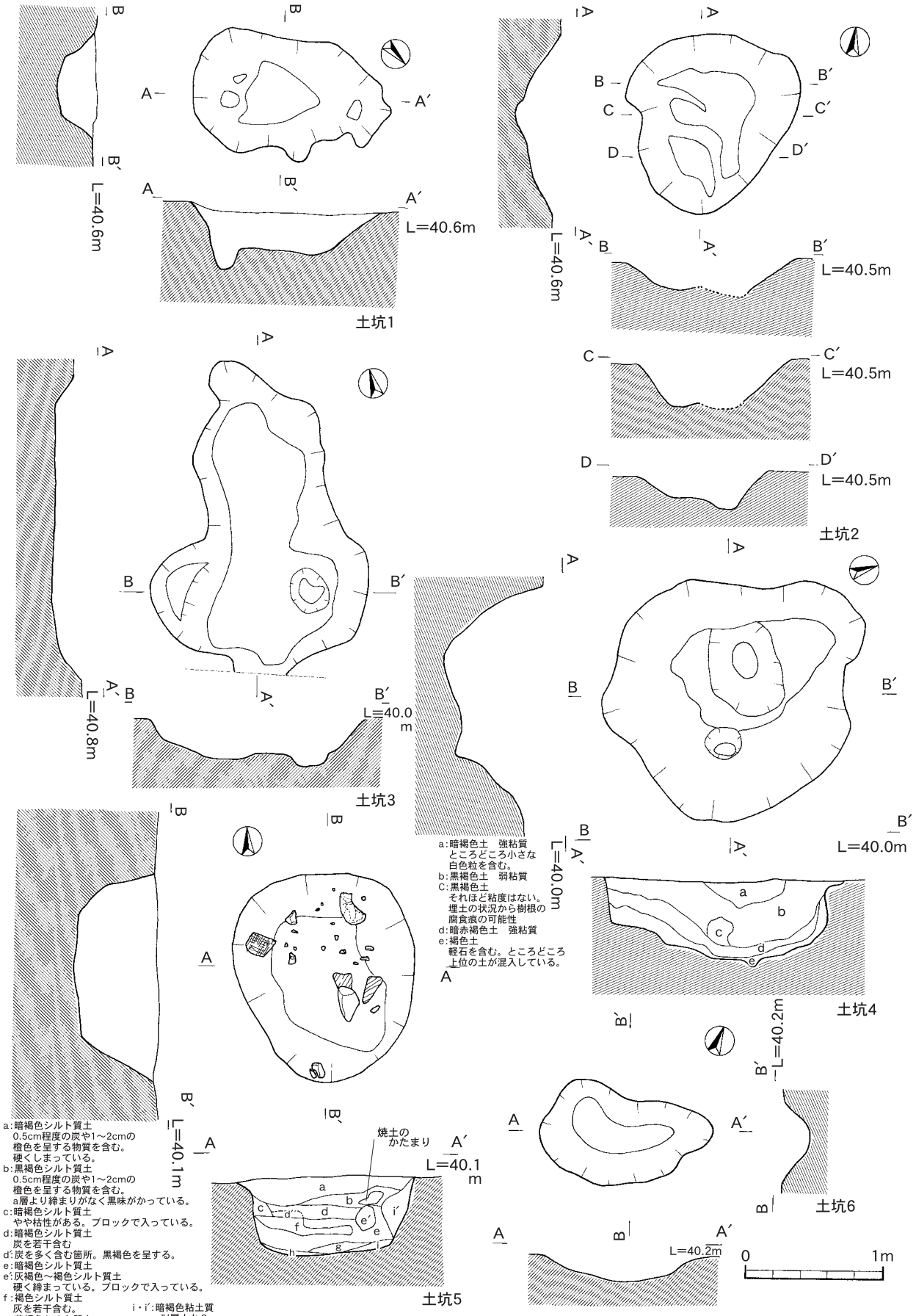
土坑内出土遺物には，成川式土器の甕や壺，古代の土師器を中心に，縄文早・晩期の土器片や少量の石器などがみられた。中には小破片のために図化が困難なものも多く，炭化物，焼土塊，礫などがみられた土坑もあった。

土坑12・13については，土坑の形状や埋土状況から検討した結果，12号土坑は縄文早期の落し穴状遺構（第12図），14号土坑は人工的な掘り込みでなく樹痕跡と判断した。

１号土坑（第34図，第36図218）

１号はＡ地点（Ｃ－４区）の調査区北側端部で検出した。その形状は不定形の楕円形状を呈する土坑で，長軸が143㎝，短軸が90㎝を測る。検出面からの深さが24㎝であった。平面図をみると掘り込み面が明瞭でなく床面が不安定で，柱穴状の掘込みらしい痕跡を認めた。この土坑は人工的な掘込みに樹痕が絡んだものが考えられる。

218は縄文晩期の土器片で，他は数点の破片と風化した黒曜石のフレークなどが出土した。



第34図　土坑平・断面実測図１

２号土坑（第34図，第36図219・220）

２号はＡ地点（Ｃ－４区）の調査区南側端部で検出した。その形状は隅丸三角形状もしくは楕円形状を呈する土坑で，長軸が130㎝，短軸が127㎝を測る。検出面からの深さが23㎝であった。平面図をみると掘り込み面が不定形で，床面が凹凸が著しいことから樹痕跡を想定したが人工的な土坑に樹痕が絡んだものである。219は成川式土器の甕の口唇部を欠損した口縁部破片である。220は壺の胴部付近の破片で，１条の貼付三角突帯に刻目を巡らす破片である。

３号土坑（第34図）

３号はＢ地点のＨ－４・５区の区境で検出した。その形状は細長い不定形の楕円形状を呈する不定形の土坑で，長軸が232㎝，短軸が159㎝を測る。検出面からの深さが35㎝で，掘り込み後の床面は凹凸が激しく樹痕が絡んだ土坑で，埋土内より土器小破片が出土した。

４号土坑（第34図，第45図280）

４号はＢ地点のＨ－４区の調査区北西側で検出した。その形状は不定形の楕円形状を呈する土坑で，長軸が200㎝，短軸が174㎝を測る。この土坑はⅣ層上面（Ａ地点ではⅢ層）で検出され，検出面からの深さが62㎝を測る。土坑内の床面には樹痕跡と想定されるピット状の掘り込みがあり不安定であった。人工的に掘込んだ土坑に樹痕が絡んだもので，埋土内より磨石や土器破片が出土した。土器片の図化は困難であった。

280は上部の約半分を欠損した安山岩を素材とした磨石である。現存全長5.1㎝，現存幅6.6㎝，現存厚3.6㎝，重量178.92ｇを測る。両面や下端面及び片側側縁には磨面が確認できる。

また，片側の側縁に敲打による浅い凹凸面が施され，「磨る」・「敲く」の機能を備えている。

５号土坑（第34図，第36図221～234）

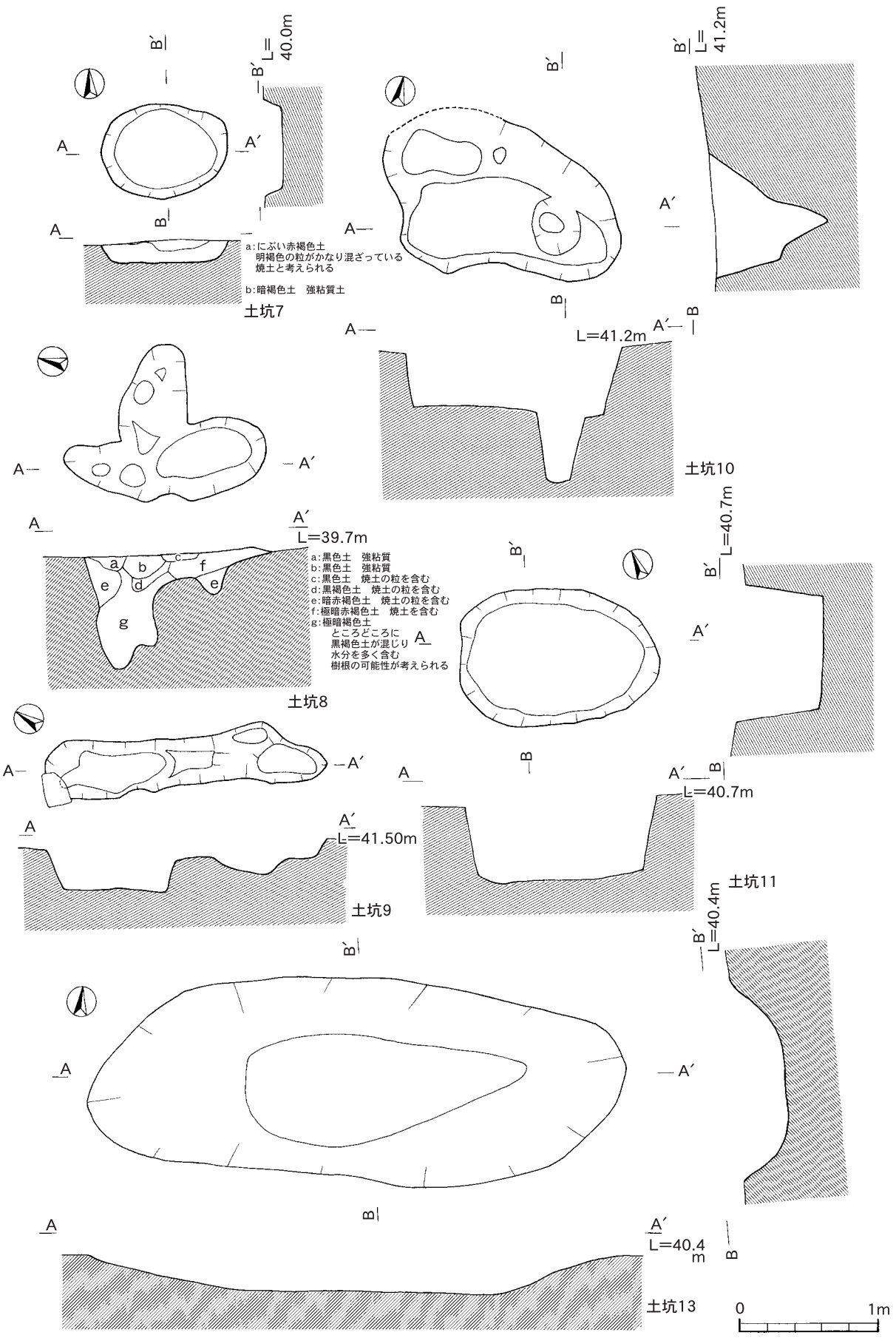
５号はＣ地点のＤ－６区で土坑７の南側約１ｍのところで検出した。その形状は楕円形状を呈する土坑で，長軸が152㎝，短軸が132㎝を測る。この土坑はⅢ層上面で検出され，検出面からの深さが59㎝であった。掘り込み後の床面はシラスで，埋土内より成川式土器や土師器などの破片をはじめ炭化物，焼土塊などが出土した。

特に，炭化物や焼土片は埋土からまんべんなく確認され，わりと大きい焼土塊は埋土の中位から上位で確認できた。

221・222は成川式土器の甕で，弥生時代の後期終末の口縁部破片が考えられる。222は胴部破片で，器種は不明である。

223～232は土師器である。223～226は甕の口縁部破片で，223は復元口径21.8㎝，224は復元口径20.0㎝を測る。224は内面に稜線をもつ破片で，223は口縁部の内面に稜線を残し，下位はヘラ削りにる調整痕を認める。227は口縁部を欠損した甕の頸部付近から下位の部位である。228～230は器種は不明で，胴部付近や胴部から底部付近にかけての破片である。

231・232は器種は不明であるが土師器の口縁部破片である。233・234は須恵器の大甕で，頸部付近から胴部付近にかけての破片である。ともに外面には細かい格子目タタキ目の痕跡をもつ破片で，一部に自然釉が確認できる。内面の調整は平行タタキ目で，234は内面上位に平行タタキ調整後に同心円紋の当具による調整痕を部分的に残している。



第35図　土坑平・断面実測図２

６号土坑（第34図）

６号はＣ地点のＤ－７区の調査区北西側で検出した。その形状は不定形の楕円形状を呈する土坑で，長軸が126㎝，短軸が74㎝を測る。検出面からの深さが20㎝の浅い土坑で，埋土中より縄文晩期の底部破片や数点の成川式土器や土師器などの破片の出土があった。ともに小破片のために図化は困難であった。

７号土坑（第35図）

７号はＣ地点のＤ－６区の土坑５に隣接したところで検出した。その形状は楕円形状を呈する土坑で，長軸が90㎝，短軸が70㎝を測る。検出面からの深さが15㎝と浅く，土坑上位のほとんどが削平を受けている。楕円形を呈する床面は，長軸85㎝，短軸57㎝を測り，比較的フラットな面を形成し，土坑の中央付近の埋土上位には焼土粒がかなり混入していた。埋土中の出土遺物は土器小破片のみであった。

８号土坑（第35図）

８号はＣ地点のＣ－４区の調査区北側端で，土坑９に隣接したⅢ層上面で検出した。この土坑の周辺には柱穴や溝状遺構など多くの遺構が検出され，遺構の一部は調査区外へ延びている。土坑の平面形は不定形な楕円形状を呈するもので，長軸が145㎝，短軸が105㎝を測る。検出面からの深さが30㎝であった。断面形をみると深浅３基の土坑が重複したようにもみえるが，確定するまでには至らなかった。しかし，土坑の平面形をみると床面に樹痕跡と想定される掘り込みが確認され，人工的な土坑に樹痕が絡んだものである。埋土内には土師甕や坏の小破片が出土したが，図化は困難であった。

９号土坑（第35図）

９号はＣ地点のＣ－４区の調査区北側端で，土坑８に隣接したところのⅢ層上面で検出した。その形状は細長い不定形な形状の土坑で，長軸が205㎝，短軸が40㎝を測る。検出面からの深さが30㎝であった。断面形をみると深浅２基の土坑が重複したように見えるが，確定するまでには至らなかった。土坑埋土内より土師器の甕や坏などの小破片が少量出土した。

10号土坑（第35図，第37図235～239）

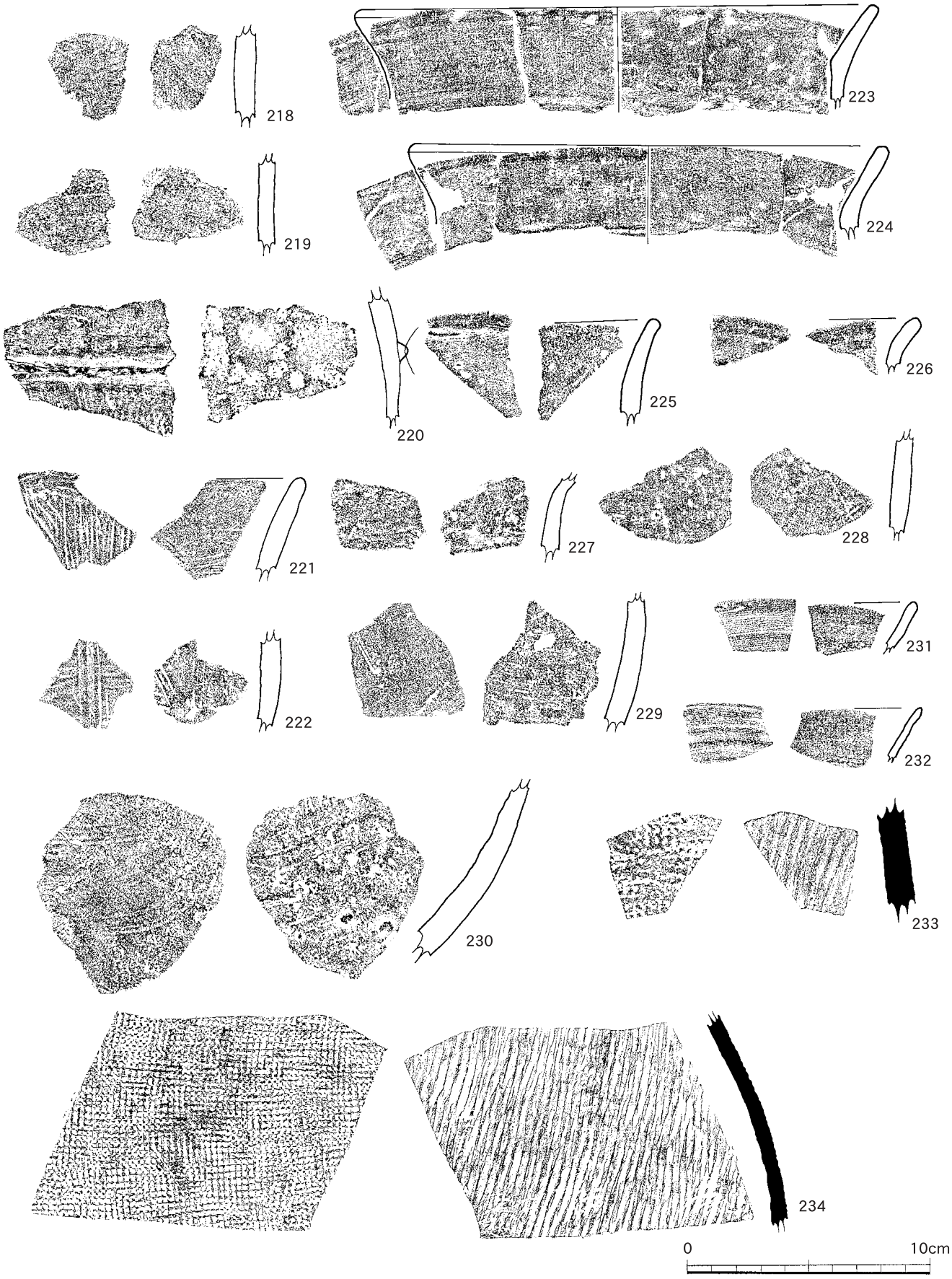
10号はＢ地点のＨ－４区の調査区北西側で検出した。その形状は不定形の楕円形状を呈する土坑で，長軸が185㎝，短軸が120㎝を測る。検出面からの深さが100㎝であった。土坑内の平面形をみると床面に樹痕跡と想定されるピット状の掘り込みがあり不安定である。この土坑も人工的な土坑に樹痕が絡んだものである。

235・236は成川式土器で，235は甕の胴部下位から底部破片，236は上げ底の破片，235は復元底径10.0㎝，236は復元底径8.0㎝を測る。

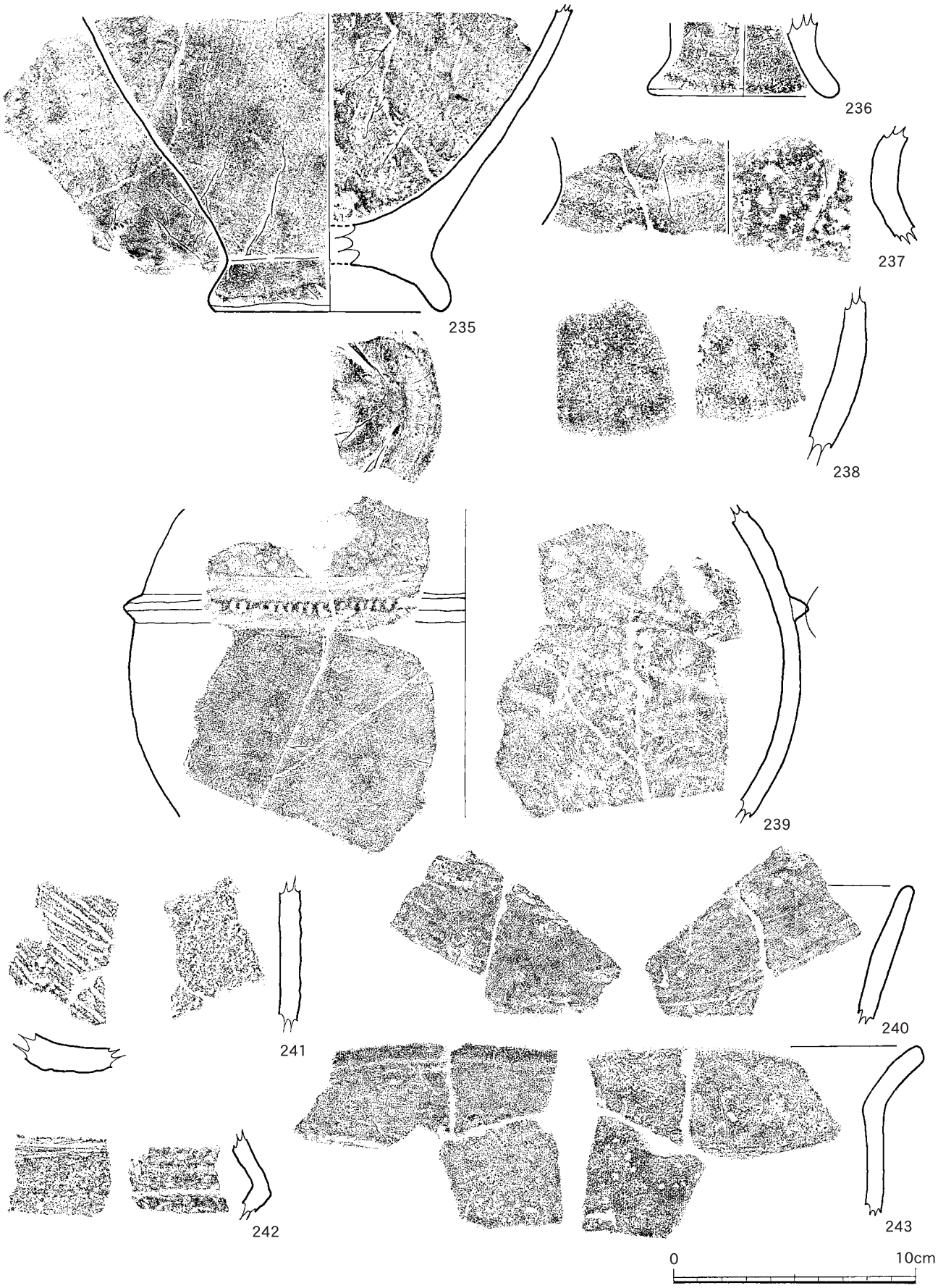
237～239は壺の破片で，237は頸部破片で，238は底部付近の破片である。239は壺の肩部の下位付近から胴部下位にかけての破片で，胴部に１条の貼付刻目三角突帯を巡らし，復元胴部径は27.5㎝を測る。

11号土坑（第35図，第37図240～243，第38図244～249，252）

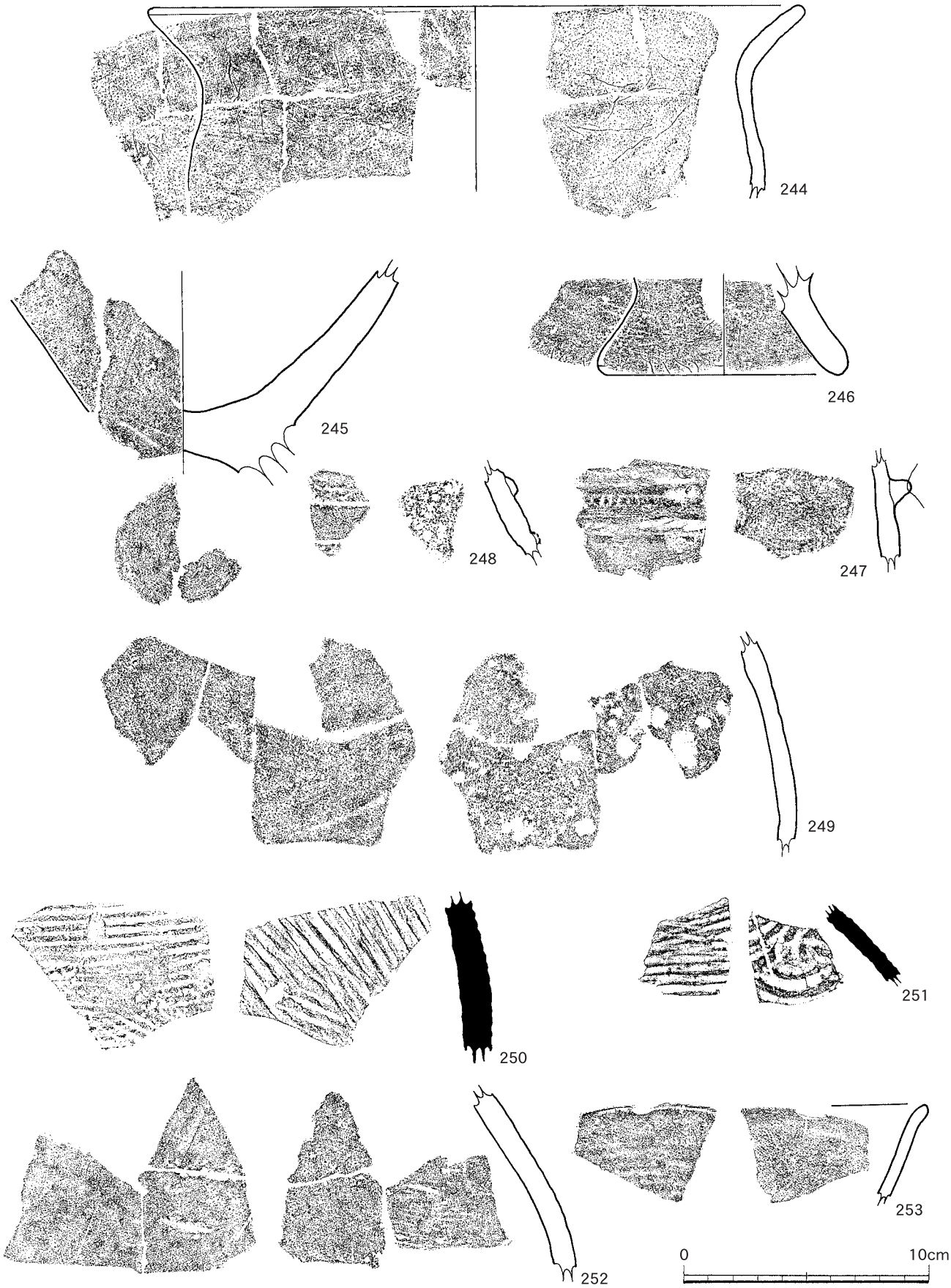
11号はＢ地点のＨ－４区の調査区北西側で検出した。その形状は不定形の楕円形状を呈する土坑で，長軸が147㎝，短軸が103㎝を測る。検出面からの深さが56㎝であった。土坑内の平面形をみる



第36図　土坑内出土遺物１



第37図　土坑内出土遺物２



第38図　土坑内出土遺物３

と床面に樹痕跡と考えられるピット状の掘り込みがあり不安定である。この土坑も人工的な土坑に樹痕が絡んだものが考えられる。

240は斜位の貝殻条痕文と隅角部には貝殻腹縁刺突文施文をもつ縄文早期の角筒土器の破片である。241・242は縄文晩期の土器破片で，241は深鉢の口縁部で，242は浅鉢の胴部破片である。243・244は弥生時代後期の終末の口縁部破片で，244は復元口径26.8㎝を測る。

245～249・252は成川式土器の破片で，248は壺の肩部で，２か所に突帯を貼付け，突帯沿いに沈線文をもつ破片で形式名は不明である。245・246は甕の底部付近や底部の上げ底の破片で，246は復元底径5.0㎝を測る。

248～249は壺の肩や肩部付近から胴部にかけての破片で，247は貼付刻目突帯文をもつ破片である。

13号土坑（第35図）

13号はＢ地点のＦ－５区の調査区西側端部で検出した。その形状は細長い楕円形状を呈する土坑で，長軸が384㎝，短軸が140㎝で，検出面からの深さ28㎝を測る。大きい規模の土坑としては深さの浅いものである。埋土内には土器小破片が出土したが，図化は困難であった。

15号土坑（第39図，第40～第43図254～279）

15号土坑は，Ｃ地点のＦ－６区の調査区西側端部で検出した。これまでの土坑とは形状や深さなどが異なっている。調査時には埋土中より大小の須恵器片が多く出土したことで，須恵器ピットとしていた遺構である。

土坑は不定形の楕円形状を呈した大きい柱穴状の遺構で，長軸が42㎝，短軸が33㎝，検出面からの深さ110㎝，土坑の中位径は27㎝～36㎝で，床面径は24㎝～27㎝を測り，床面はほぼ平らで硬化面を認めた。

土坑の掘込み面は遺物包含層下位のⅣ層上面で検出したが，検出レベルの上位からも土坑内出土のものと類似する須恵器片が出土し，実際の掘込み面は上位にあったと考えられる。土坑の埋土とⅢ層の色調がほとんど同質で，調査時には掘込み面の検出が困難であった。

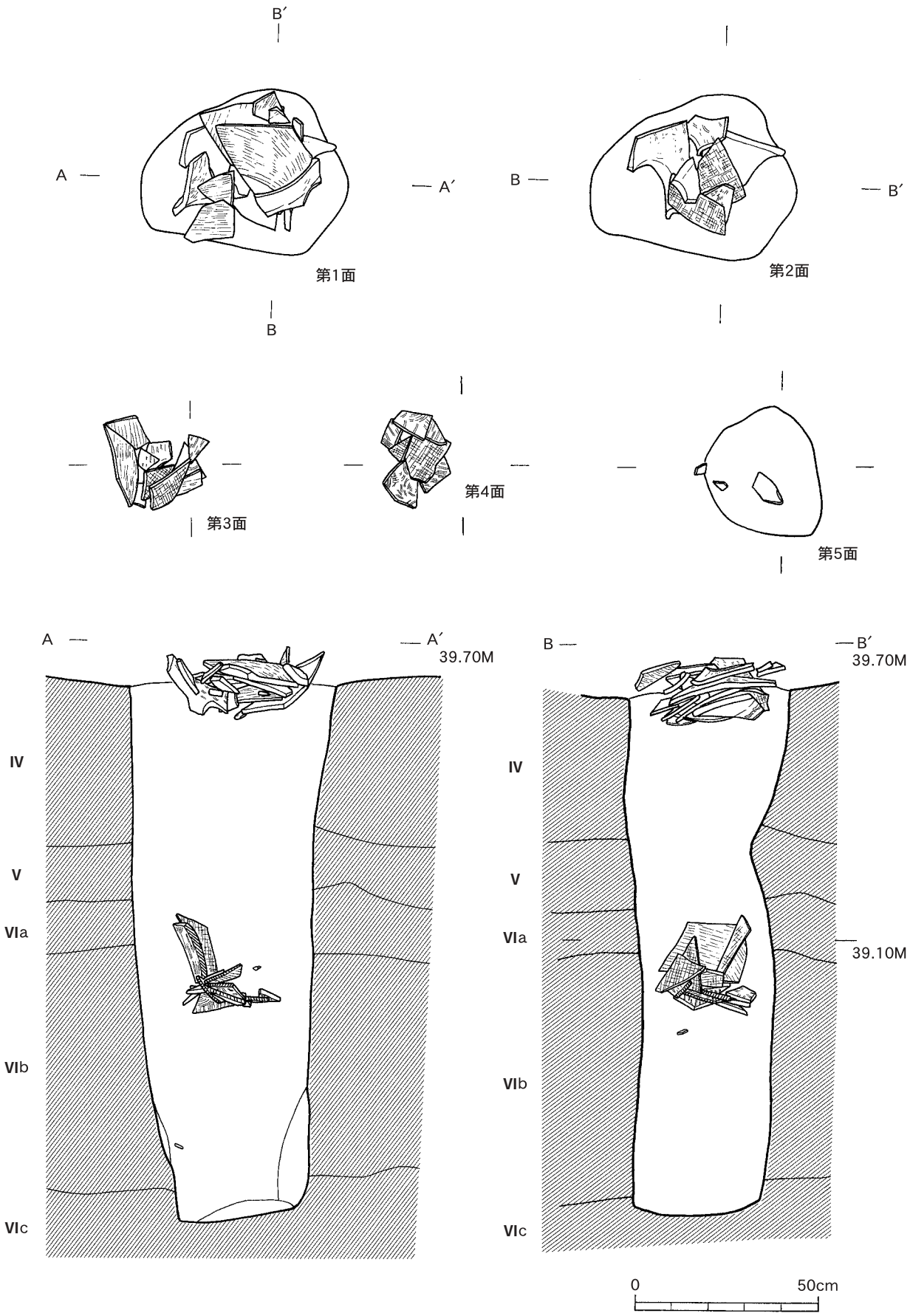
土坑の実際の深さは，先述のとおりⅢ層から掘込まれたものと考えられ，Ⅵｃ層まで達している。土坑の埋土は，徐々に埋まったものでなく，いっぺんに埋まったような状況が観察された。床面はほぼ平らで，硬化面が確認された。

土坑の埋土内上位と中位の２か所に須恵甕の破片35点がまとまって出土し，254～262が上位，263～271が中位から出土した。

254～256は口縁部から頸部にかけての破片である。

254は，頸部から口縁部直下までは大きく外反するが，口縁端部は直立する。頸部と体部の接合部直下には指頭による調整痕が顕著に観察され，さらに接合部は凹線状になっており，丁寧に調整されてはいない。口縁部から頸部の内外面ともにヨコナデ，頸部と体部の接合部内面は指オサエののちヨコナデ，肩部外面は平行タタキ，肩部内面は同心円文の当て具痕が残る。色調は，頸部の外面は暗赤褐色とオリーブ黄色，内面は頸部が暗赤褐色であるが，頸部下方から肩部までは暗赤褐色で，一般的な須恵器の印象とはかけ離れた色調である。

255は，口縁部直下に櫛描波状文が描かれ，調整は外面が格子目のタタキののちにハケ目，内面



第39図　土坑平・断面実測図 3

はヨコナデ調整が施されている。頸部と体部の接合面には格子状の接合沈線が施され，接着力を高める工夫がなされている。色調は外面が灰白色で，内面が褐灰色であるが，頸部下方は254と同じ暗赤褐色を呈している。

256は中型の甕で頸部は短く外反し口縁端部は四角におさめられている。口縁部から頸部の内外面ともにヨコナデで，肩部は外面が格子目タタキ，内面は同心円文の当て具痕が残る。また，頸部と体部の境には上方から下方への擦痕跡が確認される。色調は，外面が暗灰黄色で，内面は黄灰色であり，254・255とは異なる。

258・262は肩部破片である。257・259～261は胴部破片で，調整は外面がともに細かな格子タタキ目，内面は259が上位に同心円文，下位には平行タタキ目，257・260・261の内面には平行タタキ目調整が施されている。

埋土内の中位から出土した263～271は，すべてが体部破片である。

263～264・266・267・271は胴部破片で，265以外は外面が平行タタキ目が残り，さらにこの痕跡は純粋な平行タタキ目でなく，一部が格子風になっていることから同じ叩き板を使用したと考えられる。このことから同一個体が考えられる。

また，265の外面は目の細かい格子タタキ目，内面は平行タタキ目が残り，タタキ痕からみると別個体の可能性が考えられるが，外面の色調が他のものと似ていることから，同じ窯で焼成されたなど何らかの関係が考えられる。

268は肩部破片で，内面には同心円文の上に平行タタキ目が残り，さらにその上に先端部に丸味のある道具で押すような痕跡が残る。

269は肩部破片で，外面は平行タタキ目，内面は同心円文の当て具痕が残り，270はその下方に平行タタキが認められることから肩部から胴部にかけての破片である。

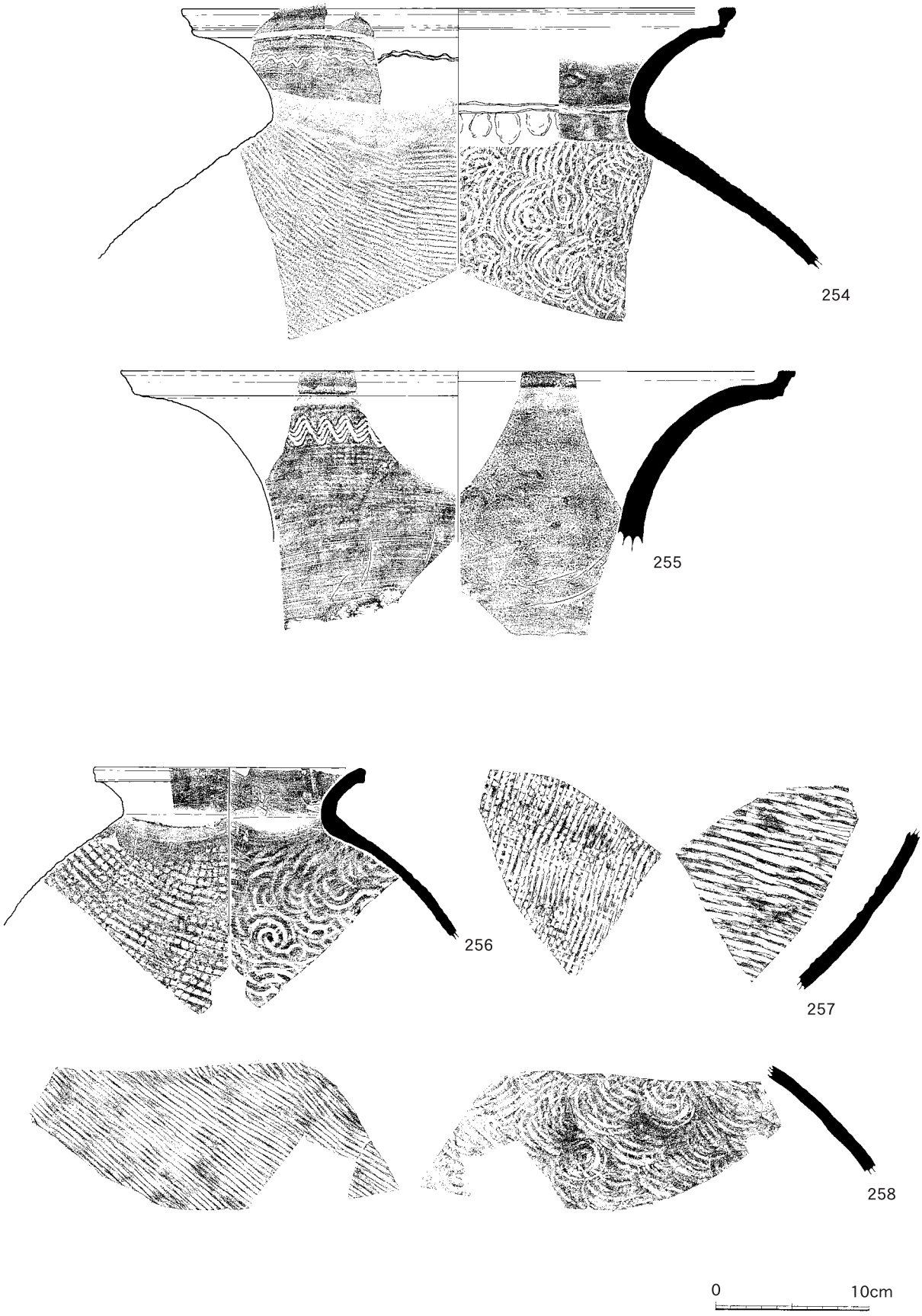
これらの体部片は，257～267・271の色調が類似することから，埋土中上位から出土した254か255と同一個体の可能性が考えられる。また，265は外面に細かい格子タタキ目が残ることから埋土内上位から出土した260と同一個体の可能性も考えられるが，現段階では254・255は，それぞれ形態の異なった口縁部をもっていることから，15号土坑には少なくとも３個体分の甕の破片があることが明らかである。

272～274は15号土坑直上から出土し，土坑内埋土中から出土するものと色調や特徴が類似するものであり，この存在から土坑の掘り込み面がⅢ層中からあった可能性が考えられる。

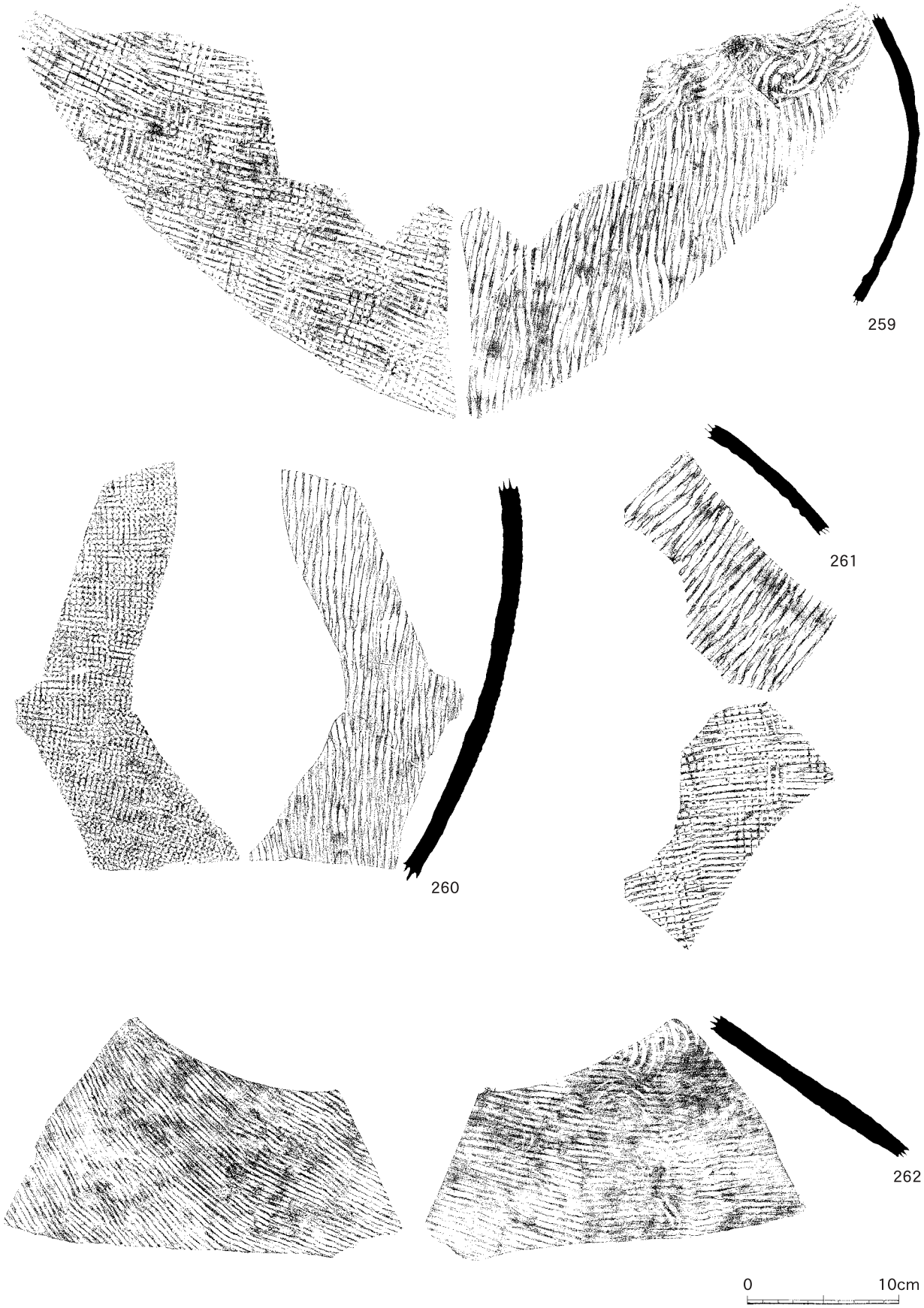
272は肩部破片で，外面の平行タタキ目から257・259・261・263～267・271と同じ板を使用しているが，同一個体であるかの判断は困難である。

275～279は，包含層から出土したものであるが，275・276は15号土坑埋土から出土した255に特徴が類似する。277・278は，外面の口縁部から頸部はヨコナデ，肩部は格子のタタキ目が残る。また，内面は口縁部から頸部までヨコナデで，肩部は同心円文の当て具痕が残る。さらに，これらは15号土坑埋土中より出土した256と類似するが，256の頸部は完全に残っていることから別個体である。

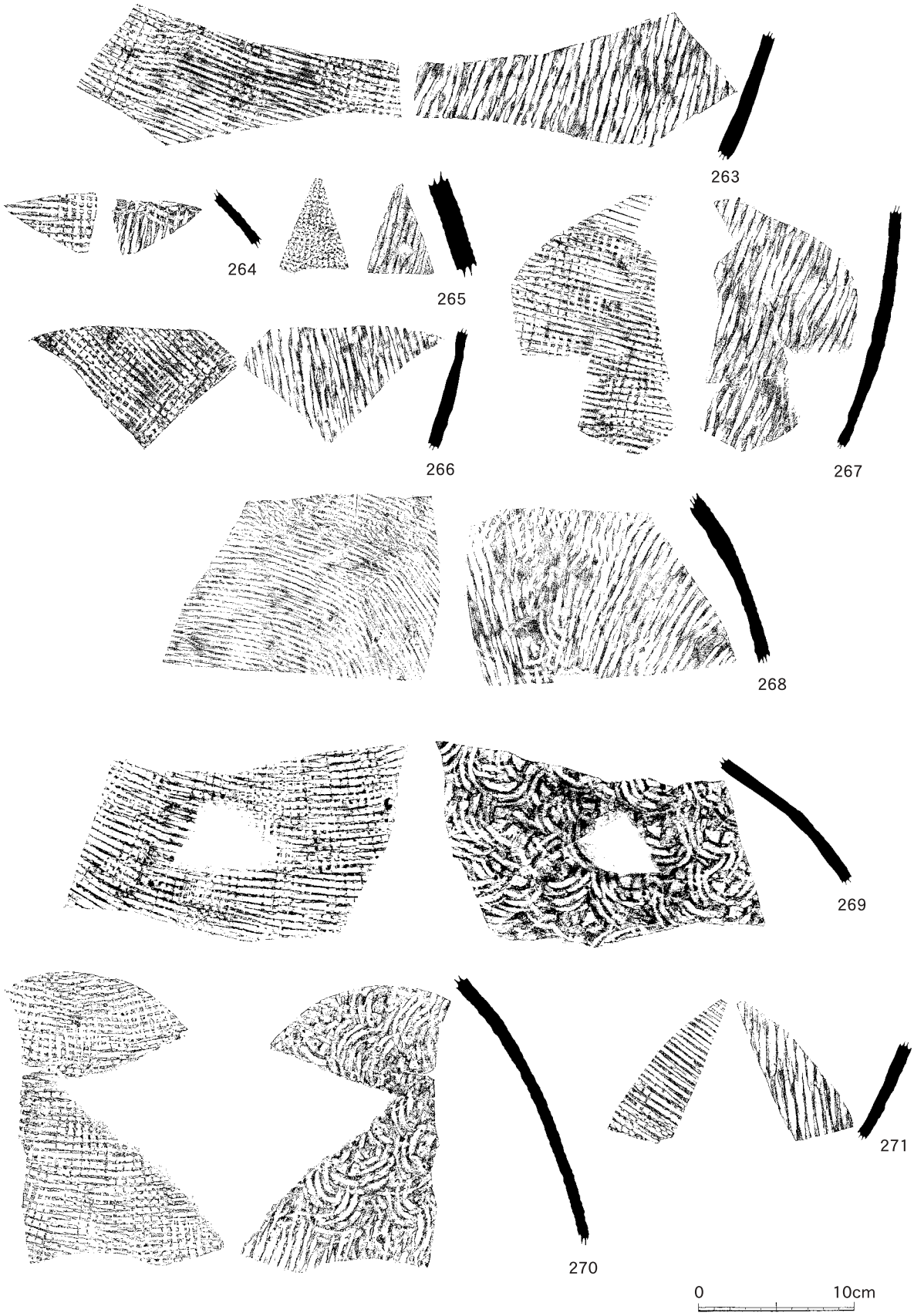
279は壺の肩部破片が考えられる。外面は平行タタキ目，内面は指オサエののちにナデ調整が施されている。これには外面に把手のようなものが付いていた痕が残されている。



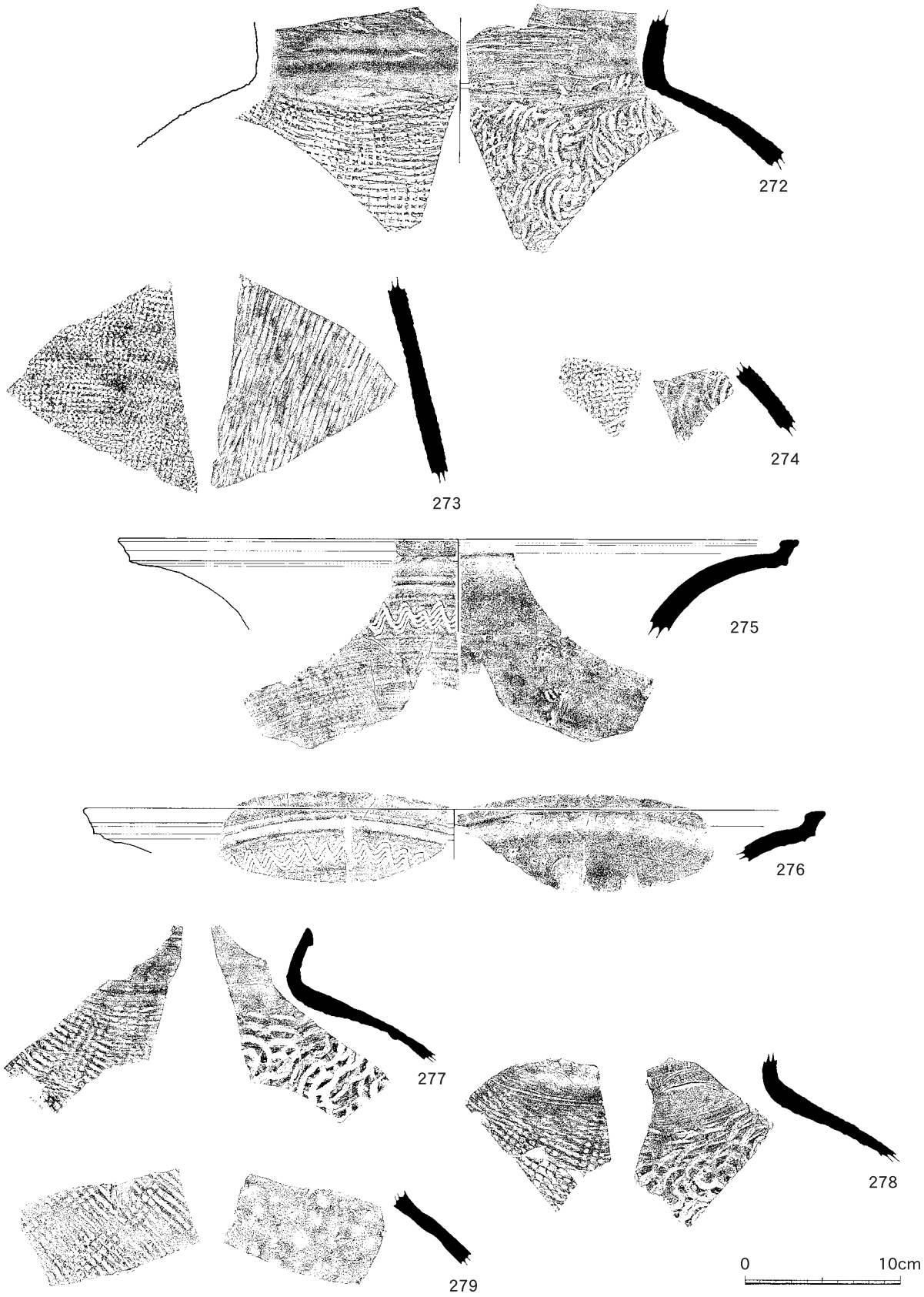
第40図　土坑内出土遺物４



第41図　土坑内出土遺物５



第42図　土坑内出土遺物６



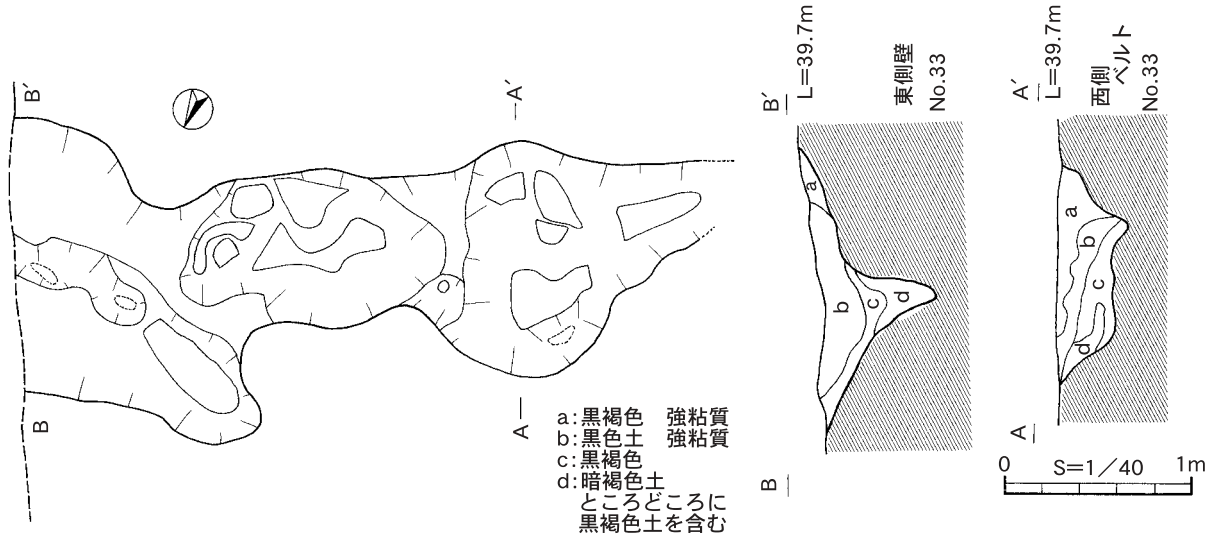
第43図　土坑内出土遺物７

⑵　**溝状遺構（第38図250～253，第44図，第45図281～283）**

溝状遺構はＢ地点のＦ－５区の調査区西側端部で検出した。その形状は細長い楕円形状を呈する土坑で，長軸が370㎝，短軸が164㎝を測る。検出面からの最大の深さは76㎝であった。

溝状遺構の平面形をみれば，3つの土坑が絡んだような形態で，床面をみると樹痕跡と想定されるピット状の掘り込みが確認された。床面は不安定で人工的な掘込みに樹痕が絡んだものと考えられる。

この溝状遺構を検出した地点には，多くの遺構が集中して検出され，遺構のほとんどが調査区外へ延びている。



第44図　溝状遺構平・断面実測図

溝状遺構の埋土には，成川式土器の壺，須恵器の甕，土師器の口縁部破片のほか，磨石・敲石・砥石などの石器も出土した。

250・251は須恵器の肩部付近や胴部付近の破片である。

250は胴部付近の破片で，調整は内外面ともに平行タタキ目が施されている。251は肩部の破片で，調整は外面が平行タタキ目，内面が同心円文で整形されている。

252は成川式土器の壺の肩部破片，253は土師器の口縁部破片である。252は磨滅を受けているが，不鮮明であるがナデによる調整を認める。

281～284は敲石，砥石である。

281は砂岩の楕円礫を素材とした磨石で，両面ともに磨面を認め，表面の一部と側縁には敲打痕が確認できる。

282，283は砥石で，282は安山岩，283は頁岩を素材としている。

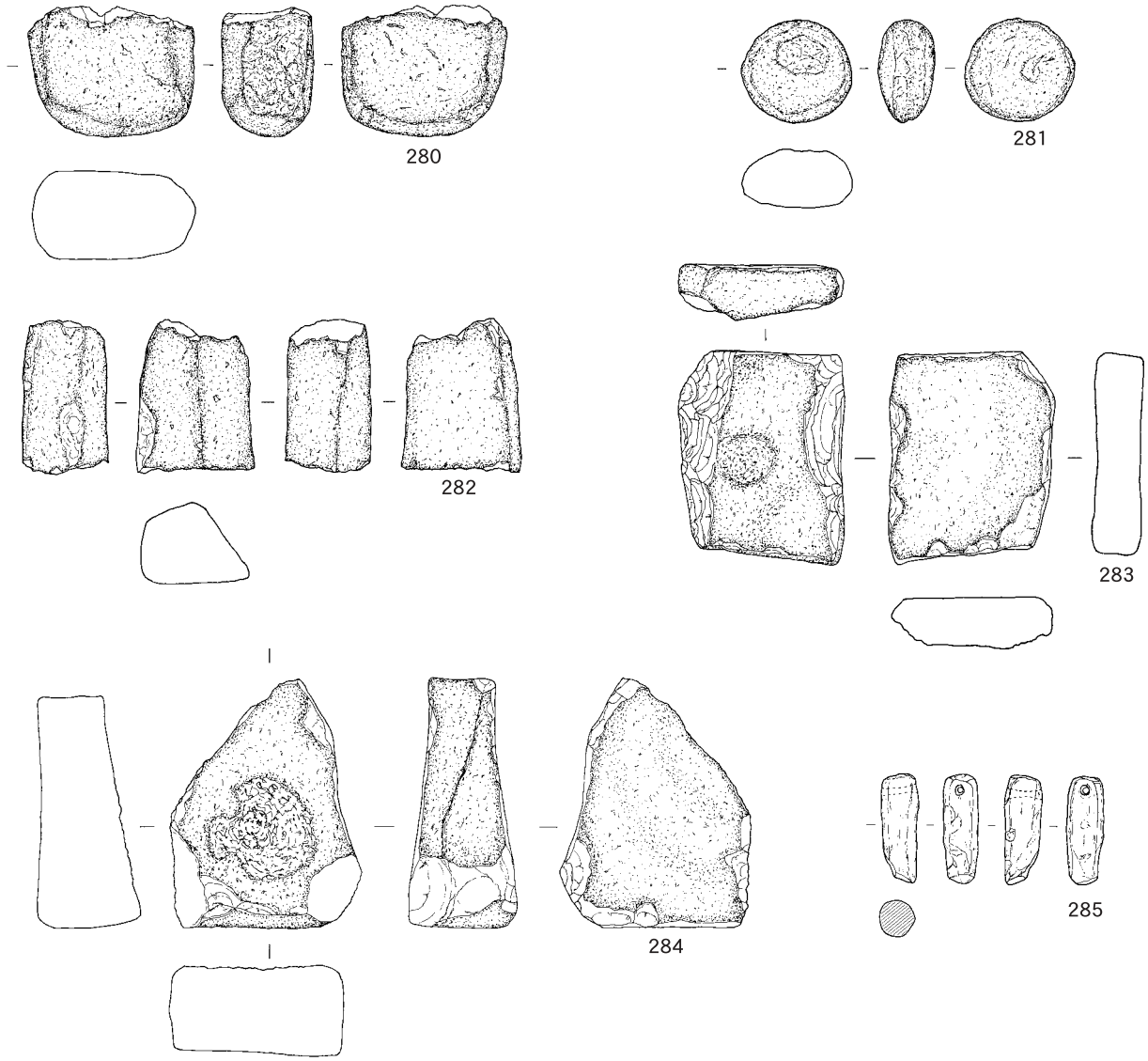
282は両端を欠損しているが，各面ともに丁寧な磨面を認める。283は扁平な素材を用いた砥石で，両面及び上端部に細かな磨面を認め，片面の一部には円形状に敲打による痕跡を残している。また，両面の両側端ともに敲打による大小の剥離痕が確認できる。

⑶　その他の遺構（第45図284・285）

284は柱穴４の埋土から出土した砥石で，285は柱穴50の埋土から出土した双孔棒状土錘である。

284は砂岩の方形状の礫を素材に用いた砥石の欠損品である。両面及び片側側縁には磨面を認める。表面には円形状の浅い敲打による痕跡を認め，「磨る」・「敲く」の機能をもっている。

285は下端部を欠損している双孔棒状の土錘である。現存全長は6.2㎝，現存幅は2.0㎝，現存は厚2.0㎝，重量は198ｇを測る。上端には両面から約５㎜の円孔を穿っている。器面全体が磨滅を受けている。



第45図　土坑・溝状遺構・柱穴内出土遺物

2　遺物

⑴　古墳時代

古墳時代の調査では，Ⅱ層を中心にⅢ層上部より成川式土器などの出土がみられた。

本遺跡出土の成川式土器は，口縁部から底部まで復元できたものは皆無である。口縁部や底部以外の破片では，甕と壺との区別や形態による分類はできなかった。

出土遺物は，ほとんど土器で，特徴が把握できる部位に口縁部破片，頸部から胴部にかけての破片，胴部破片，胴部下位から底部付近の破片，底部破片などの資料があった。

しかし，その多くは細片で磨滅を受けている。内外面の整形は，鮮明さを欠いだ調整痕をはじめに，痕跡の薄いものがほとんどであった。

出土遺物で特徴のある破片は，図化に努めるように心がけたが困難なものも多く，個々の資料での傾きについては疑問が残る。

286から349は成川式土器で，286～292，294～319は甕形土器，293・322～349は壺形土器，320は高坏形土器などの出土があった。

①　甕形土器（第46図～第51図286～292，294～319）

286～292，294～319は甕形土器の破片である。286～288，294～301は口縁部破片で，289・290は口唇部を欠損した頸部付近の資料である。291・292は胴部から，その下位までの部位が考えられる。

286・287は内外面ともに横位や斜位のハケナデ整形が施され，287の内面には煤の付着を認める。内面への煤の付着は，二次焼成を受けた破片が考えられる。

291・292は頸部下位から胴部下位にかけての資料で，調整は内外面ともに斜位に丁寧なハケナデ整形である。

294～301はやや外反する口縁部で，302～308は胴部から胴部下位までのものである。

309～319は胴部下位から底部付近や底部破片で，316～319は復元による底径が可能な底部である。316は復元底径5.3㎝，318は9.0㎝，319は7.4㎝を測る。調整は内外面ともにハケナデによる調整が施されている。

②　壺形土器（第46図293，第49図～第51図321～349）

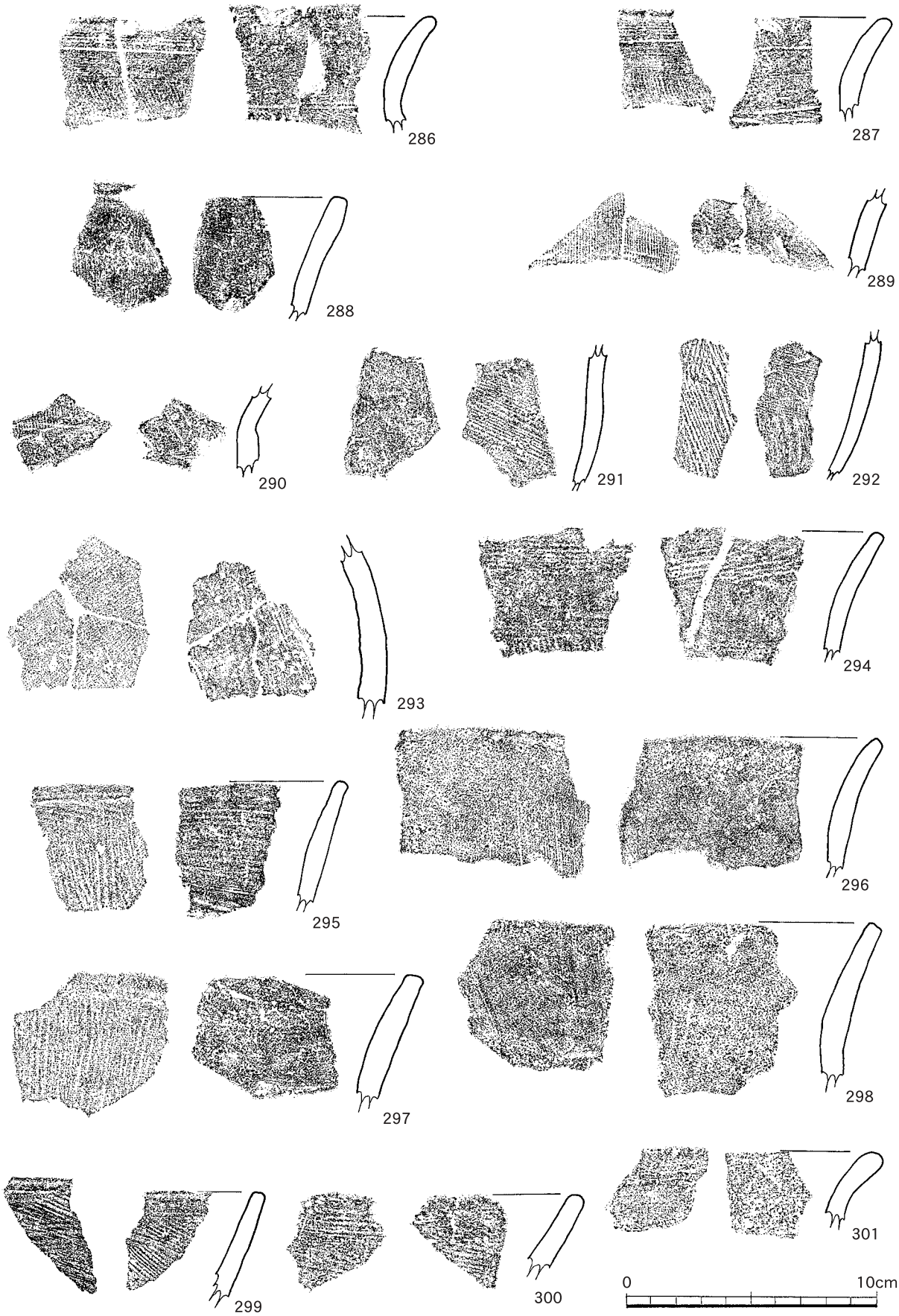
293・321～349は壺形土器の破片である。

293・321～340は肩部付近から胴部までが考えられる資料で，341～343・348は胴部下位から底部付近までのものである。344～347は底部である。293は頸部から胴部付近にかけての破片である。321～324・329は頸部に１条から２条の貼付三角突帯を巡らす破片で，321と323は貼付三角突帯に刻目をもつ資料である。

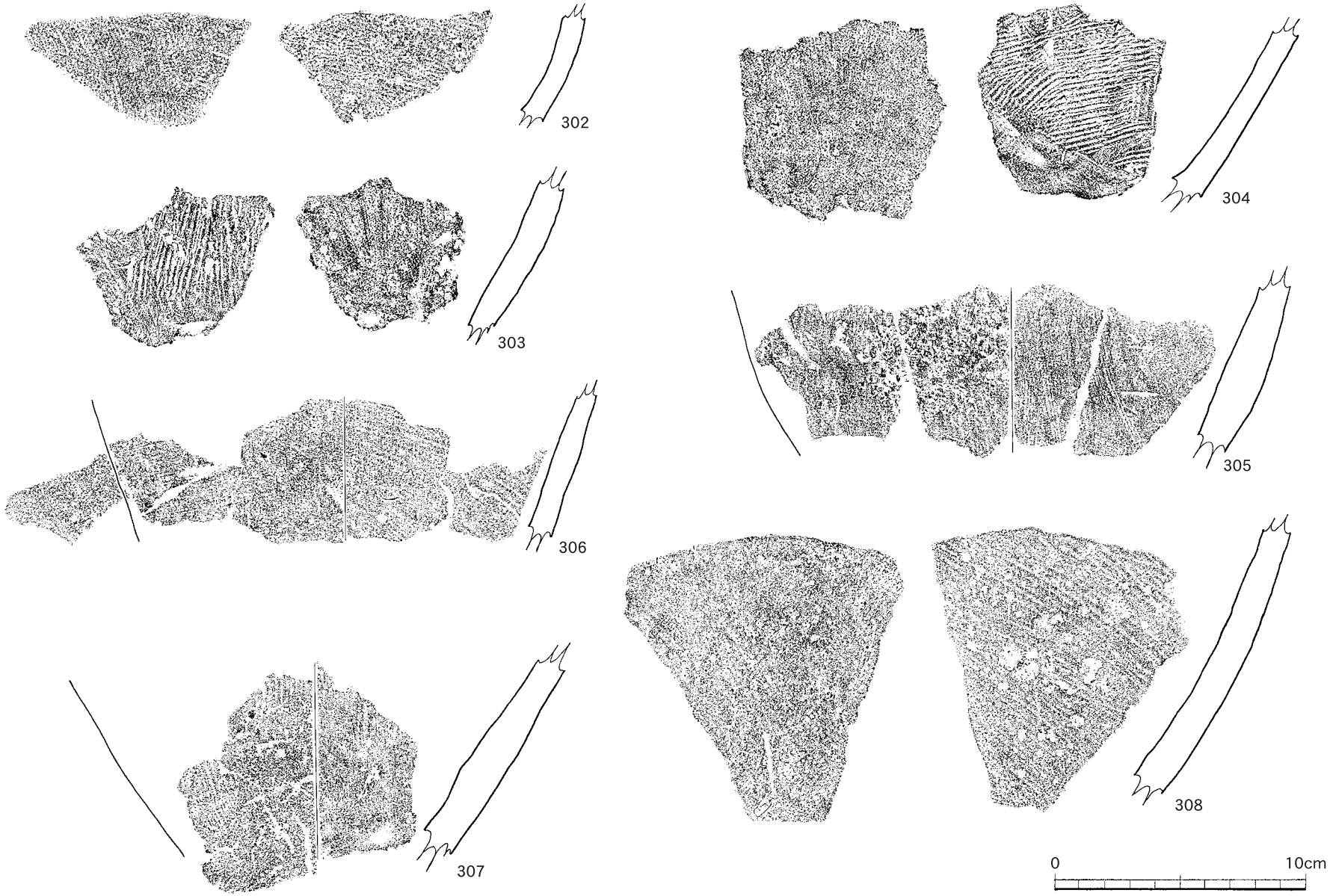
325～328・331は胴部付近の破片で，最大胴部径付近には貼付突帯を施している。325～328は格子目の刻目突帯を巡らすものと331のように帯条の突帯を有するものである。

335～339は肩から胴部付近にかけての破片で，外面には工具により縦位や横位による数条の沈線を施し，その上に連続して縦位に短略線を施文している資料である。外器面には細線による格子状のハケによる調整を施している。

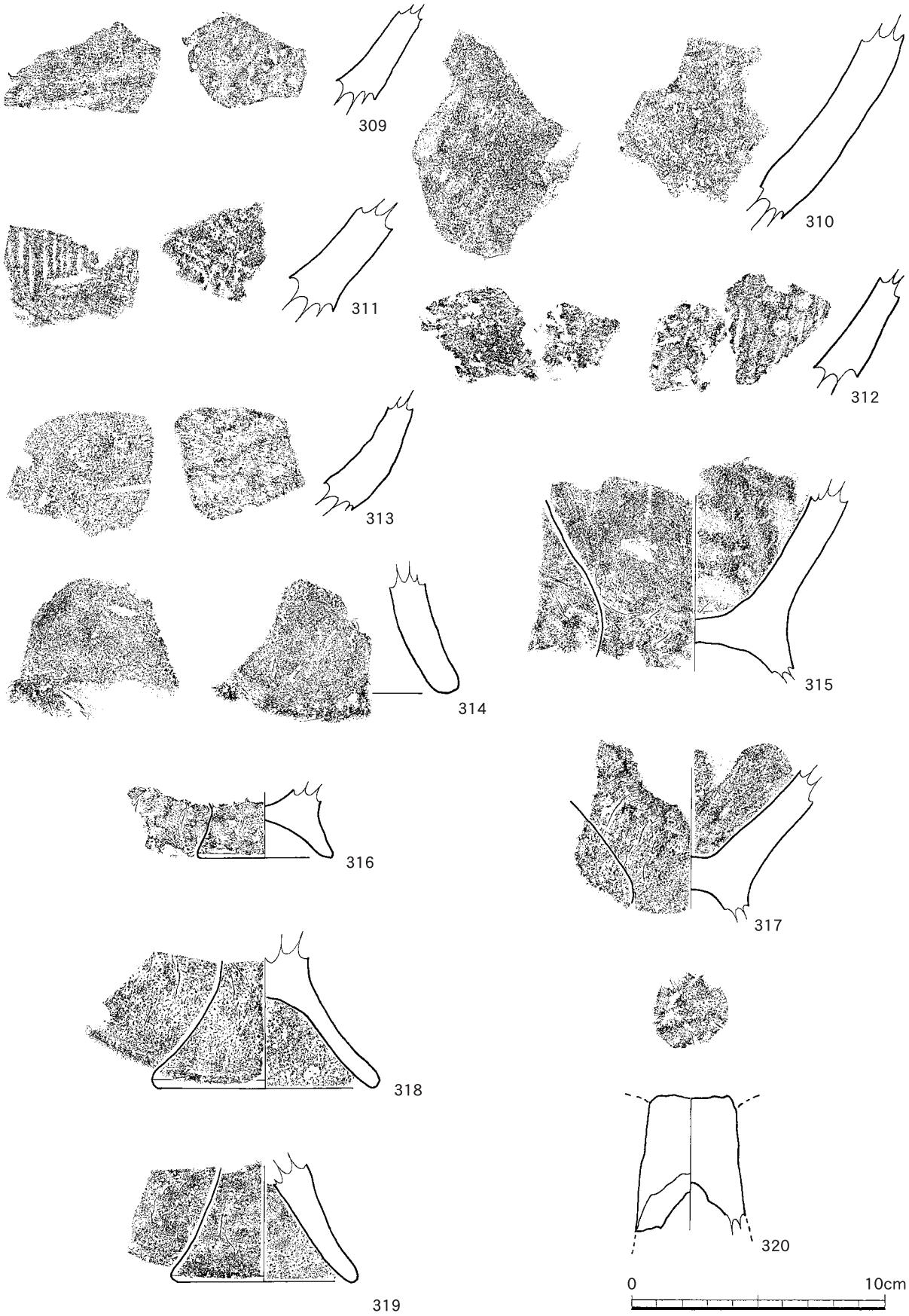
344～339は丸底の破片で，ぶ厚い器壁をもつものもある。



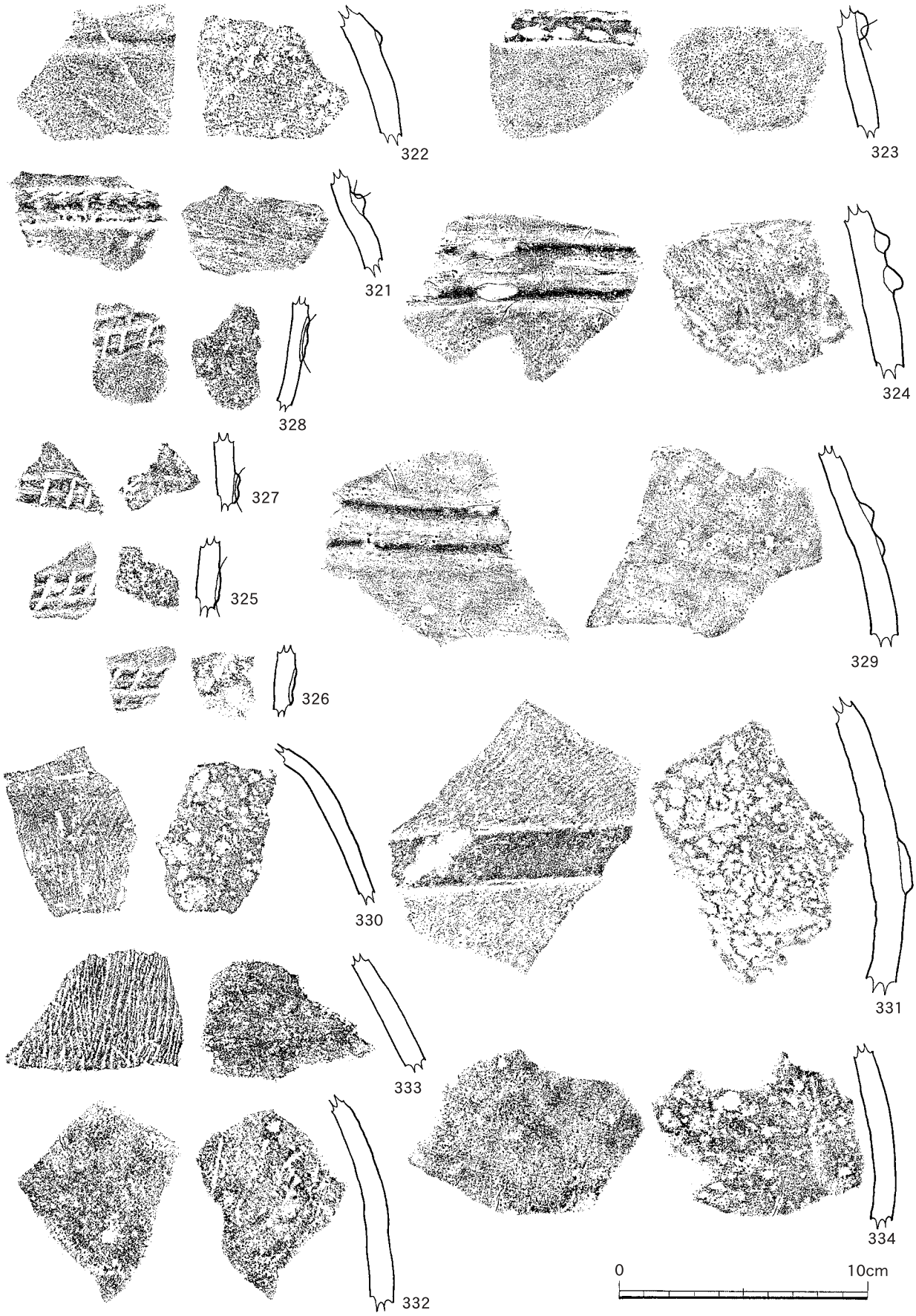
第46図　古墳時代の出土遺物１



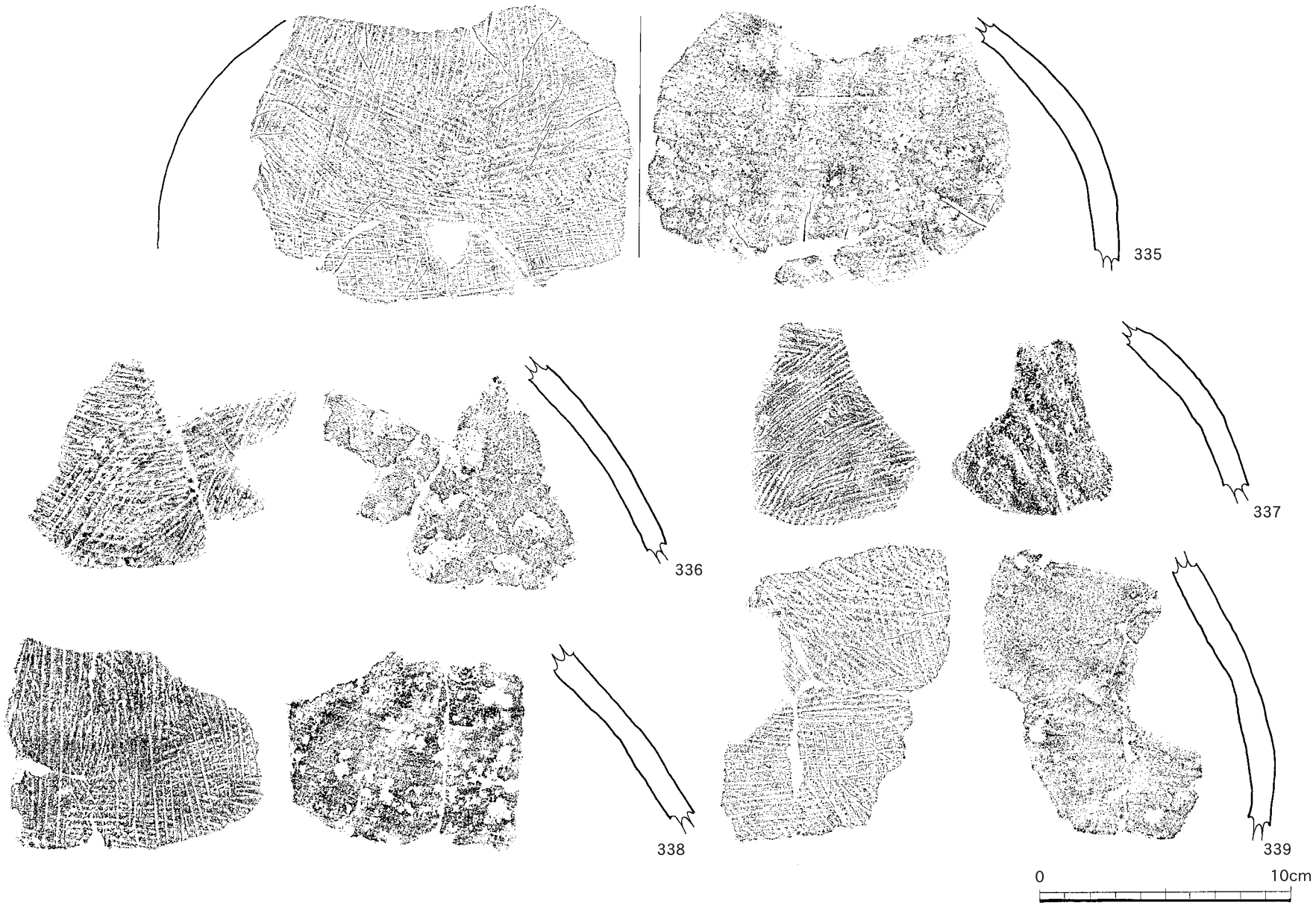
第47図　古墳時代の出土遺物２



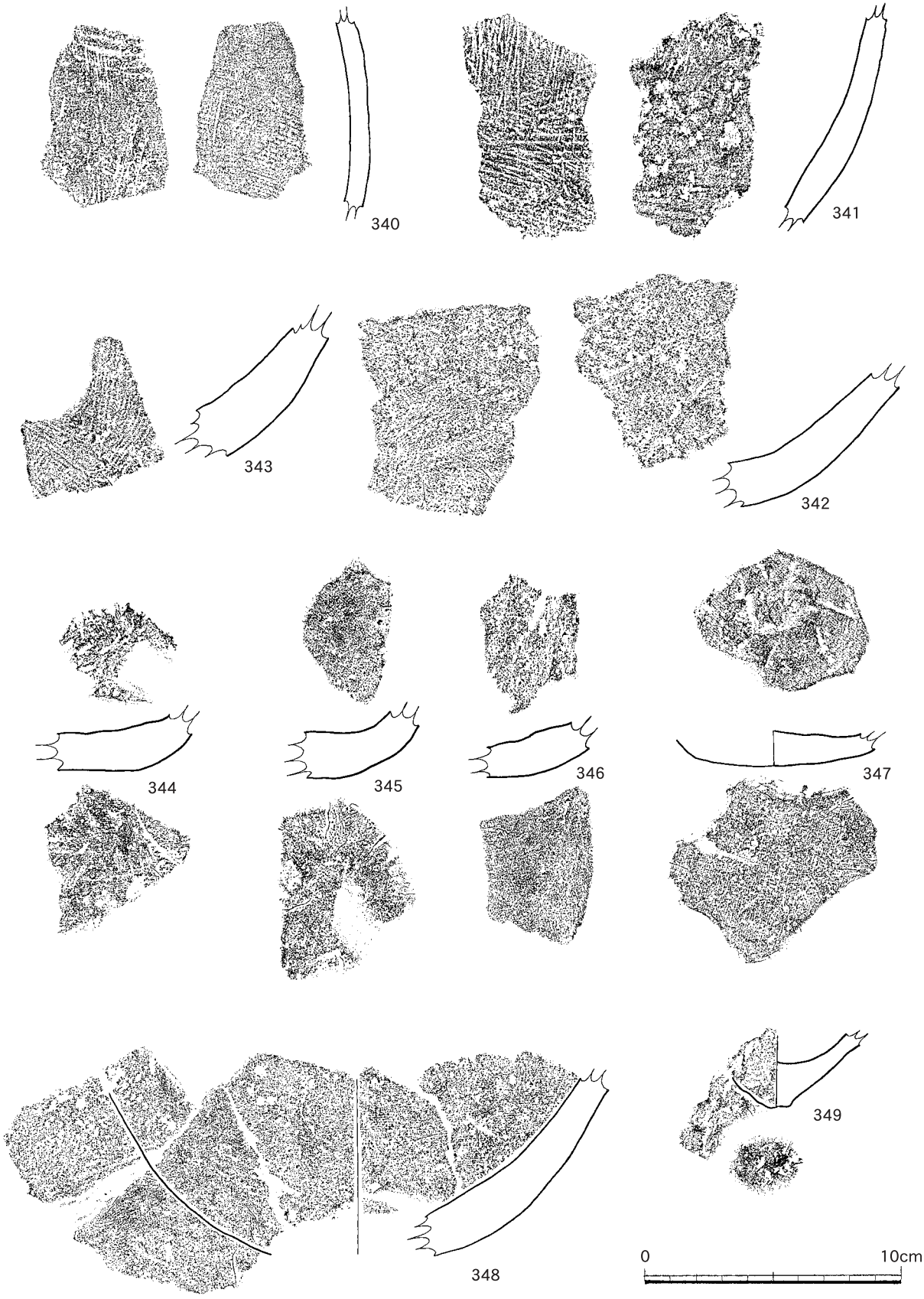
第48図　古墳時代の出土遺物３



第49図　古墳時代の出土遺物４



第50図　古墳時代の出土遺物５



第51図　古墳時代の出土遺物６

③　高坏形土器（第48図320）

320は高坏形土器の脚部破片である。坏部と脚部の裾部を欠損した資料で，器面全体が磨滅しているために調整の痕跡は剥落し不明である。

⑵　古代

古代の調査は，縄文・弥生・古墳時代と同様な手順で調査を実施した。その結果，主にⅡ層を中心にⅢ層上部より土師器の甕・壺・坏・埦・内黒土師器，須恵器の甕・壺や土錘などの出土がみられた。

本遺跡から出土した土師器も細片が多く，磨滅を受け内外面ともに調整痕跡は鮮明さを欠くものや磨滅して不明なものが多かった。

古代の出土遺物は，口縁部から底部まで復元できたものは皆無であったが，口縁部から胴部下位までの破片，口縁部から胴部までの破片など復元できたものは９点程度であった。

口縁部破片，頸部から胴部にかけての破片，胴部破片，胴部下位から底部付近の破片，底部など部位別の特徴で分類を行った。しかし，その多くは細片で，磨滅を受けているために内外面とも調整の痕跡が薄いものがほとんどである。

350～352，354～357，359～363は緩やかに外反する短い口縁部破片である。

350～389は甕形土器もしくは鉢形土器が考えられるが，鉢形土器として扱かった。

390～410は坏か埦の口縁部破片，411～438は坏の底部破片，439～455は埦の底部破片，456～476は内黒土師器の口縁部破片，477～481は内黒土師器の口縁部から底部にかけての破片，482～490は内黒土師器の底部破片，491は内黒土師器の坏の底部破片，492～538は須恵器の口縁部・頸部・肩部・胴部などの破片，539～552は土錘である。

①　甕（第52～第54図350～381）

古代の甕は，口縁部から底部まで復元できた資料はなかった。

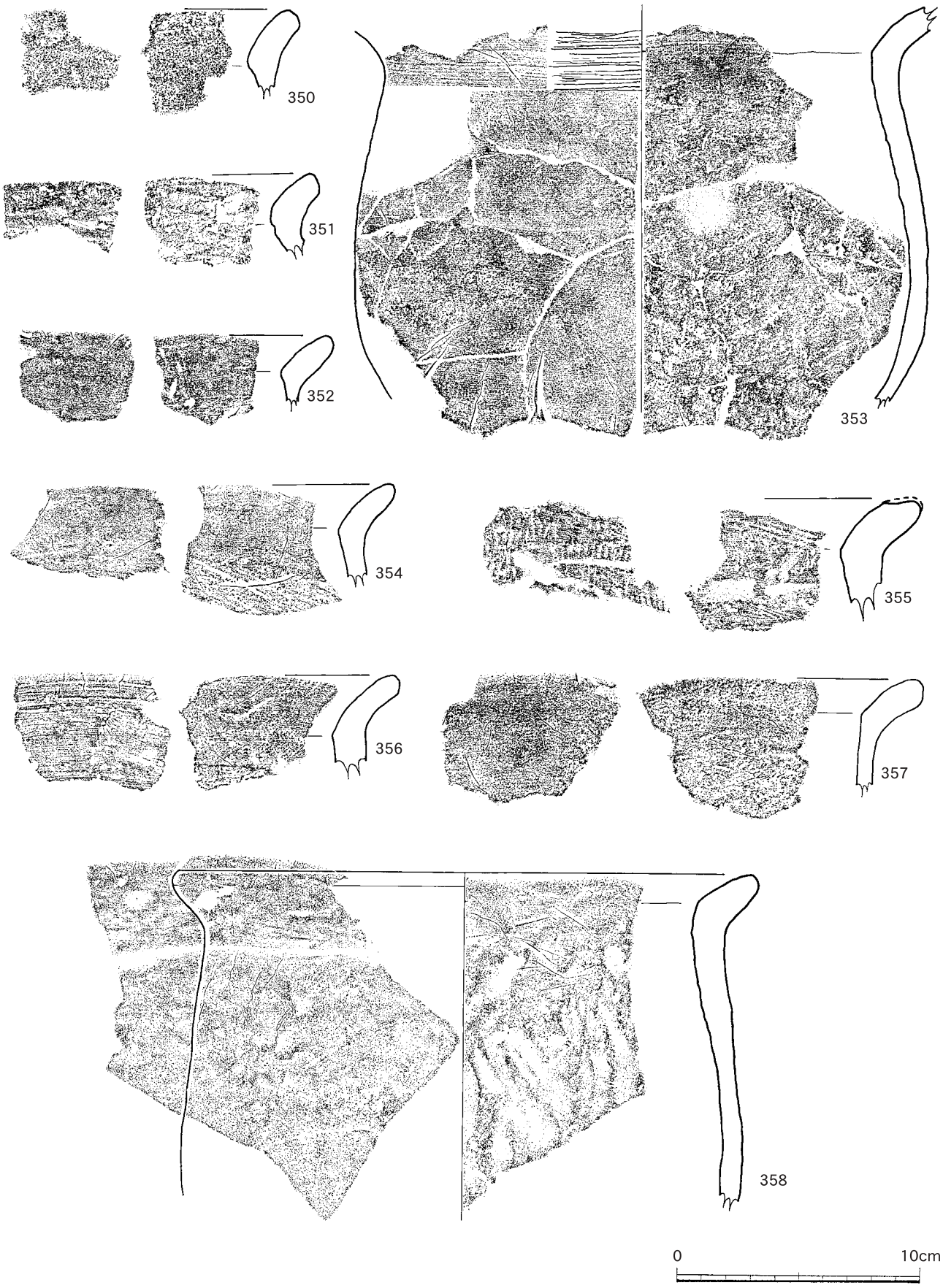
353・358・373・385は口縁部から胴部下位付近までの破片，367・369・380口縁部から胴部付近まで復元できた資料である。

350～381は甕形土器で，350～352，354～357，359～372，374～380は口縁部破片や口縁部から頸部までの破片である。口縁部は「く」の字状に外反し，口唇部で平坦面を作り出すようにもう一度外反するもの，口縁部の短いもの，口縁部が僅かに外反する資料などである。

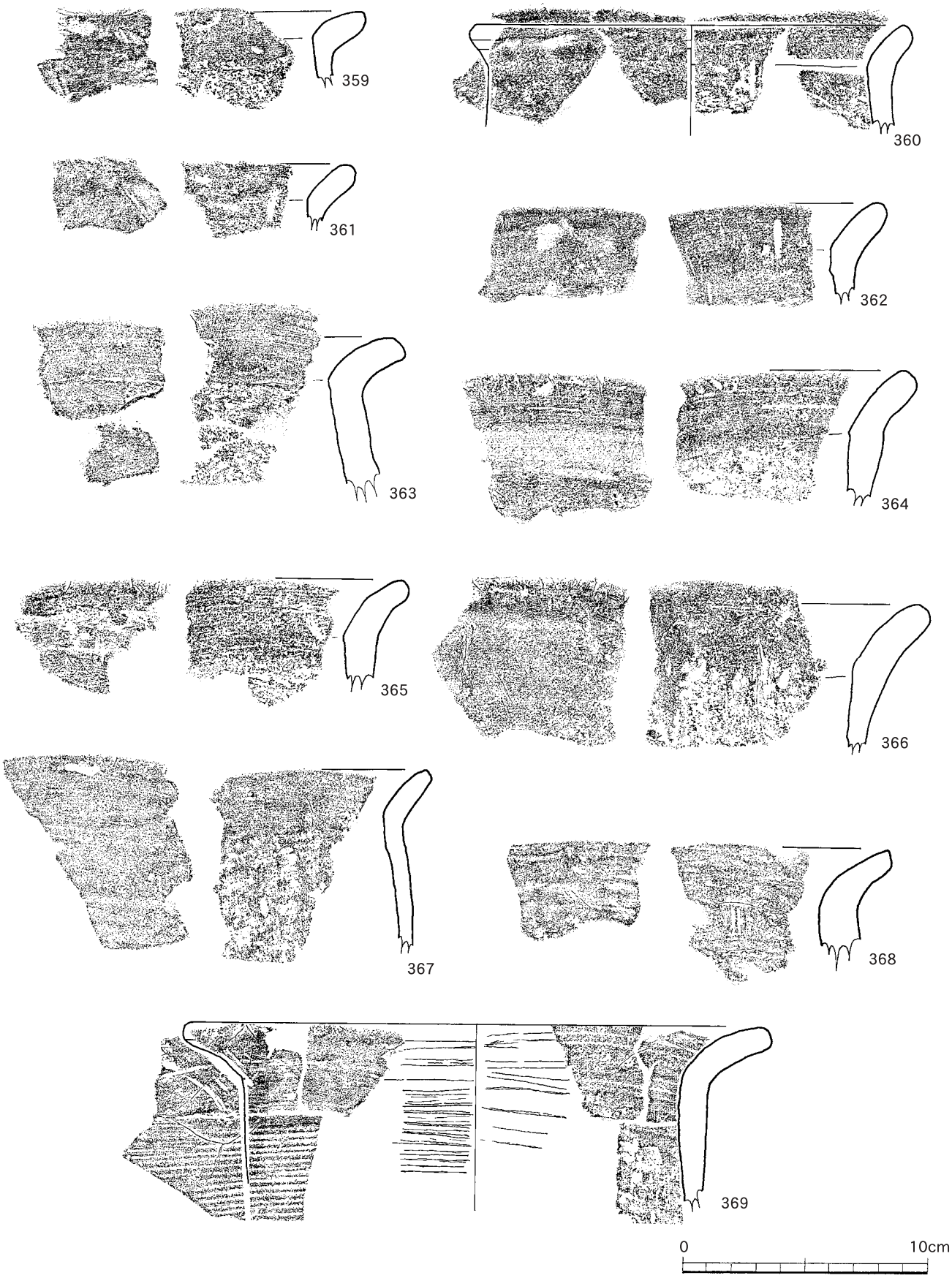
これらの口縁部から頸部付近までの資料は，破片のために傾きなどに疑問が残るが，胴部が丸みを帯びながらのびて口縁部の下で内湾するもの，胴部が上部では直線的に上にのびて口縁部の下で内湾するもの，胴部がわずかに開きながらのびて口縁部で外反するもの，胴部が開きながらのびて口縁部で外反するものなど破片の部位からみられる。

358は復元口径24.0㎝を測る。形態は胴部が直線的に上にのびて，屈曲部付近では若干内傾し，短い口縁部を作り出している。外面の調整は，頸部付近がヨコナデ，その大半が磨滅のために消滅し，鮮明さを欠くが一部にナデ整形を認める。内面の調整は，指頭による調整後ヘラケズリが施され，全体的に磨滅のため調整痕は不鮮明である。

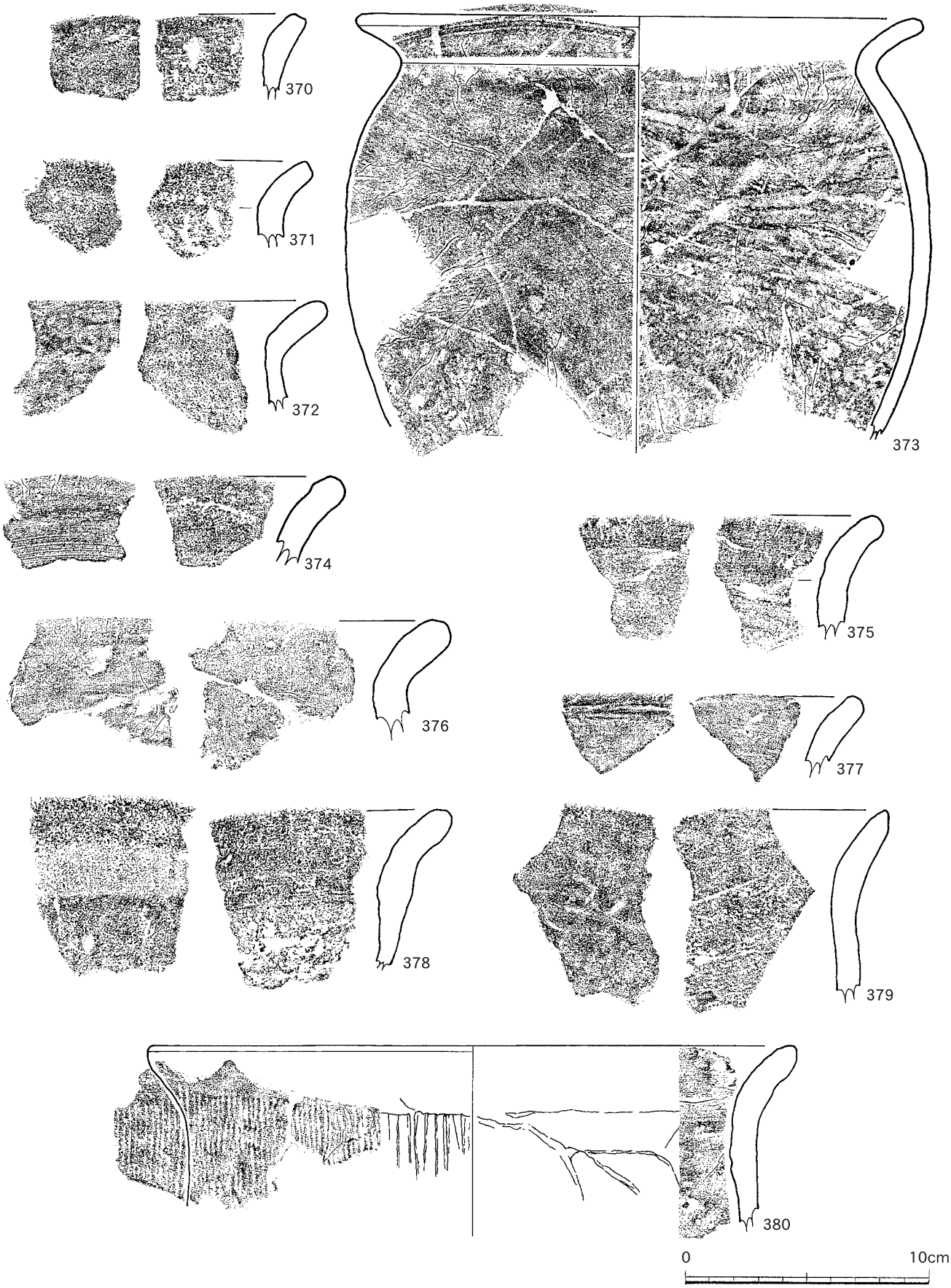
360は復元口径18.0㎝を測る。外面及び口縁部上面はヨコナデ，内面の屈曲部から下位には右下がりのヘラケズリ調整後ナデが施されている。



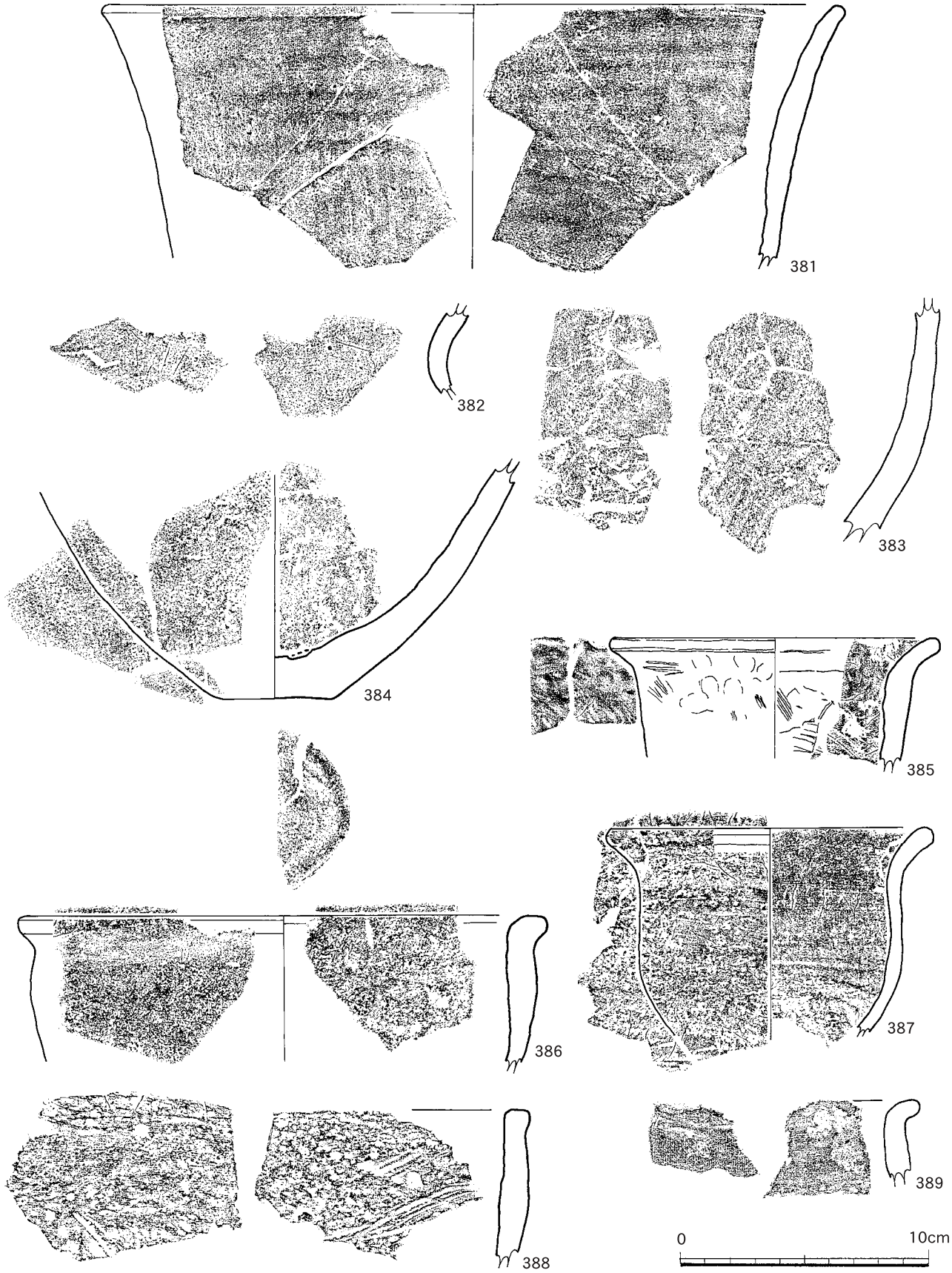
第52図　古代の出土遺物１



第53図　古代の出土遺物２



第54図　古代の出土遺物３



第55図　古代の出土遺物４

369は，胴部が直線的にのびて，口縁部は大きく外反している。調整は口縁部の内外面ともにヨコナデ，屈曲部より下位では外面が丁寧なハケナデ，内面はハケナデ後ナデ調整が施されている。

373は復元口径23.2㎝を測る。口縁部は大きく外反し，胴部は丸みを帯びながらのびて口縁部下で内湾している。内外器面ともに磨滅をうけているが，調整は外面がナデ整形で，内面は屈曲部から下位が右下がりのヘラケズリ整形後ナデ調整が施されている。

380は復元口径26.4㎝を測る。口縁部が僅かに外反する資料である。調整は磨滅を受けているが，外面はハケナデ，内面の屈曲部から下位はヘラケズリ後ナデ整形が施されている。

381は復元口径30.0㎝を測る。口縁部は直線的に立ち上がりながら僅かに外反している。器面は磨滅を受けているが，外面の上位はヨコナデ，下位は縦位のナデ整形で調整されている。

② 壺（第55図382～384）

古代の壺形土器は，口縁部から底部まで復元できた資料は皆無であった。頸部付近の破片，胴部下位から底部にかけての破片，底部破片などがみられた。各部位ともに図化に努めたが，その多くが細片のために382～384のみの資料を掲載した。

382は頸部付近の破片で，383胴部下位から底部付近にかけての破片，384は底部破片で，底部径5.0㎝を測る。ともに調整は磨滅や剥落を受けて鮮明さを欠くが，部分的に観察できる。

③ 鉢形土器（第55図385～389）

古代の鉢形土器は，口縁部から底部まで復元できた資料は皆無であった。口縁部破片，口縁部から胴部下位までの破片，口縁部から底部付近にかけての破片などがみられた。

385・386は口縁部の大きさから鉢形土器に分類したが，胎土や焼成から中世以降の可能性をも含んでいる資料である。

385は復元口径14.4㎝を測る。胴部がわずかに開きながらのびて，口縁部は外反している。調整は外面に指頭痕を残し，外面が横位及び斜位のナデ，内面ヘラケズリ後ナデ整形が施されている。386は復元口径21.4㎝を測り，僅かに外反する短い口縁部で破片である。調整は磨滅を受けているために鮮明さを欠くが，ナデ整形が施されている。

387は復元口径13.2㎝を測り，僅かに外反する口縁部破片である。調整は磨滅を受けているが，外面がヨコナデ，内面の口縁部付近はヨコナデ，屈曲部から下位は右下がりのヘラケズリ後ヨコナデ整形が施されている。

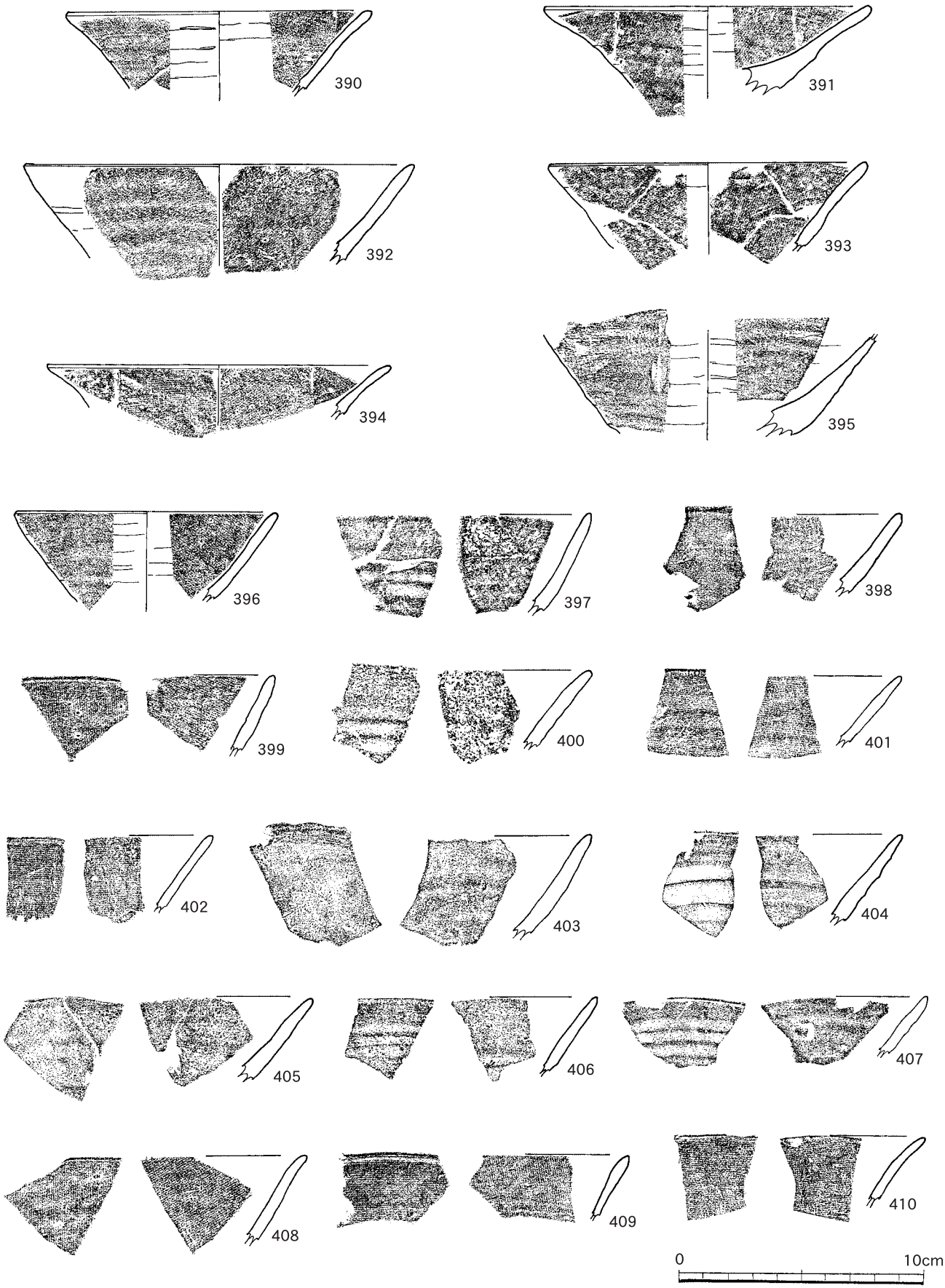
④ 坏（第56図～第58図390～438）

390～410は口縁部破片で，411～433は底部破片である。これらの資料のほとんどは磨滅しているために調整の痕跡に鮮明さを欠くものがほとんどである。口縁部破片のみの資料は，この項で取り扱った。

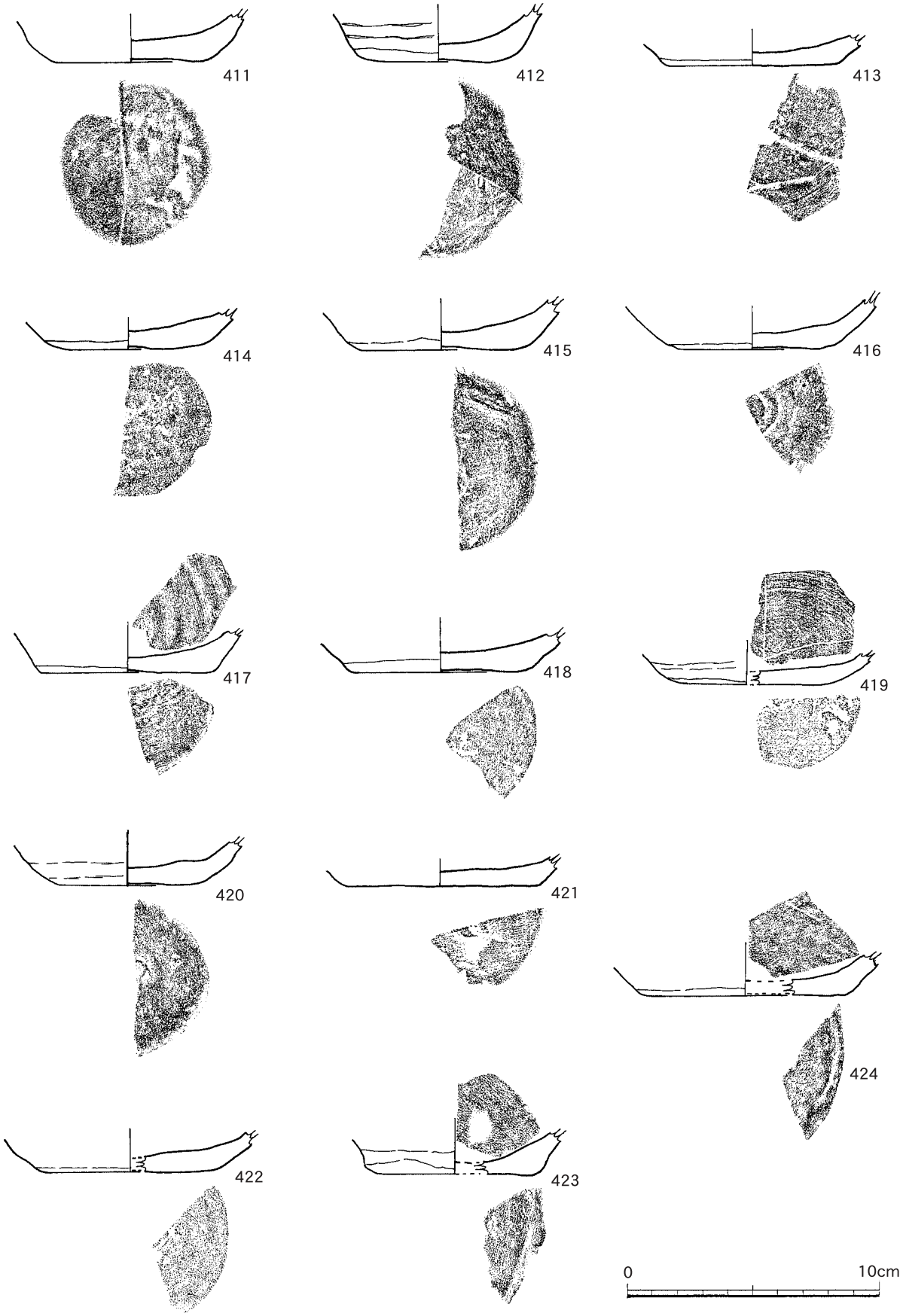
390～396は口縁部から底部付近までの破片で，体部は直線的立ち上がる資料で，395は僅かに口唇部を欠損している。ともに磨滅を受けているが，回転ナデ調整の痕跡を残している。

390の復元口径は13.4㎝，391の復元口径は16.8㎝，392の復元口径は16.2㎝，393の復元口径は13.2㎝，394の復元口径は14.1㎝，396の復元口径は10.8㎝を，それぞれ測る。

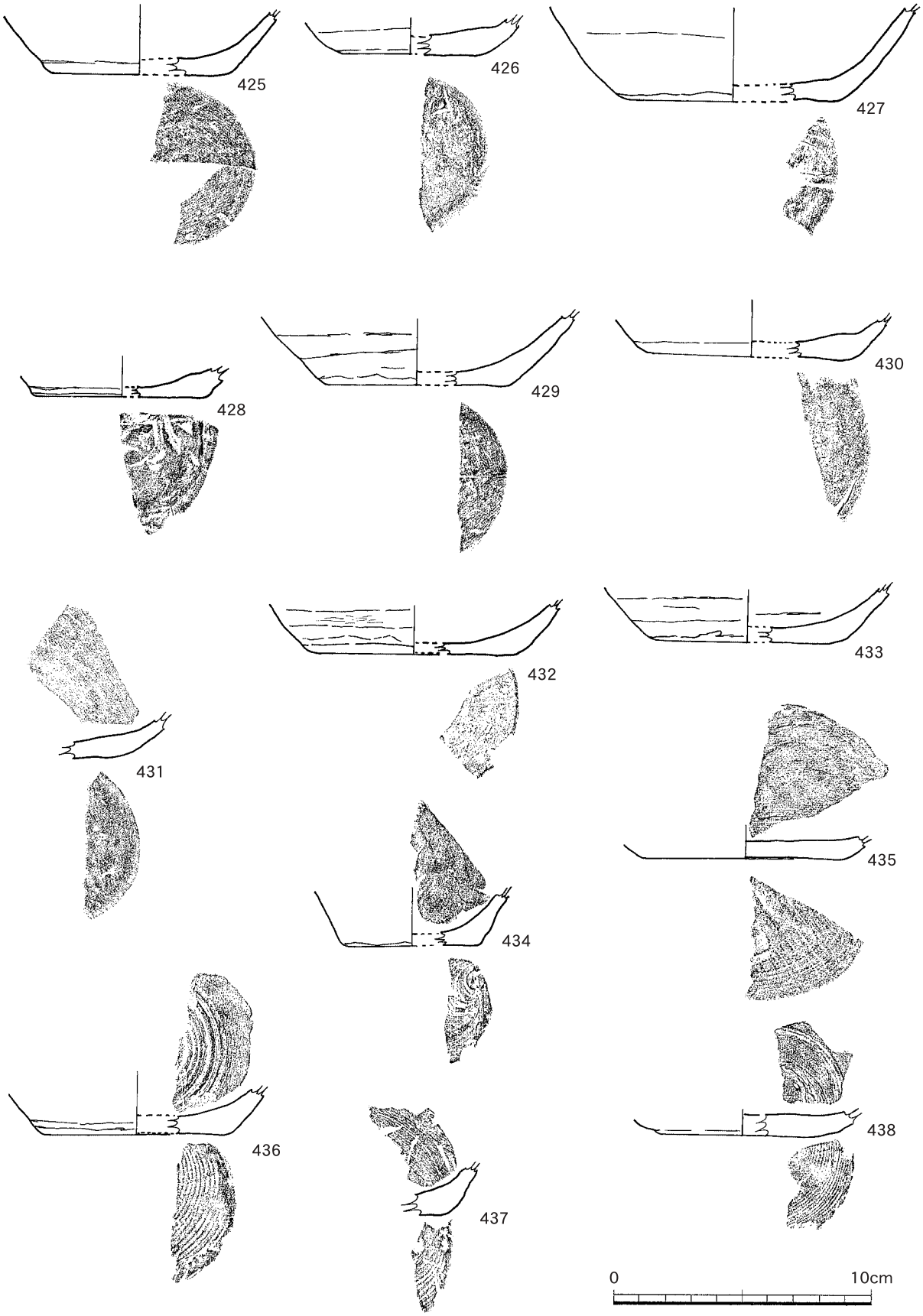
404・406・407の外面は回転ナデ調整の痕跡が顕著に残している資料で，404と407はナデとナデの間に鮮明な稜線をもつほど鮮明に調整が施されている。



第56図　古代の出土遺物５



第57図　古代の出土遺物６



第58図　古代の出土遺物７・中世の出土遺物１

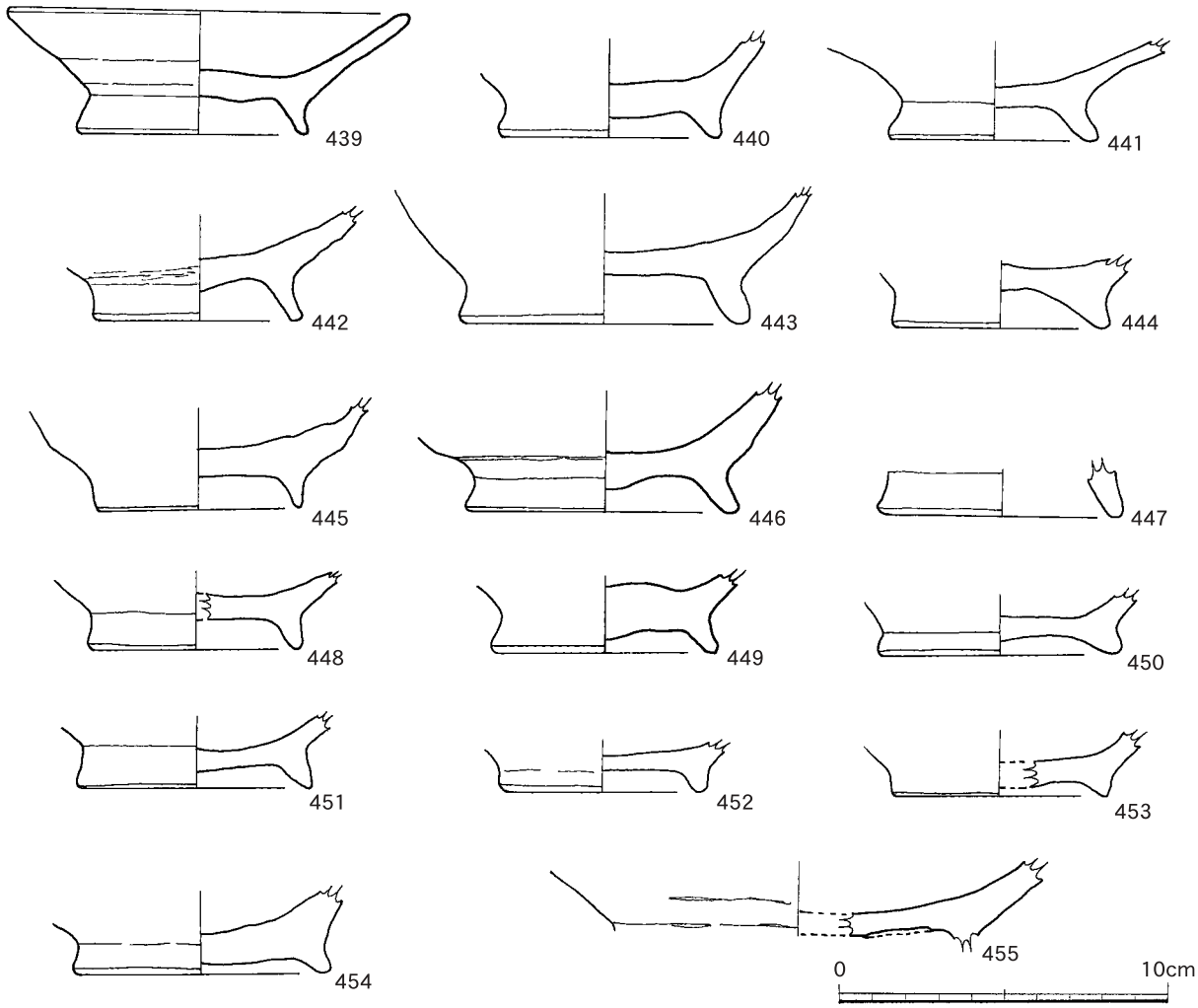
408は口縁部の内面に煤の付着を認めるもので，二次的な使用としての燈明皿への転用が考えられる。

411～433は底部破片で，底部が完形なものは411が１点のみであった。419・422～424以外の資料は復元完形品である。416・428は渦巻き状のヘラ切りの痕跡を残している資料で，ほとんどの資料が磨滅を受け，調整の痕跡は鮮明さを欠くものが多かった。復元底径ではあるが若干のあげ底となるような資料もみられる。

⑤　**椀・皿（第59図439～455）**

439～455など高台付を椀とした。しかし，439は高台付の皿で唯一の完形品である。

440・442・446・447・454は椀の底部で，底部が完形のもので，他の資料は底部径が復元できたものである。440の底径は6.8㎝，442は6.4㎝，446は8.2㎝，447は7.4㎝，454は7.8㎝を，それぞれ測る。椀の体部からの立ち上がりは破片のために定かでないが，体部より直線的に立ち上がるものと比較的曲線状に立ち上がるものや緩いものもが想定される。



第59図　古代の出土遺物８

439は口縁部径12.4㎝，器高4.7㎝，底径7.6㎝を測る皿である。体部は口縁部に向かい直線的に立ち上がるもので，高台は面をもち，若干内側から外側に傾斜している。脆弱で保存状況は不良で磨滅を受けているが，横位のハケ目調整痕を残している。内面には暗赤茶褐色の塗布を一部に残し，胎土には多くの赤色粒を含む。体部と高台には，器面両側に部分的であるが，煤の付着を認める。

446・451は底部破片で，高台や体部の一部に煤の付着を認め，439とともに二次的な使用としての燈明皿への転用が考えられる資料である。

439・441～446は比較的に高台が高いものである。

⑥　内黒土師器（第60～第61図456～491）

456～491は内黒土師器の破片である。456～475は口縁部破片で，476～481は口縁部や底部を欠損した体部破片，482～491は底部破片である。482～490は椀の底部破片で，491は坏の底部破片である。これらの資料のほとんどは磨滅しているために調整の痕跡に鮮明さを欠くものがほとんどである。

456～459，463・475は復元口径が計測できる口縁部破片である。456の復元口径は，17.2㎝，457は17.2㎝，458は11.8㎝，459は19.0㎝，463は12.2㎝，475は14.0㎝を測る。

482～488，490は椀の底部破片，491は坏の底部破片である。482の復元底径は，7.8㎝，483は，8.1㎝，484は6.9㎝，485は7.8㎝，486は7.6㎝，487は7.6㎝，488は8.2㎝，490は8.0㎝を，それぞれ測る。

⑦　須恵器（第62図～第65図492～538）

492～505は壺の破片である。

492・493は口縁部破片で，492は口縁端部を四角におさめ，外面は口縁部から頸部がヨコナデ，頸部下端はタタキ調整ののちナデ，内面はヨコナデによる調整である。493は，内外面ともにヨコナデで調整され，口縁端部は丸くおさめ，口縁部の下方にはにぶい突帯が付くものである。

494～498は肩部破片で，499～505は胴部破片である。

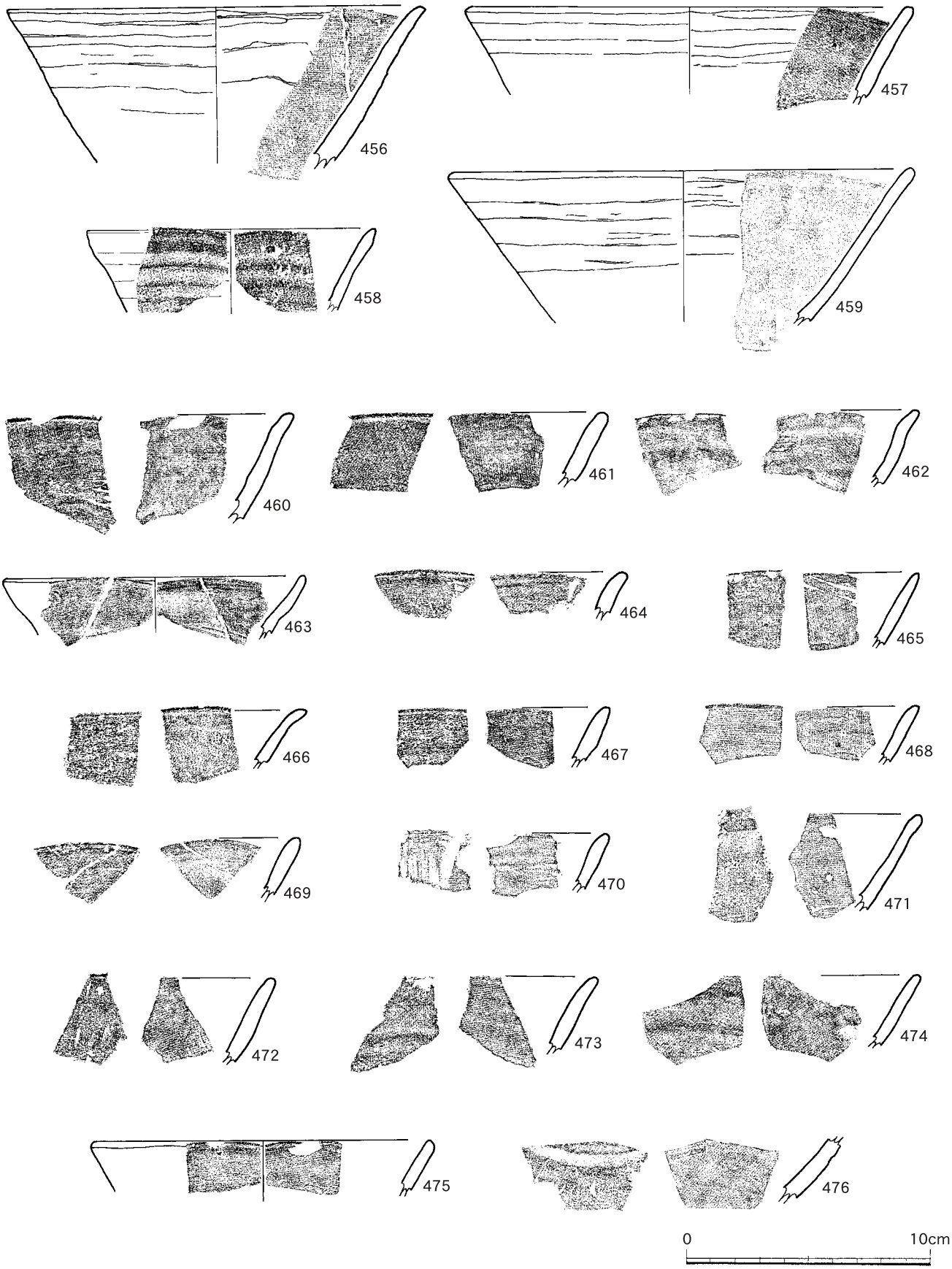
506～538は甕の破片である。

506～510の外面は細い格子タタキ目で，506以外の内面は同心円文のみが残ることから肩部破片が考えられる。506は内面が同心円文ののち平行タタキ目が残ることから胴部破片である。

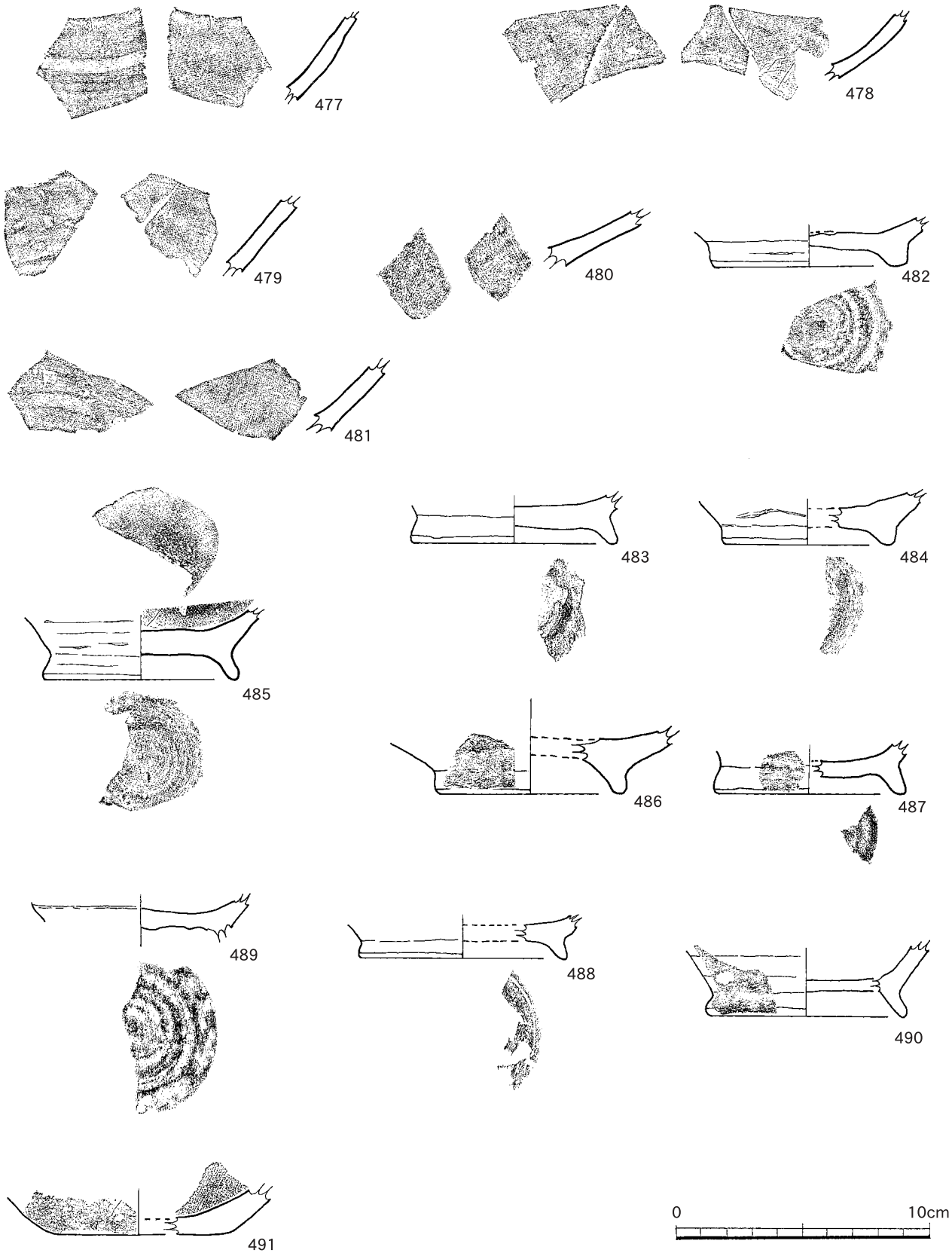
511は外面が平行タタキ目，内面が同心円文ののちに平行タタキ目の施文があり胴部破片が考えられる。512～518は外面が平行タタキ目，内面には同心円文が残ることから肩部破片と考えられる。

519・520は，外面が格子タタキ目，内面は同心円文で肩部破片である。521は外面が平行タタキ目，内面は同心円文ののちに平行タタキ目で，522の外面には格子タタキ目，内面は同心円文ののちに平行タタキ目が施され，胴部破片が考えられる。

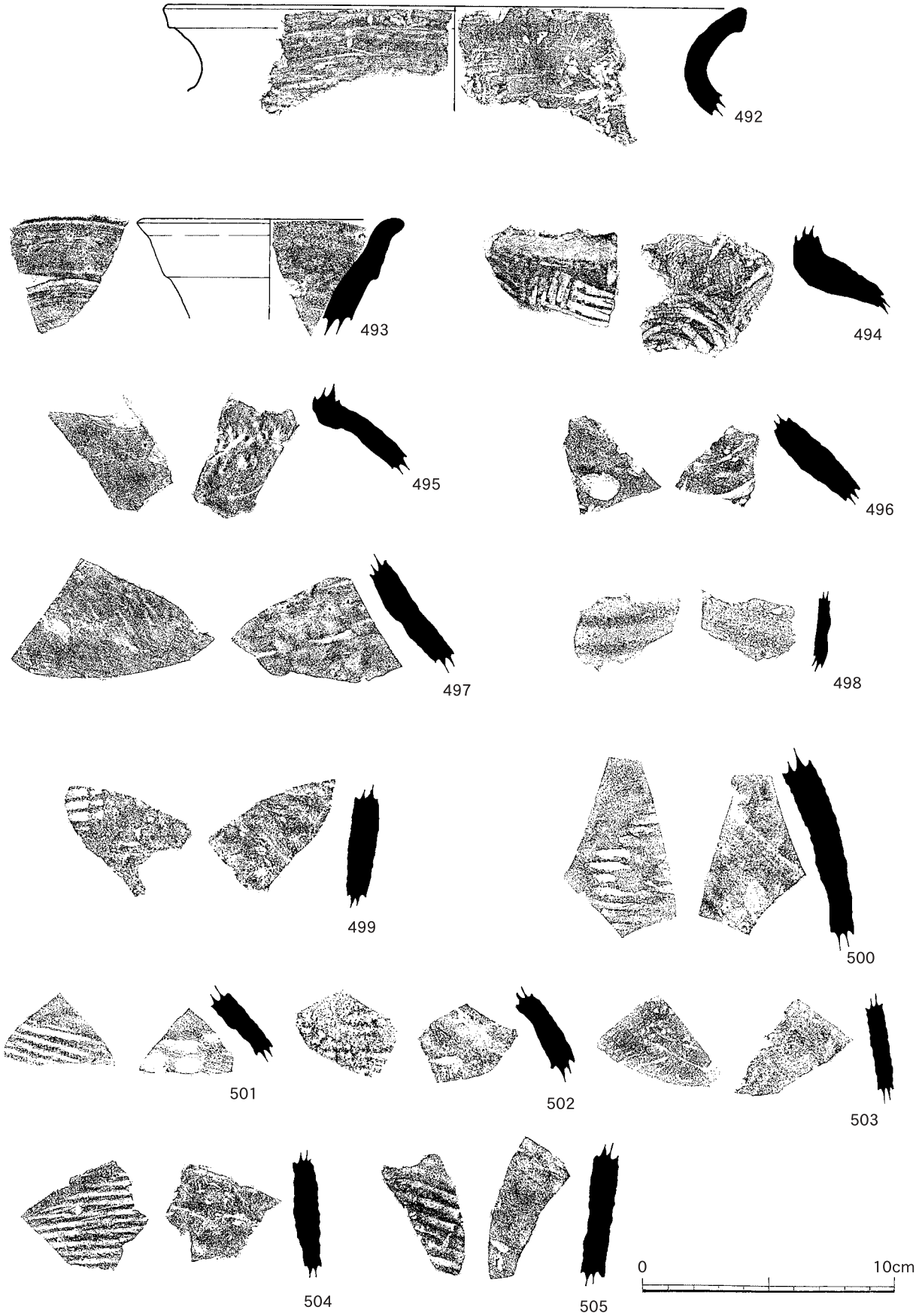
523～525・528～538は，内外面ともに平行タタキ目，526・527は外面が格子タタキ目，内面が平行タタキ目が残り，胴部破片が考えられる。



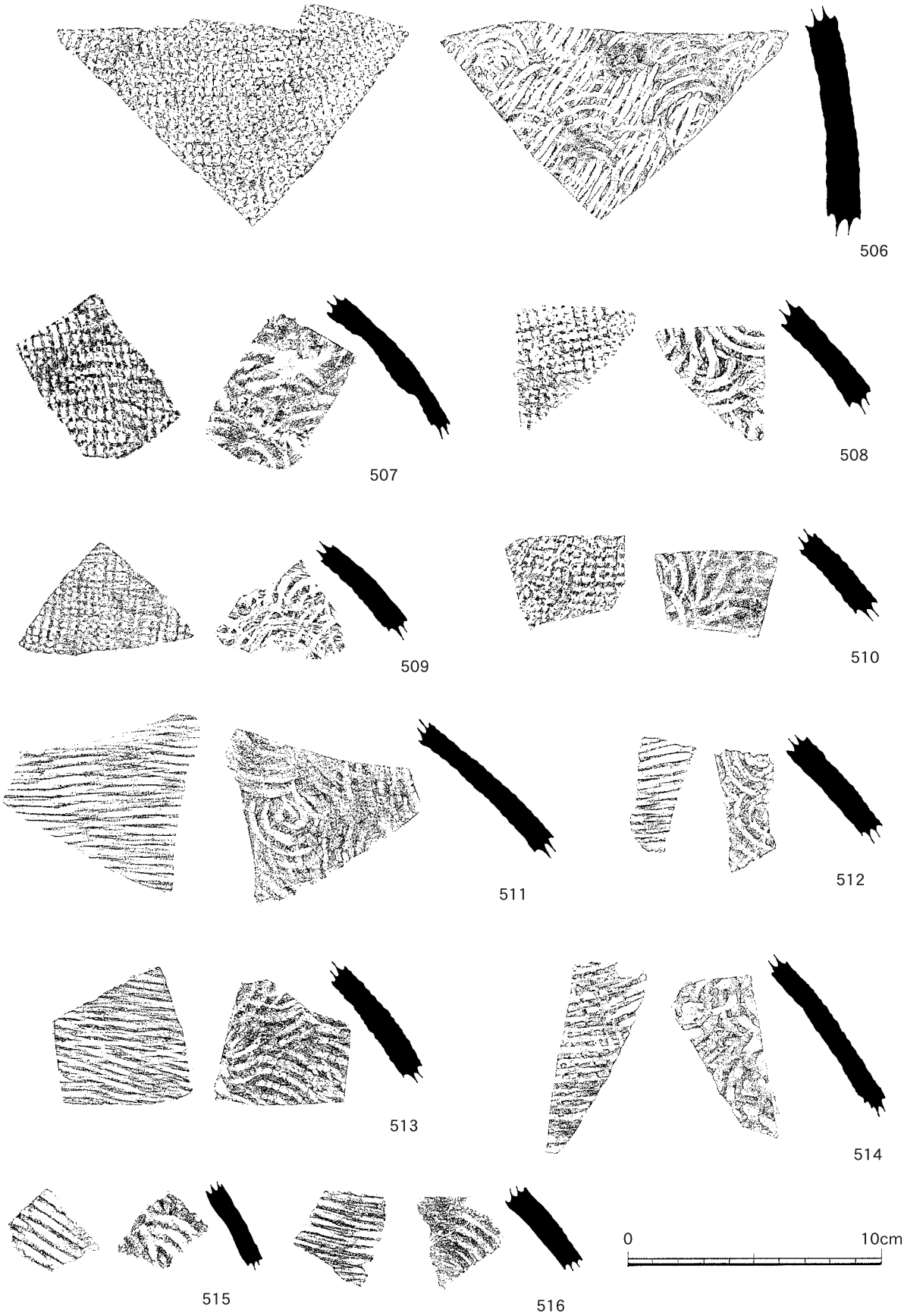
第60図　古代の出土遺物９



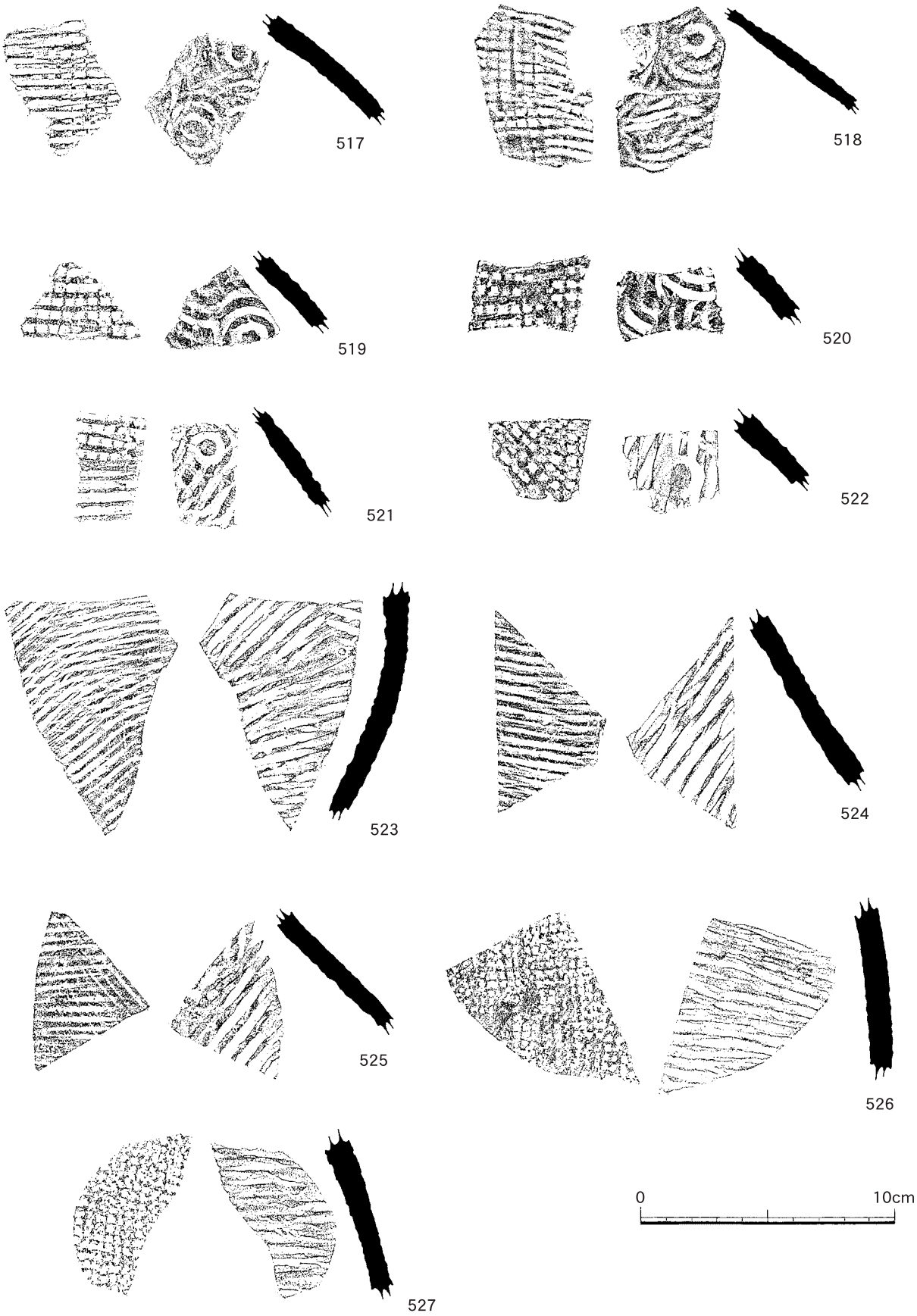
第61図　古代の出土遺物10



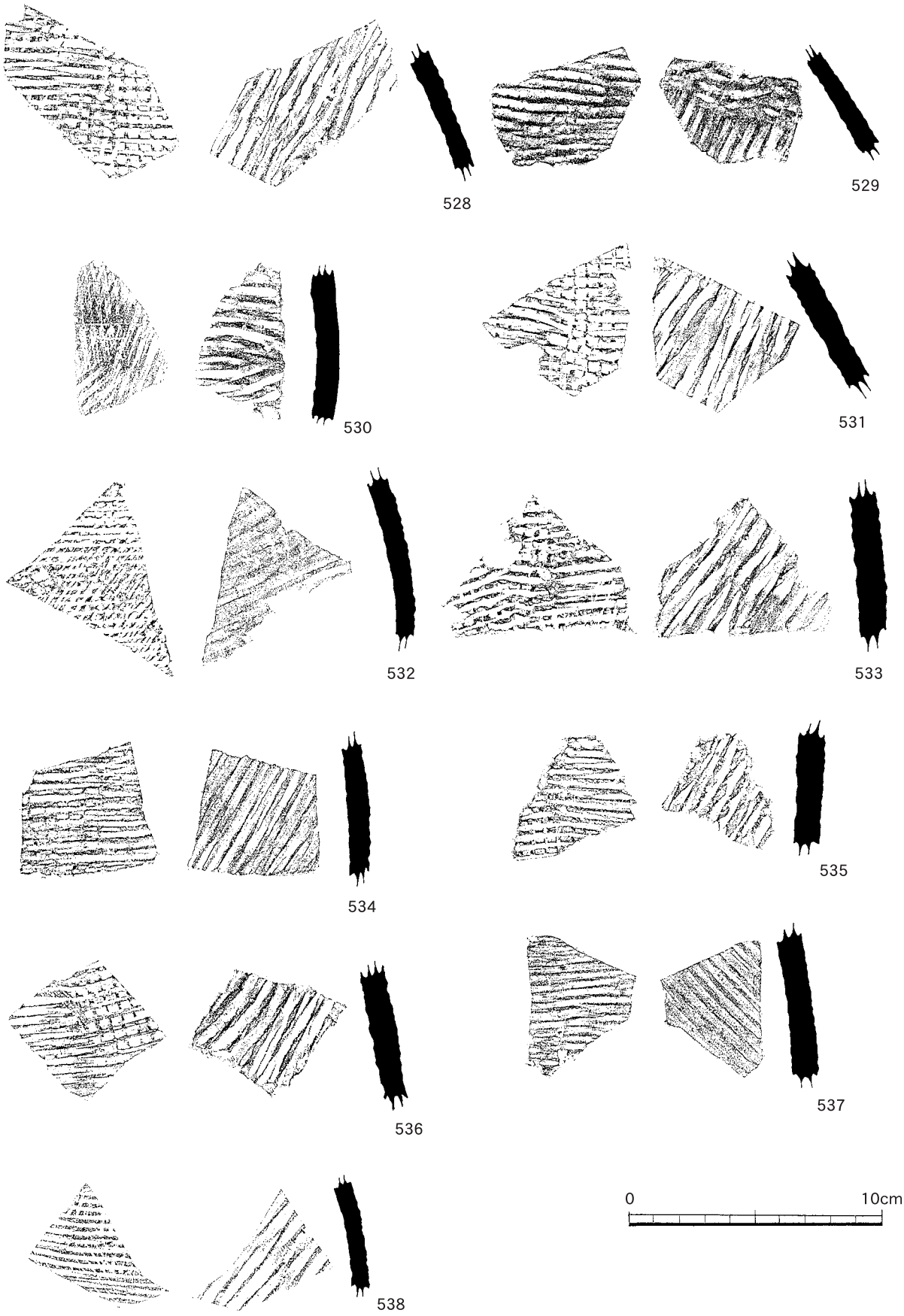
第62図　古代の出土遺物11



第63図　古代の出土遺物12



第64図　古代の出土遺物13



第65図　古代の出土遺物14

⑧　土錘（第66図539～552）

539～552は土錘である。539～547は双孔棒状土錘で，548～552は管状土錘である。これらの土錘は，土坑４出土の１点を含めて15点が出土し，539以外はすべて欠損品である。

双孔棒状土錘は，棒状粘土の両端に穿孔を持つもので，両面より３～５㎜の穿孔が施されいる。体部の下端や体部片側から下端などを欠損したものが多い。

539は唯一の完形品で，両端は面取りされ，体部は若干歪の形状を呈し，全体的に磨滅を受け調整痕は指頭の痕跡を残しているのみである。色調は赤茶褐色が塗布してあるが，一部に残存しているのが確認できる。

540・541は体部の真ん中から下端を欠損し，542・545・547は体部片側と体部真ん中から下端を欠損している。544は上端穿孔の一部を残した端部と下端部を欠損し，546は上端の穿孔の一部から上端と体部のほとんどを欠損している。ともに，磨滅を受けているために調整痕は不明である。

管状土錘は，円筒状を呈する長軸方向に孔を穿ったもので，平面形は中央部が膨らむ長円形あるいは楕円形を呈し，長軸を中心に穿孔し管状に仕上げているものである。

本遺跡のものは４点が出土し，ともに平面形や断面形を異にした形状である。平面形の孔の大きさは，548は８㎜，549は３㎜，551は10㎜，552は９㎜を，それぞれ測る。549・551は体部の短いもので，下端の一部を破損しているのみである。ともに体部の短い土錘で，形態が大中小の３種類がある。

⑶　中世以降の調査（第58図434～438，第67図～第70図）

中世以降の調査は，主にⅠ層及びⅡ層より土師器の坏・青磁の皿・坏・碗・盤をはじめ，白磁の碗，皿，染付の碗，陶器のこね鉢，摺鉢，須恵器の壺，甕などの出土があった。

特に，本遺跡から出土した中世以降の遺物は細片が多く図化するに困難であった。特徴を示す資料は図化に努めたが，個々の資料の傾きについては疑問が残る。

434～438は，中世の土師器の底部破片である。紙面の都合で第58図に掲載した。

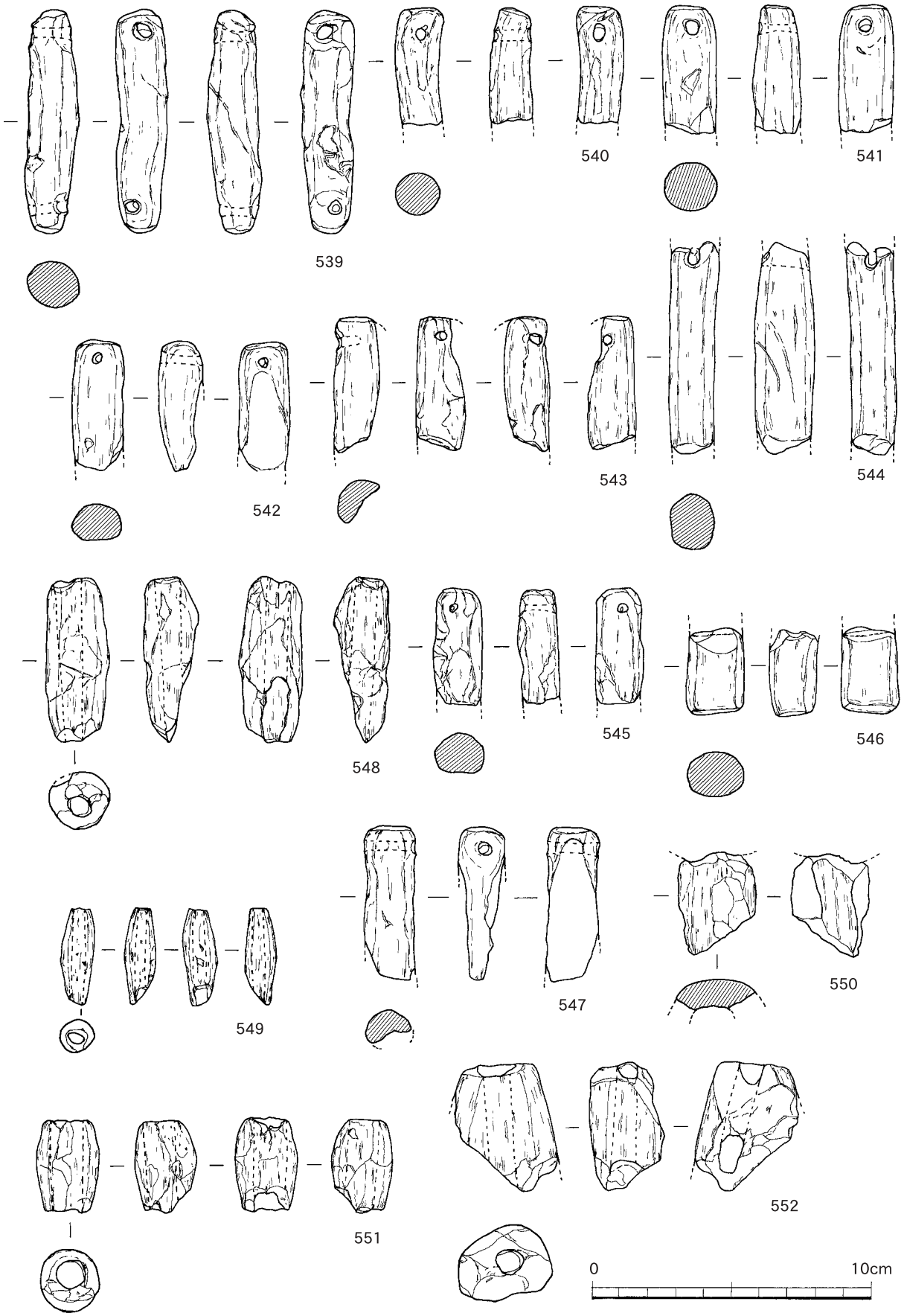
553～566は青磁の坏・皿・碗などの口縁部や底部破片，567～572は白磁の底部破片である。573・574は染付の底部破片，575～583はこね鉢や摺鉢の口縁部・胴部・底部付近の破片，584・585は中世の須恵器で，肩部や胴部破片である。586は常滑焼で，587は備前焼である。590～606は薩摩焼などの瓶・甕の口縁部破片やメンコなどで，607・608はるつぼ，609は甕，610は古銭である。

①　土師器坏（第58図434～438）

434～438は，土師器の底部破片で，糸切りの痕跡が鮮明に残つている資料である。434の復元底径は5.2㎝，435の復元底径は7.2㎝，436の復元底径は6.9㎝，438の復元底径は6.6㎝を，それぞれ測る。

②　青磁（第67図553～565）

553～565は青磁の破片である。553は龍泉窯の皿で外反する口縁部破片，554は龍泉窯系青磁で坏Ⅲ類の口縁部破片，555・556は龍泉窯の皿の口縁部破片，557は龍泉窯の盤で直行する口縁部破片である。561・565は龍泉窯の青磁碗Ⅲ類，562は同窯の青磁碗Ⅱ類，563・564は龍泉窯系の青磁碗Ⅰ類の口縁部や底部破片である。



第66図　古代の出土遺物15

③　白磁（第67図566～572）

566～572は白磁の碗や小形碗などの底部破片である。566は白磁碗Ⅷ類の底部破片，567は高台の４か所に抉りが入っているものと考えられる底部破片で，見込みには貝目跡が確認できる資料である。森田分類によれば白磁Ｄ類に比定されるものである。568は白磁小碗の底部破片，571は白磁皿の底部破片，572は白磁の皿Ⅳ類の口禿げ皿の底部で，底径6.2㎝を測る。

④　染付（第67図573・574）

573・574は染付で，573は底径4.8㎝，574は底径4.6㎝を測る。ともに漳州窯碗の青花の底部破片である。

⑤　陶器類（第68図575～583）

575～577はこね鉢の口縁部破片で，578～583は摺鉢である。578・579は摺鉢の口縁部破片，580・581は摺鉢の胴部付近の破片，582・583は摺鉢の底部付近の破片である。

575は口唇部が押圧による凹みをもつもので，576や577は口唇端部が口縁部外側へ張り出す口縁部の破片である。

⑥　須恵器（第68図584・585）

584・585は須恵器の破片である。584は壺の肩部で，外面は山形のタタキ目による調整が施されている。585は甕の胴部付の破片で，外面は山形のタタキ目，内面はハケ目調整で整形されている。

⑦　陶磁器（第68図586・587）

586は常滑焼の甕の口縁部破片，587は備前焼の壺の肩部破片である。

⑧　近世陶器（第69図588～598）

588～598は薩摩焼の破片である。

588・589は19Ｃ代の土瓶の蓋で，590・591は薩摩焼の破片を利用したメンコである。

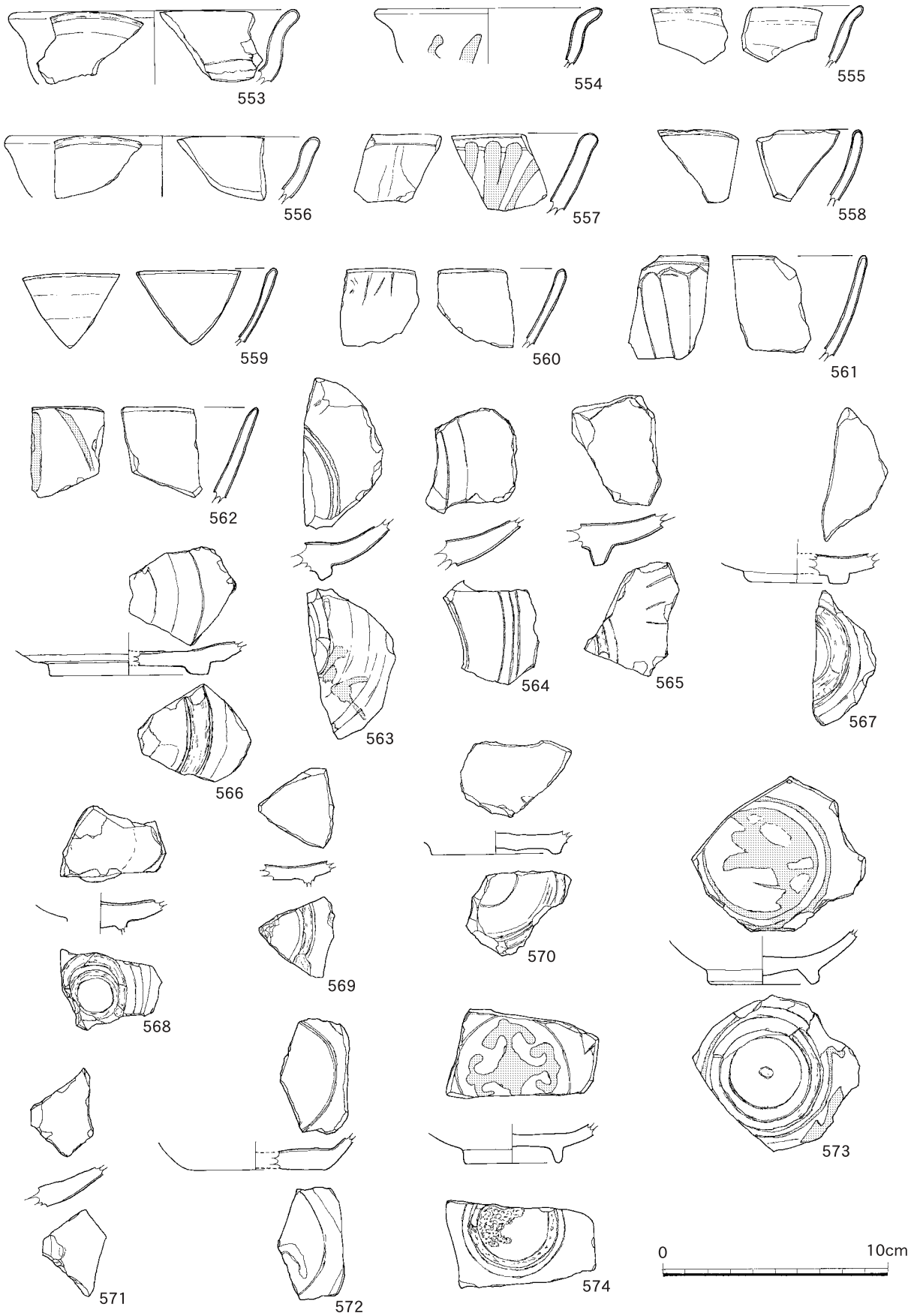
592～597は甕の口縁部破片で，592・593は口縁部の上面に貝目の痕跡が確認できる破片である。598は胴部下位付近が考えられる破片である。

⑨　その他（第70図599～604）

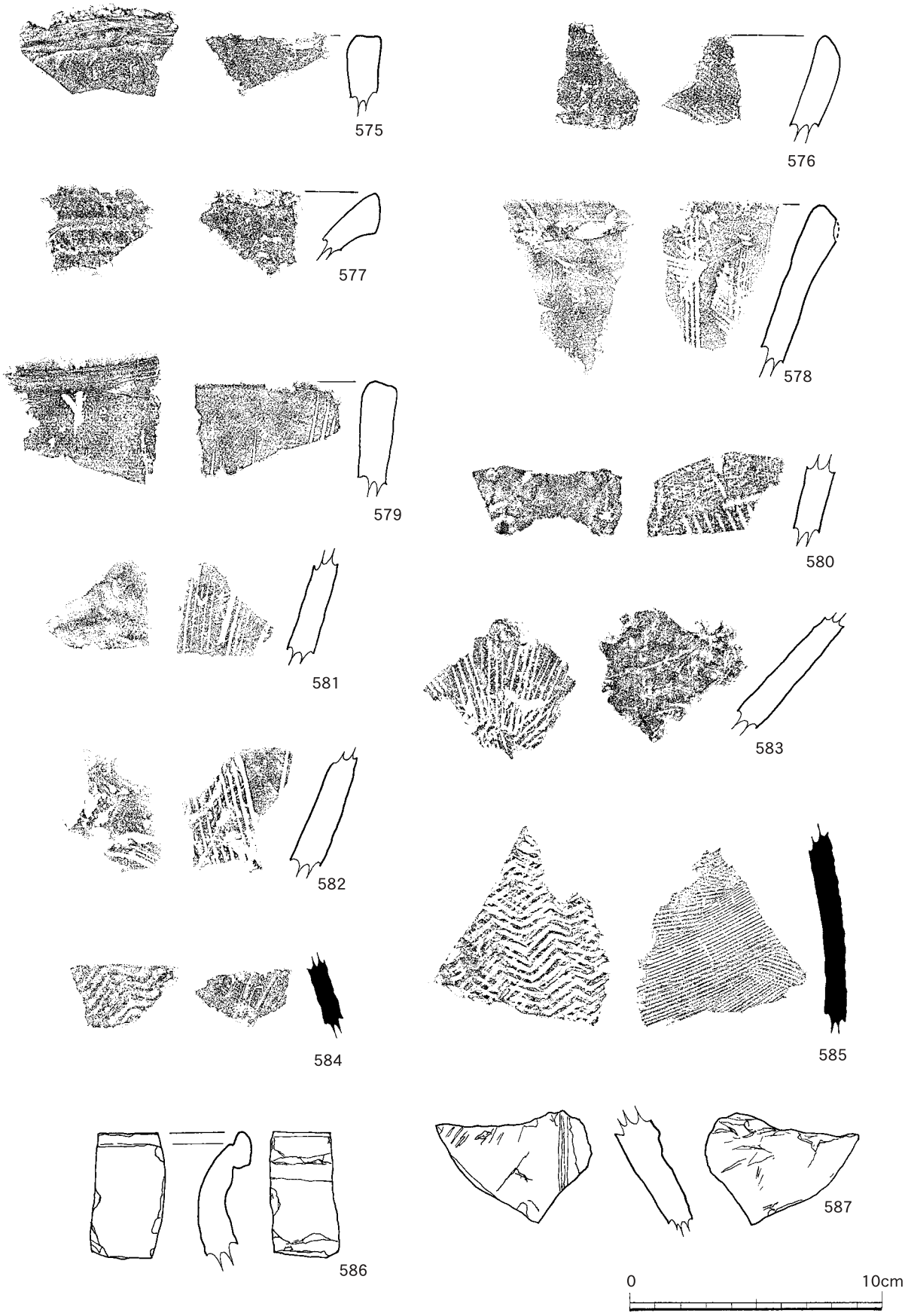
601・602はるつぼの口縁部破片で，602は復元口径8.4㎝を測る。このるつぼの表面の一部に付着物が確認でき，付着物質の材質の分析を南の縄文調査室に依頼した。（分析・同定結果については第Ⅴ章調査のデータ内に所収した。

604は寛永通宝の古銭である。603は瓦質土器で，鉢の口縁部破片である。599・600は底部破片である。

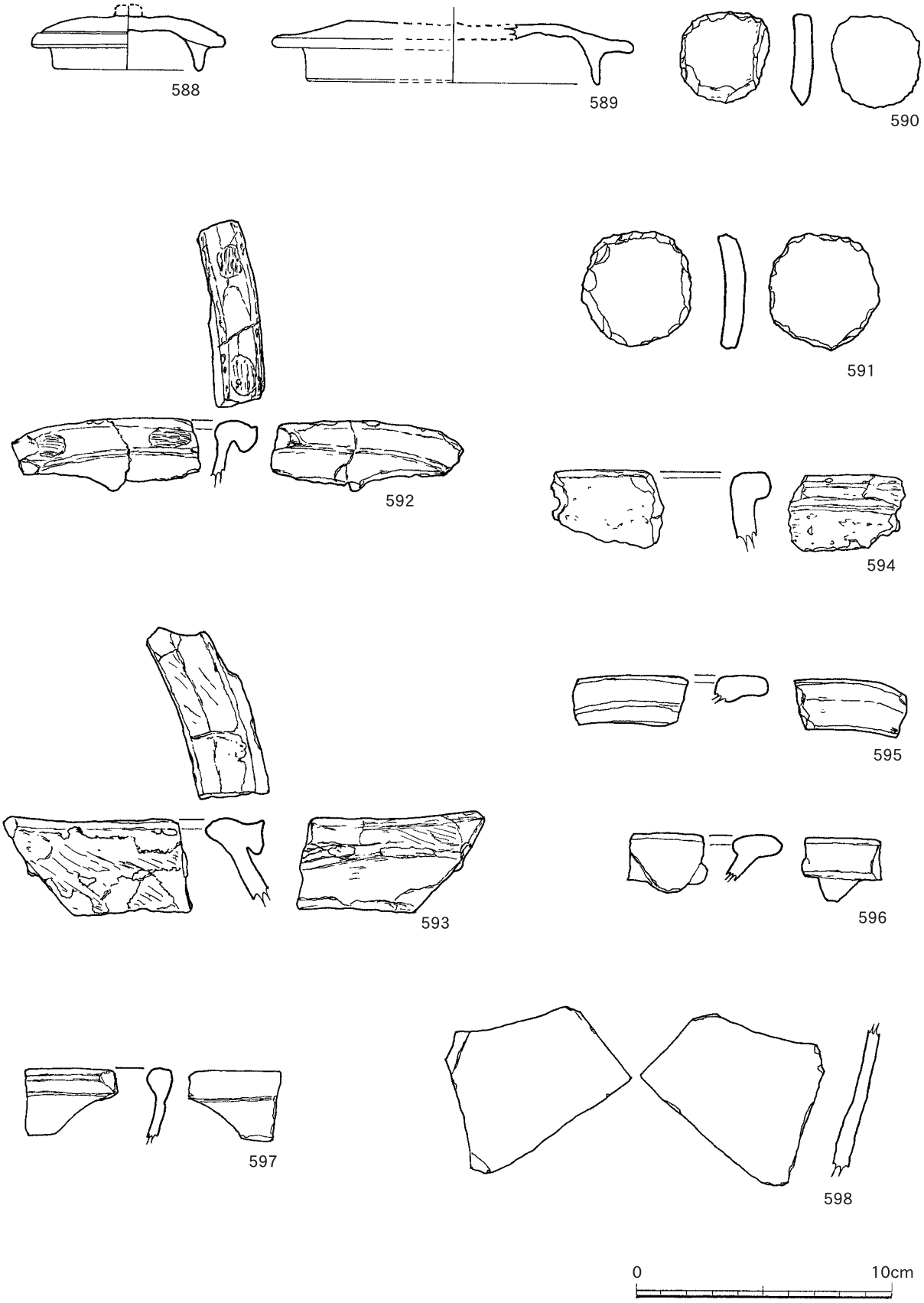
599は復元底径11.0㎝，600は復元底径11.6㎝を測り，器種は不明である。



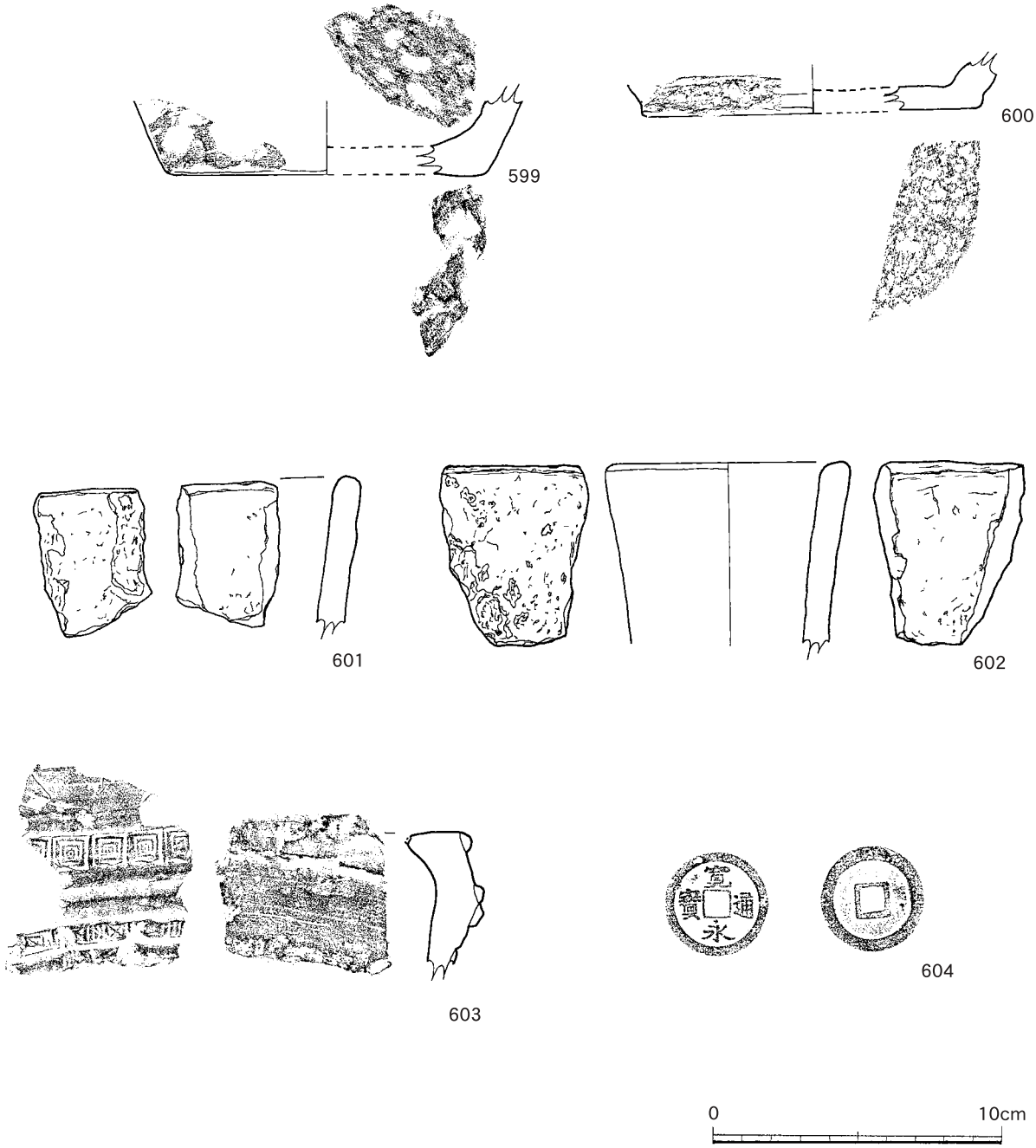
第67図　中世の出土遺物１



第68図　中世の出土遺物２

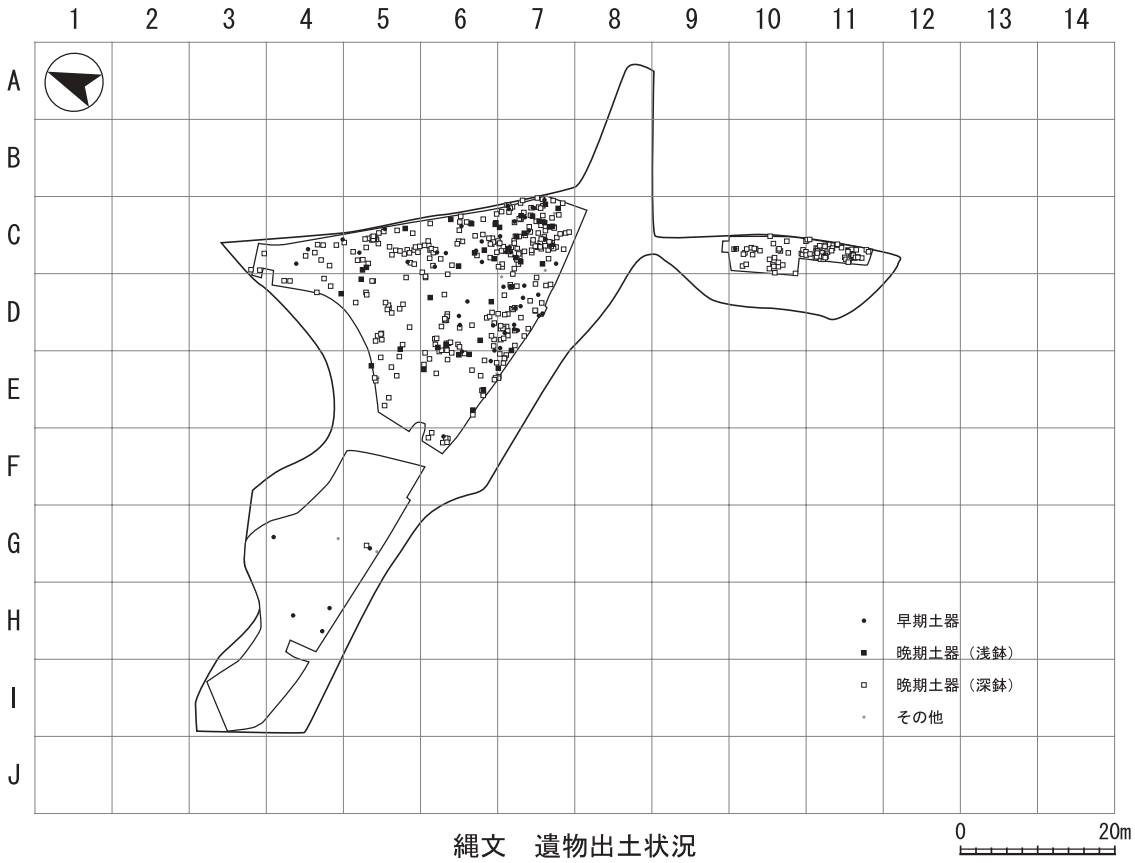


第69図　近世の出土遺物１

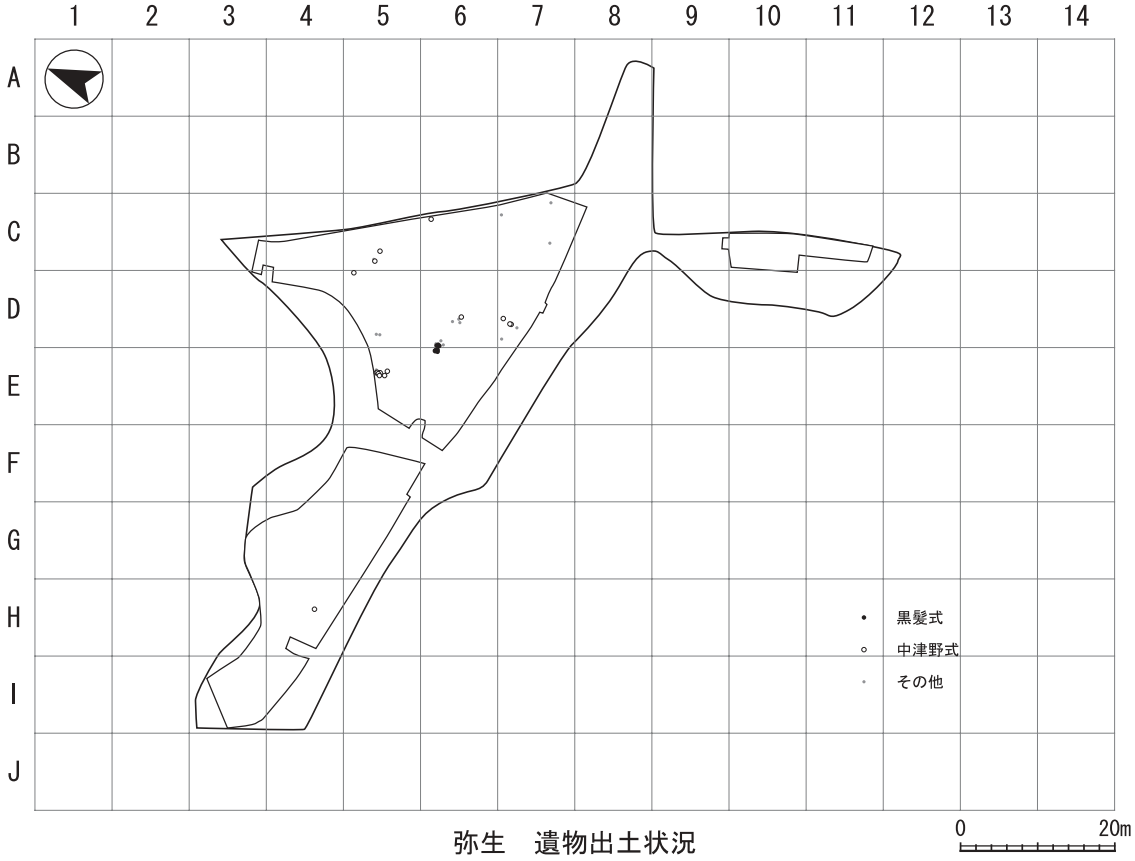


第70図　近世の出土遺物２

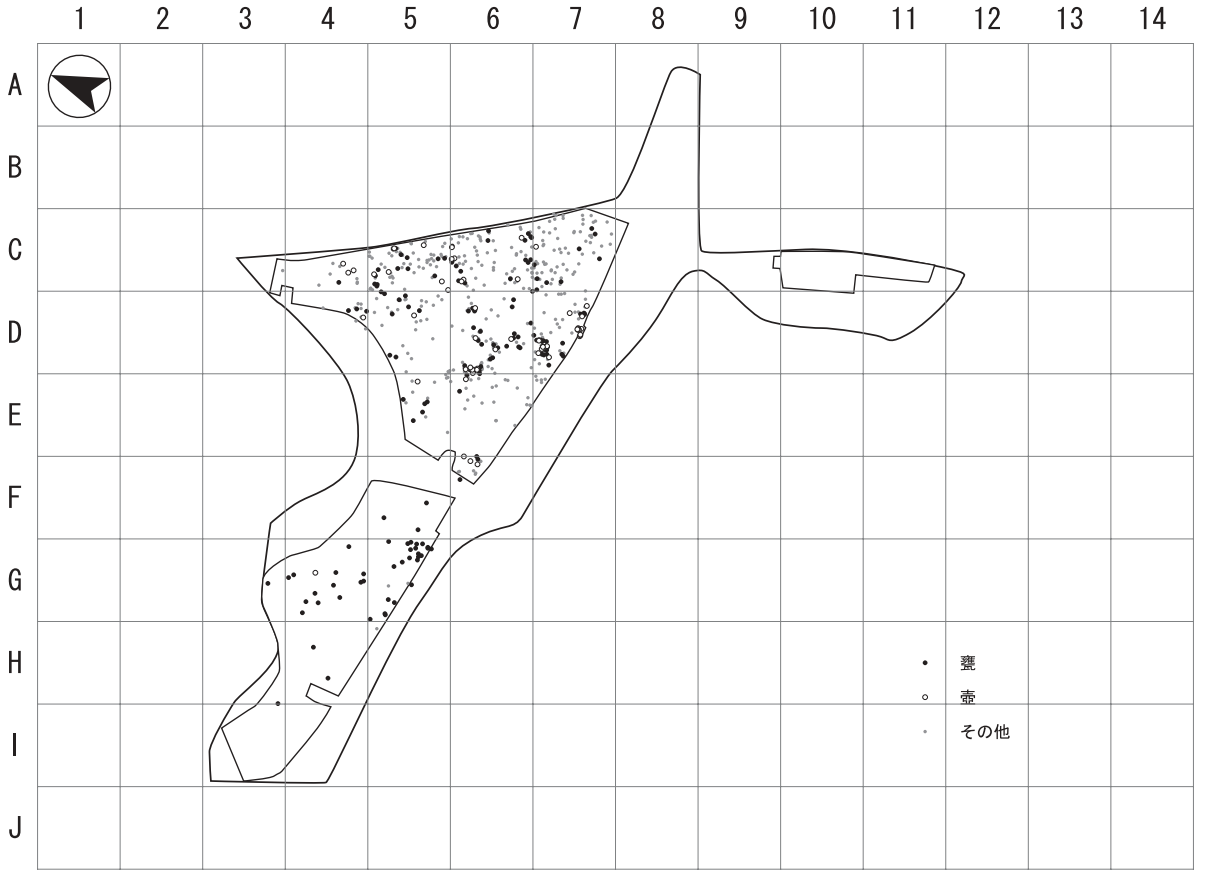
第Ⅴ章　調査データ



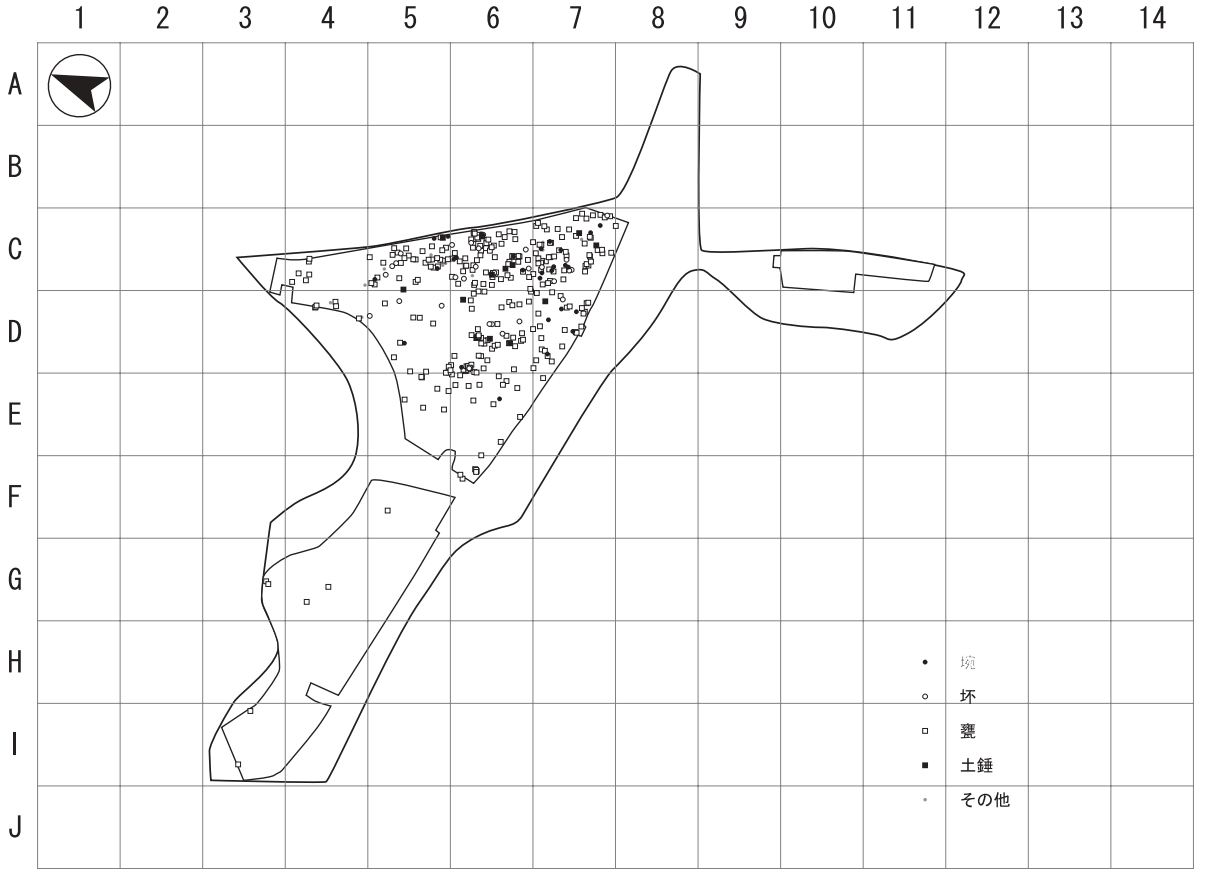
縄文　遺物出土状況



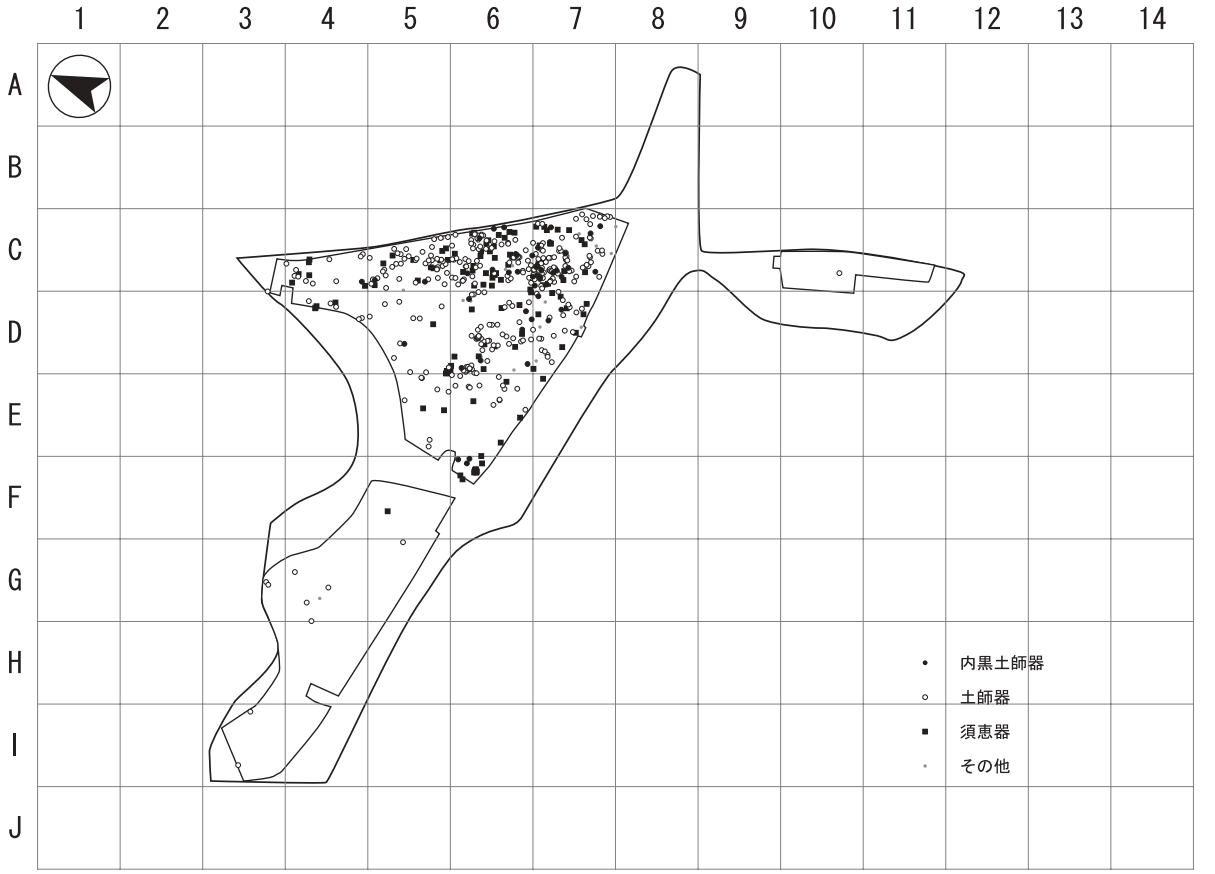
弥生　遺物出土状況



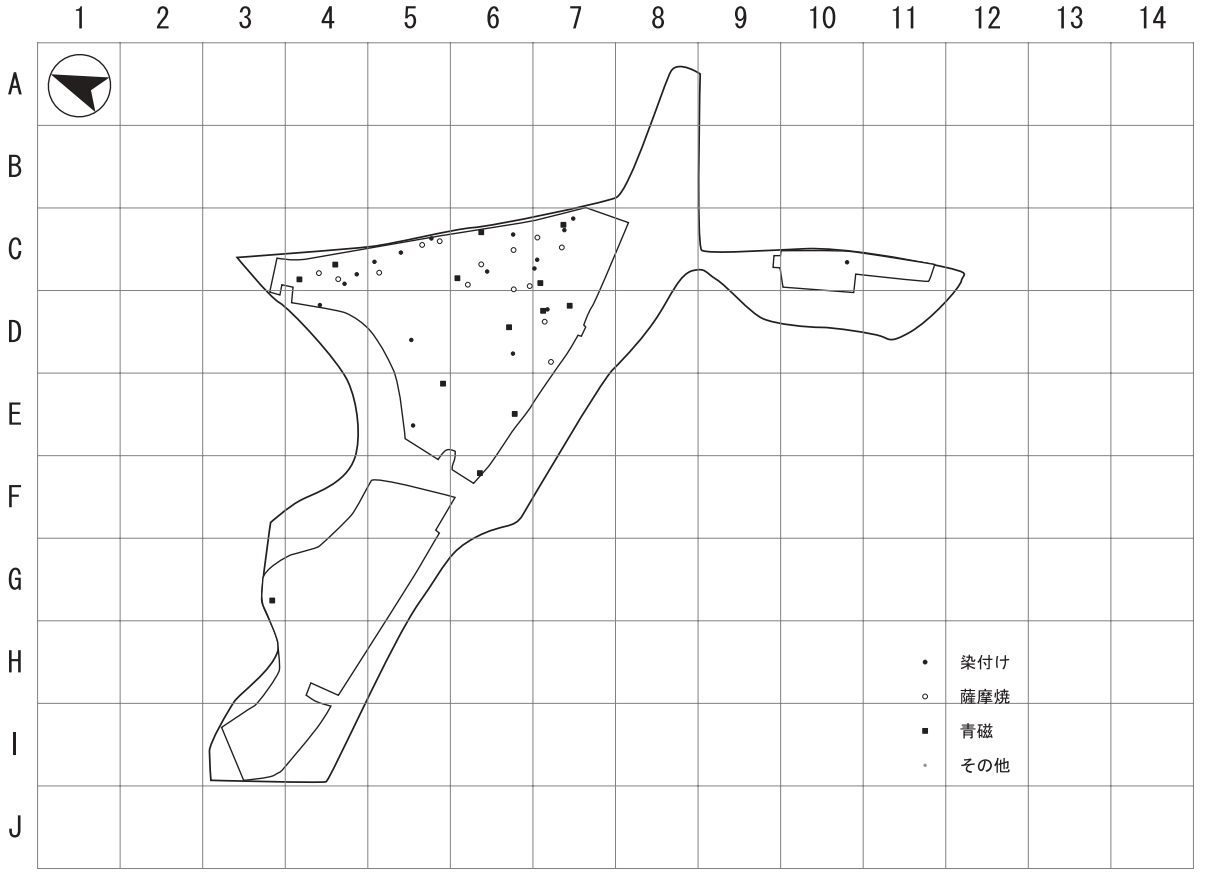
古墳　遺物出土状況



古代　遺物出土状況(1)



古代　遺物出土状況(2)



中・近世　遺物出土状況

第３表　市堀遺跡出土遺物観察表１

図番	番号	層	型式等	器種	部位	調整・文様 内	調整・文様 外	色調 内	色調 外	遺物番号	胎土 状態	胎土 石英	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 角閃石	胎土 茶粒	胎土 軽石	胎土 その他	焼成	備考
11	1		不明	深鉢	胴部	ケズリのちナデ	貝殻条痕	黒褐色	暗灰黄	91		○	○		○		○		良	集石内
13	2	Ⅲ上	志風頭段階	深鉢	口縁	ナデ	貝殻条痕・貝殻刺突文	オリーブ黒	にぶい黄橙	2180			○	○			○			
	3	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	口縁	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	にぶい黄褐	にぶい褐	2301		○					○			
	4	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	口縁	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2545					○					
	5	Ⅳ	前平式	深鉢	口縁	ケズリのちナデ	貝殻条痕	明黄褐	にぶい黄褐	A－38		○		○						
	6	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	暗灰黄	黄褐	2546			○	○						
	7	Ⅳ上	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	オリーブ黒	オリーブ黒	2612		○		○						
	8	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	にぶい黄褐	にぶい黄褐色	2377			○							
	9	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	にぶい褐	黒褐	2339		○		○		○		砂粒		
	10	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	暗灰褐	にぶい黄褐	2190		○	○				○			
	11	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	灰黄褐	にぶい黄褐	2301		○	○							
	12	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	にぶい黄褐	明褐	2324		○	○		○					
	13	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	明褐	褐	一括		○					○			
	14	Ⅲ上	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・沈線文	明褐	褐	1704		○	○	○			○			
	15	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・沈線文	灰黄褐	にぶい黄褐	2351		○			○				良	
	16	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・沈線文	黄褐	オリーブ褐	2209				○		○				
14	17	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・沈線文	灰黄褐	橙	126		○	○		○				良	
	18	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2071		○	○		○					
	19	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2307		○		○						
	20	Ⅳ上	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	黄褐	黒褐	不明		○		○						
	21	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	黄褐	黄褐	2524		○	○	○					良	
	22	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	にぶい黄褐	にぶい褐	2689		○	○	○					良	
	23	Ⅲ	志風頭段階	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕・貝殻刺突文	にぶい黄褐	にぶい褐	2689		○	○	○					良	
	24	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	黒褐	黄褐	127		○	○				◎			
	25	Ⅲ上	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	黒褐	明褐	1121		○			○				良	
	26	Ⅳ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	にぶい黄褐	褐	1465			○					火山ガラス		
	27	Ⅲ上	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	黒褐	明褐	2266 1253		○	○	○	○	○				
	28	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい褐	108		○			○					
	29	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい褐	2691		○	○		◎				良	
	30	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	橙	橙	1453		○	○	○			○			
	31	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	にぶい黄橙	橙	2615		○	○	○						32と同一個体
	32	Ⅳ上	前平式	深鉢	底部	ケズリ	貝殻条痕	にぶい黄橙	橙	2697		○	○	○	○					31と同一個体
15	33	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリのちナデ	貝殻条痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2281		○		○						
	34	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2361 857		○		○						
	35	Ⅲ上	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1397		○		○						
	36	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	黒褐	褐灰	2410		○								
	37	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリのちナデ	貝殻条痕	黒褐	橙	1150		○	○							
	38	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリのちナデ	貝殻条痕	にぶい黄褐	明褐	2327 2727		○		○						
	39	Ⅱ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	明褐	黄褐	1897			○		○					
	40	Ⅲ	前平式	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻条痕	橙	にぶい褐	1016		○	○	○		○	○			
	41	Ⅲ	前平式	深鉢	底部	ヘラケズリ	貝殻条痕	にぶい黄	にぶい黄橙	2638		○		○				砂粒		
	42	Ⅲ	前平式	深鉢	底部	ヘラケズリ	貝殻条痕のちナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2340		○	○	○						
	43	Ⅲ	前平式	深鉢	底部	ナデ	貝殻条痕	にぶい黄褐	褐	2602 2495		○	○	○						
16	44	Ⅲ		深鉢	口縁	ナデ	ナデ・沈線文	にぶい黄橙	暗灰黄	1319 2527			○	○		○				73と同一個体
	45	不明		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	表採		○	○	○	○	○				
	46	Ⅲ		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	2609		○		○						
	47	Ⅲ		鉢形	口縁	ナデ	ナデ	褐	黒褐	2544		○	○							
	48	Ⅰ		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄褐	一括				○	○	○				
	49	Ⅲ		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2617		○		○	○			○		
	50	Ⅲ上		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	褐	褐	1421		○	○	○						
	51	Ⅲ Ⅲ上		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	灰黄褐	黄灰	2212 2290		○	○	○		○				
	52	Ⅲ上		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	黄灰	にぶい黄褐	1891		○	○	○		○				
	53	Ⅲ		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	にぶい褐	暗褐	1561		○		○			○	金雲母		
	54	Ⅳ上		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2532		○	○		○	○				穿孔あり
	55	Ⅱ		深鉢	口縁	ヘラミガキのちナデ	ナデ	にぶい黄褐	オリーブ褐	1801				○	○					
	56	Ⅲ上		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	1825		○		○	○					
	57	Ⅱ		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	暗褐	暗オリーブ褐	1212			○	○		○				

第４表　市堀遺跡出土遺物観察表２

図番	番号	層	型式等	器種	部位	調整・文様 内	調整・文様 外	色調 内	色調 外	遺物番号	胎土 状態	石英	長石	輝石	角閃石	茶粒	軽石	その他	焼成	備考
17	58	Ⅲ		深鉢	口縁	ヘラケズリ・ナデ	条痕	明黄褐	明黄褐	2576		○	○	○		○				黒川式
	59	Ⅱ		深鉢	口縁	ナデ	条痕	にぶい黄	にぶい黄	261 276			○	○	○	○				
	60	Ⅲ上		深鉢	口縁	ナデ	条痕	にぶい黄褐	にぶい褐	2374		○		○	○	○	○			
	61	Ⅱ		深鉢	胴部	ヘラナデ	ミガキ	明褐	にぶい黄褐	1845		○	○		○	○				
	62	Ⅲ上		深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	橙	橙	1562		○	○			○				
	63	Ⅱ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	褐灰	橙	722		○	○	○	○					
	64	Ⅲ上		深鉢	胴部	ヘラケズリのちナデ	丁寧なナデ	褐	褐	2256		○	○	○		○				
	65	Ⅱ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	褐	褐	1151		○	○	○		○			良	
	66	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	褐	黒褐	2387		○	○							
	67	Ⅲ		深鉢	胴部	ヘラケズリ	条痕・ナデ	黒褐	にぶい黄褐	2389		○			○					口径38.4㎝
	68	Ⅱ		深鉢	胴部	ナデ	条痕・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	463		○	○	○		○				
	69	Ⅳ上		深鉢	胴部	ヘラケズリのちナデ	条痕・ナデ	灰黄褐	黄褐	2532		○	○			○				
	70	Ⅲ上		深鉢	胴部	ヘラケズリのちナデ	条痕・ナデ	にぶい黄橙	黒褐	1253		○	○	○	○	○				
18	71	Ⅲ上		深鉢	胴部	丁寧なナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1398		○	○		○	○				
	72	Ⅲ		深鉢	胴部	丁寧なナデ	ヘラケズリ	明黄褐	にぶい黄褐	2329		○	○	○	○	○				
	73	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ・沈線文	にぶい黄橙	にぶい黄褐	1493		○				○				44と同一個体
	74	Ⅲ		深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐	にぶい褐	2626		○	○			○				
	75	Ⅲ上		深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	褐灰	にぶい黄褐	2214		○			○					
	76	Ⅲ		深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	2768			○			○				
	77	Ⅲ上		深鉢	胴部	ケズリ	ミガキ	にぶい黄褐	褐	686		○	○	○						
	78	Ⅳ		深鉢	胴部	ヘラナデ	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	2719		○	○	○			○			
	79	Ⅲ上		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	褐灰	明黄褐	1855		○	○	○	○					
	80	Ⅱ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	暗灰黄	にぶい黄褐	2737		○	○			○				
	81	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	黄褐	にぶい黄橙	2347		○			○	○				
	82	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2558		○	○	○		○				
	83	Ⅱ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	褐	暗灰黄	1847		○	○		○					
	84	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄褐	2627 不明		○	○	○		○				
	85	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	暗灰黄	にぶい黄褐	1343		○	○							
	86	Ⅲ		深鉢	胴部	ミガキ	ナデ	黒褐	黄褐	2161			○	○						
19	87			深鉢	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	不明			○	○		○				
	88	Ⅲ上		浅鉢	胴部	ヘラケズリ	ナデ	赤褐	暗赤褐	1093		○	○		○	○				
	89	Ⅱ		深鉢	胴部	ヘラミガキのちナデ	ナデ	灰黄褐	暗褐	2424		○	○	○		○				
	90	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	1495		○		○						
	91	Ⅲ上		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	黒	褐	2686		○	○	○	○					
	92	Ⅲ		深鉢	胴部	ミガキ	ナデ	黄灰	黄褐	2744 2745		○	○	○						
	93	Ⅲ		深鉢	胴部	ヘラミガキのちナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	2392 2383 2583		○	○			○	○			
	94	Ⅱ		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	褐	1956		○	○	○						
	95			深鉢	胴部	ヘラミガキのちナデ	ナデ	にぶい黄褐	黒褐	表採		○	○	○					良	
	96	Ⅲ		浅鉢	底部	ナデ	ナデ	褐	褐	2805		○	○	○					良	
	97	Ⅲ		深鉢	胴部	ミガキ	ナデ	橙	にぶい黄橙	1173		○		○						
	98	Ⅲ上		深鉢	胴部	指オサエ・ナデ	ナデ	黄灰	褐灰	2754		○	○	○	○					
	99	Ⅲ上		深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	黒褐色	508		○	○	○	○					
	100	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリのちナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	2407 2394		○	○	○						
20	101	Ⅲ上		深鉢	胴部	ヘラミガキ	ヘラケズリのちナデ	赤褐	黒	1063 2249		○	○	○		○				
	102	Ⅲ		深鉢	胴部	ヘラミガキのちナデ	ケズリ	黄灰	暗灰褐	2641		○	○	○						
	103	Ⅲ上		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	1419		○	○		○					
	104	Ⅲ		深鉢	胴部	ミガキ	ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	2147		○			○	○				
	105	Ⅲ上		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ・ナデ	にぶい橙	褐灰	1112		○	○	○	○	○				
	106	Ⅲ上		深鉢	胴部	ヘラミガキのちナデ	ケズリ	黄褐	にぶい黄褐	1433		○	○	○	○					
	107	Ⅲ上		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	黄橙	にぶい黄橙	1881		○	○	○		○		金雲母		
	108	不明		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	黄褐	黒褐	不明			○	○		○				
	109	Ⅲ		深鉢	胴部	ヘラミガキ	ヘラケズリ	オリーブ褐	黒褐	2684		○	○	○		○				外面にスス
	110	Ⅱ Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	にぶい黄	暗灰黄	230 2245		○	○		○	○				
	111	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	黒	黄褐	1474 795		○	○	○	○					スス
	112	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	にぶい褐	橙	1533		○		○	○	○				
	113	Ⅲ		深鉢	胴部	ミガキ	ケズリ	黄灰	にぶい黄橙	1051		○	○							
	114	Ⅳ上		深鉢	胴部	ヘラミガキのちナデ	ケズリ	黄褐	橙	2721		○	○	○						

第５表　市堀遺跡出土遺物観察表３

図番	番号	層	型式等	器種	部位	調整・文様 内	調整・文様 外	色調 内	色調 外	遺物番号	胎土 状態	石英	長石	輝石	角閃石	茶粒	軽石	その他	焼成	備考
21	115	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2246 2296 2326		○	○		○	○				
	116	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	黄褐	にぶい黄橙	2296		○	○							
	117	Ⅲ		深鉢	胴部	丁寧なナデ	ケズリ	にぶい黄	黄褐	1073 1074		○			○					
	118	Ⅲ		深鉢	胴部	丁寧なナデ	ケズリ	褐	黒褐	1522		○		○	○					スス
	119			深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	橙	にぶい黄橙	表採		○	○	○	○	○				
	120	Ⅱ		深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	褐灰	黄褐	250			○	○						
	121	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	橙	にぶい黄褐	842 1337		○	○	○		○				
	122	Ⅲ上		深鉢	胴部	ヘラミガキのちナデ	ケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1835		○	○	○	○					頸部にリボン状の突起
	123	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	条痕	橙	明褐色	2610		○	○	○		○				
	124	Ⅲ		深鉢	胴部	ヘラミガキのちナデ	条痕	黒褐	黒褐	2768 2769		○	○	○		○				
	125	Ⅲ上		深鉢	胴部	ナデ	条痕	明赤褐	赤褐	1556		○		○		○				
	126	Ⅱ		深鉢	胴部	ナデ	条痕	暗褐	明褐	2734		○	○			○	○			
	128	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ	条痕	にぶい黄橙	にぶい褐	2600		○			○					
22	129	Ⅳ上		深鉢	胴部	ナデ	条痕のちナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	2532		○	○	○	○	○				外にスス
	130	Ⅳ		深鉢	胴部	ナデ	条痕のちナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1280		○	○	○						
	131	Ⅳ上		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	黒	黄褐	2532		○	○		○				良	内にスス
	132	Ⅲ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1466		○		○	○		○	○		底径9.0㎝
	133	Ⅲ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	暗褐	黒	57		○	○			○		砂粒		外にスス
	134	Ⅱ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰黄褐	橙	872		○		○		○				
	135	Ⅲ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄橙	2290		○	○							
	136	Ⅲ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明赤褐	1118		○	○			○				底径6.5㎝
	137	Ⅱ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	褐	1956		○	○	○						
23	138	Ⅲ上		深鉢	底部	ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	1796		○	○			○				
	139	Ⅲ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	1883		○	○	○	○					
	140	Ⅲ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙	明赤褐	1141 2086		○	○		○			砂粒		底径8.5㎝
	141	Ⅳ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	2359		○	○							底径10.8㎝
	142	Ⅲ上		深鉢	底部	ナデ	ナデ	黄褐	にぶい黄褐	1062		○		○	○					
	143	Ⅲ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄	黄褐	2806		○		○						底径10.4㎝
	144	Ⅲ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐	明赤褐	1477		○	○	○						底径12.2㎝
	145	Ⅱ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙	明褐	2031			○			○	○			底径10.0㎝
	146	Ⅲ上		深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	黒	1664		○	○							外にスス
	147	Ⅱ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	黒	褐	1962		○	○	○						
	148	Ⅲ		深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	1898		○	○							
24	149	Ⅲ		精製浅鉢	口縁	ナデ	ミガキ	にぶい黄	にぶい黄橙	2140		○	○	○		○				口径16.6㎝
	150	Ⅲ上		精製浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	灰黄褐	にぶい黄橙	1114		○			○	○				口径7.0㎝
	151	Ⅲ		精製浅鉢	胴部	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	1425		○			○					
	152	Ⅳ上		精製浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	灰黄褐	褐灰	2532		○			○					径14.2㎝
	153	Ⅲ		精製浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐	黄褐	2544		○	○	○		○				径18.8㎝
	154	Ⅱ		精製浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	黒	黒褐	1474		○	○		○					
	155	Ⅲ		精製浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	暗灰黄	にぶい黄褐	1466		○	○							
	156	Ⅲ上		精製浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐	にぶい黄褐	1069		○		○	○					

第６表　市堀遺跡出土遺物観察表４

図番	番　号	遺物番号	器　　種	石　　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	備　　考
					cm	cm	cm	g	
25	157	1556	磨製石斧	頁　　岩	28	8.1	4.4	901	
	158	2483	磨製石斧	頁　　岩	18	3.9	2.2	241.52	
	159	2405	磨製石斧	蛇紋岩	8.1	6.1	2.5	168.63	
	160	767	磨製石斧	頁　　岩	5	6.1	2.5	43.56	
	161	1929	打製石斧基部	粘板岩	6.1	8.1	1.3	96.65	
	162	A32	スクレイパー	佳質頁岩	3.8	9.1	1.1	39.33	
26	163	2716	スクレイパー	メノウ	2.9	1.9	0.7	3.83	
	164	2185	スクレイパー	黒曜石	2.7	3	1.3	7.39	
	165	2283	スクレイパー	黒曜石	3.4	4.8	1.3	20.13	
	166	2631	石　　錘	安山岩	7.8	7.6	3	188.52	
	167	1816	石　　錘	安山岩	6.5	5.3	1.6	82.52	
	168	A	石　　錘	安山岩	5.9	8	2.7	180.87	
	169	125	石　　核	黒曜石	4.2	3.1	3.3	59.35	
	170	2260	石　　核	ハリ質安山岩	5	4.9	3	64.35	
	171	2202	石　　核	黒曜石	3	4.3	2.5	31.56	
27	172	1820	磨　　石	砂　　岩	3.9	5.9	2.1	74.08	
	173	66	磨　　石	砂　　岩	4.9	5.7	1.7	79.26	
	174	2237	磨　　石	砂　　岩	4.8	5.9	2.1	88.05	
	175	85	磨　　石	安山岩	4.3	5.1	2.1	71.85	
	176	A－P1	磨　　石	砂　　岩	4.4	4.7	1.8	52.06	Ｐ１（Ｃ－10区）
	177	1937	磨　　石	安山岩	6.7	5.2	2.3	122.9	
	178	884	磨　　石	安山岩	5.7	6.3	5	254.91	
	179	2489	磨　　石	砂　　岩	8.4	9.9	5	625	
	180	2334	敲　　石	砂　　岩	4.6	3.7	1.6	37.31	
	181	2287	敲　　石	安山岩	5.7	3.3	2.6	66.3	
	182	1487	敲　　石	メノウ	4.4	5.2	3.1	96.06	
	183	886	砥　　石	凝灰岩	12.9	9.3	6.3	1295	
	184	2512	凹　　石	安山岩	7.1	9.6	4	370.5	
28	185	1491	磨　　石	安山岩	10.2	5.3	5.2	500	
	186	67	石　　皿	安山岩	13.3	8.6	6.5	1100	
	187	2346	石　　皿	安山岩	15.5	11.8	4.7	1362	
	188	1386	石　　皿	安山岩	10.1	10.3	4.1	711	
	189	85	石　　皿	安山岩	19.6	16.5	7.9	3950	
29	190	2601	礫　　石	安山岩	12.5	14.5	4.1	840	
	191	1410	礫　　石	安山岩	11.7	12.2	4.6	562	
	192	1305	礫　　器	安山岩	11.9	10	4	559	
33	217	661	砥　　石	安山岩	7.7	4.25	1.9	84.96	弥生時代
45	280	不明	磨　　石	安山岩	5.1	6.6	3.6	178.92	土坑４
	281	25	磨　　石	砂　　岩	4.1	4.4	2.3	54.14	溝　１
	282	5	磨　　石	安山岩	6.1	4.7	3.4	122.23	溝　１
	283	6	砥　　石	頁　　岩	8.4	6.6	2.1	199.67	溝　１
	284	不明	砥　　石	砂　　岩	9.9	6.9	4.2	420.1	Ｐ50（Ｃ－６区）

第７表　市堀遺跡出土遺物観察表５

図番	番号	層	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 内	調整 外	色調 内	色調 外	遺物番号	胎土 状態	胎土 石英	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 角閃石	胎土 茶粒	胎土 軽石	胎土 その他	焼成	備考
30	193	Ⅲ	壺	口縁～胴部下			ナデ	ナデ	明黄褐	黄橙	2102		○		○	○	○	○			黒髪式
											2097										
											2099										
											2778										
											2105										
											2101										
											2450										
											2777										
											2095										
											2103										
											2107										
											2776										
											2100										
											2106										
											2096										
31	194	Ⅲ	甕	口縁	22.6		ナデ	ナデ	橙	明赤褐	2141			○							弥生・成川
	195	Ⅲ	甕	口縁	22.6		ナデ	ナデ	橙	明赤褐	2170			○							弥生・成川
	196	Ⅲ	甕	口縁			ナデ	ナデ	橙	明赤褐	2164			○							弥生・成川
	197	Ⅲ	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2160					○					弥生・成川
	198	Ⅲ上	甕	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	2148			○			○				弥生・成川
	199	Ⅲ上	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1331		○			○		○			中津野式
	200	Ⅲ	甕	口縁～胴部			ハケ目	ハケ目	橙	橙	45		○	○	○			○			中津野式，外面にスス
	201	Ⅱ	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	1270		○	○			○				中津野式
	202	Ⅲ	甕	口縁			ナデ・指オサエ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	825						○				中津野式
	203	Ⅲ上	甕	脚部		7.4	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	1649		○		○		○				中津野式
											1681										
	204	Ⅲ	甕	胴～脚部		7.9	ナデ	ナデ	橙	橙	2144				○		○	○			中津野式
											2153										
											2152										
											2154										
											2168										
											2158										
											1866										
											2159										
											不明										
	205	Ⅲ上	甕	脚部		9.4	ハケ目・ナデ	ハケ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1325			○	○						中津野式
	206	Ⅱ	甕	脚部		11.5	ハケ目・ナデ	ハケ・ナデ	明赤褐	明赤褐	2800			○				○			中津野式
32	207	Ⅲ	甕	口縁～胴部	26.4		ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	橙	1307		○		○			○			弥生・成川
	208	Ⅲ上	甕	胴部下			ヘラミガキ	ハケ目	浅黄橙	にぶい橙	1834		○				○	○			弥生・成川
	209	Ⅲ	壺	頸部	12.4		ナデ	ナデ	黒褐	橙	1312		○	○					金雲母		
	210	Ⅲ	壺	頸部			ナデ	ナデ	黒褐	黒	2467			○				○	金雲母		
	211	Ⅲ	壺	胴部			ナデ	ナデ	明黄褐	黄褐	不明		○	○							
	212	Ⅲ上	壺	胴部			ナデ	ナデ	明黄褐	黄褐	1375			○							
	213	Ⅲ	壺	胴部			ナデ	ナデ	明黄褐	黄褐	2443			○							
	214	Ⅱ	壺	胴部			ナデ	ナデ	明黄褐	黄褐	927			○							
	215	Ⅲ上	壺	胴部			ナデ	ナデ	明黄褐	黄褐	2598			○							
	216	Ⅲ	壺	胴部			ナデ	ナデ	明黄褐	黄褐	2454		○	○							

第８表　市堀遺跡出土遺物観察表６

図番	番号	層	文様	器種	部位	調整 内	調整 外	色調 内	色調 外	遺物番号	胎土 状態	胎土 石英	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 角閃石	胎土 茶粒	胎土 軽石	胎土 その他	焼成	備考
36	218	土坑１号		深鉢	胴	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1								砂粒		Ａ地区
	219	土坑２号	ハケ目	甕	胴部	ナデ	ナデ	橙	にぶい赤褐	2		○	○	○						成川
	220	土坑２	突帯	壺	胴部	ナデ	ナデ	黄橙	橙	1				○		○				成川
	221	土坑５	条痕	甕	口縁	ナデ	ナデ	橙	明赤褐	36				○		○				
	222	土坑５		甕	口縁	ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	7						○				
	223	Ⅲ上 土坑５		土師甕	口縁	ナデ	ナデ	黄橙	橙	1258 1393		○				○				口径21.8㎝
	224	土坑５		土師甕	口縁	ナデ	ナデ	黄橙	橙	23 24 34				○		○				スス，口径20.0㎝
	225	土坑５		土師甕	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	16				○		○				
	226	土坑５		土師甕	口縁	ナデ	ナデ	橙	橙	1		○								
	227	土坑５		土師甕	口縁	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	8				○	○					
	228	土坑５		不明	口縁	ナデ	ナデ	橙	橙	28	摩減			○		○				内スス
	229	土坑５		不明	胴	ハケ目	ナデ	黒褐	橙	15		○				○				内スス
	230	土坑５		不明	底部	ハケ目	ハケ目	明黄褐	明黄褐	17		○				○				
	231	土坑５		土師	口縁	ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	30				○						
	232	土坑５		土師	口縁	ナデ	ハケ目	橙	橙	35						○				
	233	土坑５		甕	胴	平行文，当て貝痕	格子目タタキ	灰黄	灰黄	9				○		○				
	234	土坑５		甕	胴	平行文，当て貝痕	格子目タタキ	にぶい黄	浅黄	18				○		○				
37	235	土坑10		甕	胴～底部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明黄褐	1420		○	○	○		○				底径10.2㎝
	236	土坑10		甕	脚	ナデ	ナデ	橙	橙	2571			○			○		砂粒		底径8.0㎝
	237	土坑10 土坑10		壺	頸部	ナデ	ナデ	黄褐	明赤褐	2459 1502		○	○	○		○				成川
	238	土坑10		壺	胴	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	2570		○		○						成川
	239	土坑10	突帯	壺	胴	ナデ	ハケ目	明黄褐	明黄褐	2783 2780 10		○								
	240	土坑11 土坑11		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	18 16				○	○					
	241	土坑11	条痕	深鉢	胴	ナデ	条痕	暗褐	褐	20		○	○		○	○				前平
	242	土坑11		浅鉢	胴	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	8				○	○	○				入佐or黒川
	243	土坑11		甕	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	965 934					○					
38	244	土坑11		甕	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明黄褐	2449 2566 2289 2792 2793					○					
	245	土坑11		甕	胴部～底部	ナデ	ナデ	明黄橙	橙	15 954 2439 2569 2791				○		○				
	246	Ⅱ			脚	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2560								砂粒		成川
	247	土坑11	突帯	壺	胴	ナデ	ナデ	明黄褐	黄褐	7										弥生
	248	土坑11	突帯	壺	胴	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	17										弥生
	249	埋土5.6		壺	胴	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	2562 2561										弥生
	250	溝埋13		壺	胴	平行当て貝痕	平行文タタキ	オリーブ黄	浅黄	埋土13										自然稲あり，精製された胎土
	251	溝埋10		壺	胴	同心円当て貝痕	平行文タタキ	明オリーブ灰	オリーブ灰	埋土10										自然稲あり，精製された胎土
	252	Ⅱ		壺	胴	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい橙	2706 1952 埋土 11T952							○			
	253	溝埋41		土師器	口縁	ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	埋土41										埦又は坏

第９表　市堀遺跡出土遺物観察表７

図番	番号	層	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整・文様 内	調整・文様 外	色調 内	色調 外	遺物番号	焼成	備考
40	254	ピット上位	甕	口縁～肩部			横ナデ（口縁～頸部）・同心円文（肩部）	横ナデ（口縁～頸部）・平行タタキ目（肩部）	暗赤褐	暗赤褐			ヘラ描波状紋
	255	ピット上位	甕	口縁～頸部			横ナデ	横ナデ（口縁部）・格子タタキ目のち横ナデ（頸部）	褐灰	灰白			櫛描波状紋
	256	ピット上位	甕	口縁～肩部			横ナデ（口縁～頸部）・同心円文（肩部）	横ナデ（口縁～頸部）・格子目タタキ	黄灰	暗灰黄	1534		
	257	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	褐灰	暗灰黄			
	258	ピット上位	甕	肩部			同心円文のち平行タタキ目	平行タタキ目	灰褐	黒褐	2175 2176 2177		
41	259	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目・同心円文	平行タタキ目の重複による格子目風	赤褐	上・灰黄 下・赤褐	2173		
	260	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目	格子タタキ目	にぶい黄	灰黄	1467 1733		
	261	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	灰褐	黒褐	1536 1537 2079		
	262	ピット上位	甕	底部			同心円文のち平行タタキ目	平行タタキ目	灰褐	にぶい赤褐			
42	263	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	にぶい褐	褐灰			
	264	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目・同心円文	平行タタキ目の重複による格子目風	にぶい黄褐	暗灰黄			
	265	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目	細かい格子タタキ目	暗灰黄	黒褐			
	266	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目の重複による格子目風	にぶい黄褐	灰黄			
	267	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目の重複による格子目風	にぶい赤褐	暗赤褐	950		
	268	ピット上位	甕	底部			同心円文のち平行タタキ目のち無文の円形圧痕	平行タタキ目	灰黄褐	暗褐			
	269	ピット上位	甕	胴部			同心円文	平行タタキ目の重複による格子目風	にぶい黄褐	暗灰黄			
	270	ピット上位	甕	胴部			同心円文・平行タタキ目	擬格子	灰黄褐	黄灰	2174		
	271	ピット上位	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	にぶい褐	暗灰黄			
43	272	Ⅲ	甕	頸部～肩部			ナデ（頸部）同心円文（肩部）	平行タタキ目のち横ナデ（頸部）平行タタキ目（肩部）	にぶい黄褐	灰	1523 1535 2076 2078		
	273	Ⅲ	甕	胴部			格子タタキ目	平行タタキ目	黄褐	暗灰黄	1538		
	274	―	甕	肩部			同心円文	格子タタキ目	灰黄	暗赤褐			
	275	Ⅱ	甕	口縁～頸部			横ナデ	横ナデ（口縁部），格子タタキ目のち横ナデ（頸部）櫛描波状文	灰黄	黄灰	1250 1596 2732		
	276	Ⅰ	甕	口縁			横ナデ	横ナデ（口縁）格子タタキ目のち横ナデ（頸部）櫛描波状文	浅黄	灰黄			
	277	Ⅲ	甕	口縁～肩部			横ナデ（口縁～頸部）同心円文（肩部）	横ナデ（口縁～頸部）平行タタキ目のちナデ（肩部）	灰	灰白	647		
	278	Ⅱ	甕	頸部～肩部			横ナデ（頸部）同心円文（肩部）	横ナデ（頸部）格子タタキ目（肩部）	黒褐	灰黄	185 542		
	279	Ⅱ	壺	肩部			指頭痕のちナデ	平行タタキ目	にぶい黄	にぶい黄褐	1400		

第10表　市堀遺跡出土遺物観察表８

図番	番号	層	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整・文様 内	調整・文様 外	色調 内	色調 外	遺物番号	焼成	備考
62	492	Ⅱ	壺	口縁～頸部	23.2		横ナデ	横ナデ（口縁～頸部）タタキのちナデ(頸部下端)	オリーブ灰	灰	302	良	
	493	Ⅲ	壺	口縁	10.6		横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐	黒褐	1115	良	
	494	Ⅰ	壺	頸部～肩部			横ナデ（頸部）同心円文（肩部）	横ナデ（頸部）平行タタキ目（肩部）	オリーブ灰	灰	一括		
	495	Ⅱ	壺	頸部～肩部			横ナデ	横ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	892		
	496	Ⅱ	壺	肩部			横ナデ	横ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	1996		
	497	Ⅲ上	壺	胴部			ナデ	平行タタキ目のちナデ	暗灰黄	にぶい黄褐	782		
	498	Ⅰ	壺	肩部			横ナデ	横ナデ	黄灰	灰	—		
	499	Ⅰ	壺	胴部			ナデ	格子タタキ目	にぶい黄橙	黄褐	一括		
	500	Ⅳ	壺	胴部			横ナデ	平行タタキ目のち横ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	2660		
	501	Ⅲ上	壺	胴部			横ナデ	平行タタキ目	にぶい褐	明黄褐	1488		
	502	Ⅱ	壺	胴部			横ナデ	平行タタキ目	黄褐	黄褐	一括		
	503	Ⅱ	壺	胴部			横ナデ	平行タタキ目	暗灰黄	黒褐	596		
	504	Ⅱ	壺	胴部			横ナデ	平行タタキ目	暗灰黄	黒褐	1344		
	505	Ⅳ	壺	胴部			横ナデ	平行タタキ目	にぶい黄橙	にぶい黄	1731		
63	506	Ⅲ上	甕	胴部			同心円文のち平行タタキ目	格子タタキ目	黄褐	にぶい黄	2021		
	507	Ⅲ上	甕	胴部			同心円文のち平行タタキ目	格子タタキ目	灰黄	にぶい黄褐	1200		
	508	Ⅲ上	甕	肩部			同心円文	格子タタキ目	灰黄褐	にぶい黄褐	1256		
	509	Ⅲ上	甕	肩部			同心円文	格子タタキ目	にぶい黄橙	灰黄褐	1239		
	510	Ⅲ上	甕	肩部			同心円文のち半磨消	格子タタキ目	にぶい黄	暗灰黄	603		
	511	Ⅱ	甕	胴部			同心円文，同心円文のち平行タタキ目	平行タタキ目	灰黄	灰	2205		
	512	Ⅰ	甕	肩部			同心円文	平行タタキ目	灰	灰	—		
	513	Ⅱ	甕	肩部			同心円文	平行タタキ目	にぶい褐	褐灰	705		
	514	Ⅱ	甕	肩部			同心円文	平行タタキ目	褐灰	灰褐	1734		
	515	Ⅱ	甕	肩部			同心円文	平行タタキ目	黄灰	黄褐	一括		
	516	Ⅱ	甕	肩部			同心円文	平行タタキ目	黄灰	灰黄	275		
64	517	Ⅰ	甕	肩部			同心円文	平行タタキ目	暗灰黄	黄灰	—		
	518	Ⅱ	甕	肩部			同心円文	平行タタキ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1228	不良	
	519	Ⅰ	甕	肩部			同心円文	格子タタキ目	暗灰黄	暗灰黄	—		
	520	Ⅱ	甕	肩部			同心円文	格子タタキ目	黄灰	灰黄	620		
	521	Ⅲ上	甕	胴部			同心円文のち平行タタキ目	平行タタキ目	暗灰黄	暗灰黄	1525		
	522	Ⅱ	甕	胴部			同心円文のち平行タタキ目	格子タタキ目	黄灰	黄灰	577		
	523	Ⅲ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	灰黄褐	暗灰黄	773		
	524	Ⅲ上	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	灰黄褐	灰オリーブ	2363		
	525	Ⅲ上	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	暗灰黄	黄褐	714		
	526	Ⅲ上	甕	胴部			平行タタキ目	格子タタキ目	灰黄褐	灰白	2746		
	527	Ⅲ	甕	胴部			平行タタキ目	格子タタキ目	灰黄褐	灰黄	975		
65	528	Ⅱ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	にぶい黄褐	灰褐	1526		
	529	Ⅰ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	暗灰黄	黄褐	—		
	530	Ⅱ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	黄灰	黄灰	1948		
	531	Ⅱ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	灰黄	灰	1526		
	532	Ⅲ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	黄灰	灰	1714		
	533	Ⅱ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	褐灰	にぶい黄褐	611		
	534	Ⅱ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	褐灰	灰黄褐	538		
	535	Ⅰ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	褐灰	褐灰	—		
	536	Ⅱ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	黄灰	灰	1592		
	537	Ⅱ	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	黄灰	灰黄	769		
	538	Ⅲ上	甕	胴部			平行タタキ目	平行タタキ目	オリーブ灰	灰	1242		

第11表　市堀遺跡出土遺物観察表９

図番	番号	層	器種	部位	調整 内	調整 外	色調 内	色調 外	遺物番号	胎土 状態	胎土 石英	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 角閃石	胎土 茶粒	胎土 軽石	胎土 その他	焼成	備考
46	286	Ⅱ	甕	口縁	ハケ目	ハケ目	灰黄褐	橙	407 408		○					○			東原式
	287	Ⅲ上	甕	口縁	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	橙	805		○			○					東原式, 内にススス
	288	Ⅲ	甕	口縁	ハケ目	ハケ目	にぶい黄褐	にぶい褐	2157								金雲母		東原式, 内にススス
	289	Ⅱ	甕	胴部	ハケ目	ハケ目	明赤褐	明赤褐	1440 一括		○	○			○				東原式
	290	Ⅲ上	甕	胴部	ハケ目	ハケ目	にぶい橙	明赤褐	1669							○			東原式
	291	Ⅲ上	甕	胴部	ハケ目	ハケ目	にぶい褐	にぶい赤褐	2400		○								東原式
	292	Ⅱ上	甕	胴下部	ハケ目	ハケ目	橙	橙	1405		○	○					砂粒		
	293	Ⅲ上	甕	肩部	ハケ目	ハケ目	黒褐	黄褐	1303		○	○							
	294	Ⅱ	甕	口縁	ハケ目	ハケ目	橙	にぶい褐	1677					○		○			東原式
	295	Ⅲ	甕	口縁	ナデ	ハケ目	橙	橙	2607		○	○			○				東原式
	296	Ⅱ	甕	口縁	ナデ	ハケ目	にぶい橙	橙	1926		○					○			東原式, 内にススス
	297	Ⅲ	甕	口縁	ナデ	ハケ目	にぶい橙	橙	2122			○		○		○			東原式
	298	Ⅲ	甕	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明褐	1368		○	○					砂粒		東原式
	299	Ⅲ上	甕	口縁	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	明褐	2525		○	○				○			東原式
	300	Ⅱ	甕	口縁	ハケ目	ハケ目	橙	明赤褐	480		○					○			
	301	Ⅲ	甕	口縁	ハケ目	ハケ目	橙	橙	2317			○			○				
47	302	Ⅲ	甕	胴部	ハケ目	ハケ目	明赤褐	赤褐	1350			○		○		○			
	303	Ⅲ	甕	胴～底部	ハケ目・ナデ	ハケ目	明赤褐	明赤褐	2616		○	○							
	304	Ⅲ	甕	胴～底部	ハケ目・ナデ	ハケ目	にぶい黄褐	橙	2624		○	○							
	305	Ⅱ Ⅲ上	甕	胴下～底近	ハケ目・ナデ	ハケ目	暗灰黄	にぶい橙	1874 2142		○	○			○				
	306	Ⅱ Ⅱ Ⅲ Ⅳ	甕	胴下	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	にぶい黄褐	赤褐	1286 2375 2371 2052			○	○						
	307	Ⅲ	甕	底近	ナデ	ハケ目	赤褐	橙	2522		○	○							
	308	Ⅲ	甕	胴部	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1336		○	○	○						
48	309	Ⅲ上	甕	底部	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	1216		○		○		○				
	310	Ⅱ	甕	胴下	ナデ	ナデ	赤褐	にぶい赤褐	1142		○	○	○						
	311	Ⅱ	甕	底近	ナデ	ハケ目	橙	にぶい赤褐	1975		○	○	○						
	312	Ⅱ Ⅳ	甕	底近	ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	453 873					○		○			
	313	Ⅱ	甕	胴下	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄褐	1604			○			○				
	314	Ⅲ上	甕	脚部	ナデ	ナデ	オリーブ褐	にぶい黄褐	1530			○	○						
	315	Ⅲ上	甕	底近	ナデ	ナデ	浅黄橙	明黄褐	917			○			○				
	316	Ⅲ	鉢	脚部	ナデ	ナデ	橙	明赤褐	2677		○	○	○	○					手捏ね, 底径5.3㎝
	317	Ⅱ	甕	胴下	ナデ	ナデ	にぶい褐	明褐	49		○	○	○	○					
	318	Ⅲ上	甕	脚部	ナデ	ナデ	明褐	橙	1871		○	○	○	○					底径9.0㎝
	319	Ⅲ上	甕	脚部	ナデ	ナデ	明褐	橙	1870 1875		○	○	○	○					底径7.4㎝
	320	Ⅲ上	高坏	脚部	ナデ	ナデ	明褐	にぶい黄橙	791		○	○	○		○				

図番	番号	層	器種	部位	調整		色調		遺物番号	胎土								焼成	備考
					内	外	内	外		状態	石英	長石	輝石	角閃石	茶粒	軽石	その他		
49	321	II	壺	胴部	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	1914		○				○		金雲母		1条突帯
	322	III	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	2683		○			○		○			1条突帯
	323	II	壺	胴部	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	2366		○	○			○		金雲母		1条突帯
	324	III上	壺	胴部	ナデ	ナデ・ハケ目	にぶい黄橙	浅黄橙	1741		○			○		○			2条突帯
	325	II	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙	明赤褐	不明		○			○					1条突帯
	326	III上	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙	明赤褐	1381		○						金雲母		1条突帯
	327	III	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	2621		○					○			2条突帯
	328	III上	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	1327		○						金雲母		1条突帯
	329	III上	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	1749	磨滅	○						金雲母		2条突帯
	330	IV	壺	肩～胴	ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい橙	1490		○	○		○					
	331	III	壺	胴部	ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1316	磨滅		○	○		○				幅広突帯
	332	III上	壺	胴部	ナデ	ナデ	橙	橙	1371		○	○							
	333	III	壺	肩～胴	ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	橙	2623										条痕
	334	III	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	2448	磨滅	○		○	○					
50	335	III上	壺	肩～胴	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	500		○	○		○		○			条痕
	336	III上	壺	肩～胴	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	498 2696 2694										条痕
	337	II	壺	肩～胴	ハケ目	ハケ目	にぶい黄褐	にぶい褐	1867		○		○						条痕
	338	III上	壺	肩～胴	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	501		○		○						条痕
	339	III上	壺	肩～胴	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい褐	499		○	○		○					条痕
51	340	III	壺	胴部	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	橙	2121		○	○				○			
	341	III上	壺	胴部	ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1332										条痕
	342	III上	壺	底近	ナデ	ナデ	にぶい褐	橙	401										
	343	III上	壺	底近	ナデ	ハケ目	浅黄	浅黄	1309		○	○	○						スス　条痕
	344	III上	壺	胴下	ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	明褐	502 806										条痕
	345	表採	甕	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	表採		○	○	○		○				
	346	III上	甕	底部	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	1437		○	○	○						
	347	II	甕	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	664		○	○	○						底径7.0㎝
	348	II III上 III	甕	底近	ナデ	ハケ目・ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	411 1328 1235		○				○	○			内面にスス
	349	II	壺	底部	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい黄褐	1963			○	○		○	○	金雲母		

第12表　市堀遺跡出土遺物観察表10

図番	番号	層	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 内	調整 外	色調 内	色調 外	遺物番号	胎土 状態	胎土 石英	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 角閃石	胎土 茶粒	胎土 軽石	胎土 その他	焼成	備考
52	350	Ⅲ上	甕	口縁			ナデ	ナデ	明褐	明褐	436		○	○							
	351	Ⅲ	甕	口縁			ナデ	ナデ	明褐	明褐	2407			○			○	○			
	352	Ⅱ	甕	口縁			ナデ	ナデ	明赤褐	橙	1778		○	○			○	○			
	353	Ⅳ上	甕	口縁～胴部	23.6		ヘラナデ	ナデ	橙	橙	2475		○	○				○			
		Ⅱ									2592										
		Ⅲ									2593										
		Ⅲ									2594										
		Ⅲ									2595										
	354	Ⅱ	甕	口縁			ヘラケズリ	ナデ	橙	橙	2736			○				○			
	355	Ⅱ	甕	口縁			ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	922		○				○				
	356	Ⅲ	甕	口縁			ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	2275		○					○			
	357	Ⅱ	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	1786			○		○	○	○			
	358	不明	甕	口縁～胴部			ヘラケズリ	ナデ	明赤褐	明赤褐	2T－1			○	○		○				
53	359	Ⅱ	甕	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	758		○				○	○			
	360	Ⅲ上	鉢	口縁			ナデ	ナデ	黒褐	明赤褐	1090		○								
		Ⅱ									599										
	361	Ⅱ	甕	口縁			ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	1954		○				○	○			
	362	Ⅲ上	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	1310		○	○			○				
	363	Ⅱ	甕	口縁			ヘラケズリ	ナデ	赤褐	にぶい赤褐	520		○		○			○			
											2287										
	364	Ⅲ	甕	口縁			ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄褐	褐	604		○	○			○				
	365	Ⅲ上	甕	口縁			ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄褐	褐	1219		○	○		○					
	366	Ⅲ上	甕	口縁			ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄褐	明褐	634		○	○		○					
	367	不明	甕	口縁～胴部			ヘラケズリ・ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	2T－2		○	○	○	○		○			
	368	不明	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい赤褐	赤褐	1T		○			○		○			
	369	Ⅱ	甕	口縁～頸部	24.0		ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	144		○					○			57と同一か？
											522										
											553										
54	370	Ⅲ上	甕	口縁			ヘラケズリ	ハケ目	褐	褐	1070		○	○		○					
	371	Ⅱ	甕	口縁			ナデ	ナデ	明褐	にぶい黄褐	569		○	○	○			○			
	372	Ⅱ	甕	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	1790		○				○	○			磨滅
	373	Ⅲ	甕	口縁～胴部			ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2445		○		○		○				
											2453										
											2456										
											2463										
	374	Ⅲ	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	1071		○					○			
	375	Ⅲ	甕	口縁			ハケ目	ハケ目	にぶい褐	褐	2308		○	○							
	376	Ⅱ	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	759		○				○	○			
	377	Ⅲ上	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	745		○					○			磨滅
	378	Ⅲ上	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい褐	橙	607		○	○			○				
	379	Ⅲ	甕	口縁			ヘラケズリ	ナデ	橙	にぶい橙	2675		○			○	○	○			磨滅
	380	Ⅲ上	甕	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	2017		○								
											2020										
55	381	Ⅲ上	鉢	口縁			ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	1578		○					○			
		Ⅱ									1624										
	382	Ⅲ	壺	頸部			ナデ	ナデ	浅黄橙	明黄褐	2643		○	○		○					
	383	Ⅱ	甕	胴部			ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	1646		○	○	○				砂粒		磨滅及び剥落
	384	Ⅲ	甕	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黄橙	2426		○	○		○	○				
		Ⅱ									2738										
		Ⅱ									2741										
	385	Ⅲ上	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	681		○	○		○	○				外にスス，指頭圧痕
	386	Ⅲ上	鉢	口縁			ナデ	ナデ	黒褐	赤褐	736		○			○					
	387	Ⅲ	甕	口縁～胴部			ヘラケズリ	ハケ目	にぶい黄橙	明赤褐	2749		○	○		○					
	388	Ⅱ	鉢	口縁			ヘラケズリ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	327		○		○		○				
	389	Ⅲ	甕	口縁			ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	2135		○		○			○			

第13表　市堀遺跡出土遺物観察表11

図番	番号	層	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整・文様 内	調整・文様 外	色調 内	色調 外	胎土	遺物番号	備考
56	390	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	細砂粒	2218	
		Ⅱ										2762	
		Ⅱ										671	
	391	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	細砂粒	2357	皿形か？磨滅
	392	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	細砂粒	1520	
	393	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	黄橙	茶粒	1719	
	394	Ⅱ	坏	口縁			ナデ	ナデ	明黄橙	浅黄橙	細砂粒	1603	
	395	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	細砂粒	1555	
	396	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	細砂粒	1203	磨滅
	397	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	茶粒・軽石	2756	磨滅が著しい
	398	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	茶粒・細砂粒	136	
	399	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	茶粒・軽石・長石	552	磨滅が著しい
	400	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	茶粒・石英	1595	磨滅，剥離が著しい
	401	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	茶粒・石英	832	
	402	Ⅱ	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	黄橙	茶粒・石英	1198	磨滅
	403	Ⅲ	坏	口縁			ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	茶粒・石英	2127	
	404	Ⅲ	坏	口縁			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	茶粒	2201	
	405	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	茶粒・角閃石・石英	1177	
	406	Ⅲ	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	軽石	2503	
	407	Ⅱ	坏	口縁			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	軽石	1013	
	408	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	浅黄橙	灰黄	角閃石	1060	
	409	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	橙	橙	茶粒	702	磨滅
	410	Ⅲ上	坏	口縁			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	茶粒・石英	1233	磨滅
57	411	不明	坏	底部			ナデ	ナデ	橙	橙	長石	不明	
	412	Ⅲ上	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	茶粒・石英	898	磨滅
	413	Ⅲ上	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	茶粒・石英	992	２個組
	414	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・茶粒・角閃石	521	
	415	Ⅱ上	坏	底部			ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	茶粒・石英	1061	
	416	Ⅲ上	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黄橙	茶粒・石英	1983	内外面とも磨滅が激しい
	417	Ⅲ	坏	底部			ナデ	ナデ	浅黄橙	黄橙	茶粒・石英	715	磨滅が著しい
	418	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	834	磨滅が著しい
	419	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	黄橙	にぶい黄橙	石英	1925	糸切底
	420	Ⅲ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英	1545	磨滅
	421	Ⅲ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒	茶粒・石英	1214	
	422	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	茶粒・石英	1297	
	423	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	茶粒・石英	1265	磨滅が著しい
	424	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	石英	382	糸切底
58	425	Ⅱ	坏	底部		5.6	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	茶粒	1658	糸切底，坏
	426	Ⅲ上	坏	底部			ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	石英・茶粒	740	
	427	Ⅲ上	坏	底部			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	茶粒・石英	269	磨滅
	428	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	石英・茶粒・長石	1695	磨滅が著しい
	429	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	茶粒	1658	磨滅
	430	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	茶粒・石英	269	磨滅
	431	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英	565	糸切底

図番	番号	層	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整・文様		色調		胎土	遺物番号	備考
							内	外	内	外			
58	432	Ⅲ	坏	底部			ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	石英	1736 1045	磨滅
	433	Ⅲ上	坏	底部			ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	石英	631	磨滅
	434	Ⅰ	坏	底部			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	一括	糸切底
	435	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	茶粒・石英	1777	
	436	Ⅲ上	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	石英	2203	
	437	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	石英・茶粒	328	糸切底（剥落）
	438	Ⅱ	坏	底部			ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	石英・茶粒	740	
59	439	Ⅲ上	皿	底部	12.4	6.2	ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	茶粒	1178	赤色顔料，内外面にススス，灯明皿に転用か
	440	Ⅱ	埦	底部			ナデ	磨耗	浅黄橙	浅黄橙	石英・茶粒・角閃石	1620	磨耗
	441	Ⅲ上	埦	底部			ナデ	磨耗	にぶい黄橙	にぶい黄橙	茶粒	749	
	442	Ⅲ上	埦	底部			ナデ	ナデ	橙	橙	茶粒・角閃石・石英	999	磨耗
	443	Ⅱ	埦	底部			ナデ	ナデ	黄橙	浅黄橙	茶粒	1292	磨耗
	444	Ⅲ	埦	底部			磨耗	磨耗	にぶい橙	にぶい橙	茶粒	1482	
	445	Ⅱ	埦	底部			ナデ	ナデ	黄橙	浅黄橙	茶粒	1601	
	446	Ⅲ上	埦	底部		8	ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	茶粒・石英	652	丹，朱が剥離，ススが付着
	447	Ⅲ	埦	底部			ナデ	ナデ	橙	橙	茶粒	2233	高台だけ
	448	Ⅲ	埦	底部			磨耗	磨耗	橙	橙	茶粒	1308	磨耗
	449	Ⅲ上	埦	底部			磨耗	磨耗	黄橙	橙	茶粒・長石	601	磨耗
	450	Ⅲ上	埦	底部			磨耗	磨耗	にぶい黄橙	にぶい黄橙	茶粒	1567	
	451	Ⅲ	埦	底部			ナデ	ナデ	明黄褐	黄褐	茶粒・石英	2319	スス付着
	452	Ⅲ上	埦	底部			磨耗	磨耗	明褐	橙	茶粒・長石	1563	磨滅
	453	Ⅲ上	埦	底部			磨耗	磨耗	橙	橙	茶粒・角閃石	1083	磨滅
	454	Ⅲ上	埦	底部			磨耗	磨耗	浅黄橙	浅黄橙	茶粒・軽石	687	磨滅が著しい
	455	Ⅱ	埦	底部			ナデ	磨耗	にぶい黄橙	にぶい黄	茶粒・石英	783	

第14表　市堀遺跡出土遺物観察表12

図番	番号	層	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整・文様		色調		胎土	遺物番号	備考
							内	外	内	外			
60	456	Ⅲ上	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	橙	茶粒・角閃石	1171 1038 1037 1040	
	457	Ⅲ上	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	橙	石英・茶粒	1092	
	458	Ⅲ上	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	黒	石英・長石	2191	
	459	Ⅲ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	橙	長石・砂粒	2068	
	460	Ⅲ上	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	橙	石英・砂粒	1222	
	461	Ⅲ上	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	明褐	石英・砂粒	1006	
	462	Ⅱ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	浅黄橙	茶粒	1033	
	463	Ⅱ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	砂粒	678 656	
	464	Ⅱ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	浅黄橙	茶粒	263	
	465	Ⅱ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	浅黄橙	茶粒	676	
	466	Ⅲ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	橙	石英・茶粒	712	
	467	Ⅲ上	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	茶粒・細砂粒	667	

図番	番号	層	器　種	部位	口径（cm）	底径（cm）	調整・文様		色　調		胎　土	遺物番号	備　考
							内	外	内	外			
60	468	Ⅲ上	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	石英・砂粒	854	
	469	Ⅰ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい橙	茶粒	一括	
	470	Ⅱ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	茶粒	662	
	471	Ⅲ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい橙	軽石・砂粒	2417	
	472	Ⅲ上	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい橙	茶粒・石英	1000	
	473	Ⅱ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい橙	茶粒・砂粒	580	
	474	Ⅲ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	茶粒・細砂粒	789	
	475	Ⅱ	内黒土師器	口縁			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	軽石・砂粒	942	
	476	Ⅱ	内黒土師器	胴部			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	茶粒	1078	
61	477	Ⅲ上	内黒土師器	胴部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英	625	
	478	Ⅲ	内黒土師器	胴部			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	砂粒	1521 2069	
	479	Ⅲ上	内黒土師器	胴部			ナデ	ナデ	黒	浅黄橙	茶粒	646	
	480	Ⅱ	内黒土師器	胴部			ナデ	ナデ	黒	橙	砂粒	1634	
	481	Ⅲ	内黒土師器	胴部			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	茶粒	2353	
	482	Ⅱ	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	褐灰	にぶい黄橙	茶粒・石英・軽石	523	
	483	Ⅱ	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	黒	浅黄橙	茶粒・砂粒	419	
	484	Ⅱ	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	黒	橙	茶粒・砂粒	431	
	485	Ⅲ上	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	茶粒・砂粒	994	
	486	Ⅲ上	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	黒	にぶい橙	石英・角閃石	1718	
	487	Ⅱ	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙	茶粒・砂粒	549	
	488	Ⅱ	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	黒	明黄褐	茶粒・石英	1828	
	489	Ⅱ	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	茶粒・角閃石	658	
	490	Ⅱ	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	細砂粒	586	
	491	Ⅲ	内黒土師器	底部			ナデ	ナデ	黒	明赤褐	長石・石英	1907	

第15表　市堀遺跡出土遺物観察表13

図番	番号	層	器　種	最大長（cm）	最大幅（cm）	重量（g）	孔径（cm）	色　調		胎　土	遺物番号	備　考
								内	外			
66	539	Ⅲ上	双孔棒状土錘	8.0	1.8	20.9	0.5		にぶい黄橙	石英・輝石	1392	朱か丹が付着
	540	Ⅱ	双孔棒状土錘	4.1	1.7	9.7	0.4		灰褐	輝石	907	
	541	Ⅱ上	双孔棒状土錘	4.6	1.9	15.0	0.5		橙	石英・輝石・茶粒	718	
	542	Ⅱ	双孔棒状土錘	4.6	1.8	10.5	0.4		橙	石英・輝石・長石	2804	
	543	Ⅱ	双孔棒状土錘	4.5	1.6	6.9	0.5		橙	輝石・長石	529	
	544	Ⅲ	双孔棒状土錘	7.6	2.1	27.0	0.4		にぶい黄橙	輝石・角閃石・茶粒	1450	
	545	Ⅱ	双孔棒状土錘	4.1	1.7	10.2	0.3		橙	石英・茶粒	708	
	546	Ⅲ上	双孔棒状土錘	3.0	2.0	9.6	—		にぶい黄橙	石英・軽石・茶粒	750	
	547	Ⅲ上	双孔棒状土錘	5.5	1.8	10.9	0.4		橙	石英・輝石・軽石	853	
	548	Ⅱ	管状土錘	5.8	2.2	17.3	0.8	灰黄褐	橙	石英・輝石	348	朱か丹が付着
	549	Ⅱ	管状土錘	3.4	1.1	3.6	0.4	橙	明赤褐	石英・輝石・軽石	175	朱か丹が付着
	550	Ⅲ	管状土錘	3.4	2.7	7.3	—	灰褐	にぶい赤褐	石英・角閃石・茶粒	424	
	551	Ⅰ	管状土錘	3.2	2.2	11.4	1.0	にぶい黄橙	黒褐	長石	不明	
	552	不明	管状土錘	4.5	3.3	27.4	0.9	明赤褐	明赤褐	石英・輝石・茶粒	不明	

第16表　市堀遺跡出土遺物観察表14

図番	番号	層	文様	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整・文様 内	調整・文様 外	色調 内	色調 外	遺物番号	胎土	焼成	備考
67	553	Ⅲ上		皿	口縁	13.0				オリーブ黄	オリーブ黄	818	灰白色		龍泉窯外反口縁皿
	554	Ⅱ	蓮弁文	坏	口縁					オリーブ灰	オリーブ灰	1998	灰白色		龍泉窯系青磁坏Ⅲ類
	555	Ⅰ	蓮弁文	皿	口縁	13.0				オリーブ灰	オリーブ灰	不明	灰色		龍泉窯　皿15C
	556	Ⅱ		皿	口縁	14.0				オリーブ灰	オリーブ灰	982	灰白色		龍泉窯　皿15C
	557	Ⅱ		盤	口縁					オリーブ灰	オリーブ灰	267	灰白色		龍泉窯直行D縁盤
	558	Ⅱ		盤	口縁					オリーブ灰	オリーブ灰	490	灰色		
	559	Ⅱ		碗	口縁					オリーブ灰	オリーブ灰	649	灰白色		
	560	Ⅱ		碗	口縁					オリーブ褐	オリーブ褐	1285	黄褐色		
	561	Ⅱ		碗	口縁					オリーブ灰	オリーブ灰	11	灰白色		龍泉窯青磁碗Ⅲ類13C中～14C前半
	562	Ⅰ		碗	口縁					オリーブ灰	オリーブ黄	一括	灰白色		龍泉窯青磁碗Ⅱ類13C前半
	563	Ⅱ		碗	底部					オリーブ灰	オリーブ灰	189	灰色		龍泉窯青磁碗Ⅰ類12C中～後半
	564	Ⅰ		碗	底部					灰	灰白	一括	灰白色		白磁碗Ⅷ類12C中～後半
	565	Ⅰ		碗	底部		7.0			オリーブ灰	オリーブ灰	一括	灰白色		龍泉窯青磁Ⅲ類
	566	Ⅰ		碗	底部		4.6			灰黄	灰白	一括	淡黄色		森田分類白磁D類14C末～15C（高台に抉りが入ってる。貝目跡付き４カ所
	567	Ⅰ		碗	底部					灰白	灰白	一括	淡黄色		
	568			皿	底部					オリーブ灰	明緑灰	表採	灰白色		白磁
	569	Ⅰ		碗	底部					灰白	灰白	一括	浅黄色		白磁
	570	Ⅱ		皿	底部					灰	灰	一括	浅黄色		
	571	Ⅰ		皿	底部					灰白	灰白	一括	灰白色		白磁皿Ⅸ類口禿げ皿13C後半～14C前半
	572	Ⅱ		碗	底部					オリーブ	オリーブ	1931	黄灰色		龍泉窯系青磁碗Ⅰ類
	573	Ⅰ		碗	底部					灰白	オリーブ灰	一括	にぶい黄橙		漳州青花
	574	Ⅰ		碗	底部		4.5			灰白	灰白	一括	灰白色		伊万里焼
68	575	Ⅰ		鉢	口縁			横ナデ	横ナデ	黄灰	黄灰	不明	精製された胎土，長石，茶粒含む	良好	
	576	Ⅱ		鉢	口縁			横ナデ	横ナデ	灰	灰	1877	精製された胎土，石英含む		
	577	Ⅰ		鉢	口縁			横ナデ	横ナデ	灰	灰	不明	精製された胎土，長石含む		
	578	Ⅰ		鉢	口縁			複数の沈線	横ナデ	黄灰	黄灰	不明	精製された胎土，石英含む	良好	
	579	Ⅱ		鉢	口縁			複数の沈線	横ナデ	黄灰	黄灰	1035	精製された胎土，長石含む	良好	
	580	Ⅱ		鉢	胴			複数の沈線	横ナデ	浅黄	灰	1912	精製された胎土，長石，茶粒含む		
	581	Ⅰ		鉢	胴			複数の沈線	横ナデ	オリーブ黒	黒	不明	精製された胎土，長石含む		
	582	Ⅱ		鉢	胴			複数の沈線	横ナデ	褐灰	浅黄橙	187	精製された胎土，長石含む		
	583	Ⅱ		鉢	胴			複数の沈線	横ナデ	橙	橙	1621	精製された胎土，長石含む		
	584	Ⅱ		壺	胴			横ナデ	横ナデ	オリーブ黒	オリーブ黒	606	精製された胎土，輝石，茶粒含む		
	585	Ⅱ		甕	胴			横ナデ・沈線	山形たたき	暗灰	オリーブ黒	1226	精製された胎土，石英含む		
	586	Ⅰ		甕	口縁					にぶい黄褐	オリーブ黄	不明	精製された胎土，長石含む		
	587	Ⅱ		壺	胴部					灰	灰黄褐	一括	精製された胎土，軽石含む		
69	588	Ⅰ		蓋						灰褐	黒褐	不明	灰褐色		19C代
	589	Ⅰ		蓋						明赤褐	黒褐	不明	明赤褐色		19C代
	590	Ⅰ		メンコ	―					黒褐	黒	不明	灰褐色		甕又は壺より転用
	591	Ⅰ		メンコ	―					黒褐	黒	不明	褐灰色		甕又は壺より転用
	592	Ⅰ		甕	口縁					灰黄	黒褐	不明	褐灰色		貝目17C
	593	Ⅱ		甕	口縁					黄褐	黒褐	一括	灰褐色		
	594	Ⅰ		甕	口縁					褐	褐	一括	灰褐色		
	595	Ⅰ		甕						灰黄	にぶい黄	一括	橙色		17C後半
	596	Ⅰ		甕						にぶい黄	浅黄	一括	褐灰色		17C後半
	597	Ⅱ		甕	口縁					褐	にぶい赤褐	一括	褐灰色		
	598	Ⅱ		―	胴部					灰赤	にぶい褐	684	褐灰色		
70	599	Ⅱ		―	底部					暗灰黄	にぶい黄褐	1968	精製された胎土，茶粒含む		
	600	Ⅰ		―	底部					にぶい黄橙	にぶい黄褐	一括	精製された胎土，長石含む		
	601	Ⅱ		ルツボ	口縁					にぶい赤褐	暗赤	一括	灰黄褐色		
	602	Ⅱ		ルツボ	口縁					灰赤	にぶい赤	一括	褐灰色		
	603	Ⅱ		鉢	口縁					黄灰	オリーブ黒	1949	精製された胎土，石英・長石含む		瓦質土器
	604	―		古銭	―					―	―		―		寛永通宝

第Ⅵ章　科学分析

市堀遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析

大阪大谷大学　　三辻利一

１）はじめに

九州では須恵器窯跡は福岡県内に圧倒的に多い。次いで，熊本県，大分県内でも多数の窯跡が発見されている。これら３県に比べて，佐賀県，宮崎県，鹿児島県では窯跡数は格段に少ない。宮崎県には福岡県同様，古墳の数が多いにも関わらず，須恵器窯跡数は格段に少ない。しかし，須恵器生産では筑紫と日向で何故，これほど大きな落差があるのかは説明されていない。長崎県に至っては須恵器窯跡は発見されていない。しかし，いずれの県でも消費地遺跡からは多数の須恵器が出土しており，何処から供給された須恵器であるのかという問題は解明されていない。

今回は鹿児島県内の消費地遺跡から出土した須恵器片を蛍光X線分析法で分析し，その生産地を探ることを試みた。その際，まずは県内の生産地の製品が何処へ供給されているのか探ることにした。県内の須恵器生産地として，岡野窯群と中岳山麓窯群を対照する母集団として選択した。県外の生産地も考えられるが，今回は対象から除外した。このように，生産地となる母集団を探っている状態なので，２群間判別分析法は適用しなかった。今後，母集団がある程度絞られた段階で判別分析にかけることにした。

２）分析方法

土器類の素材は粘土である。粘土や岩石（鉱物の集合体）はアルミノケイ酸塩といわれ，化学薬品には難溶性である。そのため，化学的に非破壊分析法が有効である。しかも，多数の元素を含有しているため，同時多元素分析法が有効である。そうなると，有効な分析法としては蛍光X線分析法と放射化分析法しかない。近年，優れた性能をもつ完全自動式の装置が開発された蛍光X線分析法はとりわけ有効である。そのため，土器類の分析法として，蛍光X線分析法が使用される場合が最も多い。

蛍光X線分析装置には波長分散型とエネルギー分散型の二種類がある。前者は分析能力に優れ，定量分析には広く利用されている。後者は持ち運びに便利であり，可搬型の装置として威力を発揮している。また，不定形の試料の分析にも有効である。もちろん定形試料の定量分析も可能である。波長分散型の装置では一定形状の試料しか分析できないようになっている場合が多い。そのために，試料は一旦，粉砕されたのち，一定形状の測定試料に加工される。

蛍光X線分析の特徴は表面分析であり，試料の重量を前もって天秤で測っておかなくても定量分析できることである。しかし，標準試料を含めてすべての測定試料は同質であり，その形状は一定でなければならないという条件がつく。比較のための標準試料が必要である。言い換えれば，相対分析であることが蛍光X線分析の特徴である。

このようなことから，土器類の分析でも表面を研磨して付着汚物を除去したのち，タングステンカーバイド製乳鉢で100メッシュ以下に一旦粉砕し，粉末試料を塩化ビニル製リングを枠にして，10トンの圧力をかけてプレスし，内径20㎜，厚さ５㎜の錠剤試料を作成し，蛍光X線分析用の試料とした。

岩石学の研究では岩石を構成する鉱物に関する情報を得るため，岩石の化学組成が必要であり，主成分元素を全て測定する。他方，土器の産地問題の研究では素材粘土の化学組成はとくに必要としない。必要なのは地域差である。土器の化学組成を求めても，地域差は求まらない。化学組成から土器の地域差を出した研究者もいない。ただし，岩石学の研究における分析化学のように，土器の主成分元素を全て測定している研究者はいる。しかし，その研究者も測定した主成分元素の中から適当に二つの元素を選択し，２次元分布図を作成して地域差を求めようとしている。

筆者は土器の地域差を有効に示す元素をどのようにして抽出するかを思案した。そのために必要なのが，生産地が明確に分かっている土器試料を探し出すことであった。窯跡出土須恵器が分析対象となった。須恵器窯跡は全国各地にあるため，全国各地の須恵器の地域差を共通に表示する元素を見つけ出すことが必要である。当然，有効元素は簡単には見つからない。そのために，まず，有効元素の候補となる元素を探し出すことが必要であった。どのようにして有効元素の候補を見つけ出したか。

アルミノケイ酸塩の蛍光X線スペクトルをみると，比較的大きなピークが何本かある。Al，Si，K，Ca，Ti，Fe，Rb，Sr，Y，Zrの10本のピークである。蛍光X線スペクトルの特徴は各元素のスペクトル線が原子番号の順に並んでいることである。そこで，近接して並んでいる２本のピークを取り出して対元素を作ってみた。Al／Si，K／Ca，Ti／Fe，Rb／Sr，Y／Zrの５対である。このうち，筆者が最初に使ったエネルギー分散型の装置では分解能が悪いため，AlのピークはSiの大きなピークの肩にのって有効に分離せず，ピーク面積を正確に測定することが困難であった。また，Ti／Feの比はFeのピークが大き過ぎるため，比の値が小さ過ぎて，地域差があるかないかを判断することは困難であった。さらに，YとZrのKピークにはそれぞれ，RbのKとSrのKが重なっており，補正をしない限り，正確にYとZrのピーク面積をもとめることは困難であることが分かった。のこるK／CaとRb／Srの２対のピーク比について，各地の

窯跡出土須恵器のスペクトルを比較した。その結果，Rb／Srについては地域によってピーク比が逆転する場合があることが観測された。K／Caについてはピーク比が逆転することはなかったが，その値は大きく変動した。これらの観測データから，これら２対のピークが地域差を表す可能性があると判断された。そこで，対をはずして，K－Ca，Rb－Srの２枚の２次元分布図上に各地の窯跡出土須恵器の分析データをプロットし，地域差を有効に表すかどうか検討することにした。各地の窯跡出土須恵器の分析データを集積するには10年を越える年月が必要であった。殆ど全地域の窯跡出土須恵器の分析データがでたところで，帰納法的にこれら２枚の分布図が地域差を有効にあらわす分布図であることが実証された。では，何故，K－Ca，Rb－Srの両分布図が有効に地域差を表すのだろうか？この疑問に応えるため，日本列島の地質の土台を構成する花崗岩類試料を全国的に集めて分析することにした。この結果，KとCa，RbとSrの間にはそれぞれ，逆相関の関係あることが判明した。同時に，主成分元素Kと微量元素Rbの間には正の相関性があること，同様に，CaとSrの間にも正の相関性があることも実証された。花崗岩類を構成する主成分鉱物は石英，長石類，黒雲母，角閃石などである。とりわけ，長石類は造岩鉱物の60％を占めると報告されている。長石類のうち，カリ長石にはK（Rb）が，斜長石にはCa（Sr）が，正長石にはNaが含有されていることは周知の事実である。そうすると，土器（粘土）中のK（Rb）は母岩のカリ長石に，Ca（Sr）は斜長石に由来することが推察できる。したがって，K（Rb）に富む母岩の上にある窯跡出土須恵器には比較的K（Rb）が多く，斜長石に富む母岩上に分布する窯跡から出土する須恵器には比較的Ca（Sr）が多いというデータは地質学的にも理解されることになる。これらの母岩を背景に粘土化は狭い範囲内で進行したものと推察される。かくして，K－Ca，Rb－Srの両分布図上での地域差は母岩の長石類に由来することがわかった。そして，窯跡出土須恵器にみられる地域差は地質的なものであることが結論された。

こうしたデータの集積の上に，K－Ca，Rb－Srの両分布図が窯跡出土須恵器の地域差を有効に表す分布図として定着することになった。そして，Fe，Naについても個別に，分析データを集積し，地域差を表示するかどうか検討することにした。本報告ではK－Ca，Rb－Srの両分布図を使い，鹿児島県内の窯跡出土須恵器の化学的特徴を表すとともに，消費地遺跡出土須恵器の窯跡への対応も試みた。

蛍光X線分析には，理学電機製RIX2100を使用した。この装置にはTAP（Na用），Ge（K，Ca用），LiF（Fe，Rb，Sr用）の３枚の分光結晶が使用されており，また，蛍光X線強度の測定には，ガスフロー比例計数管（Na，K，Ca用），シンチレーションカウンター（Fe，Rb，Sr用）が使用された。X線管の使用条件は50kV，50mAであった。X線分析では通常，検量線法で分析値を求める。日本地質調査所から配布された岩石標準試料を使って検量線は作成される。この中には当然，JG－１は含まれている。筆者もこの方法で検量線を作成した。しかし，土器の産地問題の研究では化学組成そのものを必要としない。地域差を有効に表示する分析値の表示法があれば，そのほうがよい訳である。筆者はK，Ca，および，Rb，Srを同時に定量する上に，最も有効な標準試料としてJG－１を採用した。そして，JG－１の各元素の蛍光X線強度を使って測定された実試料の蛍光X線強度を標準化する方法を考えた。いいかえれば，JG－１による標準化法は検量線法の簡易法である。この方法のほうが分析値を求めるうえに，はるかに便利であり，両分布図を作成したり，統計計算をする上にも便利である。また，分析値を％やppmに換算することも容易であるが，通常，その必要がないので，JG－１による標準化値でデータ解析を行っている。

３）分析結果

分析値は別表の通りである。（前記報告の表１中に記載してある）

別表のデータに基ずいて作成した両分布図を図１に示す。比較対照のために，岡野領域を描いてある。No. 150，151は全因子で類似しており，同じ生産地の製品と推定される。しかし，その産地は岡野窯群でもなく，中岳山麓窯群でもない。鹿児島県外の生産地の製品である可能性が高い。No. 152，153も全因子で類似している。同じ生産地の製品である。しかし，その産地は不明である。岡野窯群の製品でもなく，中岳山麓窯群の製品でもない。No. 154も産地不明である。しかし，その産地はNo. 150，151の須恵器とも，No. 152，153の須恵器の産地とも異なる。したがって，今回はわずか５点しか分析してないが，３か所の産地の製品が混ざっていることが判明した。いずれも県外の生産地の製品である可能性をもつ。

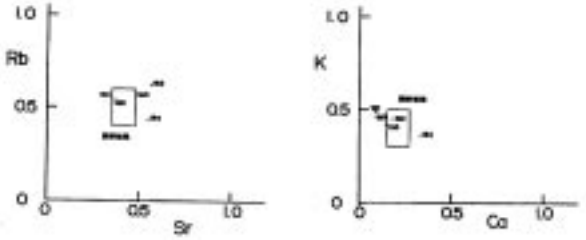


表１　市堀遺跡出土須恵器の分析データ

遺物№(レイアウト№)	分析番号	遺物名	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
150（254）	18－514	古代須恵器	0.482	0.092	1.56	0.553	0.365	0.262
151（256）	18－515	古代須恵器	0.478	0.091	1.56	0.567	0.346	0.254
152（258）	18－516	古代須恵器	0.449	0.182	1.57	0.618	0.56	0.199
153（267）	18－517	古代須恵器	0.422	0.14	2.08	0.578	0.475	0.159
154（275）	18－518	古代須恵器	0.363	0.328	2.37	0.43	0.545	0.293

※数値はＪＧ－１になる標準値

市堀遺跡出土土器片付着物質の材質について

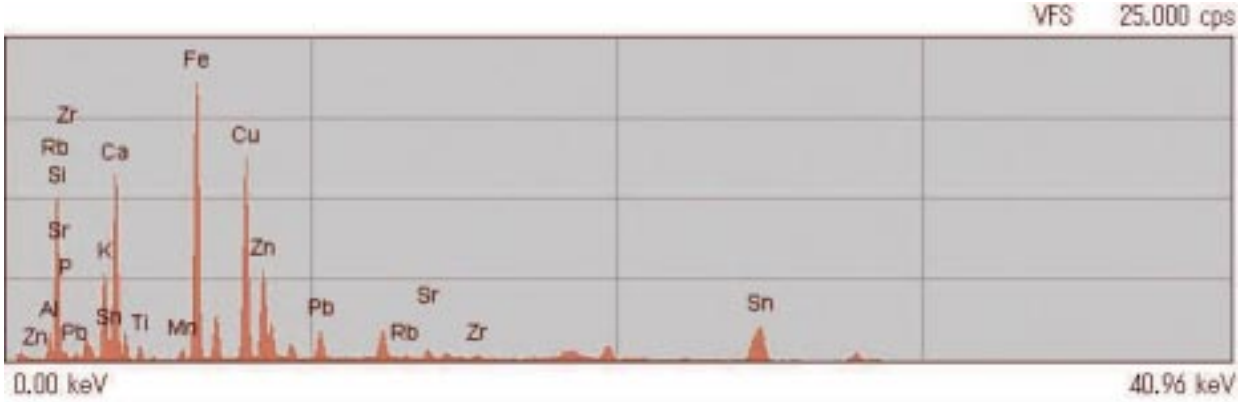
鹿児島県市堀遺跡出土の土器付着物について蛍光X線元素分析装置（EDX）を用いた材質調査を行った。分析装置は，鹿児島県立埋蔵文化財センター所有の機器（堀場製作所XGT－1000）を使用し，測定は森雄二（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。

分析資料は，近世該当のⅡ層より出土した土器片２点（写真１，２）で，その形状からるつぼの破片であることが予想される。また，付着物が土器片の表面一部を覆っている状況が確認できる。そこで，付着物並びに付着物のない土器片表面（写真１）に対して多元素測定（測定条件：X線管電圧15／50kV，電流自動，パルス処理時間P３，プリセット時間200秒，X線照射径100μm）を試みた。

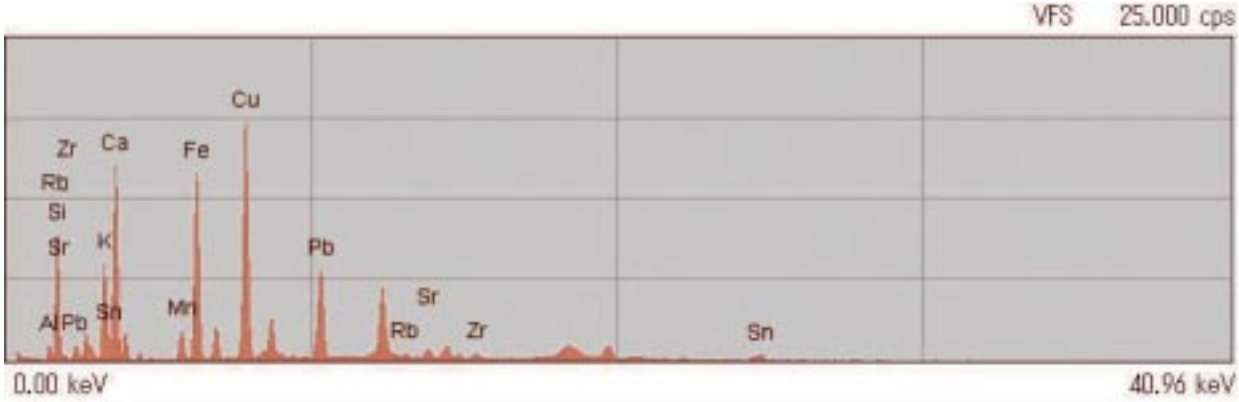
測定は非破壊で行ったため，表面に付着した土などの成分と思われるAl（アルミニウム），Si（ケイ素）なども検出しているが，付着物においてCa（カルシウム），Fe（鉄），Cu（銅），Zn（亜鉛），Sn（錫），Pb（鉛）などの金属元素を検出した（第１～３図）。比較のために付着物のない土器片表面において測定を試みた結果，金属元素を検出したが，強度［cps／mA］は低い（第４図）。これらのことから，複数の金属元素で構成される付着物が土器片の内外面にわたって覆っていることを確認できた。したがって，この土器片は，金属を融解するなど人為的な作業に用いた土器の一部であることが推測され，その形状などと合わせて勘案するとるつぼの一部である可能性が高い。

写真１　遺物番号Ａ（１：付着物，２：付着物のない土器片表面）

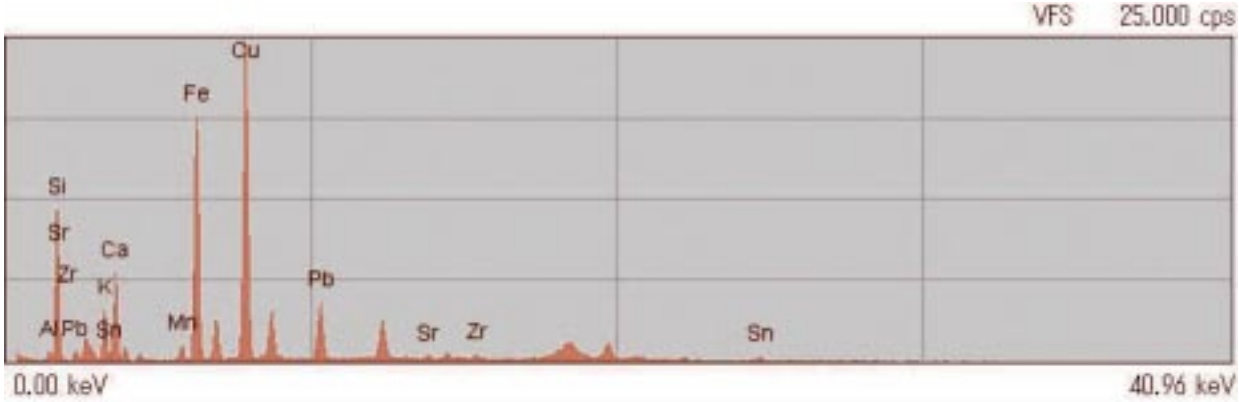
写真２　遺物番号Ｂ



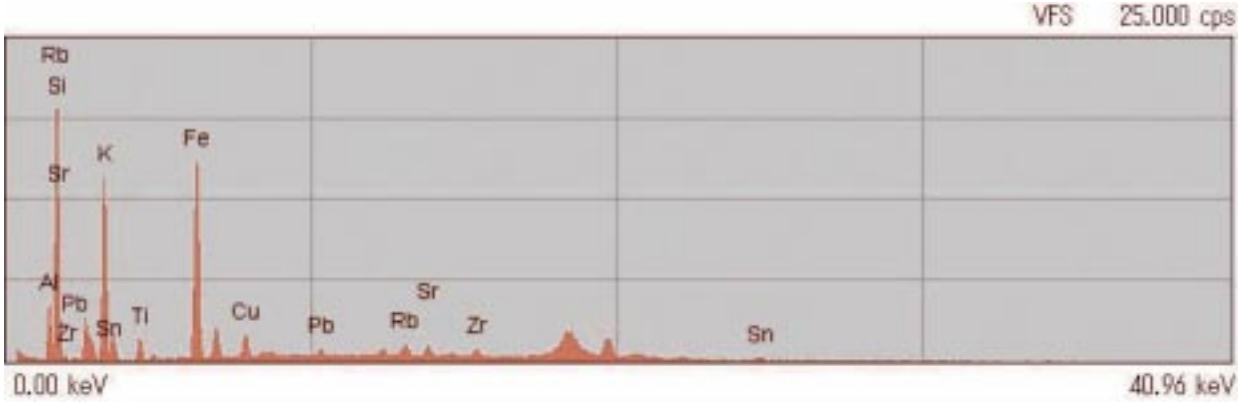
第１図　スペクトル図（遺物番号Ａ外面赤色付着物）



第２図　スペクトル図（遺物番号Ｂ外面赤色付着物）



第３図　スペクトル図（遺物番号Ｂ内面赤色付着物）



第４図　スペクトル図（遺物番号Ａ外面付着物のない土器片表面）

第Ⅶ章　発掘調査のまとめ

市堀遺跡は，いちき串木野市湊町字市堀に所在し，標高47mの丘陵地端部に位置し，平成13年度に確認調査，平成14年度に本調査を実施し，調査面積は3,040㎡であった。

調査の結果，縄文時代早期，弥生時代，古墳時代，古代をはじめ，中世から近世までの遺構や遺物などがみられた。以下，調査の概略を外観してみたい。

１　縄文時代

縄文時代の調査では，縄文時代早期や晩期の遺物を中心に，早期の集石遺構が１基，後期に想定される落し穴状土坑１基が検出された。

早期の集石は安山岩を主体とした57個の礫から成るものである。火熱を受けているために破砕礫が多くみられる。堀り込みなどはなく，ほぼ同一レベルで検出され，用途は石蒸し炉が考えられる。集石内には縄文時代早期の貝殻文系の土器片がみられた。

落し穴状遺構は楕円形を呈し，検出面からは145㎝を測る。Ⅲ層に堀り込み面が想定され，逆茂木痕などは検出されなかった。この遺構は帰属時期が困難で，調査時では埋土状況や形状などから後期の時期が想定されていた。

縄文時代の遺物は，早期や晩期の土器をはじめ石器などの出土があった。

出土した土器は小破片が多く，早期前半の貝殻条痕文を主体とした前平式土器の円筒土器，角筒土器，レモン形土器などの破片がみられた。

本遺跡の円筒土器の口縁部外面には，縦位に貝殻刺突文や斜位に貝殻刺突文を施している。胴部破片は，貝殻条痕文のあと貝殻刺突文や沈線文などを施しているもの，斜位に貝殻条痕文のあと，縦位で列状に貝殻刺突文を施すものなどがある。一方，角筒土器は，胴部に貝殻条痕文のあと波状沈線文や直線状の沈線文・連点文を施すものがみられる。

円筒土器や角筒土器のほか，円筒形に角筒形の文様構成である二重施文が施される志風頭タイプと考えられる円筒土器の破片も出土している。

縄文早期の前平式土器は，鹿児島市前平遺跡出土を指標とするもので，河口貞徳によって提唱された。円筒形や角筒形，口縁部の上面観がレモン形を呈する３種類の器形がある。

本遺跡の資料では全体の形状を知り得るものは出土していないが，出土した部位の調整痕の特徴などから型式を判断した。

本県の前平式土器が出土した遺跡は，約100か所に近い遺跡が周知され，本誌の第Ⅲ章第２節歴史的環境で紹介した本市湊町に所在する鍋ケ城跡から出土している。

志風頭タイプが出土している遺跡は，南さつまし市の志風頭遺跡・宇治野原遺跡をはじめ知覧町の永野遺跡，姶良町の建昌城跡などの遺跡が知られている。

縄文時代晩期は，胴部を中心とした土器破片が多く，深鉢形土器や浅鉢形土器などがある。深鉢形土器は外面に沈線や条痕をもつ粗製土器の口縁部・胴部・底部破片など特徴のあるものを掲載した。浅鉢形土器は，ミガキ調整で仕上げられている精製土器の口縁部や底部破片などがある。出土した晩期の土器には黒川式土器や入佐式土器段階のものが多かった。

一方，石器は器種から帰属時期を縄文時代として取り扱った。石器には，磨製石斧をはじめ石錘，

磨石，敲石，石皿など，遺構埋土中のものを含めて41点が出土した。そのほとんどが破損品で，本遺跡の特徴のひとつに石鏃の出土がなかったことがあげられる。

石器は，頁岩，蛇紋岩，粘板岩などをはじめ多種の素材を用い，小型の磨石や敲石（ハンマーストーン）には砂岩を，大型の石皿や凹石には安山岩を多く利用している。

２　弥生時代

弥生時代の調査では，遺構は検出されなかったが，ほとんどの遺物はＣ地点から出土している。弥生土器は，中期後半から終末に位置づけられている黒髪式土器，後期後半から終末にかけての中津野式土器などがみられ，出土量は多くはない。黒髪式土器は一固体分が一括して出土した。

黒髪式土器は，熊本県での弥生時代中期後半期の土器形式で，熊本市黒髪の済々黌高等学校敷地で発見され，甕に付けられた名称とされている。この黒髪式土器は，中期で中九州を代表する土器で，はじめは後期の土器とされていたが，北九州の須玖Ⅱ式土器に併行する土器とされている。この土器は福岡県南部から鹿児島県北部まで出土分布が確認され，最近では川辺町の堂園Ａ遺跡などから出土している。

弥生時代後期後半から終末期ごろの中津野式土器も少量が出土した。

３　古墳時代以降

①　遺構

本遺跡の遺構は，縄文時代の集石や落し穴状土坑のほか，柱穴，土坑，溝状遺構などが検出された。遺構には，古墳時代から古代の資料が中心で，成川式土器の甕・壺，古代土師器の甕・壺・坏・埦，内黒土師器，須恵器，土錘などと，少量の縄文土器や石器が出土した。

遺構のうち，柱穴群は掘立柱建物跡についての復元を試みたが復元はできなかった。

土坑は15基，溝状遺構１条が検出された。

土坑や溝状遺構は，平面形や埋土状況をみると，掘り込み面が明瞭でなく，床面が不安定で凹凸面や人工的な掘込みのある土坑に樹痕が絡んだ形態が大半であった。

特定の土坑から出土遺物があったが，土坑の性格づけは不可能であった。

須恵器ピットとして調査した遺構は，不定形の楕円形を呈した柱穴状の土坑である。埋土内には県外生産地の可能性をもつ須恵甕などが埋土上位と中位からまとまって出土した。

この土坑は，床面がほぼ平らで硬化面を認め，掘立柱建物の柱のようなものが抜かれた後に土と一緒に須恵器を意識して廃棄したのか，複数個体がみられたが復元できるものはないことから埋納などの祭祀的な儀礼は考えにくいとの指摘もあり，今後の資料の増加をまちたい。

②　古墳時代の遺物

出土遺物は，Ｂ地点やＣ地点に成川式土器が認められ，その多くはＣ地点から出土した。出土遺物は，古墳時代初頭の東原式土器をはじめ，成川式土器の甕・壺・高坏などが出土した。

成川式土器は甕や壺を中心に，口縁部，頸部，底部など特徴的な部位を取り扱ったが，細片で不鮮明な調整痕をもつ資料が多かった。

出土遺物は，器種・タイプ別などの分類も試みたが，口縁部の傾きや口縁部内側の稜線の有無，底部の状況などの特定部位の状況把握のみにとどまった。一方，壺では口縁部の出土はなく，突帯の部位状況や，底部破片があった。肩部や底部付近は類似した破片が多く出土した。

③　古代の遺物

古代の遺物は，土師器，内黒土師器，須恵器，土錘などが出土している。

土師器は，甕・坏・埦・皿・内黒土師器などの器種があった。これらの遺物は９世紀後半から終末にかけての時期が考えられる資料である。

本遺跡の土師器は甕が多く出土している。口縁部から底部までの完形品は皆無で，底部付近までの復元が可能であったものは３個体であった。口縁部の形態は，「く」の字状に外反し，口唇部で平坦面を作り出すようにもう一度外反するもの，口縁部の短いもの，口縁部が僅かに外反するものなどがある。

口縁部から下位までの資料は，胴部が丸みを帯びながらのびて口縁部の下で内湾するもの，胴部が上部では直線的に上にのびて口縁部の下で内湾するもの，胴部がわずかに開きながらのびて口縁部で外反するもの，胴部が開きながらのびて口縁部で外反するものなどがみられた。

一方，壺は底部付近の資料がほとんどで，他の部位は大半が細片であった。

坏・埦は口縁部片や底部破片が多く出土した。

器形は，底部から体部が直線的立ち上がるものが考えられるが，形態の分類はできなかった。調整は鮮明さを欠くが，内外面に回転ナデの調整痕を残しているものもあり，口縁部内面に煤の付着を認め，二次的な使用として燈明皿への転用が考えられる資料もあった。

埦・皿は，底部破片が主で高台付を埦とした。しかし，中には高台付の皿で唯一の完形品が出土している。他の資料は埦の底部で，底部の完形や底部径が復元できたものは，底径が6.4㎝から8.2㎝までの範疇であった。

内黒土師器は口縁部破片がほとんどであった。口縁部や底部を欠損した体部破片，底部破片など特徴を示す破片を取り上げた。

口縁部の復元口径は，11.8㎝から19.0㎝を測り，底部の復元底径は，6.9㎝から8.2㎝の範疇であった。底部の資料には，高台や体部の一部に煤の付着を認めた。坏と同じように燈明皿への転用が考えられる。

須恵器には，壺や甕など大小破片がみられた。特に，遺構内出土の須恵器は，県外生産地の可能性を示す分析結果が提示された。

本遺跡出土の須恵器は，隣接している薩摩川内市の大島遺跡の甕で，櫛描波状文をもつ資料と酷似している。

土錘は，15点が出土し，１点以外はすべて欠損品である。

棒状粘土の両端に穿孔を持つ双孔棒状土錘と円筒状を呈する長軸方向に孔を穿った管状土錘が出土した。本遺跡の土錘は，個体数が少なく破損したものがほとんどで特長は少ないが，当時の生業を知る手がかりとしたい。

４　中世以降の遺物

中世の調査は，土師器坏・青磁の皿・坏・碗・盤をはじめ，白磁の碗，皿，染付碗，陶器のこね鉢，摺鉢，須恵器の壺，甕，常滑焼，備前焼，薩摩焼などの瓶・甕・メンコ，るつぼ，古銭などが出土した。

土師器の坏は，いずれも糸切り底の底部破片である。

本遺跡出土の青磁の碗・皿・盤などは龍泉窯のものが多くみられた。この龍泉窯の青磁は，日置市（旧東市来町）の前畑遺跡や古城遺跡をはじめ，薩摩川内市の薩摩国分寺跡，成岡遺跡，西ノ平遺跡，麦之浦遺跡，大園遺跡などで出土している。

出土した青磁碗はⅠ類～Ⅲ類まで出土し，時期はⅠ類が12世紀中～後半，Ⅱ類が13世紀前半で，Ⅲ類は13世紀中～14世紀前半でのものである。青磁皿は，15世紀該当である。

一方，白磁碗は，Ⅷ類で12世紀中～後半で，白磁口禿皿は，Ⅸ類で13世紀後半～14世紀前半で，白磁Ｄ類（森田分類）は，14世紀～15世紀にかけてのものである。

染付は漳州窯碗の青花で，陶器類は，こね鉢の口縁部，常滑焼甕の口縁部や備前焼壺の肩部などの破片である。この他に，摺鉢の口縁部，胴部付近，底部付近などが断片的にみられた。

須恵器は，壺の肩部や甕の胴部の破片で，ともに外面は山形のタタキ目である。

近世陶磁器は，薩摩焼が少量出土し，19世紀代の土瓶の蓋で，メンコは薩摩焼の破片を利用したものである。ほかに甕の口縁部上面には貝目の痕跡が確認できる破片がみられた。

その他の遺物には，るつぼ，古銭，瓦質土器など少量が出土した。

るつぼは，口縁部から胴部までの破片である。表面の一部に付着物が確認でき，付着物質の材質の分析を実施した。

その結果は，第Ⅵ章に所収した。付着物としては鉄・銅・亜鉛・錫・鉛などの金属元素が検出され，金属を融解するなど人為的な作業が行なわれた容器の一部であることが推測された。

古銭は寛永通宝で，他は瓦質土器の鉢の口縁部破片である。

最後に，報告書の整理作業を概観すれば，本遺跡は利用価値の高い丘陵地の先端部に所在しているためか後世の人びとの活動の場としての営みにより，本来の遺跡の姿を映し出していないように感じた。本遺跡の出土遺物について紹介したが，遺物の形態や器種による層位的な共伴関係や，セット関係を把握することは不可能な状況で対応した。今後の課題としたい。

参考文献

南九州縄文研究会	南九州貝殻文系土器　1	～鹿児島県～	2002・2
鹿児島県立埋蔵文化財センター	大島遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(80)	2005・3
大阪大谷大学	市堀遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	三辻利一	2006・12

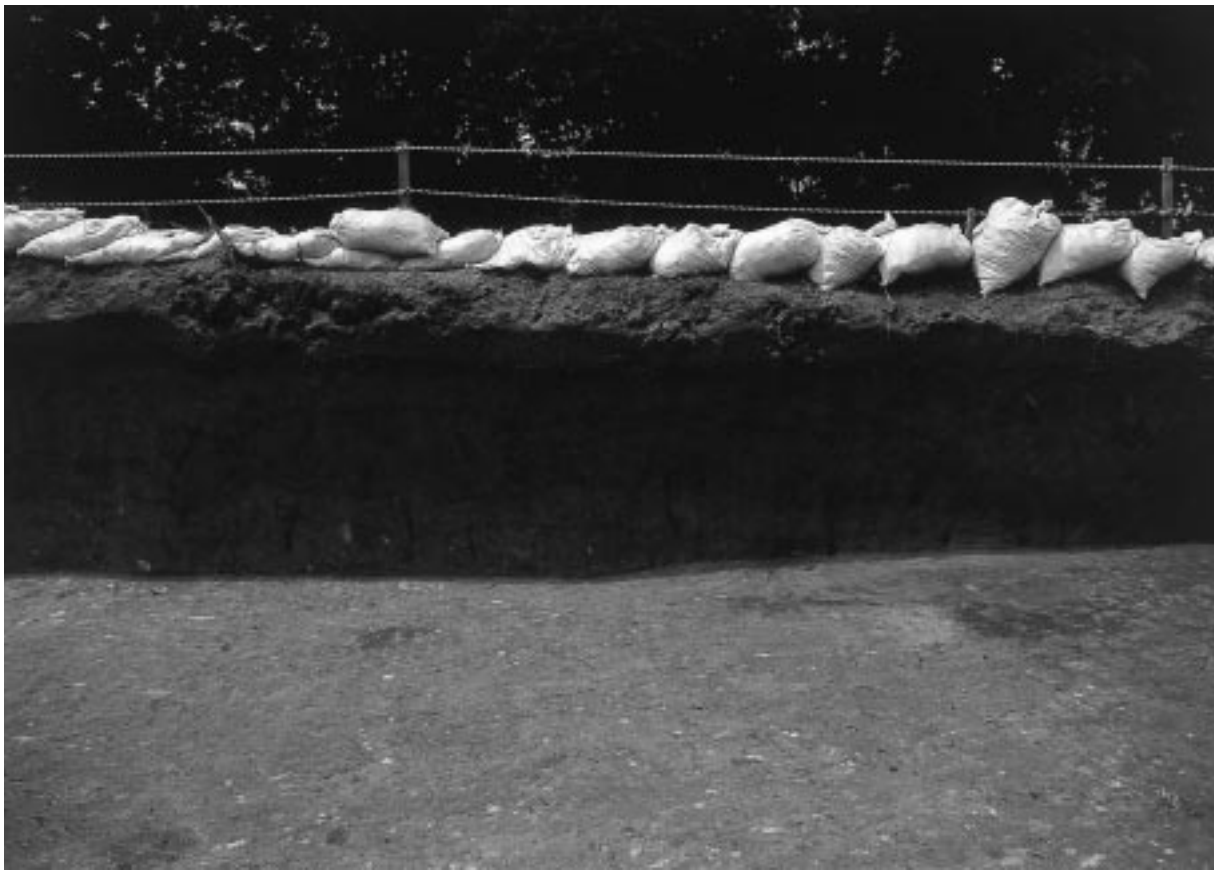
市堀遺跡発掘調査事務所

市堀遺跡作業員駐車場

写真図版２

発掘調査作業風景

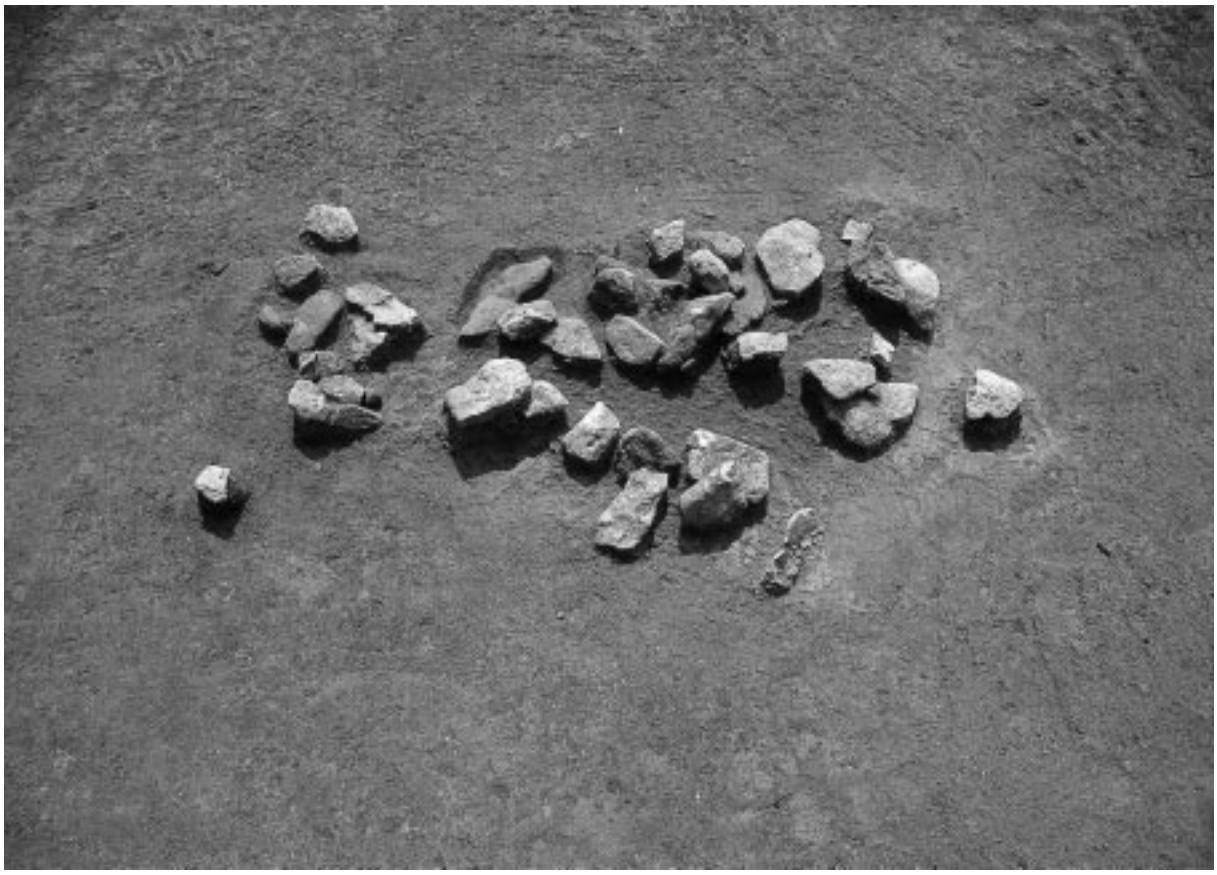
Ａ地区標準土層断面



Ｂ・Ｃ地区土層断面

下層確認トレンチ設定状況

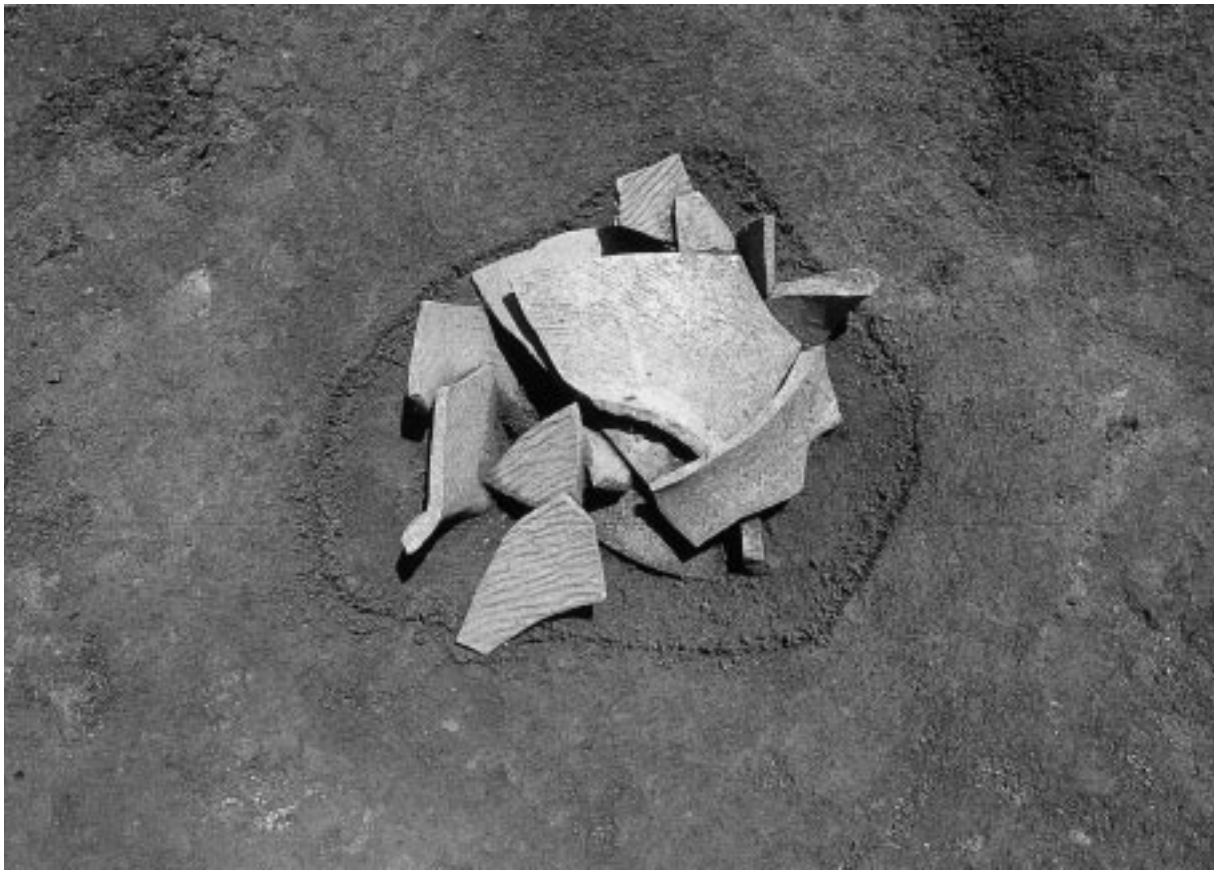
写真図版４



縄文時代早期集石検出状況

黒髪式土器出土状況

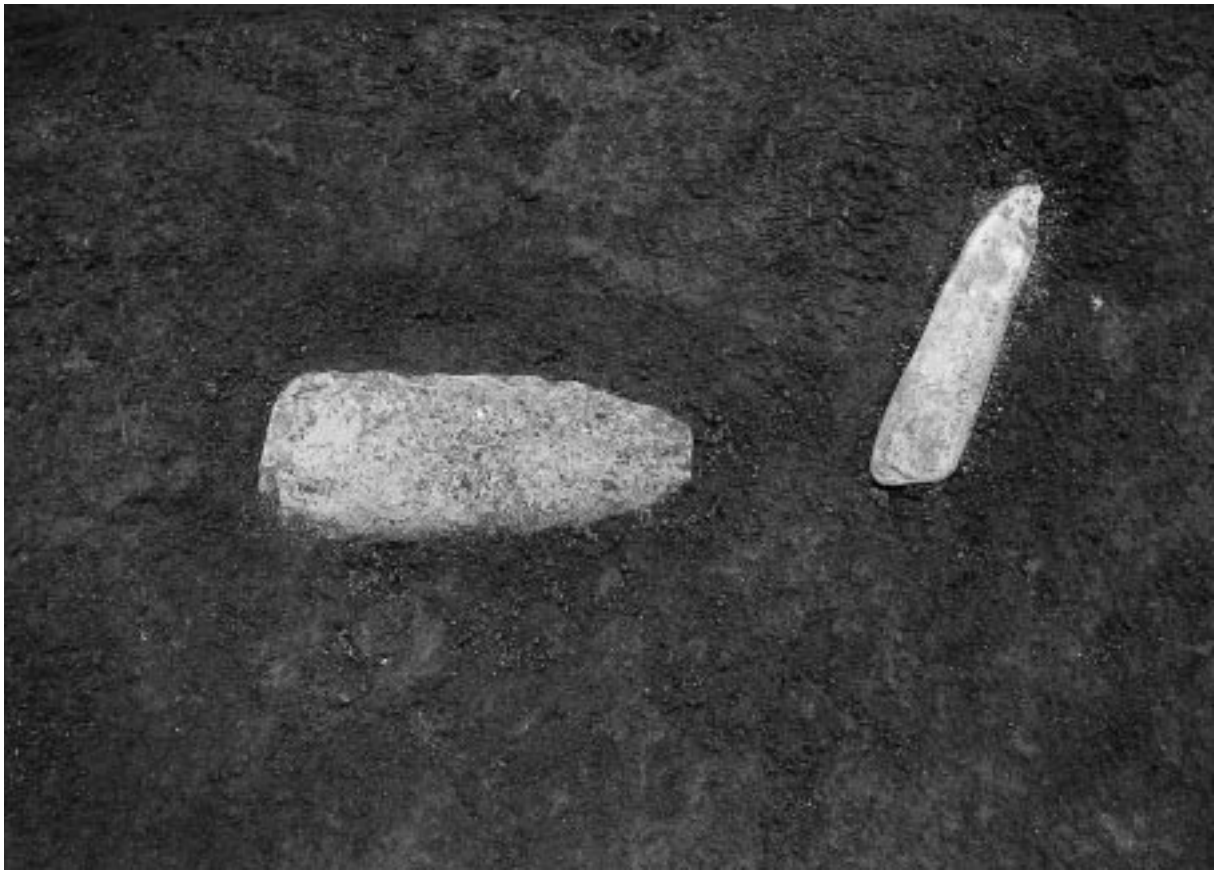
遺物包含層内遺物出土状況



15号土坑（須恵器ピット）遺物出土状況

写真図版 6

遺構（ピット群）検出状況



石器出土状況

古代土師器（高台付皿）出土状況

内黒土師器出土状況

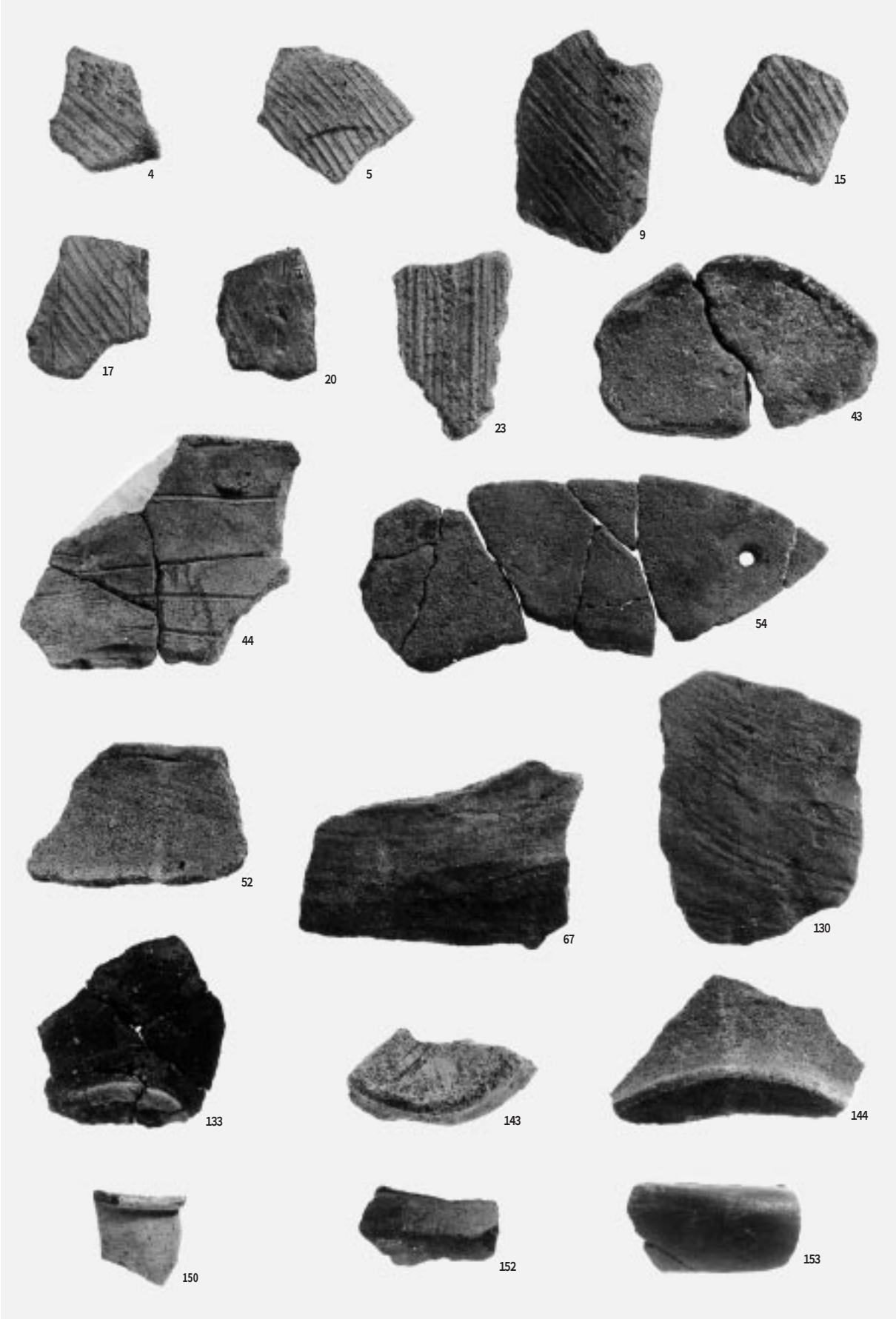
双孔棒状土錘出土状況

図　　版

写真図版８

縄文時代の出土石器

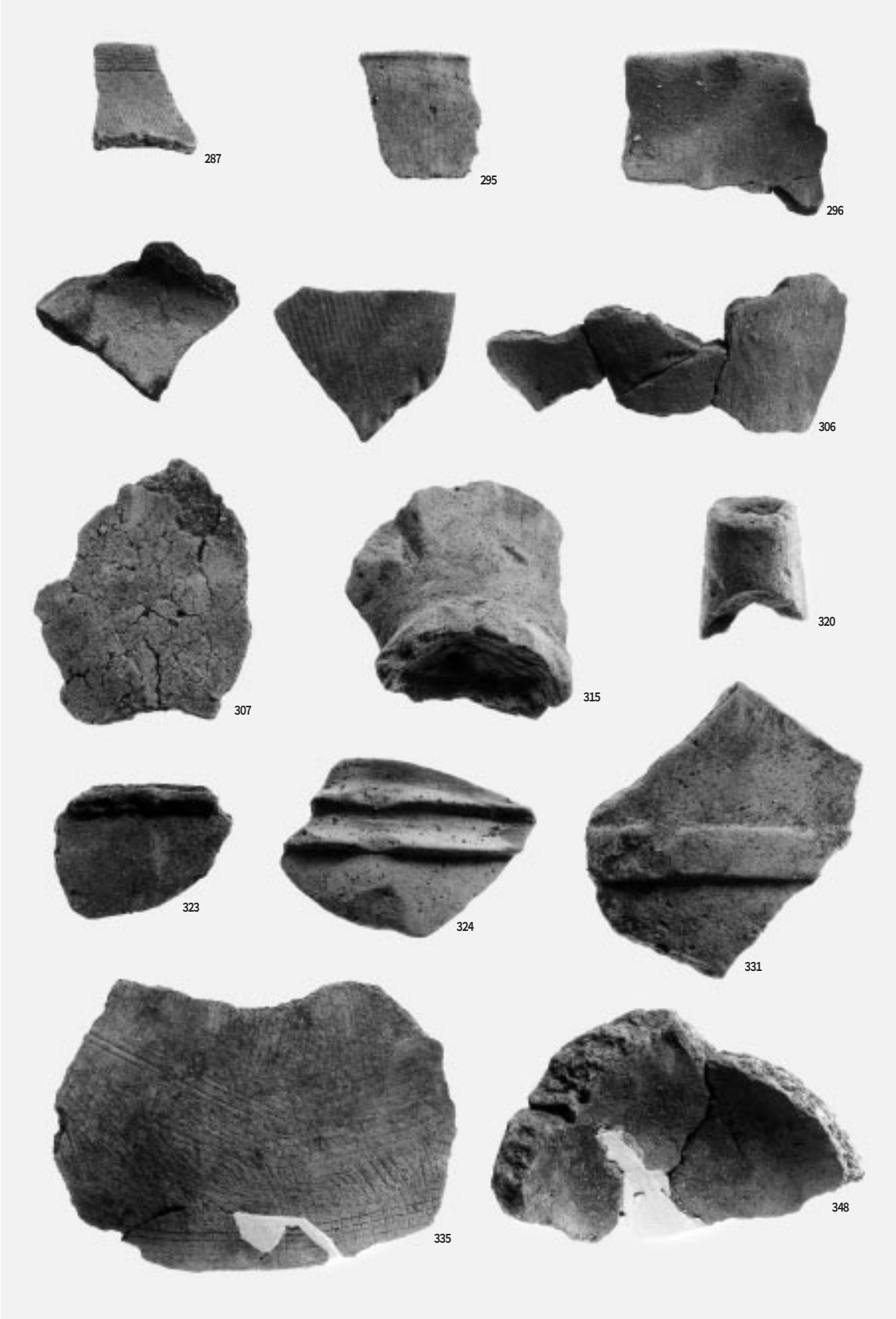
縄文・弥生時代の出土石器



縄文時代の出土土器（早期・晩期）

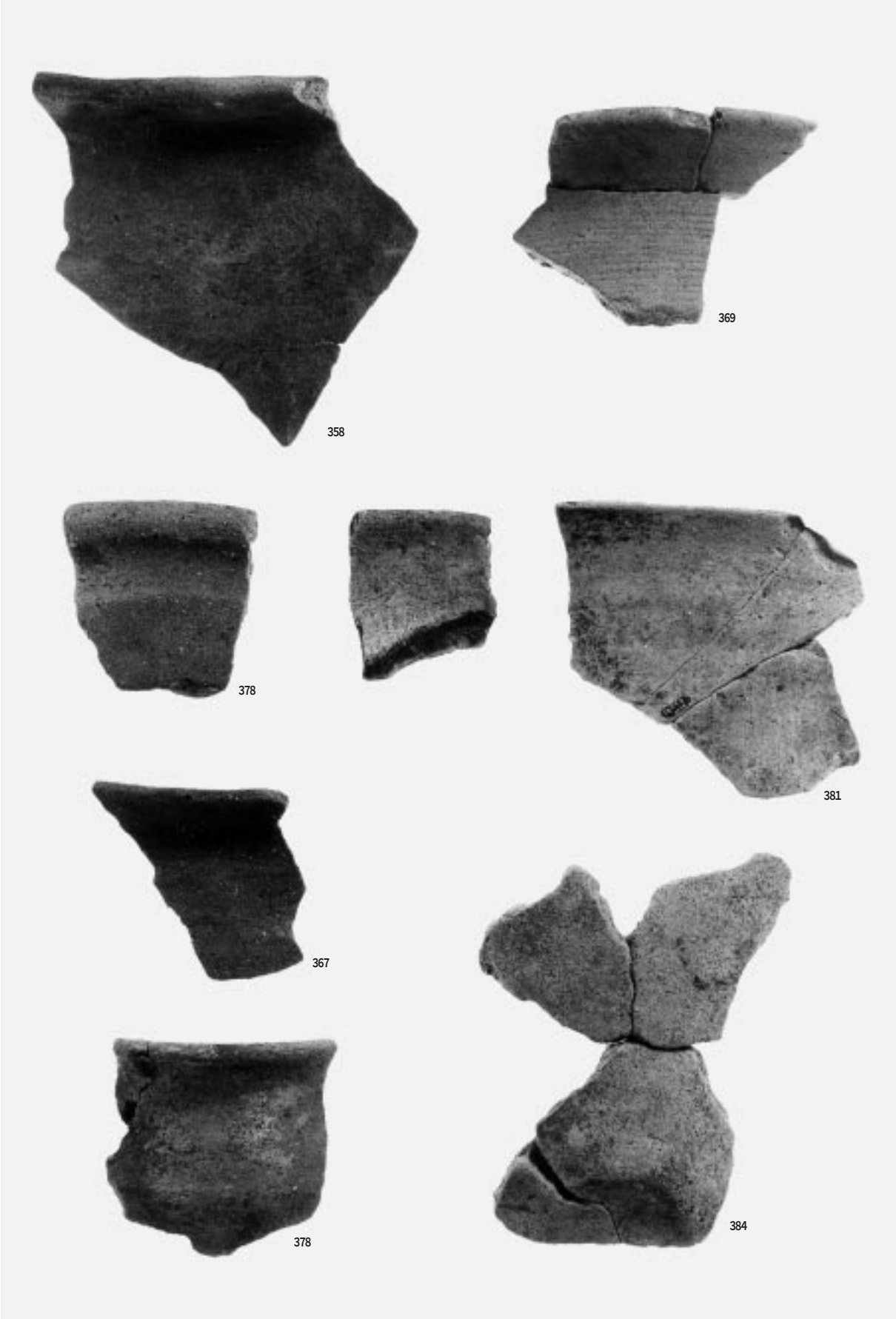
弥生時代の出土遺物（黒髪式土器）

写真図版12

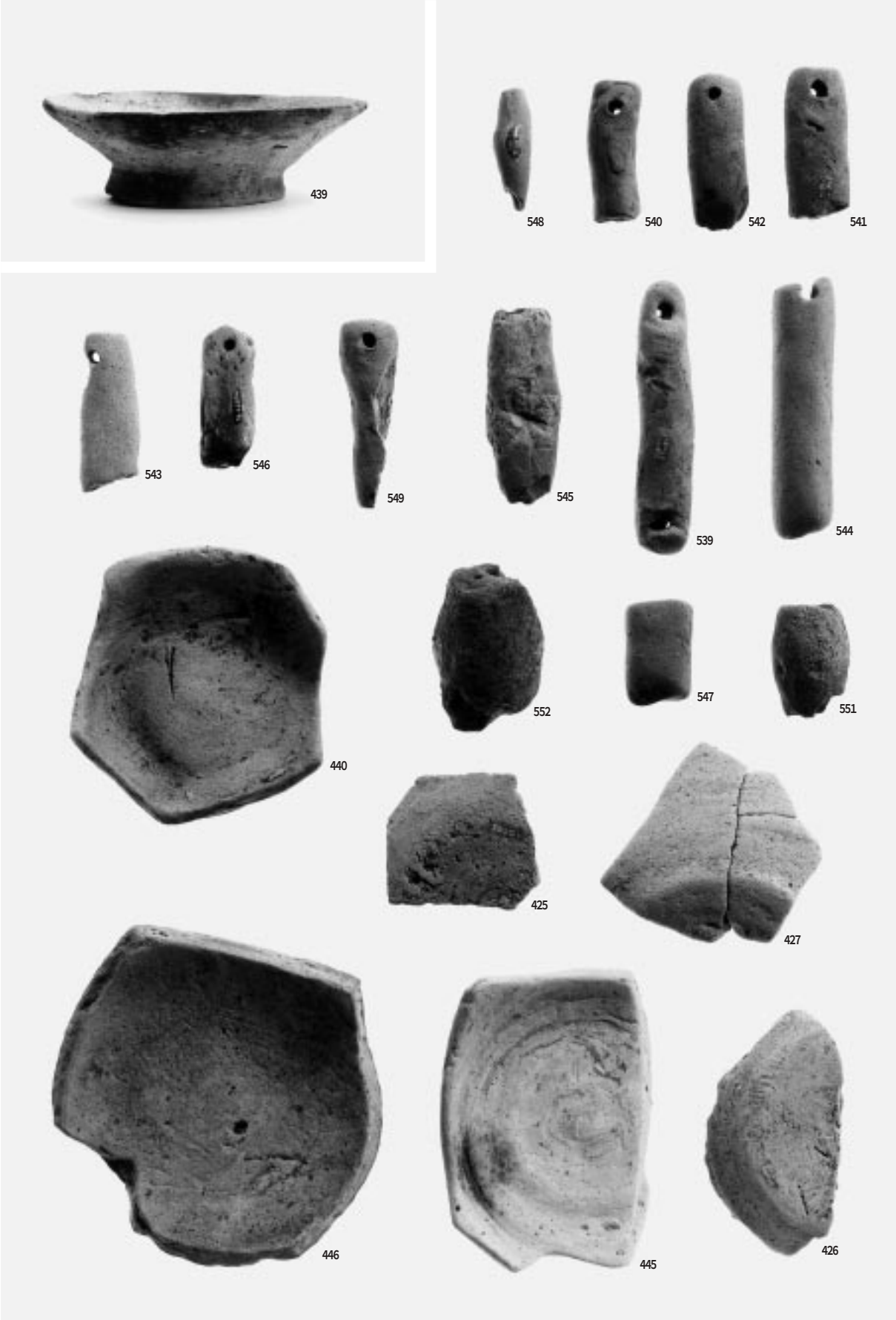


弥生時代～古墳時代の出土遺物

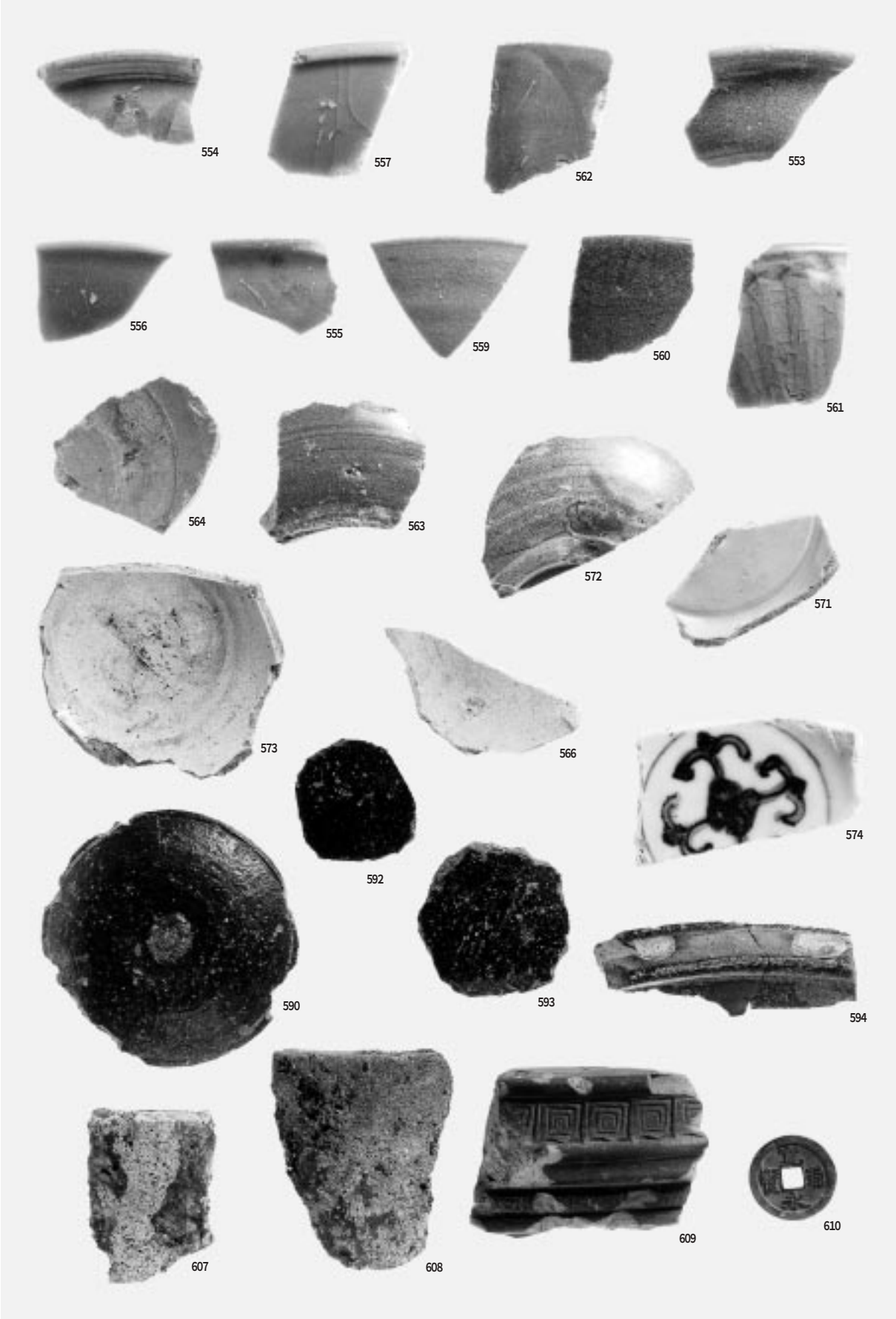
古代の出土遺物（須恵器）



古代の出土遺物（土師甕）



古代以降の出土遺物（土師器，双孔棒状土錘）



中世・近世の出土遺物（青磁・白磁・染付・薩摩焼ほか）

あ　と　が　き

筆を修めるにあたり，世間では「団塊の世代」の言葉を頻繁に聞くようになり，時の流れをひしひしと感じるようになった。時間が経つにつれ，いろいろな世界への誘いがあるようだ。

本県の埋蔵文化財行政は，本格的に「産声」をあげてから，かなり時間を経たような感じがする。しかし，この「時」は古代のひとびとの足跡に比べれば，わずかな時に過ぎない。

未だに全国の同胞たちは掘り続けている。日本列島のトレンチは，いつ終焉を迎えるのか。残してほしいと望む人々の足音を聞きながら，この手仕事はしばらく続きそうだ。

コンビの解消に当たり，市堀の若衆はこの一冊が門出だ。団塊の者は，それぞれの誘いへと歩こうとしている。

この間，遺跡の求めに答えを出し得なかったが，この答えを求めて引き継いでほしい。

現在，既に高速道路が開通し，快適なライフラインに古代の人々が年代を重ねた地が，まさに変貌したことには変わりはない。

この地の変化を，当時の人々が想定したであろうか。この地のことを「まとめる」にあたり，このわずかな旅では伝えることはできなかった。このことは，あまりにも後生の人々のいたずらが大きかった。

最後に，南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査ならびに報告書作成にかかわった，全ての方々に感謝を申し上げたい。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（117）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅢ

市　堀　遺　跡

発行年月日　2007（平成19）年３月
発　　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
☎0995－48－5811

印　　刷　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
☎099－250－7033